

---

# ノブ、ちゃんと考えてよ

奈備 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノブ、ちゃんと考えてよ

### 【Nコード】

N3107U

### 【作者名】

奈備 光

### 【あらすじ】

建築家生駒が携わるマンション新築工事現場で、ゼネコン職員の転落事故が起きる。幼馴染で、同じこの町の出身者である現場所長から聞かされた言葉が気になって生駒は……。

建築家生駒延治と自称歌手のプータロー三条優がコンビを組む長編ミステリーシリーズ4。

(シリーズ物ですが、当然のことながら1からお読みくださる必要はありません。ただし、この作品に限り、時系列的に3の「ノブ、

するじゃん」の数年後という設定になっています。）

## プロローグ（前書き）

生駒・三条ミステリーシリーズ第4弾。

分譲マンション新築工事現場で起きる事件。

おなじみの建築家生駒が事件の謎を解いていきます。現場は生駒のふるさと町。

記憶の底に埋もれた子供時代のある出来事が鍵なのか。あるいは工事受注に絡む汚い金のやり取りが鍵なのか。

様々な人物が、様々な思いで関わってきます。

提供されるかすかな情報、有意義あるいは無意味な情報の数々。

シリーズ第3弾「ノブ、ずるいやん」の聞き耳頭巾も登場し、愛とは、というテーマも流れています。

生駒は、最後は体を張った勝負に出ますが、結末やいかに。

登場人物が多いので、「主要登場人物」一覧を、プロローグの次に掲載しましたので、「これ誰やねん！」となったときには、ご参照くださいませ。

かなりマッタリとしたペースで物語は進んでいきます。場面展開もあまりないので、途中はきつと眠たくなることでしょう。工事現場の人間模様をじんわりと描いています。

長い長いトロトロとした鈍行ミステリー。どうか最後までお付き合いくださいませ。

## プロローグ

ロープがびんと張った。

男は一気に上昇し、二階の床の下端でぐんと止まった。体が派手に揺れた。

血の気の失せた顔や胸元には無数の傷。

だらりとぶら下がった腕。

指先から赤い雫が滴り落ちた。

男の眼前には、暗いエントランスロビー。

むき出しのコンクリートが放つ独特な臭気。

色みのない白々とした小さな照明が、がらんとした空間を構成する灰色の壁や床面を照らしていた。

男はつかの間、空中に浮遊したかのように見えたが、唐突に落下した。

足下に穿たれた床の穴を通り抜け、地下の暗闇へ。

こわばった直立姿勢のまま、わずかに前のめりになりながら。

履いていた工事現場用の黒い人工皮革の安全靴は役にはたたず、かかとの骨が砕けた。

膝をしたたかに打ち、顔面を床のコンクリートに叩きつけた。

鈍い音とともにセメント混じりの砂埃が舞った。

見開かれた男の眼球に、床に散乱した砂粒や材木の細破片が映った。

しかしやがてそれらも、男の体内から流れ出た血にたちまち浸されていった。

男にその様子が見えていたのかどうか。

眼球には血まじりの泥がこびりついていた。

このわずか数秒足らずのショーを、もし誰かが見たとしたら、きっと今見たばかりのシーンを心の中で反すうし、自分の気が確かだ幻を見たわけではないことを悟るやいなや、恐怖の叫びをあげただろう。

もし、一階ロビーの床の穴から見下ろせば、いずれ地下駐車場になる空間に、血の染みついた作業服を着た男の体が投げ出されているのを見ることができただろう。

そして、陥没した男の後頭部、その大きな傷の回りの血がすでに粘りを持ちはじめ、白いものまじりの髪を絡めているのを見ることができただろう。

そして、外にまだたむろしていたパーティの参加者に、この急を知らせたに違いない。

男は、自分が演じたショーの直後に、上のロビーを横切って近づいてきた足音を聞くことができたかもしれない。

誰かが一斗缶を赤く塗った工事現場用の吸い殻入れに、火のついたタバコを投げ捨てたけはいを感じることもできたかもしれない。

とはいえ、その想像は、男の感覚器が脳に刺激をまだ伝えることはできたかもしれない、というだけのことだ。

判断する能力があったという意味ではない。

男には、自分の顔の上に落ちてきた長いロープを払いのけることはもちろんのこと、血のついた指先をぎこちなく動かし、コンクリートの床のざらついた感触を確かめる力さえ残されていなかったからだ。

男の体からは体温が急速に逃げはじめ、意識はその華奢な体を離れ、魂は誰も見聞きしたことのない無限の闇の中に漂い出ていった。

最後まで残っていた若いゼネコン職員は現場事務所の鍵を閉め、エントランスロビーを横切っていった。

あちこちの照明を消して回らなくてはならない。工事途中のマンションにはひと気がない。

がらんとしたほこりっぽい空間に足音が響いた。

「ちえっ」

いやな匂いが立ち込めていた。

事務所に引き返し、やかんに水を入れて再びロビーに向かった。

薄暗い一角に、地下に資材を搬入するための大きな四角い穴が穿たれている。その穴の傍らに吸い殻入れが置いてある。そこから強烈な臭いのする煙が猛然とたち昇っていた。

息を止め、くすぶっていた大量の吸い殻にたつぷりと水をかけると、穴の周りに張り巡らされた、鉄パイプの落下防止柵を掴んだ。

地下の配管工事が終わると穴は閉じられ、一階ロビー周りの内装仕上げ作業が始まり、工事は佳境に入ることになる。ますます忙しくなる。

しかし、職員の心に浮かんでしまった疑惑は消えそうになかった。わだかまりも大きくなるばかり。

職員はしばらくの間、単管の冷たさを手の平に感じながら、殺風景な空間を眺めて自問していた。

急に酔いを感じた。

充滿したタバコの煙に、気分が悪くなってくる。

やがて職員は、確かめずにはいられない、と答えを出した。

## 主要登場人物（前書き）

大きなマンションの工事現場が舞台なので、多くの人物が登場します。なので、生意気にも、登場人物リストを掲載しました。

読み進める中で、これだれやねん！！となったときに、ご参照くださいませ。

ネタバレになるといけないので、紹介の軽重はほとんどつけていません。

最初に目を通す必要はございません。

なまじっか目を通して、こんなたくさんの人が出てくるなんて、めんどくさそう！ と思ってしまわないようにお願いします。

なお、この小説は狭い工事現場が舞台です。場面の展開は多くありません。飽きが来ないようオムニバス風にしていきますが、これがかえって中身を分かりにくくしているかもしれせん。なにとぞ粘り腰でお読みくださいますよう、お願いいたします。

## 主要登場人物

主要な登場人物

### 【主人公グループ】

生駒 いこま  
延治 のぶはる

建築家。 中年で独身。 主人公1。

三条 さんごう  
優 ゆう

生駒の恋人。 主人公2。（シリーズの相方メンバーですが、この作品ではあまり活躍しません。 ユウちゃんファンはごめんなさい）

橘 たちばな  
綾 あや

生駒の知人。 小学6年生。（シリーズ第2弾「ノブ、ずるいやん」に登場した小学生の女の子）

柏原 かしはら  
勇太 ゆうた

バーのマスター。 元弁護士。 生駒と三条の友人。 主人公の補佐役。  
（この作品ではあまりたいした役はありません）

### 【建築会社グループ】

若槻 わかつき  
米一 よねいち

ハルシカ建設大阪支店工事部長。 マンション工事現場所長。

大矢 おおや  
一成 いっせい

ハルシカ建設大阪支店工事部主任。若槻の部下。

黒井 康之

ハルシカ建設大阪支店工事部社員。若槻の部下、大矢の後輩。

栗田 昇

ハルシカ建設奈良本店営業部主任。大矢の同期入社と同僚。

香坂 さゆり（こうさか さゆり）

ハルシカ建設奈良本店CADオペレーター。契約社員。

鈴木 三郎

ハルシカ建設奈良本店工事部課長。マンション工事現場副所長。現場のナンバー2。

阿紀納 毅

ハルシカ建設奈良本店営業部長。栗田の上司。

加粉 広

ハルシカ建設本部長。阿紀納や鈴木の上司。

根木、田所、川上

ハルシカ建設 その他、現場の職員数人。

（他にも、数人登場します）

### 【設計事務所と下請け業者】

佐野川 卓郎

エヌピー興産（ハルシカ建設子会社）部長。若槻の元部下。

藍原 信司  
あいはら しんじ

日晷設計担当者。設計陣として生駒のパートナー。

織田 孝  
おだ たかし

織田工務店部長。ハルシカ建設の下請け業者。

坂本 勝  
さかもと まさる

中桜工業部長。織田工務店の下請け業者（ハルシカ建設から見れば孫請け業者）。

石上 靖夫  
いしがみ やすお

中桜工業担当者。坂本の部下。

### 【マンション事業主グループ】

羽古崎 健吾  
はなごさき けんご

三都興産課長。このマンションの担当者。

中田部 伸二郎  
なかつたへ しんじろう

三都興産執行役員。開発事業部本部長。

三木、打田

三都興産の羽古崎の上司と部下。

【地元住民】

ゆきたけ  
行武 芳次郎

弁当屋。

さくま  
佐久間 和樹

コンビニ店経営者。

## 主要登場人物（後書き）

当然ですが、この中に「犯人」はいます。

## プロローグ2 - 1 高揚感

三都興産本社ビルの地下駐車場で、助手席の生駒延治は居心地の悪さを感じていた。

開発事業部へのプレゼンテーションは初めてのことでない。しかし、出席したのは担当課長である羽古崎健吾とその部下打田愛子だけで、三木次長は冒頭に挨拶をした後、席をはずしたまま帰ってこなかった。

羽古崎の運転する車は、本社ビルを出るとすぐに渋滞につかまった。

「すみませんでしたね」

と、羽古崎が生駒を横目で見た。黙って外を眺めている生駒に、恐縮したのだろう。

「今日は取り込んでいまして。本来なら、中田部に生駒さんのご提案を聞いてもらうつもりにはしていたのです。それが中止になったのなら、わざわざ奈良まで来ていただく必要はなかったのですが、三木がご挨拶をしたいと言い出しまして」

プレゼンテーションのテーマである分譲マンションのインテリアデザインについて、羽古崎や打田とは何度も打ち合わせ済みのことだった。

したがって、今日は羽古崎の上司である三木次長に挨拶をしに来ただけのようなものだ。

ただ、生駒はそれを無駄足だったとは思ってはいない。プロジェクトの責任者である中田部本部長や三木次長に直接聞いてもらうセレモニーは、いずれ必要だと考えていたからだ。

生駒が気にかかっていたのは、三木が挨拶をした後で口にした言葉だった。

三木はマンション計画の中身については羽古崎に任せていると言った後、今日から生駒が現場の工事監理に参加することを聞いて、もう少し先でもいいのではないかと言ったのだった。それに対して羽古崎が問題はないと応え、予定通り現場に向かうことにはなった。

「さっきのあれは、どういう意味ですか？」

「え？ あ、まだ早いということですか？ 気にしないでください。渋滞が動き出した。羽古崎が運転に注意を向けた。」

車は阪奈道路を跨ぐ立体交差をじりじりと登っていった。

視線が高まるにつれて、奈良市街から遠く葛城や金剛の山並みを見渡すことができる。

そろそろ梅雨が近い。やけに近くに見える山々のみずみずしい緑が、すがすがしい青空に映えて、日ごとに深みを増しているのがわかる。

羽古崎が前の車に合わせて丁寧にブレーキを踏んだ。

「気にするなといわれても、気になりますよね。実を言いますと、現場で近々ちよつとした人事異動があるんです。ですから三木は、新任の者が来てから現場に行っていた方がいいのではないかと、気を回したようです」

頷いた生駒を見て、羽古崎が言った。

「現場に行く前に、ちよつとだけ寄り道をさせてください。すぐに済みますから」

奈良市街の中心部を抜けると、国道二十四号線は空いていた。

腕まくりをした羽古崎の細い腕が器用にハンドルを操り、三都興産の社用車である白いセダンは国道を快調に南下していった。西名阪国道の高架をくぐってしばらく進むと西に折れた。

「すぐそこですから」

住宅地に車を乗り入れ、迷うことなく細街路を進んでいく。  
新興住宅街とはいえ、二、三十年ほど前に開発された地区らしく、  
建ち並んだ家々は少々古びている。

それぞれの敷地は六十坪前後あり、いわゆるミニ開発ではない。  
庭に植えられた樹木もそれなりに育ち、街並みに豊かな印象を与え  
ていた。

「ご自宅ですか？」

「いえ、とんでもない。そんな給料はもらっていませんよ」

まもなく車は、工事用の緑色の養生シートが張り巡らされた一軒  
の家に近づいた。

ドアに白い桜の花のマークが描かれたトラックが二台が停まって  
いる。いずれの車にも建設資材が満載されている。

羽古崎は辺りを窺うように、ゆっくりとその前を通り過ぎ、ふた  
筋目の角を曲がったところで車を停めた。

後部座席に放り出してあったかばんからカメラを取り出し、すぐ  
に戻ってきますと車を降りていった。

「お待ちせしました。では行きましょう」

もの一分も経たないうちに戻ってきた羽古崎は、神経質そうに  
カメラをプレビューモードにして、撮影してきたものの写り具合を  
確かめてから、車を発進させた。

「シートベルト」

生駒の注意に、羽古崎は、おっと、と車を止め、照れ笑いをしな  
がらシートベルトを引き出した。

「事務所の安全運転管理者ですからね。皆の手本にならなくては  
いけないのですが、ついすっかりしてしまっ

て」  
羽古崎は先ほどまでとは打って変わって、いつもの饒舌になった。  
車は、もと来た住宅街の中を戻っていく。

「昼食、どうされます?」

「お任せします」

「そうですねえ、沿道にいくらでも食べるところはありますが、これといって旨いところはありません」

羽古崎が思案顔をした。

生駒は早く現場を見たかった。初めて行くのだ。

「会議に遅刻するといけないので、現場に着いてから、どこか近くで食べましょう」

「それがいいですね。活魚料理屋ですが、昼は定食をしている店がありますよ」

「じゃ、そこで。できれば会議の前に、少し現場を見ておきたいんです。今日は私の出番はないと思いますが、一応は前もって見ておきたいので」

「はい。では適当な時刻に食事を切り上げましょう。まだ十一時です。後二十分ほどで着きますから時間の余裕はあります。現場をご覧になるとき、ゼネコンの誰かに案内させましょうか」

「いえ、それは結構です。今回、私は日晷設計の下請けですし、ゼネコンの人たちにまだ挨拶もしていませんし」

厚かましいやつだと思われなくなかったからだが、羽古崎がそれを察して心配そうに聞いてきた。

「日晷設計と一緒に監理業務を進める上で、やりにくいことはありませんか?」

「いえ。いつも気にしていただいております。うまく役割分担しながらやっていますから、ご心配なく」

奈良県中央部の小さな町の市街地で着工された八階建て鉄筋コンクリート造の分譲マンション「ナチュレガーデン大和中央」

その設計は、プロジェクトの立ち上げのときから、日晷設計が受

注すると決まっていた。

数年前、三都興産が所有していた土地に隣接する町工場が廃業し、売りに出されているという情報を日晁設計が持ち込んだからだった。

日晁設計は物件の情報を持ち込むとき、二つの土地を合わせてどれくらいの規模のマンションが建設できるかというヴォリュームスタディを、すでに行っていた。

三都興産は、その提案を受け、すぐに分譲マンション開発を行うことを決め、町工場の土地を買い上げたのである。

生駒が設計作業に参加したのは、日晁設計が基本設計を終えた頃のことだった。

三都興産が日晁設計に、生駒をインテリアデザイナーとして協力させることを申し入れたのだ。

その頃、生駒が設計を手がけた三都興産の別のマンションの売れ行きが良く、特にインテリアの評判が高かったからである。

三都興産の申し入れは、日晁設計がモノ・ファクトリー、つまり生駒が主宰する設計事務所を下請けとして使うということを決着した。

生駒も、住戸のインテリア設計だけではつまらないとは思ったものの、日本でも指折りの大手事務所である日晁設計とのネットワークができればそれもいいと考えて、下請けという立場を受け入れることにしたのである。

「日晁設計の藍原さんも仕事熱心な方ですし、私がこうしてクライアントの羽古崎さんと直接打ち合わせをしても、嫌味のひとつもおっしゃりません。事情はよく理解していただいています」

生駒はほがらかに言ったが、羽古崎はまた、すみませんと謝った。

この変則的な仕事を請けることにしたのは、別の理由もあった。  
懐かしさに縁取られた久しぶりに抱く特別な関心。  
そして淡い期待に、くすぐられたからである。

生駒は現場に近づくにつれ、三木の言葉を忘れ、車窓から見える  
奈良盆地を縁取る低い山々を眺めながら、静かに沸き起こってくる  
高揚感を楽しんだ。

## プロローグ 2 - 2 監理事務所

羽古崎の携帯電話が鳴った。

やれやれ、と肩をすくめて車を路肩に寄せた。

連絡はハルシ力建設からで、今日の会議を急遽中止したいというものだった。

定例の会議が直前になって中止になったからといって、羽古崎は気分を害した様子でもない。むしろ、さもありなんという調子で電話の相手と話していた。

「生駒さん、どうされますか？」

「行きますよ、現場に。せつかくここまで来たんですから。羽古崎さんはどうされます？ できれば現場まで、送っていただけるとありがたいんですが」

「もちろんです。私も参ります。副所長と話したいこともありますし。それじゃあ、急いでいくこともない。ゆっくり食事ができますね」

と、のんきな調子だ。

「最近、情けないことにどうも中年太りでね。先日もたんすにしまいこんであったズボンをずいぶん処分しました。いつのまにか、どれもこれもきつくなってしまうって」

「いやいや、羽古崎さんがうらやましいですよ」

生駒は墨色のTシャツの上から、腹を撫でた。

「生駒さんもスリムじゃないですか」

「腹だけがね、ぶつくりとしてきて。夏になるまでにはなんとかしようと思っんですが。毎年今頃、同じことを言ってます」

そんなおしゃべりをしながら、車はさらに南下を続けた。

5月だというのに、日差しは初夏。

助手席の窓から吹き込んで来る風が、腕の毛をなびかせていた。

工事現場は遠くからでもすぐそれとわかった。あたりに高い建物はない。

羽古崎はガードマンに会釈して、現場の駐車場に乗り入れた。男が近づいてきた。

アイロンの効いた汚れのないベージュ色の作業服を着ている。背はさほど高くはないが恰幅のいい男で、赤ら顔ににこやかな笑みを浮かべていた。

「ご苦労さまです。今日は勝手を言いまして、すみませんでした。所長が急用で本店に行くことになりました」

渋みの効いたバリトンで、悪びれる様子もなく、お昼はすまされましたか、などと聞いている。

現場所長が急用で欠席しても、定例会議は予定通り開かれるものではないのか。だからこそ定例会議というのだ。と、生駒は羽古崎の代弁をしてやりたかった。

「ええ、その花鯨で」

ところが、羽古崎も定例会議が流れたことにこだわりはなく、直前のキャンセルというゼネコンの対応にも、さほど不満はないようだった。

「羽古崎課長はあそこ専門ですなあ」

確かに今はまだ昼休みだ。

とはいえ、生駒と同じような年代のこの男にとっては、会議より昼飯のことが重要ことなのか。ふたりの会話には現場のピリッとした雰囲気はなく、どことなくのんびりとした、言い方を変えれば馴れ合いが感じられた。

「現場の弁当をいただくこともありますよ。生駒さん、ご紹介します」

羽古崎がようやく話題を変えた。

「ハルシカ建設の鈴木課長、現場の副所長です。こちらは、インテリアの設計をお願いしているモノ・ファクトリーの生駒さんです」  
「生駒です。はじめまして」

鈴木は名刺を受け取ると、無造作に横分けにしたまだ豊かな髪を揺らせて、軽く頭を下げた。

「今、名刺の持ち合わせがありませんので後ほど。今日から来ていただけるんですか。それはご苦労さまです。まずは現場をご案内しましょうか？」

「ありがとうございます。ですが、ひとりで大丈夫です」

「まあ、そうおっしゃらずに。私は今ちょっと、ご一緒できませんが」

と、近くにいた三人の男達に声を掛けた。

「ちょっと頼まれてくれるか！ 誰か、この方をひととおり、ご案内してくれ」

下請け業者のようだ。

淡い緑色の作業服を着た男が二人と、グレーの作業服を着た男が一人。

緑の方のひとりが、手に持った白いヘルメットを白くなった頭にかぶりながら、早足に近づいてきた。

いかにも現場で鍛えられたようながっしりとした長身の男だ。

よれよれの汚れた作業服に、折り目の跡形もない作業ズボン。褐色の陽に焼けた肌に、剃り残しの無精ひげ。混雑した駅の構内で突き当たりそうになったら、避けて通りたいタイプ。

しかし男の目には、人なつこそうな笑みが浮かんでいた。

「内装関係の施工を担当してくれています。生駒先生がこれから、最も頻繁に打ち合わせをされることになる相手です」

羽古崎がプレハブの現場事務所の二階を指差した。

「生駒さん、監理事務所は左端です。それじゃ、また後ほど」  
羽古崎は鈴木と話したいことがあるらしい。  
ちよつと、と声を掛け、二人で駐車場の隅に向かって歩きだした。

目の前に立っている男の作業服の胸、左ポケットの上に中桜工業  
石上靖男と黒い糸で刺繍されていた。

生駒は、事務所に荷物を置いてくるので少しここで待っていて欲しいと頼んだ。

鉄製の急な階段の手前に敷かれたマットの上で力強く足踏みをして、靴に付いた泥を丁寧にした。  
マットの金網がガチャガチャと音をたてた。

いよいよ現場に乗り込んでの監理の仕事が始まる。

生駒はこういふときに感じる、晴れがましいような、身の引き締まるような緊張感を愉しみながら階段を登った。

二階にはゼネコンの事務所があり、工事現場が一望できる廊下が  
続いている。一番奥、反対側に降りる階段の手前が、生駒たち設計  
事務所が詰める監理事務所だ。

廊下に面したガラス窓越しに、ゼネコンの事務所を覗いた。スチ  
ール机が並んでいる中に人の姿があった。

昼休みであるせいか、なんとなくのんびりとした雰囲気だ。

生駒は、歩きながらひとりの女性の姿を探した。

香坂さゆり。

生駒が数年前、大阪にある建築専門学校講師をしていたときに  
生徒だった女性。

以来、数カ月おきに来るメールで、この現場でCADオペレータ  
ーとして働いていることを知っていた。

しかし、香坂の姿はなかった。

駐車場の方向向き直って、緑色のメッシュシートに覆われた工事  
中の建物を見上げた。

三都興産とハルシカ建設のロゴマークがそれぞれ印刷された、大  
きな布が貼り付けてある。

視線を下げてきたとき、石上がぺこりと頭を下げた。

生駒はあわてて廊下を進み、ガラスの引き違いドアに貼り付けら  
れた白い樹脂製のプレートを確かめた。

「ナチュレガーデン大和中央新築現場監理事務所」と黒いゴチッ  
ク文字で書かれてあり、その下に日晃設計とモノ・ファクトリーの  
名前が小さく記されてあった。

中に日晃設計の藍原が座っていた。

事務所は狭いながらも整頓されていて、今日までひとりで部屋を  
使っていた藍原の人柄が表れているようだった。

スチール机が二つ横に並べられ、作業用のテーブル、図面ラック、  
ドアノブなどのサンプルが置かれた木製棚、ファックスやコピー機、  
収納棚などが整然と置かれていた。

壁には汚れないホワイトボードや予定表が架けられていて、今  
日の欄には第四十回現場施工定例会議、生駒氏参加と書かれ、その  
横に赤い文字で中止と書かれてあった。

藍原信司。

日晃設計大阪設計部住設計課課長。生駒より少し年下の四十代半  
ば。

生駒は藍原に挨拶を済ませると、電話機が置かれただけの真新し  
い白い事務机に荷物を載せた。自分用のデスクがすでに用意されて  
いたことを、素直にうれしく思った。

「中桜工業の石上という人が現場を案内してくれるそうです。下で  
待っていてくれますので、ひと回りしてきます」

ポストンバッグに入れて持参してきたヘルメットをかぶった。

「ええ、どうぞ」

藍原の口ぶりは、いつもと変わらなかった。

ひよろりとした長身から、親しみが発散されている。

生駒は立場的には下請け業者だが、藍原はクライアントである三都興産の担当者の前だけではなく、工事現場内においても対等の立場として扱ってくれるようだ。生駒の漠然とした微妙な不安感が、和らいだ。

## 1 定例会議

「大矢、おまえ、奈良の現場に来てくれるか」

大矢一成は、若槻の顔を見た。

事務所の隅に置かれたソファに、向き合って座っていた。

窓から大阪のシンボルタワー通天閣が見えている。大阪市天王寺区にあるハルシカ建設大阪支店工事部のオフィス。

若槻が目じりの皺を、いつものように細かくひくつかせていた。

大矢は目を落とし、塗装のはげたセンターテーブルの縁を見つめた。

「どうした。返事がないな」

「部長、それは先日も申し上げたとおり……」

「家から遠すぎると言うんだろ。しかし、よく考えてみる。最近では珍しいくらいに、利益率の高い現場だ。工事途中からの参加だから、勉強熱心なおまえには物足りないかもしれないが、そこそこの高級マンションの物件だから、いい経験になるぞ」

大矢は、若槻が説得しようとしているのではないことはわかっていた。

部下である限り、どんな現場に行けと言われても、逆らうことはできない。しかも、今回は若槻自身が現場所長として赴任し、大矢について来いと言っているのだ。

それでも大矢は渋った。

「遠いからじゃありません。私が今担当している箕面の現場はどうするんですか。もう工事は始まってますし、先日も私が担当ですと先方のオーナーに挨拶を済ませたばかりです」

「ふん。おまえ、あの現場の方がいいのか？」

「個人的にいいかどうか、じゃなくてですね」

若槻が言葉を遮った。

「あそこにはもう少し若いやつをやる」

大矢は肩の力を抜いた。

「しかしなんでまた、大和中央の現場は、職員全員が工事途中で交代する、なんてことになったんですか？」

大柄な大矢が小柄で華奢な若槻と向かい合って座っていると、部下が上司を見下ろしているように見える。

スナックのホステスにそう言われたことを思い出して、大矢は猫背になった。

「白井さんの体調が悪いということだ。正確に言つと、全員が交替じゃない。鈴木とCADオペレーターは残ってもらう。根木もしばらくの間はいてもらうことになる」

大矢は背筋を伸ばして、両膝の上に置いた腕を突っ張らせた。

鈴木は課長級だが、今回の現場では副所長として赴任している。

根木は会社の先輩だ。ふたりとも奈良本店の人間である。

「そうですか。しかし、あれは奈良本店の仕事じゃないですか。なぜ大阪支店の我々が行くことになるんです？」

「さあな。そんなことは詮索せんでもいい」

聞き入れてはもらえなくても、大矢は自分の希望をはっきり言うておこうとした。

「私には箕面の現場をやらせてください」

若槻が前かがみになって、上目で大矢の顔を覗き込んだ。

「仕事へのこだわりは大切だな。ま、箕面の現場にそんなに意欲があるのなら、それもいいか」

なおも大矢を見据えたままだったが、一応は了解したというように小さく頷いた。

大矢は上司の気が変わらないように、少し話題を変えた。

「白井部長はご病気なんですか」

若槻は目をそらし、壁に掛かった時計を見て立ち上がった。

「おまえ、白井さんを知っているのか？」

「いいえ。会えば挨拶をする程度です」

「そうか。彼のことは俺もほとんど知らない。交代は社長の意向だ。向こうに行つて、いよいよ人手が足りんということになったら、おまえにも手伝ってもらうぞ」

そうとまで言われて、いやだとは言えなかった。

「はあ……」

若槻がにやりと笑つて立ち上がった。

大矢は座つたまま、自分のデスクに戻っていく若槻を見送つた。

翌週の木曜日も、快晴の暑い日だった。

現場事務所二階の会議室に入るなり、生駒はヘルメットを脱いだ。中の紙帽子が汗でぐったりと濡れていた。

「すみません。遅くなりました」

生駒の到着を機に、定例会議が始まつた。

初めての出席である。

毎週木曜日の午後に行われている会議では、週間の工事進捗状況と次週の施工予定、施工者から設計者に対する質疑、各種検査の結果報告、主要な出来事や注意事項などが議題となる。

第四十回施工定例会議は、若槻米一の自己紹介から始まつた。

若槻が先週の定例会議が流れたことを詫び、自分はハルシカ建設大阪支店の工事部長で、体調を壊した白井に代わつて現場所長として赴任したと挨拶をした。

次に現場のゼネコン職員の交代と新しい現場組織の陣容を、三都興産の羽古崎や設計事務所の藍原に説明した。

奈良本店の工事課長である鈴木三郎は、現場の副所長として従来どおりの役割。

CADオペレーターの香坂さゆりも同様。

課長代理の根木博之は奈良本店に戻るが、しばらくは引き継ぎのために残留する。

他の奈良本店のメンバーはすでに引き上げ始めている。

大阪支店からは、工事課長の田所俊介、総務課長の川上栄太郎、工事主任の田所洋介、大矢一成、黒井康之が参加する。大矢を除く四人はすでに着任している。

いずれの所員も、すでに羽古崎や藍原への挨拶を終えているようで、定例会議への初参加という意味でのセレモニーだった。

若槻に促されるまでもなく、新任の四人はさっと立ち上がり、黙って一礼した。

会議室の上座に、事業主である三都興産の羽古崎と打田、その隣りに設計者であり監理者である藍原や生駒、向き合って正面にはゼネコンの職員たち。

丁寧に水拭きされたテーブルを囲んで、会議の面々が座っている。

羽古崎の正面に座った若槻は、落ちつき払って参加者を眺め渡し、小さな体から威圧感を発散させていた。

無造作に七、三に分けた髪には白いものが混じり、目の下の皮膚が弛んでいるほかは、日に焼けて引き締まった面をしている。

飛び出た頬骨と、尖ったあご。薄い上唇。鋭い目つきが仕事に対する厳しさを感じさせた。

若槻の両隣には、鈴木と田所が占めていた。二人とも生駒と同年配か、少し上だろうか。

田所はレンズの大きな昔風の眼鏡に何度も手をやっている。総務担当の川上は通常ならこの会議には参加しないが、今回は挨拶ということで末席に座っていた。

会議はすぐに本来の議題に入った。

進行役は、工事監理者である日晷設計の藍原だ。

若槻が先週の工事進捗および次週の施工予定について、ポイントを押さえた簡潔な説明を始めた。

若槻が実質的に赴任してきたのは二日前の火曜日だそうだが、既に現場内をくまなく歩き、各下請け業者とも面談を済ませていたようで、説明にはそつがない。

もちろん、赴任してくる前に、図面や見積書にも入念に目を通してきたのだろう。計画そのものも完全に頭に入っているようだった。

次に工事監理報告。

工事監理とは設計図面どおりに施工されているかどうかをチェックすることであり、コンクリートの打設が進められている最上階での配筋検査の報告が、藍原自身からなされた。

「若槻所長。ご紹介が遅れましたが、こちらは生駒さんです」

藍原が報告の最後に、生駒を紹介した。

「私共の協力事務所として、主に住戸の内装設計をしていただいています。インテリア部分の設計監理もお願いしていますので、この会議にも今回から参加していただきました。本格的な内装工事はまだ少し先のことですが、購入者によっては内装仕様の変更を希望されている方もあると聞いていますので、工事進捗との絡みがあるでしょうし、現場の方への確に変更指示をお伝えするという意味でも、今の時期から参加していただくことにしました」

生駒は立ち上がった。

「モノ・ファクトリーの生駒です。よろしくお願ひします」

若槻と目が合った。

微笑みのかけらもない目だった。

目の下がびくびくとひくついていた。

最後に、羽古崎がクライアントとしての簡単な締めくくりの挨拶

をして、会議は終わった。

「生駒さんは奈良のご出身だそうですよ。しかもこのすぐ近くのお生まれだそうです」

羽古崎がそう言って、生駒が若槻に自己紹介ができるきっかけを作ってくれた。

羽古崎は、住戸内装の変更が多いと予想されるこのマンションの場合、生駒がゼネコンの現場担当者といい関係を作らないと良いものができないことを、よくわかっているのだ。

生駒は努めて明るい調子で、名刺を差し出した。

「この近くに小学校卒業するまで住んでいました。昔、ちょうどこの現場の辺りには水路が通っていましたね。学校の行き帰りによく遊んだものです」

「ほう」

若槻が興味を持ったようだ。口元に小さな微笑ができた。

しかし、引き続き行われる外装の打ち合わせのために、タイムリーカーの社員数人が大量のタイル見本を持って部屋に入ってきたのを見ると、お手やわらかに頼みますよ、と言って再び席につき、顔を引き締めると会議資料に目を通し始めた。

## 2 再会

ゼネコン事務所に移動した生駒に、香坂が駆け寄ってきた。

「先生！ お久しぶりです！」

周りの空気が動いて、いい香りがした。

ゼネコン事務所の職員達が何事かと顔を向けた。

「やあ、元気そうだね」

「はい！」

「この現場に残ることになったそうだね。さっき、定例会議で聞いたよ」

「ええ」

顔を合わせるのは久しぶりだ。

「お知り合い？」

近くに座っていた若い職員が香坂に声を掛けた。

「ええ。専門学校で教えていただいた生駒先生」

「へえ」

「うっれしい！」

「何年ぶり？」

「二年半ぶりかな。卒業以来」

「感動の再会か。あつ、それで今日は、いつもよりぐっとめかしこんでいるんだな」

「ばかなこと言わないでください。セクハラですよ！」

そう言いながら、うれしくてたまらないというように、男の肩を軽く叩いた。

さつき紹介された黒井というその二十代後半の職員は、艶やかな髪を無造作に中央で分け、精悍で迷いのない顔をしている好男子だ。「香坂さんはなかなか優秀な生徒でしてね。僕が講師を辞めてから

も、メールで質問してくるんですよ」

「へえ！ さゆりさんがそんなに勉強熱心だったとは知らなかったな」

「ご迷惑かなとは思いますが、時々わからないことをメールで聞いてるんです。ま、最近は質問というより、近況報告ばかりですけどね」

「仕事にかける意気込みとか？」

「まあね。でもご本人を前にすると、これまでメールで言ったことが、なんだか恥ずかしいわ」

黒井は香坂の大げさな反応がおかしかったのか、声を出して笑った。

「あんまり変わってないね」

微笑むとえくぼができる。

学生の頃はかなり化粧が濃い方だったが、まだその名残はある。

アイラインが太く、濃い。

最近の娘らしく、口紅やチークは目立たないが、目の周りは頑張っていますというパターンだ。

髪はそれほど長くはないし、茶色くもないが、いわゆるお嬢様のようにロールしている。

「変わりませんよ。どこか、変わって欲しかったですか？」

「勤め始めたら、もう少し落ち着いていた感じになるかと思ってたけど」

「そうですか？ 仕事の苦労も人並みに経験して、自分ではちょっとは大人になったかな、と思ってるんですよ」

香坂は、髪の乱れを直すかのようにいじりながら、黒井に同意を求めた。

「ね」

「さあ。君のことはまだあまり知らないからな」

「おっ、なんだか賑やかじゃないか」

会議室に通じるドアから、鈴木副所長が入ってきた。

急ぎ足で自分の椅子に座ると、保留になっていた電話に出た。

「もしもし、お待たせしました。どちらさまですか？」

黒井が香坂の出身高校や専門学校がどこかと聞いていた。

生駒はふたりのやり取りを聞きながら、鈴木の様子が曇っていくのに気がついた。

鈴木が急に声を荒げた。

「おたく、どういっつもりでそういうことをおっしゃってるんですか！ 変なことを言わないでください！」

香坂がびっくりして振り返った。

他の職員も不安そうに鈴木を見た。

「お断りします！ 私はなんにも知りませんし、知りたいとも思いません！ 切らせてもらいます！」

受話器を置いた鈴木は顔を紅潮させて、一瞬遠くを見るような目をした。そして、大きくため息をついて立ち上がった。

根木が声を掛けた。

「なにかの勧誘ですか？」

「えっ？ そうだ。本当にしつこいよ。今度かかってきたら、いないと言ってくれ」

鈴木は、電話を繋いだ女性事務員にやさしく言ったが、まだ声が少し上ずっていた。

事務員が申し訳なさそうに頷いた。

「すみません。でも、どなたか名乗られなかったものですから、つきりお知り合いの方かと……」

それには応えず、会議室に戻っていった。事務所中の視線が、鈴木の背中に集中していた。

黒井がその後ろ姿を睨みながら、ふんっ、と笑ったように見えた。

翌週の定例会議では、生駒に出番が回って来た。

当初の予想通り、住戸内装の設計変更が頻繁に起こっているのを、ゼネコン側が問題にしたのだ。

根木が、さも困り果てているといった様子で発言した。

「ご承知のように、木製建具や収納扉はワシロツトいくらでメーカーに発注しています。違うものに変更するといっても、一つ二つならなんとか話をつけることもできるでしょうが、こんなに大量に変わってしまったら困るんです。今朝の時点で、全体百十三戸の内、変更指示がすでに二十五戸もきています。最終的には、いったいどういうことになるんでしょうか」

羽古崎が、さらりと応えた。

「それは、御社に工事を発注するときの条件です。変更があるのは織り込み済みでしょう」

「おっしゃるとおりですが、一から施工図を書き直して、各種の建具や住設機器を発注し直すというのは、ものすごく手間もかかるし、間違いの元なんです。もちろん費用も余計にかかります。私共としては、全体像を知りたいんです。これから先、まだまだ変更があるのかどうか。どうなんですか？」

根木は最後の言葉を、生駒に向かって投げかけた。

生駒は応え方に迷った。

すでに変更指示としてハルシカ建設に伝えてあるのは二十五戸分だが、実際には現時点で五十戸ほどの変更設計が進み始めている。

残りの二十数戸は、マンション購入者の要望がまだはっきりとは決まっていないか、あるいは生駒の作業が追いついていないのだ。

現時点で五十戸程度の変更予定があつて、最終的にはもつと増えることはまちがいないと言え、ゼネコンはどういう態度に出るだろうか。まちがいでなく追加工事費は要求するだろう。

生駒は、ゼネコンも納得せざるをえない提案をすることにした。

「最終的にどれくらいの戸数に変更になるのか、私にもわかりません。ただ、現場のスケジュールとの絡みはあるわけですから、どこかで線を引くことは必要でしょう。例えば、階数別に住戸の変更指示の期限を決めるとか、変更するとしてもこの程度までならオーケーで住設機器の変更はしないとか。つまり変更のボリュームと程度ですね。そういったルールを、そろそろ決める時期に来ているとは思いますが」

若槻が、我が意を得たりというように頷いた。

生駒としても、ルールなしにやみくもに設計変更作業をして、ゼネコンとクライアントの間の綱引きに振り回されて右往左往するとは避けたい、という思いがあった。

羽古崎があわてて言った。

「すでに変更の話を決めているお客さんもあるわけです。いまさら、現場の都合でそれはできませんでした、とは言えません」

「ええ、わかっています。私が申し上げたのは、二期及び三期販売分における変更ルールということですよ」

生駒はそう言いながら、ゼネコンに対してまだ変更指示を出していない住戸が大量にあるということを、どのタイミングで言おうかと考えた。

確かに、このマンションの設計には変更が多すぎる。

自分の守備範囲はインテリア設計だけなので、基本的な住戸プランが完成してからが出番となる。

ところが、住戸の基本プランに再々変更が加えられ、生駒の内装デザインの作業が無駄になることが度々あったし、結果として作業にかかる時間が短くなってしまうということもあった。

マンションの販売が始まった今は、三都興産が購入者の意向をできるだけ聞こうとしていることから、以前にも増して大きな変更が

続いているのだ。

最上階までコンクリート打ちがほぼ終わり、そろそろ住戸の内装工事が始まるうとしている今に至って、キッチンの位置まで変えようというのだから、ゼネコンが根をあげたくなる気持ちは十分に理解できた。

設計事務所の下請けという立場であることから、生駒自身がお客と面談してインテリア設計を行うという仕組みではない。

日晷設計の担当者が三都興産の担当者とともに客と面談し、その結果が生駒に検討依頼として流れてくることになっていた。つまり、間取りの変更などは日晷設計の作業範囲である。

しかし、時間が押し詰まってきたことから、最近では生駒が間取り変更も含めた新しい図面を書くことが多くなっていた。

客との折衝においても、大掛かりな変更を要するものについては、生駒が参加するケースもあった。

その方が全体としての作業効率がよかったからだし、生駒にとっても効率的だったからである。

若槻や根木も、その事情は理解している。住戸設計については、生駒がキーマンになりつつあることがわかっていようだった。

根木が若槻と眼を合わせてから、口を開いた。

「そうしていただくとうれしいですね。それなら一応、先が読めると思いますし、手戻りをいくらか抑えることができますから」

羽古崎が口を開きかけたが、それより先に、若槻が念を押すように畳み掛けた。

「では、それでお願いできますか。変更のルールや変更図面の承認方法などは後ほどよく考えるところで、まずはきちんとこの件についての担当を決めないといけません。時間のない中でのやり取りですから、図面の行き違いや指示ミスがあってはいけません。私共は田所をヘッドにして、大矢を窓口にします。大矢はまだ現場に参

加していませんので、当面はCADオペレーターの香坂という女性を窓口にします。設計事務所さんの方は、どなたが窓口として動いていたですか。住戸内部の変更についての、すべての図面や指示の窓口として」

羽古崎はなにも言わなかった。了解したようだ。

それを察して、藍原が生駒に声を掛けた。

「引き受けてもらえますか」

「わかりました」

生駒の即答に、若槻は気をよくしたようだ。目の下をひくつかせながら微笑んだ。

「では生駒先生、よろしくお願ひします。香坂は後日、紹介させていただきますので、打ち合わせをしてください」

香坂が、ここ数日は休暇をとっているということだったので、出社して来しだい打ち合わせを始めることになった。

生駒は藍原に言った。

「ただ、確認しておきたいことがあります。窓口として動くということは、私とハルシ力建設さんで動かしていくということではないでしょうか。もちろん、藍原さんにご相談して指示を仰ぐべきことはしますし、羽古崎さんにご報告するべきことはします。しかし、私の責任で動かしていくということでない、結局はスムーズに進みませんか」

藍原が隣に座っている羽古崎に顔を向けた。

「羽古崎課長、よろしいでしょうか。既に新しい住戸プランは、生駒さんにほとんど描いてもらっている状況です」

「こういうことですね。建築本体設計の部分は従来どおり日晷設計さんが行う。住戸プランとインテリアはモノ・ファクトリーの生駒さん。販売パンフレットで表現しているクレジットとは少し違いますが、まあ、それはいいでしょう。ただお二方の間で、フィーの問

題は処理してください。それから著作権の問題なども話し合ってください。で、それが決まりましたら私の耳にも入れてください」

生駒が提案した住戸変更のルールは、業務の中心的役割を果たすことになる生駒が案を作り、羽古崎や藍原に諮ってから次回の定例会議で報告することになった。

### 3 アトムとコメツプ

会議が終了し、事務所に戻ると藍原が声をかけてきた。

「さっきの話、申し訳ないけど、よろしくお願いします。さあてと、今から屋上階に行くんですけど、一緒に行かれますか？ まだ行かれてないでしょう？」

「いいですね。今日は天気もいいし」

「きつと、いい眺めですよ。この辺りのご出身だそうですね」

生駒の業務範囲では、まだコンクリートを打設したばかりの屋上階に行く必要はない。

いい天気だと言ったことが、物見遊山の気分だと捉えられたかもしれないとは思ったが、藍原は気にするふうでもなく、準備を始めた。

生駒もデジタルカメラと携帯電話をポケットに突っ込み、ヘルメットをかぶって図面集の縮刷版を手にした。

工事中の建物の脇に、資材や作業員を運ぶ仮設のエレベーターが取り付けられている。

生駒と藍原が乗り込むと、先に乗っていた男が会釈してきた。内装工事業者である織田工務店の織田孝とその下請け業者、中桜工業の坂本勝だ。

藍原がオペレーターに八階まで行くことを伝えた。

「今日はお二人ですか。石上さんは？」

織田と坂本と石上は三人がトリオで動いていることが多い。

ここ数日、姿の見えない石上は、生駒が始めて現場に来た日に案内してくれた中桜工業の職員で、少し親しみを感じている。

坂本と織田の雑用係といった役回りの男だ。

坂本があいまいな笑みを浮かべた。

「休みだったんです。今日から出て来てますけど」

「へえ、旅行とか？」

「あいつが旅行なんて。お母さんのお葬式だったそうで」

「そうだったんですか」

「なんでも、所長の話によれば、首吊り自殺されたとかで」

「余計なことを言うな！」

とたんに、織田が坂本を制した。

「この先生方には関係ないことだろうが！」と、声を荒げた。

坂本はぺこりと頭を下げて、黙り込んでしまった。

茶髪のオペレーターが、力任せに扉をガチャンと閉め、稼動スイッチを捻った。

金属同士がこすれる騒々しい音が、乗り込んだ者たちの鼓膜を容赦なく振動させ始めた。

エレベーターの籠は、周囲に建て込まれた凹凸の付いた鉄の柱に、歯車を噛み込ませながら、ゆっくりと上昇を始めた。

足元から伝わってくる荒々しい不規則な振動が、いやがうえにも、このちやちな機械の安全性に不安を抱かせた。

湿った生暖かい風が、エレベーターの籠の中を自由に吹き抜けていった。

織田工務店は、ハルシカ建設から内装工事全般を請け負っているが、現場に来ているのは部長の肩書きを持つ織田孝ただひとりだけだった。実際に手を動かす作業をしているのは、孫請けとして現場に入っている中桜工業の社員である坂本や石上、そこがまた発注している一人親方や職人たちだ。

織田は、孫請けの中桜工業や曾孫請けの職人達の段取りをしながら、現場を回っている。

狭い籠の中に五人もの男が入ると、それだけで気詰まりになった。

織田は大男だった。

現場の人間らしく日に焼けてはいるが、弛んだ頬やあごの下の肉が不健康そうな印象を与えている。充血した無遠慮な目が、品定めするように生駒と藍原を見ていた。

エレベーターが、がくんと沈み込むようにして止まった。

八階に到着。

織田が仏頂面を隠そうともせず、手の平を返す仕草で、生駒達に先に降りろという。

生駒たちが降りても、無視。

さつさと、まだ乾ききっていないコンクリート独特の臭いがするフロアに向かっていく。肩を怒らせて、痩せて猫背の坂本を従えて織田の「あんな男のことを」という叱る声と、「誰でも知ってることじゃないですか」という坂本の抗弁が聞こえてきた。

後ろ姿を見送りながら、生駒と藍原は顔を見合わせた。

「なんだかね」

藍原はそうだったが、ああいう人もたまにはいますよね、と自ら納得させた。

エレベーターの脇から、下が透けて見える金網状の仮設階段を伝って、屋上に出た。

建物全体が緑色のシートに覆われているが、これより上には景色を遮るものはない。

屋上に上がった途端、青空の只中に立ったように強い風を感じ、視界が開けた。

まさしく奈良盆地の真っ只中。

北には遠く奈良市街。西には葛城、金剛の山々。南には飛鳥三山、畝傍山、香具山、耳成山。その先には吉野連山が霞んでいる。

足元に目をやれば、市街地や周辺の田畑を鳥瞰することができる。

近鉄電車がのろのろと駅に入っていくのが見えた。

生駒が小さかった頃は一面が田んぼで、市街地は小さなものだったが、今はとめどなく開発が進みつつあった。

特に国道二十四号線沿いには多くの店舗や大規模な工場が集積し、ひと目でそれとわかるミニ開発もいたるところに散らばっていた。

それでもまだ緑は多く、田植えがすんだばかりのあざやかな色が、大阪市内に住んでいる生駒の目に新鮮だった。

「やあ、先生方。ご苦労さまです」

振り返ると、若槻が立っていた。

「今日は気持ちがいいですね」と、藍原が応えた。

「ええ、ホツとします。生駒先生、どうです。なかなか、いい眺めでしょう」

生駒は、行楽的な行動を咎められたように身を硬くしながら、  
「ええ。懐かしくて」と応えた。

若槻は近寄って来ると、屋上の端に張り巡らされている仮設の落下防止柵に、大胆にも体をもたれかけさせた。

そして身を乗り出して、真下を覗き込んだ。

「この辺りもずいぶん変わりましたな。犬見神社は、昔はもっと立派だった」

生駒は、あいまいに相槌を打った。

確かに、小さい頃の思い出の中にある鎮守の杜はもっと大きく豊かで、夜になると黒々とした木々は恐ろしくさえ感じられたものだ。注連縄を張られたクスやイチヨウの大木が、天に向かって太い腕を突き出すように、力強く節くれだった枝を伸ばしていたものだ。今、見下ろすと、生駒たちがいるマンションの日陰になった狭い境内に、強く剪定された木々が、まばらに生えているだけだった。

「お宅はどの辺りでしたか？」

「ちょうど、あの辺りです」

生駒は、神社からすぐ北のあたりを指差した。

「ほう、そんなに近くですか。ということは、亀井の風呂屋の辺りかな？」

「は？」

懐かしい響きである。

亀井湯と青い文字で染め抜かれた白い暖簾や、古びて角の取れた御影石の階段や入り口の前のたたき、土埃の舞う道沿いに咲いていた赤いカンナやサザンカの生け垣などの情景が、まぶたの内側にすっと入り込んできた。

「まだあるんですか？」

若槻が、生駒の顔を覗き込むようにして、フフンと笑った。

「亀井湯はもうないよ」

「」

「昔、俺の家は亀井の風呂屋の裏、水呑地藏の路地の奥にあった。

……な、アトム」

アトム……。

生駒は、頭が一瞬、混乱した。

だがすぐに、子供の頃の思い出が次々と押し寄せてきた。

「もしかして、あの……、コメツブ？」

生駒が小学生だった頃、近所の遊び友達に若槻米一という子供がいた。

生駒より三歳年上のいわゆるガキ大将。

呼び名はコメツブ。

コメツブを筆頭に、近所の少年たちは徒党を組んで遊び回っていた。

生駒は、寝癖のついた髪がいつも逆立っていたことから、アトムというあだ名で呼ばれていた。

その頃の町は市内とはいうものの、田畑に囲まれた数百軒の集落だった。

市の中心部からは数キロほど離れていて、狭い畑を細々と耕している農家や、小さな町工場が点々とあるだけの地域だった。

まだ、乱開発が押し寄せてくる直前の時代で、昔ながらの農村集落の形状を色濃く残している村だった。

家々の連なりの南端部に犬見神社があり、鳥居の前を通る曲がりくねった細い道が、背骨のように村を南北に貫いていた。

その道を北へ数百メートルほど行っただころに、亀井湯はあった。瓦葺きの大きな建物で、煙突は村のあちこちから見えていた。

暖簾をくぐって中に入ると、使い古されたスノコを左右両側に敷いた靴脱ぎ。正面中央には番台後ろのすりガラスの嵌った小窓があり、右に「女」、左には「男」と赤い塗料で書かれた木の引き戸があった。戸は重く、敷居に打ち込まれた錆びた鉄のレールを挟んだコマが、動かす度にキーキーと鳴った。

その風呂屋で、父親に連れられた生駒は若槻らと出会ったたびに、深い方の浴槽で潜り比べをして、大人たちから叱られていたのだった。

「よう！ 久しぶりやな！」

若槻が大声をあげた。

満面の笑みを浮かべていた。

生駒は、子供時分の若槻の顔は思い出せなかったものの、コメツブという呼びかけはすぐに口から出てきたし、頼りになる兄貴という印象も、きわどいことも平気とする年上への畏怖といった感情も、

瞬時に思い出し出していた。

若槻が手を差し出してきた。

生駒は躊躇することなく、その手を握った。

若槻のどちらかというど細い指には、思いのほか力がこもっていた。

一瞬の間、生駒と若槻は見つめ合った。

耳たぶが熱くなった。

「生駒延治だというし、この町の出身だというから、もしかして、と思っていたんだ」

「いやあ、故郷の仕事なんで、懐かしいと思っただけですが、こんなに早く誰かに出会えるとは思っていませんよ。しかも、現場の中で知っている人に会えるなんて。それがなんとコメツブ」

若槻が手を離れた。

生駒の手の平に温かさが残った。

「俺もここから引越してから、かれこれ三十年になる。この現場に配属されることにならなかったら、来ることもなかったかもしれぬ。でも懐かしさはあったな。いろいろ聞いてみると、当時の村の人は、案外まだたくさん残っているぞ」と、また街を見下ろした。

「へえ！ 例えば？」

「行武食堂。この現場に、弁当屋として出入りしている。行武芳次郎。乾物屋だった家だ。延治と同じ年くらいじゃないか？」

若槻が生駒を呼び捨てにした。

生駒はわずかに戸惑ったが、最後に口から出たのは、覚えていませよ！ だった。

「お宮さんから東にちょっと入ったところの行武ですね。同級生で

した。へえ、ここの弁当屋ですか！ 今日、食べましたよ」

「もう会ったか？」

「いえ。まだ」

「相変わらず賑やかな男だぞ。で、町はぶらついてみたか？」

「いや、それも」

「パツと見は、全く変わってしまったている。上から見たらなおさらだ。昔の町の骨格さえ、わからなくなってしまった。あんなところに、新しいバイパスができたりしているからな」

若槻が巨大な看板の列に目をやった。

「でも、歩いて回って、よく見たら、あちこちそのまま残っているところもある。思い出の場所も一杯あるぞ」

「でしようね」

生駒も町の景色を眺めた。

藍原が、あのバイパスは国道二十四号線の渋滞緩和のためにできたものだと言った。

言葉が途切れた。

「ところで若槻さんは、今どちらにお住まいですか？」

「コメツブと呼ぶのは、もう照れくさかった。」

「奈良の学園前。延治は？」

「大阪市内の福島区」

「モノ・ファクトリーという会社は？ 社長か？」

「ええ、まあ。ひとりで気楽にやっています」

若槻が腕時計に眼をやった。

「そろそろ、会社のお偉いさんが来る。俺の様子を見に来るらしい。新任所長を慰労に来るんだと。ばかげた話だ」

手すりから離れ、ヘルメットのおご紐を締めなおした。

「ところで関西建友会の会報は購読していますか？」

仕事モードに戻ったようだ。

「いいえ」

「そうでしょうな。あんなもの、設計事務所の先生は誰も読んでいないでしょう。でも次の八月号は、ぜひ見てくれませんか。会報の名前は確か響きとかいったな。コラムに、私がこの現場のことを書いています」

「はい、ぜひ」

「あ、そうだ。生駒先生に頼もう」

「なんででしょう？」

「現場の北西角に石碑があります。今は工事のために引き抜いてあるんですが、これを復旧しなくてはならないんです。引き渡しまではそこだけ分筆して、地元に寄付するらしいんです。で、どう復旧するかを地元の説明しておきたいんですが、そのままになってまして。そろそろ何か計画を示さないといけないんです。申し訳ないけど、何か考えてくれませんか。本来は、藍原先生にお願いすることなんです」

「フィーのないサービス仕事であることはまちがいはなかった。しかし、たやすいことのように思えた。」

「なんの石碑ですか」

「見ればわかりますよ」

若槻は声をあげて笑い、引き上げていった。

## 4 転落

生駒は、三都興産から指示された住戸の変更内容を確認し始めた。監理事務所に帰ってきたばかりで、薄くなりかけた頭の頂部を濡らしている汗は、クーラーの冷たい風にまだ乾かされてはいない。屋上で若槻と別れてから、藍原とワンフロアずつ見て回りながら降りてきたのだ。

頭と手をタオルで拭ってから、羽古崎からファックスされてきた数枚のメモを読み始めた。

変更指示は、いつもように客の希望がそのまま書いてあるだけだ。客の希望を具体的にどのようにして実現するのかを考え、それを図面として表現するのが生駒の仕事だ。

青焼きのA1判の図面集を広げ、必要なページをコピーした。老夫婦が購入を検討している住戸だった。

希望は、寝室とキッチンとトイレの間を、廊下に出ずに行き来ができるようにしてくれというものだ。

トイレの入り口の向きを変更するだけではなく、便器を設置する向きも変える必要がある。汚水や給水の設備配管を取り回すことができるか、間仕切り壁を取り払うことによっては、排泄や排水の音が他の部屋に漏れるのが気にならないか、といったことを考え始めた。

外廊下を走ってくる足音が聞こえた。

生駒は目を上げた。

窓越しに見える空は、いつのまにか急速に暗くなっていた。そろそろ梅雨入りだった。

監理事務所の引き違い戸をバシヤリ！と開けた藍原が、  
「転落事故だ！ 屋上から人が落ちた！」

と、大声でそれだけ言うと、また廊下を駆けていった。

生駒も事務所を飛び出した。

若槻を先頭にしてゼネコンの職員達が走っていくのが見えた。その後ろから鈴木が携帯電話を耳にあてて足早に歩いていた。

生駒は廊下の手すりをつかんで、目の前にそびえ立っている建設中の建物を見上げた。

仮設のエレベーターがゆっくりと下降してくるのが見えた。雨粒が目に入った。

部屋の中にとってかえし、すばやくヘルメットをかぶると階段を駆け下りた。

若槻が、担架を持ってこい！ と大声で指示しているのが聞こえてきた。

仮設エレベーターの乗り口に人だかりができていた。

若槻、根木、田所、中桜工業の坂本、そして藍原たちが、降りてくるエレベーターが着床するのを待ち構えていた。

金網状の扉がいやな音をたてて開き、織田と石上が男を抱きかかえて降りてきた。

若槻の音が響く。

「すぐに担架が来る。そのまま、そのまま！」

そう言っつて二人に抱えさせたまま、男の顔を覗き込んだ。

男は血の気の引いた顔を若槻に向けた。額に血が流れていた。

黒井だった。

「すみません」

声はしっかりとしている。

織田がまくしたてた。

「黒井さんが足場板を踏んだとたんにはずれたんです！ A棟の屋上から八階に降りる東側の仮設階段の手前です！ 黒井さんが前を

歩いておられました！ 全く突然のことです！ 後ろに私がいましが、あつと思つたときには、もう落ちて……」

「後で聞く！ 手当が先だ！」

若槻は大声で織田を制すると、黒井の体を調べ始めた。

左の太ももあたりから、大量に血が流れ出していた。

黒井を抱えたままの織田の作業服の袖にも、石上の作業ズボンにもたつぷりと血が染みこみ、赤黒く光っていた。

鈴木が黒井のあごの下に手を入れ、ヘルメットの紐の止め具をはずして慎重に脱がせた。

若槻が黒井の頭にそつと触れた。

「頭はどうだ？」

黒井が大丈夫だというように頷くと、今度は両腕を撫でた。

「腕は大丈夫なようだな」

担架が来た。

織田と石上が黒井を担架に下ろそうとする。

若槻は黒井の足が担架の両脇の棒にあたらぬように介添えをしながら、ゆつくりゆつくり、と何度も念を押した。

黒井のズボンは真っ赤に染まり、左の太股の辺りが大きく破れていた。

血にまみれた足が見え、肉の裂け目に白いものがのぞいていた。

鈴木が三角巾で手早く止血をする間、目を見開いて痛みをこらえている黒井の顔に、若槻が手を置いていた。

「よし！ ゆつくり運べ！ 田所！ 川上！ 救急車が来たら病院まで付き添え！」

そう言つと、織田と石上に向き直つた。

織田がまた口を開いた。

「びつくりしました！ ちょうどたまたま、下の階にいた石上が……」

…」

若槻は織田を無視して、石上に声を掛けた。

「黒井が落ちた下を全部調べてくれ。下の階で二次災害が起こっていないか。一階から順に各階を見て回って、何かあってもなくても、すぐに俺に報告してくれ。携帯の番号は知っているな」

そう言うなり、ちよつとそのまま待つていてくれ、と言い残して担架を追いかけた。

若槻は黒井に話しかけた後、田所に何ごとかを指示した。黒井の家族への連絡を指示したようだ。

そしてまた走って戻ってきた。

「鈴木！ 労基に連絡を入れてくれ！ 警察にも連絡しておいた方がいい」

若槻はエレベーターに乗り込みながらも、指示を出し続けた。

「田所！ おまえは大阪支店に一報！ そうだな、木下部長がいい直接、話してくれ。伝言じゃなく。詳しい話は、後で俺からすると言え」

「はい！」

「その後は事務所待機。電話のそばを離れるな」

「はい」

言うが早いか、田所は事務所に駆けていく。

「鈴木！ 今から現場を止めて、いつせいに安全点検をする。各職長連中にそう伝えてくれ。俺が戻ったらすぐに実施する。わかったな！」

若槻が、根木と織田と坂本に、乗れと命じた。

「根木は事故現場の保存。坂本さんも協力してくれ。さ、織田さん、案内してくれ。エレベーターの中で話を聞こう。あ、先生方は、申し訳ないですが警察が来たら、上まで案内役を頼めますか。なにかあったら、携帯に連絡をください」

生駒と藍原は、エレベーターの扉が閉まるのを待たずに、現場のゲートに向かった。

石上の姿はすでになかった。

「生駒先生！ 現場のカメラを持って来るように、香坂に伝えてくれませんか！」

若槻の大声が追いかけてきた。

ときぱきとした指示に、生駒たちも追い立てられるように走った。救急車のサイレンが聞こえてきた。

## 5 おしり

「と、いうことがあったんだ」  
生駒はそういって、ピスタチオをパチンと割った。

天王寺公園の北側、ラブホテルと小規模なマンションが混在した地域に、生駒の友人、柏原の店がある。

築後三十年は経っていきそうな木造の四軒あばら長屋。

安価なリブ付きコンクリートブロックの塀に囲まれて、時代に取り残されたようなエアポケット。

夜になって、マンションの駐車場脇のわずかな植栽スペースに明かりが灯れば、長屋は古色蒼然として、良くいえばアンティークな雰囲気醸し出していた。

店は長屋の一番手前の家だ。

木板の外壁や軒先の瓦などに、修理の跡が見える。店の正面の外壁は窓をひとつ潰して、壁一面に黒いモルタルを吹き付け、背の低い飾り気のない藍色の扉を少し奥まって取り付けてある。

立方体のガラス製ブラケット照明が黄色い光を放ち、鏡面仕上げのステンレスプレートに焼き付けられた「バー・オルカ」と「柏原」の黒い文字を照らしている。

「そりゃ、始末書ではすまないな」

真っ黒なシャツを着た落ちつき払った柏原の姿が、白いインテリアの中にしっくりと収まっていた。

酒や吐息や涙。いろいろなものを吸い込んで、いかにもバーの力ウンターらしい色になった無垢の木の一枚板に、クロームメッキに黒い革張りのスツールが十脚。サービスをする柏原を取り囲むように置かれている。

手の込んだ料理は出ない。おかきや豆菓子をつまみながら、何種類かのウイスキーや缶ビールをちよろちよろと飲む。

BGMは、サザンやサンタナや吉田拓郎がメインで、合間に吉田日出子の上海バンスキングがかかったり、果ては河内音頭やモスラのテーマがかかったりする。生駒らの年代にとつて懐かしい曲を柏原が暇に任せて編集し、かすかに聞こえる程度までボリュームを絞って流している。

客は柏原の友人や、弁護士として活躍していた時に交流のあった人が中心で、常連客同士はいつしか互いに顔見知り以上の仲になっていた。

そして柏原は生駒にだけは、客としてでなく友人として話した。それで、この店では生駒は特別な客として他の客から見られることになったし、この店を通じて多くの友人ができることにもなった。

「労基の調査が入った」

「ロウキってなに？」

聞いたのは三条優。

「労働基準監督署」

生駒は少しだけ説明してやった。

「ふうん、その人、怪我はだいじょうぶなん？」

つやのある長い髪を手でかき上げて、カウンターに頬杖をついている。

整った顔立ちのせいで、実際の年齢より少し大人びて見える。

「全治七ヶ月」

「うわ、それ、すごい怪我」

「でも、運よくとしか言いようがない。なにしろ八階から落ちたんだからな」

この店の常連のひとりだ。

「どこの現場なん？」

奈良の松並町というところ。ハルシカ建設の現場。

「誰にも言うなよ。マンションが売れなくなったら困る」

優は頭も切れるし、雰囲気もさわやかだ。

しかも、さりげなく相手の自尊心をくすぐる聞き上手。他の客とも打ち解けて話す。

柏原はそんな優を重宝して、最初の一杯はおごりということにしていた。

「へえ。今、三都興産のマンションが工事中でしょ。あれのこと？」

「おっ！ よく知ってるじゃないか。まさか、買おうって思ってるのか？」

「うーん。ちょっと遠すぎるわね。そんなに遠くに行ったら、ノブが寂しがるやん」

優は生駒を、ノブと呼ぶ。

部屋に泊まっていく仲だ。元はといえば、生駒がこの店に連れてきたのだった。

「じゃ、なぜ知っているんだ？ そんなに有名な物件じゃないと思うけど」

「ハルシカ建設に、知ってる人がいてる」

「へえ、初耳。大阪支店に？」

「うん。お店に時々来る」

優は歌手志望の娘だが、実態はよくわからない。

今は、週に一回だけ、北新地のラウンジに勤めている。

KENZOというその道では知られた店で、プロ歌手を輩出しているミュージックラウンジだ。マスターその人がプロの歌手だし、ミュージシャンもよく顔を見せて、いきなりセッションが始まったりする店だ。

優はその店で歌手兼ホステスとして、修行かつアルバイトをしているというわけだ。

「常連さんグループやねん。大阪支店の幹部の人たちが」

「へえ、どんな面々？」

「んーと、それは内緒かな、一応。部長級以上やけど。でも、もうお見舞いに行つたよん」

「ええっ！」

「黒井さんやろ」

「ああ」

「ある店のママと一緒にね」

「はあ？」

「ヨウコママ。KENZOの前に勤めてたセピアっていうお店のママ。そのお店も、ハルシカ建設の人がよく来る店でさ。そっちは老若男女入り乱れて来るよ」

「へえ、それも初耳」

「ノブは私のこと、あまり聞かないからなあ。遠慮してるん？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「でね、ヨウコママから連絡があつて、みんなでお見舞いに行くから付き合えつて、強引に。でも、行ってみたら、ママと私と、もう辞めちゃつたミヤコちゃんだけ」

優の話のテンポと行動力には、いつも驚かされる。

「はあー、で、どんな様子だった？」

「気持ちの方は、いたつて元氣そうやったよ。でも、事故のことは腑に落ちないみたい。現場に張り巡らされた鉄の板、足場板っていうん？ 解体中でもないのに落ちるなんて、ありえないって」

優は自分でも信じられないというように首を横に振って、渋い顔を作つた。

形のいい唇が尖つて、かわいらしかった。

「ふーん。そんなことを言つてたのか。ありえないと言つても、現

に足場板はずれた。黒井さんが乗った途端に。なぜはずれたのか、彼はどう言ってた？」

「うっん、なんにも」

柏原は普段は黙って、客の会話を聞いているだけだ。客同士で会話が弾んでいるときは、口を挟むことはめったにない。

しかし、生駒と優に対しては別だ。

店の中であっても、他の客がいなければ完全にトモダチモードだ。

柏原の興味の素に触れたのか、

「大阪は狭いな」といった。

そして生駒に向き直り、

「気になるのか？」と、聞いてきた。

「なにが？」

「おまえ、その黒井さんがどう感じているのか、ユウにしつこく聞くけど」

「ん？」

優が、面白がってグラスの氷を派手に掻き混ぜた。

「あ、ノブ、もしかして妬いてる」

「は？ アホいえ」

「だから、本当にママと行ったんだって」

生駒は、痺れるほどに優を愛していると感じるがあった。

結婚しようか、うん、しよしよ、という軽口を飛ばしあうことはあっても、それは半分本気で、半分は冗談だった。

五十を過ぎて独身のさえない中年太りの男が、しかも安定的な収入さえ得ることができない禿げた男が、二十代半ばの光り輝いている女性を幸せにできるはずがない、と思おうとしていた。

妬いているとかいえないとか、将来ふたりはどうなっているだろうとか、本気で人を好きになることとはとか、優との会話に出てくるたびに、時として心がふさがれる思いがしていた。

「妬いてはいないけど、ユウ、黒井さんの付き合いは古いのか？」

「あ、やっぱり妬いてる」

「しつこいな！」

「古いつてことはないけど、前の店にいたときだけやから、せいぜい二年くらいかな。でも、お店の外で会ったことはないよ。この前のお見舞いが始めて」

「ルックスもなかなか。話もちゃんとできそうな人だし、どう、ユウ、乗り換えてみる？」

「ノブもしつこい！ 言っちゃ悪いけど、興味なし！ ノブ一筋つて、言ってるやん」

たまりかねて、柏原が割って入った。

「おまえらなあ、そんな話は、自分らの愛の巢でしてくれる？」

へへ、と優の唇の端がピュツと上がって、最高の笑顔だ。

この笑顔に、力をもらっている。生駒はいつもそう思うのだった。

「ところでな、俺がさっき聞いたのは、黒井がどう考えているかを、なぜ生駒が聞きたがったのかということ」

柏原が自分用のビールを継ぎ足した。

「単なる事故ではなく、事件性でもあるのか？」

優の目が輝いた。

面白い話になるのか、という期待を込めて顔を向けた。

「いや、事件というのではないけど」

生駒は、翌週の定例会議で話題になったことを話した。

## 6 足場板

定例会議の冒頭に、転落事故の件が若槻から報告された。

「先週末、みなさんには大変ご迷惑とご心配をおかけしました。黒井は市内の病院に入院させました。左大腿骨骨折と全身挫傷、全治七ヶ月です。実際、現場復帰までにはそれ以上の日にちがかかるでしょう」

転落事故は、黒井が織田を伴って現場を巡回している最中の出来事だった。

建物には、すでに四箇所の本設の鉄骨階段が取り付けられていた。しかし作業員らの上下移動のために、建物の四周に組み上げられた工用足場に設けられた仮設階段もまだ残されている。

黒井は、屋上階から八階へ降りる際に、その仮設階段のひとつを使おうとした。

建物の妻側に取り付けられたその仮設階段は建物の端部にあることから、作業員らの主な動線にはなく、それほど多く使われるものではない。

しかしゼネコンの職員が、現場内を一筆書きのように巡回するときには重宝する階段だった。

その仮設階段と、本体建物との間に架け渡された鉄製の足場板がはずれたのだった。

「黒井は、足場板とともに落下しました」

若槻は、会議室のホワイトボードに自分で描いた事故状況の模式図と、事故現場の写真を使って、淡々と説明を進めた。

「織田部長の話によれば、そのときの様子は、次のようになっています」

屋上のパラペットを跨ぐ低い階段を、黒井が身軽に、ぼんぼんと駆け上がった。

そして躊躇なく、空中に掛け渡された足場板に足をのせた。

地上二十七m。そこは建物を覆う養生シートの最上端で、視界が開けている。単管の手すりがあるとはいうものの、足下には街並みが小さく見え、崖の縁で感じるような強い風が建物に沿って吹き上げていた。

黒井は高所の恐怖感などこれっぽっちもないという様子で、手すりに頼ることもなく、颯爽と渡っていく。こんなところでへっぴり腰になっているようでは、建設現場では勤まらない。

それでも、後ろに続く織田の目には、黒井の足取りが注意力や慎重さを欠いているように映った。

織田は風に目を細め、自分の足元を確認しながら、少し遅れ気味についていった。

突然、ギクツとする音を聞いた。

こういう場所で耳にすれば、たちまち鳥肌が立ち、背中に冷や汗がざわつと流れ出すような音。

ガチャリという、金属同士が強い力で擦れるきしみ音だ。

同時に短い悲鳴！

わっ！

はっとして目を上げると、十メートルほど先にいた黒井がもかくように腕を振り上げていた。手すりをつかもうとするかのように。

しかしそれはほんの一瞬のことだ。

軍手をはめた黒井の指先が手すりに触れたように見えたものの、あっという間に視界から消えた。

すぐにドスツという音がした。

続いて、ガシャーーン！

足場板が階下の板にぶつかって派手な音を響かせ、緩やかに回転しながら地上まで落下していくのが見えた。黒井が手にしていたクリップボードが、書類をばたつかせながら足場板を追いかけるように落ちていった。

織田は単管に足をかけ、ヘルメットをずり上げると、手すりに身を乗り出して黒井を探した。

すぐ近くで、男の叫ぶ声がした。

一層下の階に、黒井が投げ出されていた。

すぐ下に架けられた足場板にあたって、運良く内側にバウンドし、地上まで落ちずに八階の床に叩きつけられたのだった。

慌てふためいて織田が本設の階段まで迂回し、八階まで走り降りると、すでに石上や数人の作業員が黒井の脇にしゃがみこんでいた。

「事故の原因は、外部足場の固定が確実になされていなかったことのようにです。なお、二次災害はありませんでした」

羽古崎が難しい顔をして、事故報告書に目を落としていた。

事故はゼネコンの失態であり、責任は所長である若槻にあるが、クライアントの担当者としても無関心ではいられない。

しかし羽古崎は叱責するわけでもなく、不幸中の幸いだったなどと、お茶を濁すようなことも言わなかった。

若槻が報告を続けた。

「で、最も重要な点です。なぜ足場板の留め金具が緩んでいたのか。これは、今のところ不明です。屋上階棟屋の吹き付け工事が事故前日の午前中に行われていましたが、担当の作業員はそのとき、その足場を通ったが異常は感じなかったと言っています。全職員及び作業員に確認したところ、前日の吹き付け作業終了後から事故までの間に、その足場を通った者はいませんでした。また、事故当日の夕

方から翌日の午前中にかけて、念のために現場の中の足場や安全柵など全数を点検しましたが、いずれも完全に良好な状態でした。もちろん、労働安全基準監督署の立ち入り検査でも、この点での指摘はありませんでした」

若槻が一息ついて、天井を見上げた。

「たまたま、あの足場板だけが、いつのまにか固定金具が緩んではずれかけていた、ということのようです」

大変申し訳ありませんでした、と若槻は立ち上がり、羽古崎に向かって頭を下げた。

「工事工程に影響はありませんか」

羽古崎が聞いた。

「はい。工程には影響はありません」

「警察へは？」

「すぐに通報しましたが、単なる事故だという結論になったようで、さっと見ただけで帰られました」

定例会議が終わったとき、生駒は席を立とうとする藍原を呼び止めた。

若槻が書いたホワイトボードの模式図と手元にある屋上部の図面を見比べながら、さっきまで考えていたことを聞こうと思った。

あの日、藍原と一緒に屋上で若槻と話した後、八階に降りるときにその足場板を通ったように記憶していたのだ。

「うーん、そうでしたかね。どのコースで回ったのか、覚えていないですねえ」

藍原が首を捻った。

生駒は食い下がった。

「確かですよ。八階の妻住戸を見に行つたじゃないですか。まだが

らんどうでしたが」

藍原は生駒を見下ろしたまま、黙って頬をさすり、やはり覚えていませんね、と言いつつ残して会議室を出て行ってしまった。

生駒には確信があった。

しかし、だからといってどうするといふほどのことでもない。

あの時間帯にその足場を通ったとしても、金具が緩んだ時刻を特定できるわけでもなかった。

ため息をついて、打ち合わせ資料を片付け始めた。

藍原が開け放していった扉から、若槻が入ってきて、ホワイトボードの模式図を消し始めた。

生駒は、きびきびと大きな動作で白板消しを動かしている若槻の背中を見ながら、今藍原に言ったことを話すべきかどうか迷った。

若槻にとっては、余計なお世話かもしれない。

少なくとも、自分の情報が若槻にとって、それほど意味のあるものだとも思えない。

生駒は資料を持って立ち上がった。

若槻が振り返った。

そして、ささやくように思いがけないことを口にした。

「ちよつと物騒な感じですね」

「は？」

「あれがもし、事故ではなかったとしたら、私を狙ったのかもしれないということですよ」

生駒は驚いた。

若槻は厳しい顔をしていた。

生駒が口を開きかけると、若槻がはじけるように笑った。

「ハハ！ いや、すみません！ 変なことを言いました。忘れてく

「ださい」

生駒を担いだだけかもしれない。

しかし生駒は、部屋から出て行くこうとする若槻に声を掛けてみる気になった。

「足場板の金具ですけど、黒井さんが通る直前に緩んだんじゃないでしょうか。ほら、あの日、屋上でお会いしましたよね」

振り返った若槻が、少し驚いたように表情を見せた。

「その後、私と藍原さんはその足場を通って八階に降りたんです。そのときはなんともなかったように思います。もしかすると、気がつかなかっただけかもしれません」

若槻は口を開きかけたが、ポケットに突っ込んでいた手を出し、右手で左の肩を揉みながら微妙な笑みを浮かべた。

反応を待った。

若槻の鋭い目が見つめていたが、

「ま、あんまり気にせんでください」

と、部屋から出て行ってしまった。

やはり詮索しないで欲しいということだ、と生駒は判断した。

## 7 一陣の風

「ふうん、そうなんか……」

優が、溜息をつきつつ、人差し指で眉毛を撫で始めた。考え込むときの癖だ。

「おい、ユウ。余計なことを思いつくなよ」

「うん……、そうやね、いくら三都興産の御曹司でも……、彼をどうにかしたって……」

「なに！ 三都興産の御曹司？」

「あれ。ノブ、知らなかったん？ 知ってて私に、彼はどうやって鎌かけたのかと思ってた」

「はあー」

柏原が話題の方向を修正してくれた。

「その現場所長が、自分が狙われたのかもしれない、と言ったんだな」

「まあね」

そこで生駒の携帯が鳴った。

「おじさん、アヤです」

その声を聞くなり、生駒の胸に喜びが広がった。

「ちよっと大切なお話があるんだけど、今から、そっちに行っていますか？」

「今からって、どこにいる？ もう七時半だよ」

橘綾。小学六年生だ。

京都の山奥の村で、生駒がある有名な美術家のアトリエを設計していたときに知り合った、村の娘だ。村の娘といっても、元は生まれも育ちも東京っ子である。

生駒はこの娘が好きだった。

子供を持つということが、これほど楽しい感触に包まれた毎日なのかと、綾を見て初めて思うことができるようになった。

綾を挟んで優と川の字になって寝たあの晩、彼女の見せたどこまでも澄み切った信頼と愛情の瞳に、生駒は釘付けになった。

彼女の瞳に見つめられれば、大人なら誰しも心に底に溜めてしまった汚れを、洗い落とすことができるだろう。

いや綾でなくても、子供であれば、誰もがそうなのかもしれない。そんなことを教えてくれたのだった。

「えっ、アヤちゃん？」

優も身を乗り出した。

聞こえるはずもないのに、生駒の携帯に耳を寄せてくる。

「京都駅。だめ？」

「今から会ってたんじゃ、今日中に村に帰れないぞ」

「うん。おばさんは、いいって」

綾は独りぼっちになってしまっていた。

村で一緒に暮らしていた父親は、病で亡くなっている。離婚していた東京の母親は綾を引き取るうとはしなかったし、綾の方も母親には未練はないようだった。

綾は、村でひとりで暮らしている美千代という女性の養女となっている。

美千代は生駒も優も知っている人だったし、比較的裕福でもあった。

綾は、新たに母親となった美千代を「おばさん」と呼んだが、ふたりが強い絆で結ばれていることを生駒は知っていた。

綾の将来を案じながらも、美千代と一緒になら大丈夫だと思っていたのである。

「じゃ、大歓迎だ！」

「やった！ おじさんの家に行くの、初めて！ うっれしい！ ユウお姉さんもいてるといいな！」

綾のはしゃいだ声が携帯電話から聞こえてきて、生駒はそれだけで、喜びという言葉を噛み締めた。

「JR大阪駅まで、ひとりで来れる？」

「もちろん！」

綾は利発な子である。大人びているというのではない。賢く、天真爛漫。

天性のものなのか、山奥での暮らしがそうさせたのか、あるいは与えられた役目がそうさせたのか、綾は生きる力がほとばしっているような子だ。

都会の子にありがちな、暗闇を恐れたり、小さな生き物を恐れたりするようなことはない。ひたすら明るく、物怖じもせず、それでいて心優しい。

老人ばかりが住む山奥の村で、ピカピカ光る宝石のように、芳しい香りのする一陣の風のように、綾は村や周囲の山々のいたるところを照らして回り、笑いを振りまいて回るのだった。

優はもう帰り支度をしている。

「ユウ、おまえが大阪駅まで迎えに行ってくれ。俺はベッドを片付ける。でないと、三人で川の字になって寝れないからなっ」

「うお！ 始めてや！ ノブが自分から泊まっていけっていった！ こちらも、やった！というように拳を振り上げた。」

「柏原、今日はもう帰る」

生駒は美千代に電話を入れた。

「たまには綾も、村の外の空気を吸わないとね。もともと都会の子なんだし。よろしく願います」

そして、美千代は朗らかに、彼女の話をよく聞いてあげてください

いね、生駒さんや優さんが大好きなんですから、と付け加えた。

## 8 仮面

大矢が箕面の現場から帰ってくると、机の上に、連絡をせよといふ若槻からの伝言が置いてあった。

「大矢です」

「おう。やはりおまえに来てもらうことにした。手が足りなくなつた。七月一日からこっちに来い。函面を送っておいたから、読んでおけ」

「はい」

大矢は驚かなかつた。黒井が入院したことで、声が掛かることはわかつていた。

奈良の現場に出勤するまで、あと数日しかない。気持ちを切り替えよう。

大矢はそう考えて、机の上を占領しているぶ厚い函面集を開いた。ざつと目を通した大矢は、奈良本店営業部の電話番号を押した。

栗田昇はすぐに電話口に出た。

「よう！ 新婚旅行、どうやった？」

「どうってことはない」

「おまえは毎日、お楽しみやろうが、俺のほうは散々や。聞いてるかもしれないが、大和中央の現場に行かされることになった」

「ふうん、そうか。いつから？」

「来週の月曜」

「それはご苦労さん。ま、おまえは若槻さんのお気に入りだから」「ふん。そういうことやない。黒井が入院しよつたからな。それにしても、おっさん、やけに気合が入つとる。途中からの引き継ぎやから、できるだけ面子を集めておきたいってことやる」

「気持ちはわかる。絶対に失敗できないからな」

大矢と栗田は、大阪支店の技術者と奈良本店の営業マンという部署の違いはあっても、同期入社仲の良い友人だ。

「ところで、あの物件はおまえの担当やる。いったいなぜこんなことになったんか、聞いておこうと思ってな」

「なにを聞きたい？」

「白井部長が病気になったから交代や、ということは聞いた。しかし、だからといって奈良本店の仕事を、なぜ大阪支店ですることになったんや？　しかも営業担当はそのままおまえで、契約実績も奈良本店というやないか。奈良には他に誰も工事できるやつがないということか？　そんな忙しいとは思えんぞ」

「暇じゃない。こつちもそれなりに受注している。しかし、そのあたりの事情は僕もよく知らない。いきなり、上からそう言うって言われただけで」

「はあ？　いつ？」

「先月の末ごろ」

「理由は？」

「聞いていない」

「担当営業のくせに、頼りないやつやな。結婚式のことですぐ一杯やっただんか？」

「なにを言うか」

「おかしいやないか。奈良本店でできない理由が、なにかあるんか？」

「だから、僕はなににも知らないって」

「おまえが知らんのがおかしいと言ってるんや！」

大矢は大声になった。

女子社員があきれ顔で、人差し指を口の前で振ってみせた。またいつもの調子で毒づいていると思っただけだ。

大矢はそれを無視して、さらに大声を出した。

「なにを頼りないことを言ってるんじゃない！」

栗田が知らないものは知らないと繰り返した。

「それなら、別の聞き方をする。あの物件には、なにか裏があるんか？」

「裏？」

「なにがあつた？」

「しつこいぞ。なにをそんなにこだわっているんだ？」

「こだわる？　こだわりやら夢やら、そんな糞の役にもたたん眠たい話はどうでもええ。えーか、俺はけたくそ悪いんや。あんなろくでもない現場に、誰がほいほい行きたい？　通勤に片道何時間かかると思う？　前の物件もそう。滋賀県の山奥やぞ。今度こそ人間的な毎日が過ごせる箕面の現場に配置されたと思って喜んだとたん、またこれや！」

「裏話を聞いたところで、どうなるものでもないだろ」

「いいや。どうせ行かされるなら、納得づくで行きたいからな」

「わがままなやつだ」

「利益率がいい？　そんなこと、俺になんの関係がある？　会社は儲かるかもしれんが、くつだらん話や。なぜ俺が他の現場を放り出してまで行かないかんのか、納得できる答えを知りたいもんや」

「なるほど、若槻さんはそう言ったのか。さすがに目ざといね。確かに利益率は高い。今どきのご時世では珍しいくらいに。いいじゃないか。ポーナスもたくさん出るぞ」

「ふん。あほくさい！　もともと目くそ鼻くそがちよこつと増えたところで、どうなるもんでもないわい」

「まあ、あんまり詮索せずに、職務を遂行しろよ。どうせ、下々の俺たちには関係のない話だよ」

栗田はわざとらしく投げやりな調子でそう言って、電話を切ってしまった。

翌日、大矢は若槻に指示された書類を取りに、奈良本店に来ていた。

エレベーターの扉が開き、工事部のフロアに入っていった。

この部屋に入るとはめつたにない。本店に来ることはあっても、普段は総務部や設計部での用事を済ませるとすぐ帰路についた。工事部に立ち入ることを、できるだけ避けてきたからだ。

奈良本店工事部と大阪支店工事部の間には、暗黙の縄張り争いがある。

ストレートな言い方をすれば、敵対意識、あるいは足の引っ張りあい。

大阪の工事部からすれば、奈良の工事部は施工力が弱いくせに社長のお膝元にいる立場を利用して、なにかにつけていいめをしているという思い。

奈良の方からすれば、大阪の連中は大きな工事を手がけていい気になっているが、我々こそが会社発祥の地で地元に着した仕事を丁寧に請け負っているという自負。

上層部の間では、公然と綱引きが行われていたが、大矢のように若い社員には関係のないことだった。

それでも、そういう上の空気が各社員の意識にも少なからず影響を与えていた。

フロアは閑散としていた。

打ち合わせコーナーにも応接セットにも誰もいない。

このフロアの中で、大矢がただひとり、普通に話かけることができる女子事務員の姿が部屋の隅に見えた。

「中島さん、こんにちは。大阪支店の大矢です」

大矢が声を掛ける前に、中島と呼ばれた女子社員は、書類を入れた封筒を引出から出していた。

「こんにちは。はい、これ」

「ありがとうございます」

「ホットコーヒーでいいですか？」

「いや……」

「遠慮せずに。誰もいないから」

中島がそう言って立ち上がったので、大矢は厚意に甘えることにした。

手近な打ち合わせコーナーに座り、封筒を開けた。

中島が紙コップを二つ持って、すぐに戻ってきた。

「書類の中身を説明しましょうか」

「ああ」

中島は時間をもてあましていたのか、丁寧に説明しようとした。

「ありがとう、もうわかったよ」

「できるだけ早くここから退散しよう、ということですね」

中島が笑いながら睨んだ。

「うん、まあね。ところで、白井部長はどこが悪いんや？」

「え？」

「体調が悪いって聞いたけど」

中島が意外だという顔をした。

「へえ、そうなんですか。知りませんでした。白井部長は転勤なんですよ」

今度は、大矢が驚いた。

「どこに？」

「九州支店」

「九州？ いつ？」

「来週から。昨日、送別会だったんですよ。確かに最近はあまり元気がないようでしたけど……」

「転勤って、なぜ？」

「さあ」

中島は紙コップの湯気を楽しみながら、大矢を見ている。

大矢は変な話だと思った。体調が悪いからと、担当している大きな工事現場を途中で交代した者が、急に転勤ということはないはずだ。

「あつ、部長が帰ってきました」

中島が、お帰りなさい、と大声で呼びかけた。白井は、ただいま、と言って窓際にある自分の席についた。

まずいとところで会ってしまった、もつと早くここを出るべきだったと悔やんだが、遅かった。

ここで白井に挨拶をせずに、こそこそと出て行くわけにはいかない。礼儀を欠くわけにはいかなかった。

大矢は中島に礼を言つて、白井の席に近づいていった。

「部長、お久しぶりです。大阪支店の大矢です」

「やあ、君か」

白井は気味が悪いほどの笑顔を作つて、大きな声で応えた。

敵対する部隊同士でも、管理職は相手部隊の若い者には好意的な態度で接するものだ。

例えそれが見せかけのものであつても、いつ何時、自分の部下にならとも限らないし、できるだけ仲間を作つておこうという気持ちも働くからだ。

大矢はそういう場面をいやというほど見てきた。白井の態度は、まさにそれだった。

「今日は本社に用事か？」

笑顔をやささず、当然のことを聞いてきた。

「はい。大和中央の件で、書類を取りに来ました」

「おお、そうか。君もあの現場の担当になったのか」

「はい」

「うんうん。よろしく頼むぞ」

仮面を被ったように、ずっと微笑んでいる。

「九州にご転勤だそうですね」

「そうなんだ」

「お世話になりました。もっといろいろと教えていただきたいこともありましたが、残念です。ところで、お体の方はもうよろしいんですか？」

白井の顔に張り付いていた笑みが、固まったように見えた。

「うん、もういいんだ。僕の方こそ世話になったね。君もせいぜいがんばってくれ」

そう言っつて白井は目をそらし、表情を仏頂面に戻すと、電話に手を伸ばした。

会談は終わりだというポーズだった。

## 9 孫請け

一階住戸の内装工事が始まり、生駒は忙しくなりつつあった。

変更に伴う設計担当にもなったことで、業務範囲が格段に広がっていた。ゼネコンとの打ち合わせ回数も時間も、増えはじめていた。インテリアデザインだけの業務なら、一週間に一度の定例会議のときに合わせ、現場を見に来る重点監理で十分だと考えていたが、このままでは週の内半分は現場に来ることになりそうだ。

現に、これまでは定例会議後にはたいした打ち合わせもなく、いくつかの住戸を見て回るだけでよかったものが、最近では必ず田所や香坂らが参加する長時間の打ち合わせが待っていた。

打ち合わせが終わって生駒が解放されたのは、夕方になってからだった。

議題に上がった住戸を見ておこうと思った。

事務所を出ると、現場事務所の下に、たまたま石上がいた。

声を掛けると、いつものように丁寧に頭を下げた。

生駒が降りていくと、石上は待っていたかのように、まだそこに立っていた。

「このたびはお母様がお亡くなりになられたということとで、ご愁傷さまで。どうかお力を落とされずに。お悔やみを申し上げるのがたいへん遅くなってしまって、失礼しました」

石上がかしこまって、また深々と頭を下げた。

「どうも……。現場のほうにも生駒先生にも、大変ご迷惑をおかけしまして」

「いえいえ、とんでもない。大変でしたでしょう。もっとゆっくり休まれたらよろしかったのに」

「いやあ、そうもいきません。あれやこれやで、ま、なにしろ……」。

四日も休ませてもらいました。厳しい世界ですから、それ以上休むと、仕事がなくなってしまう。そうになったら、それこそ困りますから」

と、にっと笑った。

生駒は、石上が言葉の途中で言いよんだように感じた。

母親が自殺したというのは本当のことだったのかと思っただが、興味半分で聞くことではない。

「お母様はおいくつだったんですか」

「七十二でした」

「まだまだお若いのに。お父様は？」

「もうとつくに死んでしまって、おりません。これで天涯孤独つてやつですなあ」

「……」

「兄もふたりおるんですが、ひとりには死に、もうひとりは中学を出ると家に寄りつかなくなりまして。私とは、もうまったく」

「そうなんですか……」

哀愁を帯びた話題は誰でも苦手だが、事の成り行きで、

「ご家族は？」

と、水を向けると、石上は自嘲気味に笑った。

「八八。妻には結婚数年であっさり出て行かれてしまい、子もおるにはおるんですが」

「……。息子さん？」

「はあ。まあ、娘ですが。妻の方に親権があつたということ。生駒は余計なことを聞いてしまったことを後悔した。

「それはどうも……」

言葉に詰まったからといって、じゃ、と立ち去るわけにはいかない。

まさか、頑張ってくださいとは言えないし、気の毒がるのも日の

浅い付き合いでは差し出がましい。

掛ける言葉を捜しているうちに、石上が自分からジ・エンドの言葉を言ってくれた。

「どちらにしても、私らみたいに能のないもんは、一生懸命に体を使って働くだけのことすな。自分のできることをして、精一杯生きていくということすわ」

大げさな表現をしたことが恥ずかしかったのか、石上は顔を両手で強く擦って、笑い顔を作った。

陽に焼けた健康そうな顔が夕日に照らされ、汗が光っていた。

太い指が、作業服のポケットからタバコの箱をつまみ出した。

「最近、本数が多くなりましてなあ。あきませんわ」

「珍しいですね。ハイライト」

「昔からずっとこれです。変える理由もありませんし。つまらんことだわりというもんですな」

織田が通りかかった。

気づかないはずはないのに、まるで無視してサブコンの事務所に入っていった。

生駒はこの男を付き合いにくい奴だと感じていた。

それが態度にも出ていたのかもしれない。織田の方からも、必要とき以外、声を掛けられることはなかった。

石上もそのことに気がついていたのでだろう。生駒の肩を持つようにぼつりと言った。

「昔からあの調子や」

生駒は、ふと今のシチュエーションが気になった。

自分を差し置いて、孫請けである石上と仕事上のやり取りをしている、と織田には見えたのかもしれない。

仕事上の本来の指示系統は、ゼネコンから下請けである織田工務

店、その下の中桜工業へと流れていく。厳密に言えば、生駒は、そのルールを破っている。石上と世間話や施工上の一般論を話すだけでなく、作業上の指示をすることもあったからだ。

本来は、生駒はゼネコンに指示をすればよい。ここではハルシカ建設だ。

それを、ゼネコンはおるか下請け業者も飛ばして、孫請けの担当者に直接話をしていることになる。

ゼネコンの職員とは、阿吽の呼吸がある。ある程度は、設計者が下請け業者に直接指示を出すこともある。

しかし、石上は下請けの職員ではなく、孫請けの職員なのだ。

織田にすれば、自分がないがしろにされていると感じているのかもしれない。

しかし、生駒は石上と話をするのが楽しかった。

いや、正確に言うと、織田より石上の方が話しやすかったし、実際、手っ取り早かったからだ。トラブルになるかもしれないようなことは、必ずハルシカ建設と協議していたので、高をくくっていたともいえる。

「ところで、定例の後に打ち合わせが入ることが多くなりましたね。今日もたった今までそうでした。現場を見に行く時間がなかなか取れなくて。工事時間は夕方五時までですよね」

「ええ、一応は。ですけど、内装工事は日によって七時や八時ごろまでやってます。いよいよ切羽詰まってきたらもつと遅くまでやることになるんでしょうが、今のところはまだ通常ペースという感じですよ」

近隣住民との取り決めで、この現場は基本的に五時には作業を終える。しかし、周辺への影響が少ない内装工事は、延長して作業が行われることもよくあることだ。

「今日は？」

「たぶん、六時には終わるでしょうな。今から行かれるのであれば、  
ご一緒しましょうか？」

「こんな時間から生駒に同行することなど、石上にとってうれしい  
ことではないはずだ。」

生駒はその申し出を断った。

大矢は、大和中央の現場へ着いた。

まだ朝の七時だというのに、蒸し暑い。

早過ぎたかと思ったが、すでに若槻が出勤していた。

思ったとおり、自宅のある高槻市からバスと阪急電車と大阪地下鉄と近鉄電車を使い継いで二時間近くかかったが、もうそんなボヤキを若槻に聞かせるつもりはない。

しかし、所長より早く出勤するには、いったい何時に家を出てくればいいのかと思うと、さすがに気分がぐったりした。

初日は根木からの引き継ぎで始まった。

契約図書はすでに目を通してあるという前提で、根木はてきばきと説明を進めていった。

工事スケジュールと進捗状況、近々の検査日程、設計上の課題と変更点、下請け業者リストや担当者の氏名、契約内容と発注額、取引メーカーリストと金額の仕切り、設計事務所の担当者、施主の担当者、などだ。

昼前ごろまで、会議室で缶詰になった。

「以上が概略だ。俺は来月一杯までここにいる。細かいことはおいおい伝えていく。さて、オリエンテーションの最後は近隣のことだ」  
近隣についての留意点は二点。

一点目は、近隣対策として現場の北側にある神社境内での植栽工事が完了済みだということ。これは地元の要望によるもので、近隣対策工事として実施したことはこれだけ。

二点目は、工事現場の中にあつた石碑を再整備する必要があること。

大矢は神社の植栽図面を、関心の無い目で眺めた。

根木は同じような引き継ぎの説明を数週間前にもしたはずだが、いやな顔ひとつしない。典型的な無色透明のサラリーマンなのだろうと思った。

「地元住民の中には建設反対派がいたが、すでに折り合いはついてる。近隣対策は、昔からこの地域でいくつかの物件を手がけたことのある鈴木課長が担当してきた。彼は副所長としてこの現場に残るので任せておけばいい。ま、地元要員として残るといふことのもうだから」

根木が漏らした最後の言葉に、大矢は引つかかるものを感じた。言わずもがなのことをあえて口にしたのは、特別な意味があるのかもしれない。地元要員なんだから、大阪支店のおまえも気にするな、という意味だろうか。

根木は、なにくわぬ顔で机の上に散らばった資料を整理し始めた。

大矢や根木のような中堅以下の社員は、大阪と奈良のいざこざには無関係だ。

関心はあつたとしても、お互いに思うところはないはずだ。

あえてそんな地雷を踏むことのないように、いざこざに巻き込まれることのないように、うまく避けて通るに越したことはない。大矢はいつもそう考えていた。

「さ、午前中の講義はこれで終わり。昼飯までに設計事務所とサブコンの連中を紹介して回ろう。午後からは現場内を案内するつもりだ」

大矢は、立ち上がった根木に礼を言った。

油物が目立つ出入り業者の弁当を食べると、大矢は自分にあてがわれた机の引き出しに物を詰め込み始めた。

昼休みには誰もなにもすることがない。作業服のまま町をぶらつくのははばかられるし、かといって現場内でキャッチボールをし

たり、将棋をしたりする気にもなれない。

現場内の人間関係も、かつてのような古き良き時代の家庭的雰囲気や徒弟制は完全に失われ、目に見えて希薄になりつつある。

めいめいが勝手に新聞を広げたり、本を読んだりしていた。

静かだった。

椅子の背に深くもたれかかって眠っている者もいた。

根木がパソコンに顔を近づけていた。インターネットに接続して覗いているものが何か、大矢には興味はない。

田所は事務所で弁当を食べるのが嫌なのか、昼休みになるやいなや、スーツとどこかへ出て行ったきり戻ってきていなかった。単独行動が好きな男だ。ベタベタしているよりよほど気持ちがいいとは思うが、同僚として頼られていないと感ずることがあって、大矢は田所を好きになれなかった。

大矢は愛用のノートパソコンを取り出した。

最近では工事現場でもネット環境が整っている。この現場でも本店や支店のLANに繋ぐことができる。

これによって、奈良や大阪の事務所にいるのと同じように事務的な連絡は回ってくるし、現場からは出来高などのデータを送ることができた。

きちんとした報告はやはり会議でなされるのだが、ファックスや郵便や宅急便でさまざまな書類を送っていたところに比べると、事務効率も少しは上がったといえる。

「これ、LANに繋ぐんやけど、やり方、知ってる？」

派遣会社から雇った事務の女性がすまなさそうに、知りませんと応えた。

大矢は自分でLANに繋ぐことはできた。

しかし、少し前までここが奈良本店の現場だったことで、大阪とは違うシステムになっているかもしれないと思って聞いてみたのだ。

昼休みだというのに、パソコンのモニターに映し出されたCAD図面に目を凝らしている女性が、すぐ後ろに座っていた。

本店のCADオペレーター。主に、設計事務所が描く設計図を、現場での施工用図面に書き直していく作業をする。設計事務所の図面の精度が低かったり、施工中の変更が多かったりすると、大変な重労働になる。深夜勤務もままある仕事だ。

二十そこそこのチャーミングな女性。

大矢は朝から気になって仕方がなかった。

香坂が下を向いて手元の図面に目を落とすと、ドールのような巻き髪が前に垂れて、白いうなじが現れた。部屋の白い壁のクロスを背景にして、きれいにカールしているまつげが見えた。

視線を感じたのか、香坂が図面から目を上げて大矢に向き直った。「それじゃ、利用申込書に必要な事項を書き込んでもらえますか」といって立ち上がり、レターケースから一枚の用紙を取り出した。

「今までのメールアドレスなんかは変えませんか。じゃ、こことここだけ記入してください。それからここにハンコ」  
書類の上を動く香坂の指には、細いシルバーのリングが光っている。

マニキュアをしていない切りつめられた健康そうな爪。

ピアスを三つもしている子なら、楽しくてかわいいネイルがしてありそうだが、キーボードを打ち続ける仕事なのだから、これで普通だ。

そんなことに大矢は、ほっとした。

香坂が、この現場ではLAN以外にメーリングリストと違って、自動的に現場内の全メンバーとメールのやり取りができるシステムを使っていると説明した。

「ふうん、なかなか先進的なことをしてるんやな。でも、こんな大きな現場でメールリングリストを使うというのは、あんまり聞いたことがないな」

香坂が頬に手を当てて首をかしげた。

小さなあごの先のふくらみが魅力的だ。仕草はキョートだが、言葉は他人行儀で味気ない。

「そうですね。ただ、誰でも参加できるわけじゃなくて、私達と各サブコンの所長クラスの人と、設計事務所の人だけです。でも実際は、それほど使われていません。社外の人にもいつせいに知らせることって、そんなにないですね。個人のメールのやり取りは盛んですけど」

今日始めて会って、今言葉を交わしたばかりだ。もっと愛嬌のある話し方をしてくれないかな、と思う方が厚かましい。

それをわかっていながら、大矢は物足りない気がした。

「うちの所員は全員、メールを使えるんか？」

「ええ」

作業服の上からでもわかる、どちらかといえば、細身の体。痩せているというのではない。肩も腰もボリュームがある。

それに、むき出しの腕から判断すると、引き締まった体を持っているようだ。

「若槻所長も？」

目が合った。

視線を恥じて、大矢は書類に視線を戻した。

「そうですね。でも所長は、読むだけ」

「へえ、知らなかった。ほい。これでいいか？」

大矢は書類を渡そうとした。

香坂はストリップというように手の平を突き出し、冷たく聞こえるくらいにはつきりと言った。

「総務の川上さんに渡してください。彼が本社に送ってください」  
「ん？」

「私は契約社員ですし、そういう手続きはできません。でも、承認のファックスが来たら、パソコンの接続と設定は私がしてあげます。もし必要なら」

「自分でする」

立ち上がった大矢に、香坂はやんわりと笑って、隣のデスクに寄りかかった。

体形が強調された。

柔らかくメリハリのあるライン。

作業服の上からでもわかる、豊かなふくらみ。

「ねえ、大矢さん。お願いがあるんですけど」

「あん？」

「黒井さんの机、彼が帰ってくるまで、私が使ってもいいでしょうか。この机なんですけど」

指先で机の上を、つーつと撫でた。

「あのパソコンデスクだけじゃ狭くて。図面を広げるのにも苦労しているんです」

黒井のデスクには、見事になにも載っていないかった。

黒井康之と丁寧な文字で大書きされた連絡ノートが置かれてあるだけだ。

大矢は二つ返事で答えた。

「ええよ。どうせ元々、ここ二つ分をあいつが使ってたんやろ。でも引き出しは」

最後まで聞かず、香坂がうれしそうに笑った。

「引き出しはいいんです。図面を広げるだけですから」

## 11 螺旋

昼休みが終わり、根木が大きく伸びをして、さあ行くか、と声を掛けてきた。

大矢は図面集の縮刷版を持って立ち上がった。

まず最上階に上がり、順に下りてくることにした。

根木は現場の中が隅々まで頭に入っているようで、フットワークよく動き回って大矢に説明をしていく。部位ごとの工事担当の下請け会社や仕上げの予定、スケジュール上のクリティカルになっている点などだ。

根木は作業員に出会つと陽気に声を掛け、その場で気がついたことを指示したりした。

三階まで降りてきた。

内部間仕切り用の軽量鉄骨の柱が林立している段階の住戸に入ると、険のある声が飛び込んできた。

「そりゃあないだろ！」

大矢らが入ってきたことに気がついていないようだった。

織田が鈴木に詰め寄っていた。

「ちゃんと金は払ってもらいたい。あの家をほつたらかしにはできなかった。あのままじゃ住めないからな。せめて屋根だけでも仕上げてしまわないと。俺たちにも工事店としての信用というものがあるんだ」

鈴木がおう揚に心えている。

「ばかいい。おまえはすぐに工事を中止しろと言ったそうじゃないか。それを中桜工業が見かねて、工事をなんとか終わらせたと聞いているぞ。偉そうに言うものじゃない。とにかく、いいか、あの話はなかったことになったんだ。一旦支払った金を返せとは言っていない」

ない。ただ、今後の支払いの中から差し引かせてもらおうと言ってるんだ」

「そんなばかな話があるか！」

根木が大矢の肩をつかんだ。出て行こうと促している。

きびすを返すとさっさと部屋を出て行き、どンドン歩いていく。

「あれ、なんの話ですか？」

根木は振り向かなかつた。まだ黙って歩いていく。

二階まで降りると、やっと振り向き、はつきりといやな顔をした。

「ふん、くだらない。考え方の相違。おまえが気にすることはない。もうけりについては」

根木はそう言っつて、目の前にある大きな床の開口部を指差し、ロビーの吹き抜けにあたるところだと説明を始めた。

現場では、ああいう言い争いはままあることだ。

金額が安いだの高いだの、段取りが悪いだの、仕事が雑だの、現場が汚いだの。

特に、金の支払いにまつわるトラブルは、どこの現場にもある。

しかも織田は、屋根の仕上げがどうのこうのと言っていた。この現場の件ではない。まだ、屋根の仕上げが問題になるような段階には進んでいない。

自分には関係はない。根木が言ったとおり、気にすることはない。

大矢は現場を見て回ることに意識を戻すため、しゃがみこんで、単管で組み立てられた転落防止用の手すりに触れた。手すりは、緊結用金具で床から突き出た鉄筋と確実に固定されていた。

「今、俺たちは二階のラウンジにいる。この吹き抜けの手すりは、原設計ではコンクリートの立ち上がりにタイル貼り。でも、この手すりは視線を通すものの方が、下のロビーが明るくなっていいと思わないか？ 実は、俺たちからアルミ鋳物の手すりにしたいと提

案しているんだ。サンプルが事務所にあるから見ておくといい」

「はい」

「安いわりに、見栄えはまあまあだ。まあ実際は、例によってコストダウンが目的だけだな。今、設計事務所の方で検討してくれている。で、こんな状態のままだ」

大矢は根木のレクチャーに集中した。

明日から実務が始まる。

遅れて参加してきたとはいえ、足手まといになりたくはなかった。二人がいるところは二階のロビー的な空間にあたる。設計では、乳白色のガラスの間仕切りで仕切られた小部屋が設けられることになっている。

「ここはラウンジで、その辺りが談話室。図面によってはライブラリーと書いてあるが、同じ部屋のことだ」

「はい」

「見てのとおり、まだ内・外部共に建具が入っていないが、インテリア設計がまだ最終的に決まっていけないんだ。で、ここもペンディング状態」

コンクリートの床を歩いていき、建物の先端に立った。

養生シートを透かして、現場内の駐車スペースや白い仮囲いやゲート、現場事務所が見えている。

大矢は、将来ここに談話室ができたときの眺望を想像してみようとした。大きな窓を通して、マンションの表玄関の車寄せや植栽帯越しに、前の街路を行きかう車や街並みが見えようになるはずだ。

「一旦、戻って休憩するか」

吹き抜けに取り付けられた鉄骨の螺旋階段を降り始めた。

この階段もまだ仕上げはされていない。モルタルが流し込まれただけの段板が、かつんかつんと乾いた音を響かせた。コンクリート破片や砂埃が薄く積もっていた。

そのころ、生駒のオフィスでは、

「だいたいそんなところ？」

「はい。今日の打ち合わせは以上ですね。ありがとうございます」  
生駒は図面集を閉じ、赤の色鉛筆をペンケースにしまった。

メールで送られてきていた質問事項を事前に検討していたので、  
打ち合わせは思ったよりも短時間で終わった。

「コーヒーを入れよう」

立ち上がってキッチンに入り、慣れた手つきでコーヒーを沸かし  
始めた。

香坂が改めて部屋の中を見まわしていた。

「すてきなオフィスですね」

生駒の事務所は、オフィスといってもファミリーマンションの一  
室で、自宅兼用だ。

玄関を入ったところが打ち合わせ用スペース。元々の飾り気のない  
リビングルームと狭い個室を改造したところだ。照りのある黒い  
木製のミーティングテーブルが白い空間の中で存在感を出している。  
心理的な結界かつ目隠し代わりにしている大きなベンジャミンの  
鉢植え。

独立した生駒が初めて手がけた集合住宅のドローイング。

そんなものを香坂は興味深げに眺めていた。

トレイに載せたカップを運び、生駒は再び香坂の正面に座った。

「取り柄は、大阪駅から歩ける距離にあるってことだけ」

「こんな便利なところでしたら、家賃、高いんでしょう？」

「いや、分譲。中古だけど」

「まあ、失礼しました」

香坂がそそくさと書類をトートバッグに入れ始めた。

外部の人とひとりで打ち合わせに出掛けるのは初めてだと言って、  
香坂は緊張しっぱなしのようだ。今にも立ち上がりそうに、水色の

バッグを抱えている。

「さあさ、かばんを置いて。ゆっくりして」

「ありがとうございます」

「たいした物件じゃないよ。古いから。それに住まい兼用だし、経費という意味では、ただみたいなもの」

「この白い壁、先生がご自分で塗られたんですか？」

オフィス部分の壁は改造のついでに漆喰の櫛引で仕上げている。ビニールクロスにはない質感がある。

「いや、もちろん職人さんにやってもらった」

「いいですよ。こういうの。本物で」

そう言って香坂がまた、部屋の中を見まわした。

無事に打ち合わせも終わり、熱いコーヒーの香りでもうやく緊張がほぐれてきたのだろう。好奇心満々という顔になっていた。

「でも、これってひび割れてきませんか？」

「割れるかもしれない。しかし塗ってから二年ほどたってこの調子なら、大丈夫じゃないかな。でもひび割れてきても、それはそれで味だよ」

「ですよ。今の住宅はクロス貼りばかり。あれってなんだか嘘臭くて、私、好きじゃないんです」

「マンションは手間ひま掛けられないからね。それに、引き渡しの際にちよつとでも傷がついているとクレームをつけまくる客が大勢いる。だから供給サイドはこんな塗り壁なんて、やりたくても怖くてできないんだよ」

「お金もかかりますしね」

「まあね。でも、少しでもその気になれば、もっといい空間が手に入れられるのに、たいがいの客は自分で自分の首を絞めていることに気がついていない。見せかけだけの豪華さに惑わされてしまつてね。欠陥マンションだとか手抜き工事だとか騒いで、本当にいいものと見せかけだけのものとの区別を教えないマスコミにも辟易する

よね」

「ええ」

「それに、そんな風潮に便乗した専門家が、素人受けする欠陥マンションを見抜く方法、なんていう本を出したりして、ますます不安心理を煽っている。無責任だよね」

生駒は言ってから、ちよっとくどいかなと思った。

多くの設計者が感じていることだし、香坂にとっても判りきった退屈な話かもしれない。

香坂が話題を変えてきた。

「黒井さん、お気の毒ですね」

生駒は姿勢を正した。

## 12 雑談モード

「この現場に自分から志願したのに、あんなことになってしまって不幸中の幸いだってみんなは言うけど、そんな言い方って、慰めになりませんよね」

香坂は生駒の前で、黒井だけでなく同僚を、「さん」付けで呼ぶ。契約社員という会社に縛られない自由さがあるからだろうし、まして黒井の場合は歳もあまり離れていない者同士という親しみもあるのだろう。

「そりゃ不運だろうな。彼は三都興産の御曹司だそうだね」

生駒は仕事先の人たちと、進んで食事をしたり酒を飲んだりする。仕事上の儀礼ということではないし、コミュニケーションをとるためにという名目でもない。

せっかく知り合った人と、仕事上の付き合いだけで終わらせるのはもったいないと思っていたし、少し踏み込んだ関係を作ることが楽しかったからだ。それに、そういう関係の中でこそ、結果としていい仕事ができるとも考えていたからだ。

しかし、いつでも誰とでも心から楽しめているか、ということそうでもない。

会議を食事の席にまで持ち込んだだけ、という相手には辟易するし、相手によっては微妙に緊張することもあった。

香坂との関係を、親しいものにしたいたいと思いはじめていた。

元生徒、そして携わっている現場のCADオペレーターという関係だけではなく、友人として一歩踏み込んだ付き合いになればと。

香坂は、若い娘らしく身なりや化粧といった自分を飾るものにも並みに興味があるようだったが、それと同等かそれ以上に、自分の仕事やスキルにも貪欲だった。打ち合わせでも懸命さが伝わってくる

る。

生駒はそう感じて、香坂をこれからも見ていたいと思うのだった。

三都興産の御曹司という、生駒のざつくばらんな表現に抵抗があったのか、香坂がコーヒーカップを口元で止めた。

「ええ。だからこそ黒井さんは、あの現場に参加したいと思ったそうなんですけど……」

「気合が入ってたろうにね」

生駒はお悔やみのような言い方だったなと思い、言い直した。

「治るまでの数ヶ月。待ち遠しいだろうね」

香坂はコーヒーカップに口をつけず、皿に戻した。

ニコリと笑った。

「私、極端な猫舌なんです。だから人と食事するとき、うどん屋さんやお好み焼きなんかはだめ」

生駒は笑って、香坂もちよこつと出した舌をピクピクと動かした。

「それが……、大矢さんが来て、それでもないみたいなんです」

「うん？」

「実はですね」

リラックスモードに完全に切り替わったようだ。

「若槻所長は元々、大矢さんをこの現場の担当にと考えておられたんですけど、彼が別の現場で動けないということでモタモタしているうちに、黒井さんが名乗りを挙げたそうなんです。でも、やっぱり施主のご子息とはやりにくいと思われたんでしょう。どうも黒井さんはずしたい、と思っておられるみたいなんです」

「ふうん」

「単なる噂ですよ」

リラックスモードどころか、雑談モードに入っていた。

「でも、彼が病院から出てきても、工事はもうあらかた終わってる頃じゃないかな」

「もう使いものにならないってことですね」

「なんともきつい言い方をするなあ」

香坂の雑談モードに乗せられて、生駒は事故の前に自分もあの足場板を通ったこと、それを若槻に言ったときのことを話した。

「へえ、そうだったんですか。でも、所長の反応もわかりますよね。もう事故処理も済んだんですから」

「そうだね、と応じたものの、あのとときの若槻のささやきの違和感が、また持ち上がってきた。

「黒井さんの巡回は、いつものコースだったのかな」

「さあ」と、香坂が首を捻った。

「いつもあの二人で？」

「あ、それは違います。いつもあの時間帯は、所長が巡回されるんです。あの日は、本社の偉いさんが来て行けなくなっただので、たまにたま黒井さんが所長の代役に。所長は几帳面で、決めた現場の日課は絶対に守られるそうなんです。自分が行けなかったら代役を立てても」

「そうか、だから若槻は、自分が狙われたのかもしれないと言っただの。」

「若槻さんは、いつも織田さんと？」

「いいえ。所長はいつもおひとりです」

「ふーん。あ、そうだ。本社の偉いさんというのは？ 事故のときはもういなかったのかな」

「お名前は知りません。事故のときは、もうお帰りになってました」

若槻はあの時、冗談が受けたときにように笑った。

しかし、半ば本気で物騒な感じだと思っていたのかもしれない。

生駒はもう少し、あの日の事情を聞いてみたいと思った。

「黒井さんが代役に決められたのは、直前のこと？」  
「たぶん」

「織田さんが一緒だったのは、どういうこと？」

「さあ。たまたまじゃないですか」

「たまたまか。で、あの後で何か話題になった？」

「は？ どんなことですか？」

「いや……」

生駒は口ごもった。

若槻がささやいた、冗談とも本気ともつかないことは、他人にする話ではない。

「さあ、特になにも聞いていませんけど……。もちろん、大矢さんが急遽こちらに来ることは話題になりました。仕事の段取りは大変そうでしたから……」

「警察の連中はなにも疑問を抱かなかつたらしいけど、現場内の判断としては、どうだった？」

「事故の原因ですか？」

香坂に見つめられて、生駒は意識して微笑んでみせた。香坂の顔に疑問符が張り付いていたからだ。

少し間が空いた。

「そうですねえ。特には……」

「そうかあ」

生駒の反応は、思わず気のないものになった。

しかし香坂の顔の疑問符は大きくなっていった。

「あの、先生がおっしゃるのは、事件性がないかどうか、ということでしょうか？」

生駒は身を乗り出した。

まともに目が合った。

「そんな噂もある？」

「いえ。ですから、ありません」  
香坂が目をそらした。

### 13 サンプルの束

事件性という言葉に対する生駒の反応が、強すぎたのかもしれない。香坂の、会社員として防衛反応が働いたのだろう。

生駒は立ち上がって、中元でもらったクツキーの缶をブックシェルフから下ろした。

香坂がコーヒーカップにようやく口をつけ、「冷ましすぎた」と笑った。

「温めようか」

「いえ。そんなことをしたら、また飲めなくなってしまいます」

生駒は袋入りのクツキーを二つずつ、コーヒーカップの横に置いた。

「ところで、石上さんも気の毒だったね」

「本当に……」

「お母さんは自殺されたそうだね」

香坂がさつと生駒を見たが、すぐに目を落とした。

「勤め先から解雇されて」

石上の不幸を、香坂との雑談のネタにしようとしたわけではなかったが、仕入れた話をつい披露してしまった。

香坂はうなだれたままだ。

人の陰口を叩いてしまった自分が情けなくなった。

「石上さんは親切にしてくれるし、仕事熱心な人だ。気持ちが悪くないでしまわなければいいのに。本当にそう思うよ」

生駒は体勢を立て直そうとした。

別の話題を探そうと、書棚に眼をやった。

頭に浮かんだことは、住宅の内装部に含まれる化学物質による健康被害の云々とか、日本の林業の儲からない現実云々とか、流行の屋上緑化に適した軽量土壌と乾燥に耐える植物云々。

どれもおもしろい話ではない。少なくともロマンティックな話題ではないし、夢のある話でもない。

再び口を開く前に、香坂が聞いてきた。

「石上さんから、お聞きになったんですか？」

生駒の陰口を許さないらしい。口調に厳しさがあつた。

「いや。坂本さんがそんなようなことを」

中桜工業の坂本から耳に挟んだ話は、石上の母親が住み込みの家政婦としてご隠居さんの世話をしながら、少しずつ金を掠め取っていたらしいということだった。

しかし、そんな噂話を香坂に披露できるものではない。

「そうですか……」

顔を上げた香坂の目に、非難の色がのぞいていた。

「ところで、香坂さんはあの現場に来る前、どこの現場にいたのかな」

苦し紛れの世間話的话题轉換に、明らかにホツとしたように、香坂がクツキーの小袋を開けた。

「現場に出るといわれたのは、今回が初めてなんです。それまでは技術研究所というところにいました。奈良本店の中にある小さな部署なんですけど、このご時世じゃないですか。研究なんかやってないで前線に出て働け、ということなんでしょう」

もとの明るい声に戻っていた。

クツキーをパクンと口に入れ、おいしいと微笑んだ。

できるだけ無表情を作り、内心を悟られまいとする人が多い中で、香坂のように好き嫌いや喜怒哀楽がはつきり顔に出る人は貴重な存在だ。

生駒はそんな香坂の若々しさが好きになっていた。

生駒もクツキーの袋を開けた。

「へえ、契約社員でも？」

「そう。派遣契約では、研究所のメンバーの補助として図面を描くという仕事だったんですけど、人が現場にどんどん出て行ってしまつて、いつのまにか開店休業状態。で、私も現場に出るということになつたんです。あの現場でも、初めの頃は社員の方もひとりおられて、ふたりで図面を描いていたんですけど、最盛期を過ぎたら私だけとり残されてしまつて」

香坂が声をあげて笑つた。

「ふーん。そういう場合、契約違反とかなんとかで、派遣を取り止めたりすることもあるつて聞いたけど」

「そういう場合もありますけど、私も勉強になるし、楽しんでますから」

瞳がくるくると動き始めた。

「建設業界に在るといつても、本当のことつて、なかなかわかりませんよね。でも、こつこつ自分の仕事をしながら感じることもあるんですよ。楽しんでるなつて思うのは、そういうなにかを感じたとき」

「そうだね。例えば、最近、どんなことを感じた？」

一般論が好きな人がいる。

いつも大所高所に立つて社会の矛盾を嘆き、問題点を列挙してみせる人だ。

他方、そういういわゆる自称論客を嫌い、同じテーマで話すときも、常に自分の身近な出来事や生き方や、周囲の変化などを雑談のように話しながら、自分が感じた流れのようなものを伝えようとする人もいる。

生駒は自分が前者でしかないと思つていた。

それでよしと思つてゐるわけではない。力が入りすぎて、演説や訓話のようになってしまふのが自分の欠点だと思つていた。

香坂は後者のようだ。

彼女と話をするのは楽しかった。

本当は、人は誰でも、自分の目線で見たことを話したり聞いたりすることの方が好きなのだ。

そんな話をしないのは、自分の感性に自信がないからか、話すテクニックを持っていないかのどちらかだ。生駒はそう思っていた。

翌朝、香坂からメールが来た。

こんにちは。よく降りますね。

今日の定例会議、よろしくお願いします。

とんでもないことが話題になりますよ。

生駒先生にも関係することです。

内容？ それは会議で。

これ以上言うと、スパイまがいのことをしたと叱られるかもしれないから。

それから、今日は新しく着任した内装の担当者をご挨拶すると思います。

いい人みたいですよ。

でも、引き続き、私ともよろしくお願いしますね。

さて、F302号室の変更プランの件ですが、

生駒は、新しい担当者と会えるのを楽しみにしています、というように短い返信を送った。

香坂の事前情報のとおり、七月に入って最初の定例会議には険悪なムードが漂っていた。

住戸に敷くカーペットの入手のめどが立たなくなっていたのだっ

た。

この現場の場合、コスト的に厳しいということはなかったが、それでも切り詰められるところは切り詰めたいというゼネコンの意向で、一部の仕上げ材を海外からの輸入品でまかなうことが提案されていた。子供室のカーペットもそのうちのひとつだった。

若槻が謝った。

「大変、申し訳ありません。エヌピー産業からマレーシアの現地法人に問い合わせたところ、納期どおりには生産が間に合わないというのです。他のものならストックがあると行ってきていますので、替えていただくわけにはまいりませんでしょうか」

ハルシカ建設が、もっと安いものを使おうと、ひと芝居打っているということも考えにくかった。

エヌピー産業とはハルシカ建設の子会社で、海外資材の輸入を専門にしている会社だ。

会議室の隅に、その担当部長であるという佐野川卓郎という男が、かしくまって座っていた。

「いまさら替えてくれと言われてもだめです。既にお客さんはモデルルームでカーペットを見ているんです」

藍原が静かに、しかしきっぱりと言った。

若槻はむつかしい顔をして黙り込んだ。

沈黙が流れた。

いたたまれなくなつたように、佐野川が小さな声で言った。

「いろいろ手を尽くしておりましたが、本当に申し訳ありません」

突然、若槻が声を荒げた。

「きちんと工期に合わせて納品できるのか、確認してから注文を出したのか！ おまえのミスだぞ！」

佐野川がますます小さな声で謝った。

顔が赤黒くなっていた。

自分のミスを恥じているのか、関係者の前で無能呼ばわりされた怒りなのか、うなだれて床を見つめていた。

生駒も居心地が悪くなった。

そのカーペットは、ハルシカ建設から提案されたサンプルの中から、数ヶ月前に生駒が選定していたものだった。

選んだのが生駒だとしても責任はない。設計事務所の立場としては、あくまですでに決定したカーペットを入れてもらわなければならない。

クライアントの三都興産から、監理者としての責任を追及されるかもしれないからというわけではないが、ここで簡単に折れるわけにはいかなかった。

「なんとかするるように、もう一度先方にプッシュしてみてください」  
そう言うしかなかった。

このような課題が出たとき、クライアントの担当者があると話が早い。

特に羽古崎は決断も早いし、上司からの信頼も厚い。問題のおおもとや責任の所在を理解した上で、対処の方向を示してくれた。

しかし、今回の会議には参加していなかった。三都興産からは打田という女子社員が参加していたが、メモをとるだけで自分から発言しようとはしない。当てられたら困るという小学生のように、黙ってノートを見つめていた。

ゼネコンの職員達も黙りこんでいた。

今日から会議に参加した大矢という職員は、なにくわぬ顔で議事録用のメモをとっていたし、根木や田所も神妙な顔つきのまま、口を開こうとはしなかった。

周囲の沈黙に押されたかのように、佐野川が小さな声で三たび謝

った。

「もう一度確かめさせます」

若槻はそう言うと、佐野川を無視して次の議題に移った。

会議が終わり、監理事務所に引き上げてから、生駒と藍原はカーペットの問題について意見交換をした。

結論は見えていた。

ないものはないで仕方がない。設計事務所として新しいものを選んでおく必要があった。

「それにしても、とんでもない話だ。今になるまで、あんなことがわからなかったってことが問題ですよ。もしかすると、隠していたのかも知れない。あの佐野川って人、だめだな」

藍原は怒りが収まらないというように、会議資料でデスクの角をバシリと叩いた。

「少し前まで、若槻さんの部下だった人ですよ。その前は白井さんの部下で、着工直後はこの現場にもいたことがある人です。その頃はあんなちゃらんぼらん人だと思わなかった。パチンコ狂いのおかげで、性格までいい加減になってしまったんだ」

そう言いながら、以前、ハルシ力建設から提出されたカーペットのサンプルの束を、ストッカーから乱暴に引きずり出した。

ゼネコン事務所と通じている扉が開いて、大矢が入ってきた。

藍原と大矢はすでに面識があるらしく、挨拶もそこそこに、立つたまま打ち合わせを始めた。

生駒はカーペットのサンプルを広げて、一枚ずつ見ていった。

一旦は没にしたものばかりなので、これといって気に入るものはない。主寝室に選んだものを子供室にも使うということでもいいのかな、と考えたりした。

考えながら、技術系で入社したものの、子会社に転籍になり、海

外資材の営業をさせられている男の気持ちを思ったりした。

## 14 弁当屋

「初めまして。大矢と申します。内装関係を担当することになりました。よろしくお願ひします」

大矢が名刺を差し出した。

ゼネコンの職員にとって、生駒はインテリアを専門にして現場に乗り込んでいるという疎ましい存在だが、大矢は気にもかけていないようにざつくばらんに自己紹介をし、例のカーペットの件ですが、と切り出した。

この三十過ぎの男の考え方ひとつで、生駒のこの現場での仕事の進めやすさや楽しみの具合が変わる。

どんな変更や再検討にも前向きに気持ちよく進めてくれるかどうかで、デザインの自由度が決定されるし、設計者である生駒の気分も変わる。

理解しあい、できるだけ密に、二人三脚で進めていかなければならない相手だ。

大矢は体重百キロはあるつかという巨漢だ。

太い腕が作業服の半袖から突き出し、五分刈りの頭はバレーボールほどもある。異様なほど大きな丸い目と鼻。そして無精髭。

大矢が内装工事のスケジュールを、ばか丁寧に説明した。

そのだみ声を聞きながら、生駒は姿や声とは裏腹に繊細な気持ちの持ち主かもしれないという印象を持った。

そして、投げやりな気持ちはどこかにあるようで、慫慂な態度の中にもよそよそしい言葉が耳についた。

大矢との打ち合わせが終わり、カーペットを選び終わったときを見計らったように、石上が顔をのぞかせた。

「あつ、もうそんな時間ですか。ちょっと待っててください。暑いから中に入って」

生駒はそう言っ、大阪の自分の事務所に電話を入れて留守録を聞いた。夕方の日課にしていることだ。メーカーなどからの営業の電話がほとんどだった。それでも何件かは重要な連絡が入っている。

藍原が、大矢と石上を相手に、黒井の事故の話 시작했다。

「やはりあれは変ですね。生駒さんは、あの事故の直前に私とあの場所を通ったけど、そのときは足場板はなんともなかったと言っています。僕もあれから気になっていたんですけど、ふと気がついたら、もしかすると僕たちの内どちらかが落ちていたかもしれないんですよ。ぞつとしますよ」

のんきな調子で藍原が言うことを、ふたりは黙って聞いていた。

「結局、あれはどういうことだったんでしょう。若槻さんはあれ以来、報告されないし。金具のボルトが緩んでいたとあって、あんなもの、そんなに簡単に緩むものじゃないはずだし」

これは大矢に向かって言ったようだ。大矢が困った顔をしていた。「ねえ、そう思いませんか？」

石上にも同意を求めた。

「私らにはそういうことの説明はありません。ただの孫請けですか」

石上はヘルメットを被ったまま、扉の横に突っ立っていた。

「ただ、こう言っちゃあ叱られますが、実際、現場ではそんなことは絶対にない、とはいえませんし……」

「それを言ったらだめですよ」

まだ遠慮があるのか、大矢が石上をやんわりとたしなめた。

石上が、自分が言ったことの始末をつけるように付け加えた。

「すみません。でも、現場にはいろんな人が働いてますから。中に

は経験のない人もいてるし、時間の余裕のない仕事もあります。金の支払いの悪い現場も。ここがそうということやありませんが……」

生駒は受話器を置いた。

石上の後半の台詞は、藍原や大矢にというより、独り言のようになっただけだ。

「うまく立ち回る人もいてるし、どんくさい人もいてるわけですわ。ま、私には金には全く縁もないし、どんくさいほうなんでしょうな  
あ」

藍原の質問に答えようのなくなった石上が、頓珍漢なことを言うて、これ以上その話につき合わさなくてくれと言っているように聞こえた。

「さ、行きましようか」

生駒は石上を促した。

石上はホツとしたような顔をして、ヘルメットの紐を確かめた。

「ご一緒していいですか？」

大矢が聞いてきた。

「ええ、もちろんです」

生駒は、大矢に対してさつき感じたことを、心の奥に封じ込めた。第一印象だけで人を決め付けてはいけない。

ここへ転勤してきたばかりで、まだ設計者との距離のとり方がつかめていないのか、あるいは前の現場での問題を引きずっているだけのこともかもしれないのだ。

廊下に出たところで、男が階段を登ってきた。

「まいどおー！」

黄緑色のTシャツにジーパン、薄汚れた白いデッキシューズといういでたち。ほったらかしの崩れたパンチパーマ。痩せた白い頬に無精ひげ。

男は、黒目だけのような切れ長の目で、生駒たちをちらりと見る

と、扉の横に置いてあつた弁当の空箱を拾い上げた。

生駒は会つたこともない人のように感じた。それでもこの弁当屋に声を掛けた。

「行武さんですか？」

面影があるかどうかという以前に、顔かたちの記憶がなかった。若槻のときと同じだ。

しかし、年恰好からすると行武芳次郎に違いない。

男は目を丸くして、生駒をしげしげと眺めた。

「先に行つてましようか」

大矢がじれたように言った。

「あ、すみません。すぐに追いかけていきますから」

生駒は行武に向き直り、自分から名乗つた。

「生駒延治です。亀井湯の前の」

男は困つたように笑い、あ、どうもと、ぺこりと頭を下げた。

「若槻さんから、よっちゃんにここの弁当を頼んでいると聞いたんです」

よっちゃん、と行武のあだ名で呼んでみた。

「え？ そう。あつ！」

「やつと挨拶ができましたね」

「あつ、あつ！ 驚いたな！ 君が生駒君！」

生駒の顔を違つ角度から見よつとするように、行武は体を左右に動かした。

顔に喜びがあふれ出した。

「あれえ、えらく変わつてしまつて。全く気がつかなくつた。そういや、若槻さんから君のことを聞いてたんや。しかし、それにしても、おっさんになつて。面影が、んー、全くないがな」

行武が自分のことを棚に上げて、うれしそうにしゃべり始めた。

「若槻さんが交替で来たときも驚いたけど、次は生駒君や。いやあ、まるで同窓会みたいやなあ！」

若槻のときと同じように、生駒はどうにも照れくさく、相手との距離感も掴めなかった。

とりあえずの無難な質問をした。

「ここには、誰かからの紹介？」

「織田工務店から。それにしても奇遇やなあ」

行武は改めて満面の笑みを浮かべた。

生駒の口元も緩んだ。

「うん。しかし行武君もなにかその、人が違うようで……」

行武の大きな黒目が生駒を見つめた。

「そうか？ 苦労してるからな。おっ」

と、腰につけたポーチの中を引っ掻き回して名刺を取り出した。

大きな文字で「行武食堂」と印刷され、「皆様の健康を応援します」というキャプションがついている。代表取締役と書かれてあった。

「住居表示は変わったけど、場所は昔のままや」

「住まいと兼用」と、生駒も名刺を出した。

「大阪の福島か。都心中の都心やな。あれっ、確か平野区に引越したんやなかったんか？」

「うん」

生駒も行武も、話すほどにくだけたものの言い方になった。

「そうかあ。たまにふるさとに来たこと、ある？」

「いや、残念ながら。ほんとに久しぶり」

「変わったやろ。いったいここはどこ、という感じやろ」

「そうだな。犬見神社があるから、かろっじて位置関係がわかるという感じ」

「そう。俺らはずっとここにいてるから、それほど感じんけどなあ、いかん。そろそろ次のところ、行かんと」

生駒が今度ゆっくり話をしようと言うと、行武は了解と応えて、数個の弁当箱を抱えて軽のライトバンのドアを威勢よく閉めた。

「そんじゃあな」

生駒は、行武が口にした同窓会という言葉が気に入った。三人顔を揃えただけで同窓会とは、あまりに軽薄な印象を受ける表現だったが、現に込み上げてきた懐かしさが心を少し熱くしたことは事実だった。

行武とは小学校の同級で、若槻の指揮の下、近所中を走り回った仲だった。

夜、阿倍野近鉄の裏にある居酒屋で大矢は栗田と向き合っていた。ビールや料理が運ばれて来る間ももどかしく、現場の様子を話し始めた。

「だいたい上層部の連中が、たいしたこともない頭を使って、不自然な人事をするからこういうことになるんや」

「人事？」

「鈴木をやつこと。あいつはバリバリの加粉派やろ」

「まあ、そうともいえるな」

「不機嫌を回りにまき散らしてやがる。今日もそうや。俺が設計事務所の人と現場を回ってたら、あいつ、なんて言っただと思っ？ 暇そうにほつつき歩くな、やと！ 普通、言っか？ そんなこと」

「それはひどいな。そんな人じゃないんだけどな」

「身内には甘くて、外に向かつては辛いやつ。身内受けはよく、對抗するやつには徹底的に嫌味になるやつ。あれはそういう輩やな」

「そう息巻くところを見ると、君は、自分は若槻派で鈴木課長は加粉派だと言いたいんだな」

「あいつがそう思っているということや！ 俺はそんなしょうもないことなんか、どうでもええ！」

「僕は鈴木さんをよく知っているけど、内面だ外面だっというのではない人だ。八方美人だともいえるけど。僕よりもよほど営業向きだな」

「それは、おまえが身内にいて、あいつの本性を知らんだけやろ」  
「ようやくビールが運ばれてきた。」

「ああいうのが会社で大手を振って泳いでいけるといのもけたくそ悪いし、若槻派だ、加粉派だというのも辟易や。あいつ、俺のことを相当強烈に毛嫌いしてやがる」

大矢は軽く乾杯のポーズをとり、ジヨッキをぐつと傾けた。

「案外そういうことではなくて、君がほんとにぶらついていると思っただんじやないか」

「けっ」

大矢と栗田は料理に取り掛かった。

典型的な居酒屋メニューで、テーブルの上には鳥の軟骨のから揚げや冷奴やきずしなどに混じって、チーズのフライなどが載っていた。どれもが五百円以下の安いものばかり。

「どうだ、奥さんの手料理は？ 今日はずまんかったな。こんなもん食わせてしまつて。急に呼び出して奥さん怒ってるやろ」

「毎日、遅いから気にしていない。遅いのは、結婚する前から承知の上。ところで、現場に香坂という子がいるだろ」

「ん？ ああ」

「どうだ？」

「なかなかまじめな子やな」

「ふふん」

「かわいいし」

「好みか？」

「まあな。そんなことより、この前、本社に行ったとき、白井に会った。あいつ、ほんとに病気か？ そうは見えなかったぞ」

「なんだ、またその話か。孤独で気高い香坂の人となりを話してやるうと思つたのに」

「孤独で気高い？ なんじやそれ。それはまた次回や。で、どうなんや？」

栗田が笑みを消した。

「僕にもわからない。白井部長は確かに数日は休んでいたようだが、送別会では普通に飲んでた。九州に転勤になつたんだ」

「ああ、中島から聞いた。彼女は白井の病気のことを知らなかったみたいやつたぞ。普通、そんなことはないやろ。上司が何日か休ん

「だんななら」

「ふうん」

「俺は白井に、体の具合はどうですかって、直接聞いてやった」

「おっ。で？」

「はぐらかしやがった」

「どうしても今度の仕事が気になるようだな」

「仕事そのものやなく、なぜ大阪支店に振られたんかをな。鈴木が普段ああいうやつやないんなら、余計、気になる」

栗田は、ううむ、と唸ったきり黙って口を動かしている。

大矢は疑問を連発した。

「白井は更迭されたんやないか？」

「そんなはずはない。少なくともあの現場でとんでもないミスをしたということはない。もしそんなことがあったなら、僕の耳に入らないはずがない。それに、現場以外での失態というのも聞いていない。確かに、今の時点で九州に転勤、というのは変だと思うけど」

「いったい白井という男、どういうやつなんや？」

「どうって、別に。あの人は阿紀納部長や加粉本部長のお気に入りだし、本店工務の中では優秀な男で通っている」

「しかし突然の転勤。しかも、本店の誰かが引き継ぐんじゃなく、大阪支店に振られてきた。これはどう見たって変や」

「ふう！」と、栗田が不愉快そうに息を吐き出した。

「それに、若槻のおっさんがやけに張り切っているというのも変や。普通なら嫌がるぞ。こんな中途半端なときに引き継がされるのは。いくら利益率がいいからって、ふざけた話やる」

「君にかかったら、まじめに仕事している人も変人扱いだな」

栗田が、これは君が食えよ、と冷奴を大矢の目の前に押しやった。

「豆腐はダイエツトにいいそうだ」

「興味ないな」

「全く箸が動いていないな。本気でダイエット中か？」  
「やつかましい！」  
「ビールをちよつとは控えたら痩せるぞ。なんとかしろよ、その体」  
「うるさいんじゃない。ほつとけ。積算部の知り合いに聞いた。あの現場の受注金額は、なかなか折り合いがつかなかったそうじゃないか。三都興産とうちの言い値がかけ離れていて」  
栗田がちらりと目を上げた。

「お互い、ど厚かましい値を提示してな。ところが、おまえの働きがよかったからかどうかは知らんが、ほぼ満額の回答が出たそうじゃないか。このご時世に。変と言えば、これも変や」  
「僕は奈良本店きつての営業成績だと言っただろ」  
「はいはい。そりゃそうやろ」  
「信用していないのか？」  
「俺が信用してるのはおまえだけ。しかしやな」  
「ああ、もう、くどい！」  
と、栗田は煮魚をつつき始める。  
「何か知ってるんなら、言え！」  
栗田の箸の動きが止まった。そして顔を上げて大矢をまっすぐに見た。

大矢は栗田が話し出すのを待った。  
元気いっぱいの若い女店員が追加注文を取りに来たが、睨みつけて追いつ返す。

ハルシカ建設には、大きなふたつの派閥があった。  
ひとつは奈良本店を拠点とするもので、営業系の阿紀納部長を中心としている。

実際はその上司で取締役でもある加粉本部長を核とする一派である。工事部長の白井や、このところ頭角を現してきた鈴木などが周りを固めている。

栗田はその下に連なっている営業マンである。

もうひとつは、大阪支店の工事部を中心とするグループで、技術系社員が多い。

中心となっているのは若槻部長で、ことあるごとに加粉一派の仕事で槍玉に上げていた。

大矢は若槻の部下である。本人はとにかくも、周りからは若槻親衛隊という目で見られていた。

総合的な工事力という面では奈良本店を圧倒していたことから、全社の技術系社員の中では、若槻派に正義があるという見方が強かった。

実をいうと、と栗田が話し始めた。

「僕も君が言い出してから考えていたんだ。おかしいことは他にもある。というより、僕が前から気になっていたことを話してやろう」  
大矢は手に持ったたまだったジョッキを置き、黙って聞く態勢になった。

「受注するときのことだ。今から一年以上前。僕は営業として三都興産に日参していた。ほぼ取れると思つて積極的に動いていた。サービス仕事だけど、三都興産に言われた資料をかき集めて持って行つたりもした。しかし、僕が思っていたより向こうが示してきた発注金額はかなり低かった。がっかりしたよ。うちでは請け負えないというような安い金額だった」

大矢はなにも言わなかった。

栗田は箸の先で小さく砕いた煮魚を口に入れながら話し続けた。

「加粉本部長に相談すると、自分が先方に出向くと言ってくれた。そういう時はありがたいやら、悔しいやらという気分になる。しか

し、もう後には引けないほど突っ込んでいたから、正直言ってほつとしたよ。加粉本部長が出てきて、それでもだめなら、僕も少しは救われる」

栗田は自嘲気味に笑い、口をゆすぐようにビールを口に含むとまた話した。

「で、加粉本部長が先方の中田部重役に挨拶に行ってくれて、その後は僕と阿紀納部長と二人がかりの折衝になった。コストの説明という名目で、阿紀納部長にも側面からプッシュしてもらうことにしたんだ。相手方は羽古崎課長」

「ちよつと待て。中田部つてのは、どんなやつだ？」

「加粉本部長と似た者どうしかもな」

加粉は、見た目はインテリ然としているが、この男の思考の最優先は、いかに自分が最も得をするかだ。大矢はそう考えていた。

「腹黒いってことか？」

「おまえなあ。頭が切れるとか、言えないか」

「そつやな。いい仕事をする事より、自分の地位と金にかけては、抜群のセンスを発揮するやつ」

「センスねえ。たしかに世渡りのセンスは誰にも負けない」

「中田部つて三都興産の重役も、その類か」

「そこまでは知らん」

「まあ、いい。で、おまえの折衝の話の続きは？」

「ああ、何度か折衝を重ねたものの、羽古崎課長が歩み寄って来るけはいがない。彼も苦しそうだったけど、こつちも苦しい。で、結局は互いに煮詰まってしまった。いよいよ、だめならだめで、けりをつけようという段階にまでできてしまったんだ。加粉本部長からは毎日のように催促される。僕は、もうここまで来たら加粉本部長に再度、直々お出まし願うしかないと思った」

一人用の寄せ鍋の固形燃料が消えかかっていた。

栗田があわてて、これ食べようぜと、自分から箸をつけた。

「羽古崎課長にそう通知して、中田部部长にも同席してもらおうように頼んだ。あんたでは話しにならないと言っようで申し訳なかったけど、もうあの時点では、悠長なことは言ってられなかったんだ。一気にかたをつけてしまおうという作戦だ。つまり、これだけは欲しいという金額に絞って再提示し、それでだめなら手を引くという最後通告だ。しかし、それは向こうさんも同じ状況だったはず。他のゼネコンはすでにその時点では降りてしまっていたから。それが向こうの弱みといえれば弱み。でももし向こうが、地域のもっと小さな工務店にでも発注する気なら、いくらでも請けるところはあるだろう。そうなればうちはコスト的に太刀打ちできない」

栗田が店内を見まわした。誰もふたりの話に関心を持っているものはいない。

「日にちは忘れたけど、三人で三都興産の本社に最後の折衝に出かけた。恒例儀式のようにひとしきりいつもの押し問答をしたが、やはりらちがあかない。で、事前の打ち合わせどおり、加粉本部長が向こうの中田部部长と指しで話したいと申し入れた。僕と阿紀納部長は席をはずした。三都興産の羽古崎課長も席をはずした。羽古崎課長にも僕から、今日はこういうふうに進める、と事前に話しておいたんだ。羽古崎課長も困り果てていたはずだ。万一、このまま物別れということになったら、彼も担当者として社内での立場がなくなる」

汗をかいたのか、栗田はお絞りで額をしきりに拭った。

誰にも聞かれまいと、前のめりになっている。真剣な表情で、大矢に視線を当てている。

「僕と阿紀納部長と羽古崎課長の三人は、会議室の横にあるレスト

コーナーで、二人の会談が終わるのを待つことにした。ところがふたりはものの三分もしないうちに出てきた。加粉本部長はニコニコ中田部本部長に深々と頭を下げて、僕たちを引き連れてエレベーターに乗り込んだ。うまくいったような感じだった。僕はエレベーターの扉が閉まるなり聞いた。どうなりましたかって。ところが本部長は、会社に帰ってからだ、となにも教えてくれない。本部長の一存で決められないような条件がついたのか、あるいは即答できない微妙な金額の提示があったのかと思つて、がっかりしたな。帰りの車の中でも誰も口をきかなかった。重苦しい空気だった」

栗田の話が途切れて、ビールに手を伸ばした。

大矢は話の続きを促した。

「が、受注できたんや」

栗田がまた店内を見まわした。

「そう。その日の内に、加粉本部長から内線が架かってきた。三十一億五千万円で受注。早速契約の手続きにかかれと。正直言つて、びっくりした」

栗田の顔が引き締まってきた。

「元々、僕たちが主張していたのは三十三億。先方の主張は二十七億。ずっと平行線というわけじゃない。互いに歩み寄つた。向こうは二十九億まで近づいてきたし、うちは三十一億ならどうかと打診した。しかしそれ以上に、どうしても差を埋めれなかった。ところがだ」

栗田が、ふうと一息入れた。

「あつけなく、うちの元の言い値に近いところで話がついた」

「ちよつと待て。おまえの最終的な提示値は三十一億だろ」

「そう、本部長が決めてきた受注額は三十一億五千万」

「そんなことがあるのか。一旦提示した価格より高い金額で決まる

なんてことが」

「あるんだな」

栗田が、げんなりした表情を見せて、自嘲の笑みを見せた。

「あの日、加粉本部長は三十億以下ならハルシ力建設は手を引くと中田部本部長に伝えることになっていたんだ。それが結局、三十一億五千万で受注できた。本部長の力といえばそれまでだが、どうも腑に落ちない気分だった。うれしくないかと言えばもちろんうれしいんだけど、いったい、それまでの僕の折衝はなんだったんだ、ということだな。三十一億まで落とすことは加粉本部長にも渋々了承してもらってたんだけど、あれはいつたいなんだったんだ。かれこれ半年もかかってやってきたことはなんだったんだ」

栗田がまた溜息をついた。

「僕は自分の力の限界を突きつけられて、立つ瀬がなかった。羽古崎課長も同じ気持ちだったようだ。彼は彼で、会社の上から言われて、無理に安い金額で折衝してきたはずなんだ。実際、後で聞いたら、そう話してくれた」

栗田がビールのお代わりを注文した。

話は終わったようだ。

大矢は確信した。

「この仕事はおかしい。やはり、なにか裏がある。金の話も、人事も」

「若槻さんは黒井を連れてきた。三都興産の嫡子だ。ところがあの事故。この一連のことは、おまえの頭ではどう整理されているんだ？」

「うーん、まだ何も」

栗田はふんと笑っただけで、上目遣いに大矢の顔を見据えたまま、焼き餃子にかぶりついた。

「この話は、これで終わりだ」

## 16 踏み絵

翌日。

香坂からメールが届いた。

三人で、現場を見て回っておられるお姿をお見かけしました。帰ってきた大矢さんは、喜んでたみたいですよ。

あの人、誰彼なしにののしるのが信条なのに、生駒先生のことはいみじたい。

これから、石上さんも含めて二人三脚ですね。

現場は人で決まる。共通の目的を持つもの同士として、人と人の関係がうまくいくならいい仕事ができると、先生がいつもおっしゃっておられること、私も、そのとおりだと思います。

現場で、どんどんいい人間関係を作っていけるのですね。お弁当屋さんとも仲良くなられたとか。

私も見習って、この現場で大切な友人や仲間を作りたいと思います。

生駒は、香坂の今回のメールは小学生の読書感想文のようだった。思った。

それでも、仕事上の関係だけでない友人を作りたいよね、クライアントとの関係も同じだよ、と書いて返信した。

追伸に、君とも会えてうれしかった、と書きかけて削除した。

久しぶりに生駒は三都興産の本社ビルに出向いた。

打ち合わせの間中、羽古崎は硬い表情を崩さなかった。

「どこか具合でも悪いんですか。今日は元気がないですね」

羽古崎は心ここにあらずといったふうで、検討の上で後日答えるという項目が多かった。

「いえ、そんなことはないですよ」

と、羽古崎があいまいに笑った。

羽古崎の態度がいつもと違うのは、プライベートなことかもしれない。

否定されるとそれ以上に突っ込むことはできない。それでも生駒は言った。

「先日から現場の定例会議にも出て来られませんね。羽古崎さんが来られないと、問題点がその場で解決できなくて、皆が困っています。打田さんもそうでしょ？」

最後の言葉は、羽古崎の代理という立場で定例会議に参加している女性に向けたものだ。

しかし打田はあいまいに頷いただけだった。

「すまないと思います。打田君が決めてきてもいいんですが、まだ半人前ですから。生駒さんや皆さんの中で勉強してきなさいと言っているんです」

「いえ、がんばってられますよ」

生駒はあわててごまかしたが、打田は黙って下を向いていた。もっと積極的に会議をリードするべき立場だと、わかつてはいるのだ。

打田が根木とやりあっているのを見たことがある。

手馴れた現場の男と対等にやりあうのはまだ無理なようで、顔を真っ赤にしながら自分は正しいことを言っているとばかりに追及したものの、現場は根木らの手で動いている、という事実を思い知らされただけで終わったようだった。

「打田さんはまだ二年目なんですから、羽古崎さんと同じようにやれと言ってもちよっと、ね」

打田の肩を持つように言ったが、打田は小さな声で、がんばりますと言っただけだ。

「次回の定例会議には、出てきてくださいよ。羽古崎さんが出てこないと、なんというか、物足りない気がしますよ」

そんなおべんちゃらには反応せず、羽古崎は考えておきますと応えて席を立った。

「おまえ、今から体空いてるか？」

大矢が現場事務所に戻るなり、鈴木に声を掛けられた。

喜びに溢れた張りのある声をしていた。

「はあ」

「さつき本社秘書室から連絡があった。副社長が視察にみえられる。他に誰もいないので、俺とおまえで対応しよう」

「何時にですか？」

「もうそろそろだ」

「また急に。なにかあるんですか？」

鈴木はそんな質問には答えず、会議室を清掃するように女子事務員に命じ、自分は机の上に乱雑に積み上げた書類の束を引き出しの中に詰め込み始めた。

副社長の板垣は加粉を伴って現れた。

板垣は社内では数少ない技術畑出身の重役で、差し出されたヘルメットを抵抗なくかぶり、慣れた手つきであと紐を締めた。

鈴木が考えた現地の案内は三十分ほどのコースだった。

案内の間、鈴木が現場の状況や工夫している点などを説明しながら、板垣に張り付くようにして歩いた。

大矢は無言のまま、加粉と肩を並べて二人の後ろをついていった。

内装工事が急ピッチで進められている四階の住戸の中で、鈴木が板垣に説明している間、加粉は廊下に残り、養生メッシュ越しに町を見渡し始めた。

大矢がためらいがちに横に立つと、話しかけてきた。

「大矢君。君は元々、箕面の現場を担当していたんじゃないのか？」  
大矢は他部署の本部長が自分の担当現場を知っていたことに驚いた。

しかも、小さな個人オーナーのレストランの現場だ。理由があつて調べたに違いないと考えると、つい身構えた。

「はい」

「黒井君のピンチヒッターか」

「はい」

「あの現場より、こっちの方がやりがいがあるだろう。僕もああいう新人向けの現場に、君のような人材を使うのはどうかと思つていたんだ。よかつたじゃないか」

「はあ」

大矢は手の平に汗がにじんできたことを感じた。

若槻に操を立てる意図はないが、この現場にいる限り、加粉におべんちゃらを使うわけにはいかない。

加粉にもそういう自分の気持ち十分わかつているはずだ。

軽く自分をテストしているのだと思つた。

「今日、若槻君は出張だろ。たまには羽を伸ばして、というところだな」

若槻が羽を伸ばしていると言いたいのか、鈴木や大矢が鬼の居ぬ間にくつろいでいると言いたいのか、わからなかった。

「副社長をお連れするのは、今日のようなすがすがしい日がいいだろ」

加粉はそう言って大きく息を吸つた。

自分は副社長を動かせるんだと自慢しているのだ。

板垣副社長はこの現場の責任者である若槻なんか眼中にないんだぞと、言っているようにも聞こえた。大矢は黙っていた。

「クレームが続いているそうじゃないか」

これは大矢も含めた現場の所員に向けられた非難だ。

これには黙ったままでいることはできなかった。

「近隣にうるさい人がおりまして。鈴木さんがうまくまとめてくださいましたが」

「ああ。途中からこういう大きな現場を引き継ぐのは、若槻君にはむづかしいのかもしれないな」

上司が無能呼ばわりされていた。

大矢にとっても侮辱だった。

あるいは踏み絵かもしれない。

大矢は意識して口を閉ざした。

ここでつまらないことを言っ、言質をとられたらかなわない。

板垣が早く部屋から出てきて、この会談を中断してくれることを祈った。

翌日も香坂からメールが届いた。

生駒先生、こんにちは。

今日の夕方、事務所に伺いたいのですが、よろしいでしょうか。若槻所長とは個人的なお話をされましたか。昔話とか。途中で交代した現場所長として、孤軍奮闘でがんばっておられるように感じます。

黒井さんのことで、ちょっとだけニュースがあります。それはお会いしたときに。

さて、今日の打ち合わせの用件は三点あります。

生駒は、打ち合わせの後、食事でもどうかと返信した。

すぐに香坂から返信が来た。喜んで、と。

福島駅近くのワインバー。時間が経つにつれて生駒と香坂は饒舌になった。店は適度に騒がしく、緊張感をほぐしてくれた。

「へえ、先生、株取引をされるんですか」

「少々は。日本経済に微力ながら貢献しないとね」

「ふうん。株取引って危ないんじゃないですか？ 私は、なけなしのお金をなくしてしまいそうで、やったことがあります」

「危ないよ。なにも勉強せずに人の言うなりに取引してたらね。それに、やるという言い方は適切じゃないな。どこそこの企業に投資するって言うてくれないかな。ギャンブルじゃないんだから」

生駒の事務所で、香坂と二人きりで打ち合わせをするのは三度目だった。

大矢は生駒と細かい打ち合わせをするのは香坂の担当と決めているように、事務所に来るのは以前どおり、香坂ひとりだ。

生駒は自分が軽んじられているのではないかと少々不安には感じながらも、それはそれで楽しんでいた。  
そして初めての夕食。

「香坂さんはどちらにお住まい？」

「市内の平野区です」

「平野区はどこ？」

「加美っていうところです」

「正蓮寺のイチヨウは、今年もたくさん銀杏を落とすかな」

「えっ？ うちのすぐ近くですよ。なんで？」

「僕は平野区平野」

「あれ、奈良のお生まれじゃなかったんですか？」

「子供の頃に平野に引っ越ししたんだ。加美の生まれ？」

「いえ。五年ほど前から」

「なんだ、接点はないのか。ご家族と一緒に？」

「いえ。私、父ひとり子ひとりなんです。ですけど、父との交流はありません」

「そう」

「つい最近まで、顔も知らなかったんです。それがひょんなところで会って。でも、向こうは私とは関わりあいになりたくないみたい」  
ここまで言うてから、香坂の口が重くなった。

生駒はプライベートなことを聞いてしまったことを後悔したが、

香坂は身の上話を続けていた。

幾分、無理やり説明しているという感じで。

「私がまだ赤ん坊の頃に、親が離婚してしまいました。母親に引き取られたんですが、母も私が専門学校に入学したらすぐに死に……。それからひとりで……」

「それは知らなかった。大変だったね」

月並みな反応しかできなかった。

「でも、祖母とはたまに会いましたし……、まあ、こうして仕事にありつけてますから」

「そうだね。さて、黒井さんのニュースというのを聞かせてもらおうかな。まず、彼の怪我の具合はどう？」

生駒は話題を変えた。

「ええ、いいようですよ。大矢さんとお見舞いに行ったら、相変わらず、事故の原因を嚴重に調査して欲しいと騒いでました」

「嚴重に調査ねえ」

「足場板がはずれたこと。やはり変だつて」

生駒は頷いた。

「昨日の夜、大矢さんが若槻所長に改めてそのことを言ったそうなんですけど、軽いなされてしまったんですって」

「ふうん。現場としては、単なる事故ということにしておいた方が好都合ということかな」

「そのようですけど」

「じゃ、黒井さんは不機嫌だろ」

「そうでもないようです。若槻所長がさいさい見舞いに来てくれるって喜んでいました。嚴重調査なんていかめしいことを言いながら、実はそんなに真剣に考えてないんでしょうね」

生駒も、黒井の転落事故をやみくもに事件化する気はもうとうない。先日の続きで、あくまで話題のひとつだ。

香坂がメールで書いて寄こした黒井のニュースというのも、それほど興味があるわけではなかった。

「こないだはおもしろかったって、黒井さんが言っていました」

「なにが？」

「若槻所長のお見舞いと、ある女性達のお見舞いが重なったんですって。内緒ですよ」

香坂の小さな顔が近づいてきた。

三十も歳が離れている初々しい女性の、薄い化粧の下の素顔が少し見えたような気がして、生駒はどきまぎした。

「黒井さんが言うには、若槻所長とその女性たちの中の一人、噂が立ってたくらい親しいはずなのに、お互いに変によそよしいんですって。女性の方はお見舞いだということまで馴れ馴れしくするのはどうかと思ったんでしょうし、若槻所長の方は勘違いされるのは困ると思ったんでしょう。でも二人の関係は有名な話なんです。私でも知っているくらいですから」

生駒は関心を持った。

典型的な職場の噂話だったが、若槻のことを知りたいという気持ち働いた。

「どんな関係？」

「大阪支店の工事部の人たちがよく行くお店の子なんです。とてもきれいな人。特に若槻所長がそのお店をひいきにされていて、部下をよく連れて行かれるんです。黒井さんも若槻所長に連れられて行くそうです。ところがですね」

香坂の顔がますます近づいてきた。

「ある日、黒井さんが用事でエヌピー産業の事務所に行ったら、なんと、その女性がいたんですって。会社の制服を着て」

タン・シチューが運ばれてきて、食欲をそそる湯気が二人の顔の前に漂った。

「でも、若槻所長とその女性が、その、男と女の関係かといえば、違うと思います」

生駒は、ねえ、と口を挟んで香坂の言葉を遮った。

香坂が噂話をたしなめられたかのように首をすくめた。

「その女性、なんという名前？」

香坂は体を引き、首をすくめたまま、上目遣いに生駒を見ている。

「当ててみようか？」  
きよとんとした。

「セピアのミヤコちゃん」

「えーっ、そうです！　なんで？」

「後の二人は、セピアのヨウコママとその他一名だな」  
香坂が体をくねらせて驚いた。

「さ、それで君の話の続きは？　若槻さんとミヤコちゃんとの関係はどうだった？」

香坂が困った顔をした。

生駒との関係を図りかねているのだろう。

「気にしなくてもいいよ。僕は会ったこともない人だから」  
香坂は安心したようだ。

「私の想像ですから、怒らないでくださいね。そのお店に連れて行ってもらったことがあるんです。お店の人たちはお金を払う若槻所長を中心に盛り上げますよね。でも、ちょっとした目線の動きとか仕草で、女性がどの男性に興味があるかって、わかるじゃないですか」

生駒は香坂の話がだれないように、短い相槌を打った。

「つまり？」

香坂がタンシチューを舐めて、舌を出した。熱い……。

「ミヤコちゃんは黒井さんがお気に入りに入ってことなんです」

「やっぱり」

「やっぱりって？」

「大阪の工事部の中では一番の好男子だそうだし、なにせ、三都興産のオーナーのご子息だしね」

「うーん、そうかもしれないけど……、あんまり関係ないかな」  
「ふふ」

生駒はオルカでの優との会話をトレースしているようで、おかしかった。

「なにか、おかしいですか？ 一生懸命なのは黒井さんの方。実はですね、その黒井さんにもライバルが」

完全に噂話モードに入ったようだ。

声のトーンを落として、さらに顔を近づけてきた。

「佐野川さん」

「佐野川さん？」

「この二人が競争して。結果は黒井さんの勝ち。佐野川さんはかわいそうに子会社に転籍。ほら、エヌピー興産の人。ご存知でしょ」

生駒は、顔を真っ赤にして縮こまっていた佐野川を思い出した。輸入物のカーペットの不手際の一件だ。

「へえ。でも、黒井さんの勝ち？ 佐野川さんはミヤコちゃんとエヌピー興産で一緒になれて、よかったじゃないか。転籍の件はともかく、そういう意味では」

「その辺がややこしいところ。ミヤコちゃんがエヌピー興産に入社したのは、佐野川さんが転籍になってしばらくしてから。両方とも、若槻所長の一存ですよ。これってどう考えたらいいのかしら」

「ふうん。佐野川さんはどういうわけで転籍になったのかな？」

ふっと吐き出した香坂の息が、生駒の喉にかかった。

「はい……。こんなこと、先生にお話ししてはいけないことかもしれませんけど、社内には加粉本部長を中心にした派閥と、若槻所長を中心にした派閥があるんです。今朝、メールで言った若槻所長の孤軍奮闘というのはそういうことなんです」

相槌を打つ暇もなく、香坂は一気に喋りだした。

「加粉さんというのは、執行役員で奈良本店の本部長。若槻所長は工事に何人かいる部長の中のひとりですから、加粉さんの方が役職は上なんですけど、お互いに張り合っていますね。入社当時、

同僚だったらいいんですが、今は社内では知らない人はいない犬猿の仲。あの現場の工事担当部所の交替も、そういったことが関係してるって、もっばらの噂なんです」

香坂の舌が滑らかなのはいいが、社内の人間関係の噂話が続くのかと、生駒は少し心配になってきた。

もっと夢のある話や楽しい話をしたい。

しかし、香坂の口は動きっぱなしだ。

元々おしゃべりな女性なのかもしれない。毎日のようにメールもくれる。

話すことがなくて黙り込んでいるだけの人より余程いいと思い直して、グラス片手に香坂の口元や目や頬のラインを眺めることにした。

そういや、彼女は学生時代、空手を習っているなんて話をしていたなあ。

けっしておしとやかというタイプではない。酒もそれなりにいけるクチで、時として直情的に行動するタイプでもある。

そんな印象を彼女に対して持っていたことを思い出しながら、話を聞いた。

「佐野川さんは白井さんの部下だった人なんですね。つまり加粉派。彼も、初めの頃はあの現場にいたんです。なのにどういうわけか、昨年の秋ごろ、大阪支店へ転勤になって、若槻所長の下で働くことになった。でも、ひと月も経たないうちに子会社に転籍。うまくいかなかったんでしょうね」

生駒は、藍原の佐野川批判を思い出した。

パチンコ狂いと吐き捨てるように言ったときの口調も。

「つまり、若槻さんは佐野川さんを追い払ったってことが」

「ストリートな言い方ですね」

「君の話は、そういうことだろ？」

「まあ、そういうことでしょうね。どんな原因があったのかは知りませんが。彼に聞いてみたことありませんし。でも私、時々はプライベートなところで顔を合わせることはあるんですよ」

「佐野川さんに？」

「私、ボクササイズにはまっているんです。阿倍野のジムに通っているんですよ。佐野川さんも、たまたま一緒のクラス」

「へえ！」

生駒はあざやかな話の展開を喜んだ。

「空手の次はボクササイズか。おもしろそうじゃないか」

「あ、先生、空手のこと覚えてくれてたんですね！」

「そりゃそうさ。かわいい教え子だからね。黒帯だって言ってたよね」

「わ、うれしい！ ね、先生も一度、いかがです？ ボクササイズ。気分転換に最高ですよ。私が入っている金曜日のクラスは初心者向けのクラスですから、一回だけの体験つていうのができるんですよ。私がエスコートしてあげます。バーっと汗をかいて、とてもいい気

分になれますよ」

香坂が小さくパンチのポーズをとってみせた。

「あっ、そうだ」

水色のバッグからジムのパンフレットを取り出した。

「ここに写真があります」と、広げてみせる。

「いや、遠慮しておくよ」

自分が若い女の子達にまじって、パンチングボールを叩いている姿は想像できなかった。

香坂や佐野川が一緒ならなおさら、腹の出かかった中年のおっさんの妙な格好を見せるわけにはいかない。

「ジムで佐野川さんと話をしたりする？」

「挨拶くらいは」

「ん？ 苦手なわけ？」

「彼のことが？ ま、あんまり気にしないでください」

「君は奈良本店籍だよ。加粉派ということかな？」

「まさか！ 私はどちらにも属していませんよ。私だけではなくて、若い人はみんな」

「そう思ってるだろ。ところが、組織人であろうとすれば、いつのまにか組み込まれているものなんだ。仕事のための組織ではなくて、誰かの権力を維持するための組織にね」

生駒はちよつと茶化してやろうとして、あえて説教臭い言い方をしたつもりだった。

ところが香坂は真に受けたのか、反撃してきた。

「でも、私は誰かのために働いているわけじゃありません。自分のために働いているんです」

生駒は自分のため、という言葉が嫌いだった。

ついそれを指摘したくなった。

まだ専門学校の先生という意識が抜けないでいるのかもしれない、

と思ったときには言葉が口から出ていた。

「自分のために働いている人に、誰も金はいくれない」

香坂は自分の失言に気がついたようだ。

だからといって、安易に生駒に従う気持ちはないようだ。

「そうですね。言い直します。組織貢献のためではなく自分の仕事として取り組んでいるつもりです」

「うん。でも、そういう人ばかりじゃない。サラリーマンがいたるところで仕事の愚痴を言いあっている。そのほとんどは妬みだな。

上に立つ人も、部下を仕事の優秀さではなく、自分にとって都合のいい人間かどうかで判断する。もちろん極論だよ」

香坂は、今度は素直に頷いた。

「そうかもしれませんね。私は契約社員ですから、自由な気分で仕事をしているつもりですけど、他の人はそうでもないみたい。組織変更や人事異動があったりすると、自分の仕事に直接関係ない人まで、さも重大事のようになんやかやとささやきあっていますからね」

「その加粉という人や若槻さんも佐野川さんも、そんな呪縛から逃れられないんだろうな」

「サラリーマンだから?」

「人に使われる身だから。そして誰かが誰かを評価する。自分で自分の給料を決める権限はないんだから」

「厳しいですね」

香坂が疲れたように目の前の料理に目を落とした。

「ごめん、つまらないことを言い過ぎた。ところで、さっきの話の続きは?」

「えっと」

「若槻さんと佐野川さんの関係。佐野川さんが若槻さんを恨んでいるということ?」

「うーん、それは大げさかもしれませんが、好きではないんですよ」

う。先生、若槻所長と佐野川さんの関係に興味があるようですね」「いや」

そんなことに興味はない。

またつまらない話に水を向けてしまった、と思ったが、香坂の次の言葉に驚かされることになった。

「例えば、誰かがわざと足場板がはずれるようにしておいたとか？先日もそんなことを考えておられたのでしょうか？まさかその誰かは、佐野川さんかもって」

「いや」

そこまでは考えていなかった。

腑に落ちないのは確かだが。

ただ、たいして重要な関心事ではない。茶飲み話のついでみたいなものだ。しかし香坂にそう言うわけにはいかない。

話題を変えたいと思ったが、香坂の舌は休もうとはしなかった。

「事故でなかったとすれば、誰かが仕組んだわけですよ。誰かを狙ったということでしょう？」

事件性があるという言葉を、香坂は先日からずっと考えていたのかも知れない。

自分の問いに自分で応えて頷いていた。

「そうですね。私も大矢さんとそんな話をしました。黒井さんが狙われたのか、若槻さんが狙われたのか、あるいは誰でもよかったのか」

この賢そうな女性と、物事を斜めから見ているようなあの大男が、どんな話をしたというのだろう。

「それで、大矢さんとの話の結論は？」

「結論はなし。サラリーマンの愚痴みたいな程度の話ですから」と言いながら、香坂がまた話を展開させた。

「最近ちょっと変なことがあるんです。変って言うより、いやなことかな？ 黒井さんの事件とは関係ないかもしれませんが」

ワイングラスを手にし、座りなおした。

「現場が、なんて言うか、乱れてきているんです。作業員の意識が下がってきているというか」

「ああ、聞いた。近隣からクレームが来たらしいね」

「ゴミが散乱しているというクレームだったんですけど、それ以外にも作業員の不法駐車とか、近隣の人たちへのマナーの低下とか、くわえタバコとか遅刻とか」

「うん」

それは生駒も耳にしていた。

「若槻所長は厳しく注意されているんですけど。なんていうのかな。不穏な感じ。現場所長が替わったからといって、急にそんなことになるなんて考えられないでしょ。先日なんか、若槻所長が上層部に呼ばれて注意を受けたんですよ。でも、そもそも現場のそういう細々したことが上の耳に入ること自体、変だと思いませんか？」

生駒は返事のしようがなかったが、香坂がなにを言おうとしているのかはわかった。

「さつき君が言った加粉派ってというのが関係してるってこと？」

香坂がきっぱりと言った。

「私、ああいう権力争いって大嫌い。ほんとに情けない。あからさまな足の引つ張りあい。若い人はみんな辟易しています。プロジェクトの遂行より、人を蹴落とすことに一所懸命な人たち」

生駒は頷いた。

「若槻所長はともやりにくいと思います。業者もすべて白井前所長からの引き継ぎだし、現場のメンバーにも白井さんの部下がまだいるんですから」

「白井さんというのはいわゆる加粉派？」

「そうです」

「そもそもその加粉派から若槻派にバトンタッチした理由ってなん  
だい？」

「えっ？ あっ、ご存じなかったんですか」

生駒は、そういうことにはあまり関心がないからね、と言いつつ  
した。

「私も関心はないんですが、その場にずっといると、いろいろ耳に  
入ってきますから」

「で？」

「お金にまつわる汚いことがあったそうですよ。白井さんの時代に  
それで交替」

「へえ」

「でも、ありがちなことだって、聞きました」

「どんなこと？」

「詳しくは知らないんです」

香坂の話は核心を突かず周辺部をまさぐっている。

生駒は反応することに徐々に疲れてきた。

少し投げやりな言い方になった。

「それで、鈴木さん、根木さん、君の三人が白井さん時代からの残  
留組ってことだ」

「ええ。私はニュートラルですけどね」

香坂も負けじと突き放したような言い方をした。

生駒は香坂が話したかった結論を先回りした。

「つまり、現場の不穏な空気も、それを上司に注進したのも、その  
残留組だったことかな？ そしてその現場の乱れが、結果的には黒  
井さんの事故に結びついてしまった。そう言いたいんだね？」

香坂は首を縦にも横にも振らなかった。

「あるいは足場板がはずれたのは、残留組が意図したことだったと  
か？」

生駒はきわどいことを言ってみた。

しかし、香坂はさすがに居心地が悪くなってきたのか、あるいは凶星だったのか、生駒の質問を無視すると携帯電話を取り出し、いくつかボタンを押してから好きな球団はどこかと聞いてきた。

「大阪人だからね。阪神」

「よし！ 今日も勝ってますよ。ほら！」

と、携帯電話のディスプレイを生駒に向けた。

木曜日、大矢は残業していた。

事務所に残っているのは大矢と香坂。

壁の時計が八時半を指していた。そろそろ帰るかと思いはじめたとき、扉が開いた。

「おう！ まだがんばっていたか」

若槻だった。

「お帰りなさい。明日の資料、できてます」

若槻は机の上に大矢が置いておいた封筒の中身を確かめると、ほがらかに言った。

「鈴木は完璧な段取りをしてくれていた。俺が地元の出身者だと知られていないようだったし、近隣も矛の収めどころを求めているようだ」

若槻は鈴木とともに、近隣への説明に出向いていた。

数日前の突風で現場からゴミが飛散した、というクレームが来ていた。

クレームの元は、梱包用の大きなビニール袋が飛んだことがきっかけではあったが、実際のところは、作業員が道端に座り込んで休憩しているとか、工事車両のタイヤに付着した泥が道路を汚しているなどといった日常のささいな不満が、小さな爆発を起こしたのだ。確かに、現場の風紀は少し緩んでいた。

「織田には話しておいてくれたか？」

「はい。注意しておきました」

飛散した大きなビニール袋は、内装工事で使用したカウンター材を梱包していたものだった。

「それで？」

「ゴミを飛散させた直接の責任は、中桜工業にあるようです」

「うむ」

「所長がおっしゃるように、織田部長がわざとしているというふうには見えませんでした。これだけ注意しても改善されない、というのはどうかと思いますけど……」

「ま、あいつ、俺の言うことは聞けないということだろ」

「しかし、それほどあからさまに現場の所長にたてつく、ということがあるものでしょうか」

若槻がフンと鼻を鳴らした。

「いくら自分が加粉部長にかわいがられているからといって、仕事は仕事、というように考えるもんじゃないでしょうか」

「普通の神経ならそうだな。しかし織田工務店と中桜工業は白井の業者だ。現実には、汚い世界もあるということだ」

若槻の言い方には、かすかに楽しんでいるようなニュアンスがあった。

「織田はなにか言っていたか？」

「いえ、特には」

「なんだ。叱り飛ばしただけか？」

若槻が目の隅で笑った。

「そんなことはありませんよ。所長のお教えのとおり、きついことを言った後には世間話もして、根に持たれないように関係修復しますよ。中桜工業の石上さんを子供のころから面倒みてやっているんだとか。そんな話を」

「そうか。大矢、ちょっと相談がある」

「はい」

大矢は若槻の目を覗き込んだ。

上から目線にならないように、背をかがめて。

「織田工務店と中桜工業はこの仕事から下りてもらおうと思っっている。おまえはどう思うっ？」

「えっ」

大矢は、若槻のストレートな発言に驚いて背筋を伸ばした。

「特に中桜工業はな」

「はあ」

「あの会社がどうこうというわけではないが、ここに入りにしていい担当のやつが気に入くない」

大矢はうかつなことはいえないぞ、と慎重に言葉を選んだ。

「しかし、それでは現場が」

「動かないといたいのか？　すでにプラス工務店に話をつけてある。ついでにコストダウンもできるぞ」

プラス工務店は、若槻お気に入りの業者だ。加粉一派が使う業者を排除して、自分の業者を使おうというのだ。

確かに、腕はいいし、会社の規模も大きくて、現代的なスタイルで仕事も速い。

中桜工業とは一枚も二枚も上手の業者だ。

相談だとはいいながら、若槻はすでに決めているのだ。反対する筋合いはないし、所長が決めればいいことだ。

「いつからバトンタッチするんですか？」

「来週からだ」

「えっ、そんなに早く。今日はもう木曜ですよ」

「まだ誰にも言うなよ。明日は焼肉パーティーだ。にこやかにシャンシャンとやって、明後日の土曜日に鈴木に伝える。あいつから織田工務店と中桜工業に話を付けさせる」

現場が休みの土曜日に呼びつけるというのだ。

若槻がにやりと笑った。

大矢は、若槻がそんなことを自分に話してくれたことに、うれしい反面、一種の恐怖を感じた。

若槻が波風を立てれば立てるほど、社内で自分に貼られた若槻派のレッテルは強くなっていく。

勘弁して欲しい、という気持ちが湧いたが、若槻に訴えるわけにもいかない。

と、香坂の存在が気になった。

一心不乱にパソコンに向かっていているが、今の話は聞こえていたはずだ。

「ところで、鈴木課長は？」

白井の部下である鈴木に聞かれたらまずい話をしている。

香坂は契約社員でもあるし、若い。社内の加粉派や若槻派ということも知らないかもしれないが、万一鈴木の本に入ることになれば、若槻は上層部からまた呼び出しを受けることになるだろう。

「そのまま帰ったよ。さーて、ビールでも飲むか」

若槻が事務所の隅に置かれた冷蔵庫から、缶ビールを二つ取り出した。

「おまえも飲むだろ」

そう言っただ矢の机に一本置くと、かばんから引きずり出したコンビニの袋をさかさまにして、中身をミートイニングテーブルの上にぶちまけた。

「ほれ、乾きもんシリーズ。なんでもあるぞ」

大矢は、話題がそれていきそうではっとした。

「もし僕が、もう帰っていたらどうされるつもりだったんですか。

このえびせんやスルメ」

「ハン！ おまえがそんなに能率よく仕事ができるとは知らなかったな」

「なにを言ってるんですか！」

若槻も大矢も、缶ビールに口をつけた。

「ところで所長、黒井の事故のことを、本当はどう考えておられる

「んですか？」

大矢は自分から話題を変えた。

「ん？」

「足場板が簡単にはずれるなんてことは考えにくいし、不自然やと思っんですが」

若槻はなにも言わずに、大矢を軽く睨んで一口チーズの袋を引き裂いた。

「単なる事故じゃないんじゃないか。そう考えたくないですか？」

「なにが言いたい」

「きちんとした調査をする方がいいんじゃないでしょうか。もしかすると、もう始めておられるのかもしれないが」

若槻がおどけた顔をして、手に持ったスルメを指先でくるくると回した。

「単なる事故じゃないとすれば、なんなんだ？」

若槻がスルメを振り回している限り、軽い調子で話ができる。

「誰かが仕組んだことだとしたら？」

ニヤリと笑って、

「誰かって、誰だ？」

と、若槻は冷蔵庫を開けて二本目の缶ビールを取り出した。

「いえ、それを調査……」

「想像力は、現場では重要だ。優秀な安全管理者になれるぞ」

「でも、どう考えても」

「あれは単なる事故だ。金具の締め付け不良だったということ」

「んー」

「ところで大矢、おまえ、最近ますます太ったんじゃないか。嫁の来手がなくなるぞ」

「げっ」

大矢は大げさに頭に手をやり、若槻を糾弾するように指先を振ってみせた。

しかし若槻は大矢が期待したほど反応しなかった。  
「もう気にするな」

きつぱりといい、香坂に声を掛けた。

「香坂君。あまり根をつめると美容に悪いぞ。母乳の出も悪くなるぞ」

香坂は聞こえないはずはないのに、無視している。

「ちょ、ちよつと、所長、それは」

「すまんすまん。セクハラ発言だったな。こっちに来て、一緒にやるう」

大矢は、黒井の件について若槻が隠していることがあるように感じたが、それ以上、話題にすることはしなかった。

若槻が会議用資料の内容について、質問を始めたからだった。

金曜日。

現場で開催される焼肉パーティの開始まで、まだ時間がある。

打ち合わせも済んで、なんとなく手持ち無沙汰。

懐かしい街並みでも見て回ろうかと生駒が現場を出たところに、綾から電話がかかってきた。

「おじさん。今日も行ってもいい？」

「いや、今日はダメだ。現場で焼肉パーティだから。帰りは遅くなる」

「いいよ。優お姉さんと待ってるから」

「ううん。それもだめなんだ。優もたまには歌手仕事もしてるみたいで、今日は生意気に東京出張だってさ」

綾はこのところ、十日に一回位のペースで生駒の部屋に来ては泊まっていく。

生駒はそれがうれしくてたまらないのだが、綾からの連絡は常に

突然で、「今から行く」なのだ。

「じゃ、焼肉パーティに入れて」

「おいおい」

押し問答をしているうちに、

「だって、もう近鉄電車の乗り場まで来たよ」だ。

「今、どこにいる」

「もちろん京都駅。おばさんにも、今日はおじさんのところに泊まるって、もう言ってる」

「うーん」

困る。

いや、現場の慰労と懇親のためのパーティだ。少々人数が増えたからと言って、なにも問題はない。

仕事場に女の子を連れてきた、と思われるのがいやだ。

いや、いやなわけでもない。なんとなく自慢したい。

そうだ、娘だといったら、若槻はどんな顔をするだろう。案外、面白いかもしれない。

香坂も綾の相手をしてくれるかもしれない。

というようなことを考えてしまった。

「おじさん、今日はどうしても話したいことがあるのと、綾が追い討ちをかけてくる。」

「話って？」

「とつても大事な話。だから、切符、どこまで買えばいいの？ 早くしないと急行が行ってしまう！」

## 20 アイスクリーム

土曜日。

「一週間ほど前、三都興産の社長が現場視察に来たんだ。現場の連中、みんなぴりぴりだ。ハルシカ建設からは副社長が待ち構えていたんだが、若槻さんには全く話をさせない。普通なら現場所長がホストとして案内も説明もするものなんだけどな」

オルカのカウンターに張り付いているのは生駒だけだった。

「三都興産の社長つてのは、ハルシカ建設の現場の所員の父親でな」  
オルカが賑わうのは夜九時を回ってからだ。

生駒は柏原と話したいときには、夕方に顔を出すようにしていた。

「そりゃ、息子にけがをさせたんやから、ハルシカ建設の上層部は気を使っているんやろ。生駒も立ち会っていたんか？」

「ああ。たまたま居合わせたんで、インテリアデザインの説明をした。言い方は不謹慎だけど、現場に事故はつきもの。だからこそ、事故をなくすように努力する。黒井社長が息子のことでのこの言っているとしたら、公私混同だな。それに、特に若槻さんは現場の安全管理には厳しいことで有名な人だ」

「あれ？ 若槻さんとはこの現場で数十年ぶりに巡り会ったんやなかつたんか？ 昔から知っていたような口ぶりやな」

「言い直す。厳しいことで有名だとゼネコンの所員が言っていた」

「むきになるなよ」

生駒は酔っていた。

「噂では、若槻さんは危ないかもしれない。昨日の焼肉パーティーも盛り上がらなかった」

七月半ばの金曜日、現場ではかねてから予定されていたハルシカ建設主催の焼肉パーティーが催された。

現場内の親睦を深める名目で行われた懇親会である。

ハルシカ建設の現場社員、三都興産、設計事務所、工事業者の幹部や主な作業員など総勢百人ほどが参加していた。

「危ない？」

「ああ。どうも、あの現場からはずさされるといふ噂もあるらしい」

「転落事故の責任をとってか？」

「ハルシカ建設にとって三都興産は今後の上得意候補らしい。その三都興産のお坊ちゃんを預かってけがをさせてしまった。しかも、あるうことか三都興産が発注者である現場で。ハルシカ建設はそういうことを非常に気にする会社らしくて、責任者の首をすげ替えるなんてことに抵抗がないらしい」

「ハルシカ建設でなくなつて、どこでも気にするやる」

「人事まで触るか？ だいたい、若槻さんに代わつたのも、最近のことやぞ」

「案外、三都興産の方から、やんわり申し入れがあつたり？」

「さあな」

「黒井という子と若槻所長の仲は？ うまくいったんか？」

「さあ。息子が父親に、若槻さんのことを告げ口していたということか？」

「そういうことやない。生駒の話では、黒井転落事件の犯人は佐野川というのが、ひとつの推理やつたよな」

確かに、ラウンジの娘を黒井と取り合つた佐野川が犯人ではないかという想像を、柏原に披露した。たあいのない酒飲み話として。

そんなことを言いながら、若槻のぴくぴく動く目元を思い出しただけだ。

「推理つてもんじゃない」

「わかつてるさ」

柏原もそれを知っていて、付き合つてくれているのだ。

「佐野川は、元はといえば加粉派。左遷ともいえる子会社への転籍

と、若槻の辛らつな追及。人を殺すほどの動機かどうかは別に、若槻を恨んでいてもおかしくはない。そうやったな？」

生駒は熱意のこもらない返事をした。

「ああ」

「若槻っていう線はないんか？」

「はあ？ まさか。どんな理由で、そんな想像ができるんだ？」

「俺はなにも知らんさ。生駒の情報だけが頼りやからな」

おまえの推理を手助けしてやってるんじゃないか、と柏原が苦情を言った。

それはすまないな、と生駒は言ったものの、真剣みが増してきたということでもなかった。

「想像つかないなあ」

「そうか？ ミヤコって女の子を取り合ったのは、なにも黒井と佐野川だけとは限らない。若槻所長もその争いに一枚加わっていたんじゃないか？」

「まあ、そうかもしれない。でも、柏原、おまえそれ、まじめに言ってるのか？」

「おまえと同じ程度の真剣さ、かな」

「ふう」

「それにしても、今日は誰も客が来んな」

「俺ひとりだと不服か？ ところで、もっと深刻な話があるんだ」

生駒は、綾のことを話した。

彼女と知り合ったいきさつや、彼女を取り巻く現状、そして自分分が抱いている感情も。

「俺は結婚もしていない、もちろん子供もない。その俺が、こんな娘がいてるといいな、と感じてるんだけど……」

「おまえ、それ、やばくない？ もしかしてロリコン？」

「そんなんじゃない……」

「そんなことより、早く優にプロポーズしろ。それが今、おまえがすべきことだ」

「いや、それは……。少なくともおまえに言われることじゃない」

「俺が言わなきゃ、誰が意見する。彼女は」

「だから、今日はそれはいいって。それより、とんでもないことになつてきたんだ」

「ん？」

「綾ちゃんが、俺の養子になりたいんだって……」

「なんだと！」

柏原は飲みかけたビールにむせ返った。

「昨日、大事な話があるっていつから……」

「どういふことなんだ！」

「どつって……。俺もひっくり返った」

「むむっ」

柏原は目を剥いて、宙を睨んだ。

「まずいだろ、やっぱり……」

「独身男性が小学生の女の子を養子にするなんて、認められるわけがないぞ」

「俺もそう思うんだけど。綾ちゃん自身がそういうんだから……」

「待て！ それで、おまえはどう答えたんだ？」

「どうにも答えようがなかったから、美千代さん、今、彼女の育て親になつてくれている人、に相談するって」

「はあ！ それじゃまるで、自分はオーケーって言ってるみたいなものじゃないか！」

「でも、そういうしかないじゃないか！ どうすればいいと思う？」

「ダメだ、ダメだ、絶対にダメ！」

「なぜ？」

「おまえは優を愛している。優もおまえを愛している。二人は結婚

する。それが常道というもんだ。綾という子を養子にする必然性はない！ おまえと優の間に、その子が入るスペースはない！」

「しかし、それじゃ、彼女の気持ちはどうなる」

「知るか！」

「こんなこと、自分から言い出すなんて、よほどのことだぞ。あの子はまだ小学生なんだぞ。そんな子が」

「いや、その子がどんなに思いつめていようと、まじめに考えていようと、ダメなもんはダメだ。いったい、優にどう説明するつもりだ！」

言われるまでもなく、綾を養子にすることなど想像さえしなかったことだし、してはいけないことだと思っていた。

歳の離れた優を妻にすることより、はるかに罪深きことかもしれないとも思っていた。

しかし、気持ちは揺れ動いていた。

「もし、俺が結婚したら……いいのか」

「それでもダメだ！ その子のために結婚するわけじゃないだろ！」

そのとき、携帯電話がカウンターの上でグリグリと音を立てた。

小さな液晶ディスプレイに、藍原という名が表示された。

「はい、生駒です。昨日はお疲れさまでした。今どこですか？」

どこかで飲んでいる藍原が誘ってきたのかと思った。

「えええっ！」

用件は違った。

「はい……、はい……。わかりました。では」

鼓動が一気に速くなった。

グラスを置く手が震えた。

柏原が厳しい顔をして、生駒の口が開くのを待っていた。

「若槻さんが死んだ……」

生駒は背筋を伸ばし、両手をゆっくり持ち上げ、髪をかき上げた。

「なんとということだ。推理ごっこをしている場合じゃなかった……」  
両肘をカウンターにつき、左手を両目に強く押し当てた。

柏原が静かな声をだした。

「事故か？」

「いや」

「突然死？」

「よくわからない……」

柏原が激しく反応した。

ゴトリと缶ビールを置くと、きつぱりした声を出した。

「生駒！　しっかりしろ」

「昨日の夜、お開きになってから、死んでいるのが発見されて……」

「ちゃんと話せ！」

「首に長いロープ……」

「首吊りか？」

「現場のロープ……」

「いつだ？　どこで？　発見者は？」

生駒の頭はまだ混乱していた。

「パーティは八時半頃に終わった。俺はお開きの後、現場を出て、

綾ちゃんも裏の神社に行つて……」

「神社？」

「聞き耳頭巾を……」

「おい！」

柏原がカウンターをバンツと叩いた。

「落ち着いて話せ！」

「綾ちゃんがいるから飲み直しには行かずに。大矢さんが見つけた

……」

「大矢？　藍原ってのは？」

生駒は説明しながら、自分が少しずつ冷静になっていくのを感じ

た。

「生駒」

「ん」

「もう少し落ち着いたら、事件のことを考えてみるか？ 真剣に」  
生駒は唸ることしかできなかった。

考えるといつても、なにを、だ。

「その気があるなら、昨晚のことを忘れないうちに詳しく話してくれ」

考えてみる気などない、と言おうとしたが、それさえ言葉にならなかった。

眩暈がしそうなほど、頭は混乱していた。

「もしかすると、パーティ参加者の中に犯人がいるのかもしれない」  
柏原が、冷静な声で促してくるが、思考停止だ。

一気に疲れが押し寄せてきた。

これ食ってみるか、と柏原が小さなアイスクリームの粒を出してきた。

そんなちっぽけな冷たいものを口に入れたからといって、考えてみる気にはなれなかった。

先ほどまでの黒井転落事故の推理ごっこは、わけが違うのだ。  
今度は人が死んだのだ。

発見されたのはロビーの地下だという。

またもや転落事故か。

だからといって、酒の肴にすることではない。

しかし、柏原の目つきが先ほどまでとは変わっていた。

元はといえば弁護士。事件に人並み以上の関心を持つ男だ。

ようやく、生駒の頭もかろうじて回り始めた。

「なんだ、犯人って？ 単なる転落事故、そういうのも変やけど、  
かもしれない」

ふん、と柏原が鼻を鳴らした。

「違うな」

「でも、まさか」

「じゃ、自殺か？」

「うーん。まさか……」

まさか、なんだというのだ。

生駒は明確な考えがあつて、そう口にしたわけではない。  
しかし自殺ではない。

ありえない。

連日、機敏に現場を動き回っていた若槻。

いきいきと白板消しを動かしていた若槻。

颯爽と定例会議を取り仕切っていた若槻。

そんな若槻が自殺したなどということはありえない。

ただ、漠然とした不安はあつた。

黒井の事故の後、若槻は自分を狙ったのかもしれないと言つた。

とはいえ、殺されたなどということは、もつと考えられない。

自分の身近で人が殺されることを、誰がリアルにイメージできる  
だろう。

まして、知人が殺されるなどということは。普通の人には、連日の  
ように凶悪犯罪のニュースが新聞を賑わせていたとしても、自分も  
関係者になりうるとは思ひもしない。

もちろん、生駒もそうだった。

自殺や殺人などではなく、できれば事故だと思いたい。

その方がまだしも……。

まだしもなんだというのだ。事故ならありうることだというのか。

これにも生駒は答えを持っていなかった。

酔いの回った頭で自問を繰り返しては、別の醒めた頭が、そんな愚問をけなしているだけだった。

はつきりしていたのは、犯人がどうこうなどと、リアリティのないことを議論したくはない。

もやのかかったような頭で、ただそればかりを考えていた。

しかし、その後すぐにかかってきた羽古崎からの電話が、堂々巡りをするだけの生駒の思考を吹き飛ばしてしまった。

若槻が殺された、と明確に伝えてきたのだった。

## 21 標識ロープ

パーティのデリバリーは行武食堂だった。食材、飲み物、食器の調達から調理、会場の設営まで、すべて任せておけばよかった。

若いからといって、あるいは女性だからといって昼間から買出しに出かけたり下ごしらえをしたり、飲み食い談笑どころか延々と立ち向かうだけということにはなかった。

むろん、現場には女性は香坂しかいないし、若手所員の黒井は入院中なのだから、身内で段取りをするのは無理がある。

パーティは、気がかりで不自然で漠然とした不安を抱かせるただひとつの出来事を除いては和気あいあいと進み、誰もが満足して帰路についた。

そのはずだった。

「大矢。早く来い」

「くそお！ 冷たいやつらや！」

お開きとなった後、ハルシカ建設の職員らは駅前のカラオケスナックで二次会をすることになり、三々五々現場から出て行った。

唯一人残されたのは大矢。

パーティの責任者ということで、最後に現場の戸締まりをする役が残っていた。

行武食堂の雇用人たちの片付けの手際はよかった。

パーティの残り香は急速に消えていき、会場となった広場は、いつもの見慣れた殺風景な空間に戻りつつあった。

臨時に取り付けた数基の工事用照明に白々しく照らし出された簡易アスファルトに、こぼれたタレやビールが染みを作っていた。それだけが宴のなごりを留めていた。

行武が事務所に顔をのぞかせた。

「片付けが終わりました。本日はまことにありがとうございます。また、何かございましたらよろしくお願いいたします」

「ご苦労さまでした」

「請求書は、後日お持ちいたします」

そう言つて深々と頭を下げ出て行つた。

「さ、行くか」

大矢は声に出してそう言い、携帯電話をジャケットの内ポケットに差し込んだ。

カラオケなど、それほど行きたいわけではなかった。

もうカラオケで体をくねらせて歌うような年齢ではないし、涙するほど思い入れのある曲もなかった。

コピー機の電源を切り、事務所の照明を消して回つた。窓はすでに施錠し、換気扇も止めてあつた。

若槻の机の上に置いてある茶封筒に目を留めた。

薄っぺらの封筒の表に、生駒様と書かれたクリーム色のメモ用紙が貼り付いていた。

「ええかげんなおっさんや。いったいどこに行つたんや」

毒づきながら、現場事務所の鍵を閉め、ロビーを横切つていった。

事務所は昨日プレハブ小屋から、マンション一階の集会室となる予定の空間に移設していた。

ロビーはかなり広いがまだ何の内装も施されていないため、がらんとした埃っぽい空間で、薄暗い。

トイレの照明がつけっぱなしになっていた。ロビーの奥に小さな光が流れ出していた。

コンクリートから発散される独特の臭気が満ちた空間に、大矢の足音が響いた。

赤い一斗缶から、猛然とタバコがくすぶっていた。やかんで水をかけると、嫌な臭いが鼻を突いた。

トイレの照明を消すと、あたりは闇に包まれた。

ちっ、と大矢は舌打ちをした。事務所の電気を消す前に、こつちを先に消せばよかった。トイレの脇から駐車場に出るのが早いのが、資材が積まれたところを通らねばならない。暗くて危険だ。

タバコが確実に消えたかどうかを確かめるのを待ちながら、大矢は辺りを見渡した。

つかんだ単管はひやりとして気持ちが悪かった。ロビーの奥の床に穿たれた穴の周りに張り巡らされた落下防止用の柵である。穴は、地下に資材を搬入するために空けられてあるもので、数日後には閉じられる。

カラオケには遅れていけばいい。

どうせ、自分には歌える曲はひとつしかない。

ロビーは吹き抜けになっている。

北側に大きな窓があり、神社の木々が黒々としていた。

栗田から聞いた話が気になっていた。

大矢は、いくつかの疑問を繋ぎ合わせるシナリオを考えていた。

自分が考えたひとつの推論。

スタートは辻褃合わせであっても、導き出された答えはもう別の解がないと思えるほど、ぴったりくるものだった。

これしかない。

どうして確かめるか……。栗田に話すか……。

話してからどうする……。

大矢は、はつとした。

喉の奥に込み上げてくるものがあるのを感じた。辺りに充満したタバコの煙のせいではない。

酔いのせいでもなかった。

柵を強く握り、穴に身を乗り出し、目を大きく見開いた。覗き込んだ下は真っ暗だった。

目が慣れてきた。

穴の中に横たわっている異質で見慣れないものの輪郭だけでなく、細部まで徐々にはっきり見えてきた。

「うわっ！」

やかんを放り出し、上着の内ポケットから携帯電話を取り出そうとした。

やかんがけたたましい音をたてて転がった。

アンテナがポケットの口の縫い目に引っかかった。

むしりとるように強引に引っ張り出した手が震えていた。

電話を穴の中に取り落としそうになった。

急いで穴から離れ、体の向きを変えて救急の電話番号を押すことに集中した。

大矢の足元、床に穿たれたままの穴の底、地下一階のコンクリートの床に、若槻が横たわっていた。

作業服の背中についた血。

横を向いた頭の下には小さな血溜まり。

乱れた髪が血糊でべったりと頭部に貼り付き、後頭部が陥没していた。

黄色と黒の縞模様のロープ。

工事現場ならどこでも見かける、標識ロープと呼ばれるもの。

若槻の体の上から辺りの床にかけて、無造作に放り出されたように長々と伸びていた。

ただ、一方の端は若槻の首に食い込み、もう一方の端は強い力で引きちぎられたかのように、よりあわされた繊維の束が一メートル

ほどの長さにわたって三つに分裂していた。

見開かれた若槻の目が床の血溜まりを睨んでいた。

再び穴の上から見下ろした大矢の目には、もはや手遅れだと映った。

不意にまた血の匂いを感じた。

大矢は警察の番号を押しした。

警察が到着するまでに、大矢の急報を受けた同僚達がとって返してきた。

あわただしく現場中の照明がともされ、大阪支店や本店に連絡がとられた。

田所がパーティーの参加者名簿の代わりに名刺をコピーし始めた。

大矢がもし一億人にひとりというような特別な感受性の持ち主なら、人間の耳では聞こえない声が聞こえたかもしれない。

生あるものが発する声を。

それが生き物であれ、木々であれ、はたまた霊や妖怪といわれるようなものであれ。

しかし、大矢も耳には、近づいてくるサイレンの音しか聞こえなかった。

## 22 いらだち

生駒先生

工事はしばらくの間、中断ということになりましたが、今の内に懸案事項を片付けておきませんか。

先日いただいた住戸の変更指示を拝見しておりますが、いくつかお聞きしたいことがあります。

また、私の方からご提案させていただきたい点もあります。

そちらに伺いますので、都合のいい日時をお知らせください。

(追伸)

とんでもないことになりましたが、モチベーションが下がらないよう気を引き締めてがんばりたいと思っています。

これからもよろしく願います。

香坂からのやけに冷静なメールに、生駒は来てくださいと返信はしたものの、全くなにも手がつかない月曜日となった。

約束の四時に香坂がやってきたが、とても集中できるものではなかった。

若槻、黒井、そして佐野川。彼らのことが頭から離れなかった。

電話が鳴った。

「はい。モノ・ファクトリーです。……はい、私です。今から……、構いませんが……」

香坂がテーブルに広げた図面から目を上げて、やり取りを聞いていた。

「わかりました。じゃ、お待ちしています」

生駒は、電話を架けてきた男の少しくだけたようなものの言い方と、ぶしつけにさえ聞こえる快活な声色に慥然とした。

「ご来客ですか？」

「警察。聞きたいことがあるらしい」

「事情聴取ですか。私はもう済みました」

香坂は、集団歯科検診の順番のことを言うように、気楽な調子だ。

「いつ、来るんですか」

「今から。失礼なやつだ」

「席をはずしてましようか。なんでしたら、近くの喫茶店ででも時間をつぶしてきますけど」

「いや、すぐに済むだろう。ここで待っていてくれていいよ」

香坂は落ち着かなく腰を動かした。

「でも、私。また、同じようなことを聞かれるのはいやなんですけど」

「いやな経験だった？」

「はい」

「そう」

「すみませんが、私、ハルシカ建設の者ではないということにしておいてくれませんか」

「ん？ そうしようか。じゃ、もし聞かれたら、近所の喫茶店の娘さんということにしておこう」

「どこの店って聞かれたら？」

「慎重だな。じゃ、うちのアルバイトってのは？」

「いいですね。もし、私の顔を知っている人のようだったら、別の部屋にでも隠れています。あの、あのドア、入ってもいいでしょうか？」

「寝室だけど、いいよ」

チャイムが鳴った。

もう来た。

刑事はマンションの下から電話してきたのだ。エントランスにオートロックがないと、どんな客でもすぐに玄関まで来てしまう。

扉の前に立っていたのは、若さに似合わずのそりとした風采の男だった。警察手帳を見せるとはこのようにするのだというようにひよいと差し出し、うむを言わさぬ態度で玄関の中まで入ってきた。手帳をじっくり見る間もなく、刑事は、上がらせてもらっていいですか、と聞いてきた。

「はあ」

「どうも。えっと、靴は……」

「どうぞそのままです」

刑事は、先ほどまで香坂が座っていたミーティングチェアにどさりと腰を下ろした。

そして、ようやく小浦と名乗った。

お仕事のところ申し訳ない。梅雨とはいえ、今年は雨が多いですな。水不足にはなりそうにないが、今年の夏もやはり猛暑だそう。節電とか何とか言って、どこもクーラーの設定温度を上げるそう。暑がりには応える夏になりそうですな。

などと、小浦がとりあえずの世間話をする。

脂ぎった顔のわずかな動きに合わせて発せられる線の細い声。

生駒はじとりと背中が濡れるような疲れを感じ、相槌も打たず、聞かれたことだけに応えていた。

かたくなな反応に気がつかないのか、小浦が暖簾に目をやった。キッチンから、トクトクとなにかを注ぐ音が聞こえた。

「ご用件を伺いたいのですが」

小浦が視線を戻し、おじやましたのは、とようやく切り出した。

「若槻利郎という人を知ってられますか？」

生駒は大きく息を吐き出した。

「もちろんです」

キッチンから出てきた香坂が小浦に冷たい茶を勧めてから、小浦

の視線が届かない後ろのデスクに座った。

そして、楽しんでるようにように秘密めかした笑みを送ってきた。

小浦が笑みを消した。

「若槻利郎さんですが、亡くなりました」

「ええ」

「あ、ご存知で。それなら話が早い。工事は当分の間、中止になったそうで」

「ええ」

「いろいろ大変でしょうな」

生駒は黙っていた。

小浦が真正面から見つめていた。

「焼肉パーティのとき」

「その目に表情がなかった。」

「あなたから見て、被害者の様子はどうでしたか？」

「普通に楽しんでるように思いましたが」

別の質問をしてきた。

「パーティでの出来事を、覚えておられる限り教えてくれますか。被害者に直接関係しないことも」

つまらないことまで含めると思い出すことは無数にある。

まだ一昨昨日のことだ。

「出来事と言われても……」

「どんなことでも。会場に見慣れない人が入って来たとか、ちょっと気になったこととか、あなたが被害者と話されたことも、ぜひ」

生駒は、小浦が被害者という言葉を連発するのが気に食わなかった。

まだ若槻が殺されたという実感が湧かない。

現実感がないのだ。

あるのはむしろ違和感。

被害者という言葉を、なんのためらいもなく用いる刑事の無神経さが腹立たしいと思った。

「若槻さんは、どうなったんです？ 殺されたという連絡を受けたきり、なにも聞いていないんですが」

自分のいらだった気持ちをぶつけた。

小浦は目を離し、小さく頷いた。

「詳しいことはまだなにもわかっていません。宴会が終わってから、事務所を閉めるために最後まで残っていたゼネコンの社員が被害者を発見して、通報してきました。夜九時過ぎのことです。生駒さんは、お開きのときも、会場におられましたか？」

パーティの間、最初から最後までずっと会場にいましたか。などと聞いてくる。

スピーチをされましたか。帰宅ルートを教えてください。帰宅されたのは何時ごろですか。

などという意味もない質問を投げかけられるに及んで、生駒は返答することさえうつとおしくなった。

どなたかと一緒に帰られましたか。

という質問には、皆で一齐に駅に向かいましたからね、と答えた。実際は違う。

綾と町を散歩したのだが、綾とは何者か、などと質問されては、説明するのが面倒だ。

途中で席をはずしたりはしませんでしたか。

小浦に質問の仕方は、行きつ戻りつする。

この男の戦術なのだろう。

現場からは出なかった。しかし、トイレにくらいは行った。

そう答えると小浦は間髪を入れずに差し込んでくる。

「では、パーティの間は、ずっとどなたかと一緒でしたか？」

小浦は、質問をまずは連発して、相手の気持ちを追い詰めようとしているのだろう。

気の弱い相手には有効な作戦だろうが、しらけてしまっているものには効果はない。

綾とはずつと離れずにいたが、刑事に話す気はなかった。

「たいがいは。しかしあなたね、立食パーティーですよ。いろんな人と話をしたし、厳密に言えばひとりきりだった時間もあるでしょう。そんなことを聞いて、なにになるんです？」

刑事はこういう反応にも慣れてきているのだろう。

言葉遣いは若干丁寧にはなったが、相変わらずの無表情で、聞いたことだけに答えればよいという態度は変えそうにない。

「一応の確認という意味でお聞きしているのですから、正直にお答えいただけますか？」

さすがに生駒の顔面に血が回り、熱くなった。

「正直に？ あんた、それ、どういう意味だ？」

「ご協力をお願いしているということですよ」

「とても、そうは聞こえない」

小浦の表情は変わらなかった。

生駒はけんか腰になるつもりは毛頭なかったが、不愉快さは言葉に表れた。

「若槻さんと私は、仕事場の仲間だし、友人だ。その人が殺されたというのに、詳しい説明もないまま、あいまいな質問を連発されて不愉快だ。私のアリバイ調査であればそう言ったらどうだ」

刑事の顔にふつと怒りの表情が浮かんだように見えた。

しかし小浦は何度も頷き、都合の悪い表情を収めた。

「おっしゃるように、あなたのアリバイを確認するという意味もあります。しかし、それはほんの形式的なこととして、パーティの途

中でどんなことがあったのかを教えてくださいたいと思います」「言葉を切って黙りこみ、生駒の発言を促していた。

「宴会の途中ねえ。つまり若槻さんが殺されたのはパーティの途中だったということかな？」

「その間に襲われた、ということですよ。何か思い当たることはありませんか？」

「確かに、お開きのときには若槻さんはいなかったな」

閉会の予定時刻になって、若槻を探したが見つからず、現場の副所長である鈴木がお開きにすることを決めたのだ。

だからといって、その時点ですでに若槻が襲われていたということにはなるまい。

しかし、生駒は思いついたことを口にはしなかった。

頭から離れない別のこと。

香坂から聞いた若槻と加粉派との確執のこと。黒井の転落事故の不自然さや佐野川のこと。

小浦が黙って見つめていたが、これも話す気はない。

ハルシカ建設の社内の噂話を、外部の人間の口から軽々しく言うべきではない。

それに、噂話をさも重要な情報であるかのように警察に話したことを、他人に知られるのは気持ちのいいものではない。

もちろん、すでに警察はその情報を得ているだろうとも思った。

## 22 醒めた自分

「生駒さん」

小浦の声に生駒は我に返った。

「若槻さんを最後に見かけられた時刻はいつでしょうか」

若槻や鈴木と二言三言話した後、挨拶に来た設備業者と席を移っていったのを見送った。そのときが最後だ。

「パーティの中ごろだろう。八時は回っていたと思う。来賓の挨拶が始まる少し前かな」

小浦はそのときのことは問い直さず、またしてもあいまいな質問を繰り返してきた。

「参加者の中で、なにか気になる行動をした人を見聞きしませんでしたか？」

「特にない」

生駒は若槻の言葉を思い出していた。

パーティの途中で、見て欲しいものがあると言っていたのだ。なんだったのだろうか。

松並町の元住人同士だから、というニュアンスがあったように思う。たあいのない昔話をするつもりだったのだろうか。

警察の耳に入れる必要はない。生駒は自分がかたくなに、そう考えようとしていることに気がついた。

小浦が改まった調子になった。

「これなんです」

と、鞆から取り出した茶色の封筒をテーブルの上に置いた。

封筒の表にはなにも書かれていなかった。どこにでも売っているような定型サイズの細長い封筒。

口のところは、セロテープの封をハサミかなにかで切った跡があった。

「中身を見てもらえますか」

生駒は封筒を手に取り、小浦が見つめている前で、中のものを引き出した。

出てきたものは、縦に三つ折にしてあるA4サイズの紙。

開くと、地図のコピーが一枚。文章をコピーしたものが数枚。

地図は一万分の一程度の地形図で、ひと目で現場の周辺であることがわかった。

中央部に、赤いペンでごく小さな丸印が描かれていた。犬見神社の文字のわずかに左下。ちょうど工事中のマンションの中央部、ロビーにあたる辺り。

文章の方は、「ナチュラルガーデン大和中央新築工事にあたってハルシカ建設大阪支店工事部部长若槻利郎」というタイトルがついていた。

「現場の付近見取り図のようだな。相当に古い地図のようだが」

「そのようです」

「これがなにか」

「どう思われます?」

「どうって、なにを」

小浦は鞆からさらにもうひとつの封筒を取り出し、こちらは自分で中身を取り出した。

「これがその封筒に貼り付けてありましたね」

小浦がテーブルの上に出したものは、小さなビニール袋に入られたクリーム色のタックシールで、鉛筆書きで生駒様と書かれてあった。

「この封筒が被害者の机の上であり、これが貼り付けてありました。お心当たりはありませんか」

生駒は思わず息を吐き出した。

若槻が見せたいものがあると云っていたのは、これなのだ。わずかこれだけのことなのだ。

子供時代の松並町の地図に、今の現場の位置をマークして。それに関西建友会の会報に載せた自分の原稿。

やはり、これらをネタに昔話でもしよう、という趣向だったのだ。

刑事はこんなものを、さも大切な証拠品であるかのように思い込み、芝居がかった態度で取り出してみせて、情報を聞き出そうとしている。

なにを聞きだせるのか、聞きだせるものがあるのかどうかさえ、皆目見当もついていないに違いない。

慇懃無礼な態度は、そんな自分の弱みを見せまいとする防衛反応だったのだ。

生駒は小浦の姑息さに同情さえ覚えた。

地図を眺めている間に、小浦への怒りは消えていた。

「たぶん、若槻さんが昔話でもしようと用意されていたのでしょうか。私はこの会報を購読していませんし、彼はあの日、見せたいものがあると云っていましたから」

小浦がシュツと音をたてて息を吸い込んだ。

「そういう話があったのなら、私が先ほどお聞きしたときに、おっしゃっていたできたかったですな」

「それは申し訳なかつたですね。しかし、ただそれだけのことです」  
小浦は黙って生駒を睨みつけてから、若槻の原稿や地図を封筒に入れ始めた。

「その地図、コピーさせてくれませんか。そういう古い地図はなかなかないし、せっかく若槻さんが見せてくれようとしていたものなんでしょうから」

生駒は若槻のことを偲びたいし、と言いかけてやめた。

小浦が生駒の飲み込んだ言葉を理解したはずはないが、躊躇することなく地図を再び封筒から取り出した。

「どうぞ。差し上げます。コピーですから」

「あ、それはどうも」

「大変お手数をおかけしました。お茶、ごちそうさまでした」  
立ち上がった小浦に、生駒は座ったまま声を掛けた。

「どのようにして殺されたんですか」

「先ほども申し上げたとおり、まだ詳しいことはお伝えできないんです」

「ロープがどうか」

「ええ……」

と、言葉を飲み込んだ。

「本当にお話しできないのです。あいまいな情報を、皆さんにお伝えするわけにはいきませんから」

「死因は首を絞められてということでしょうか。その……、凶器はロープということでしょうか」

小浦は困った顔をして、大げさに両手を広げた。

「すみません」

と、右手を頭の後ろに持っていった。

先ほどまでとは違い、態度に若さが出た。

「そもそも、殺されたのはいつなんでしょう？」

「死亡したのは発見される二十分くらい前だったようです。ところで、生駒さんと被害者は幼馴染だそうですね。小さい頃は遊び仲間だったとか。しかも、現場の近くにおふたりともお住まいで」

生駒は曖昧に頷いた。

「それがまた、たまたまあの現場で再会されたそうで」

これにも頷くしかない。

「非常に稀なことですな。お互いに、さぞかし驚かれたんじゃないですか？」

生駒は、誰から聞いたのかとは聞かなかった。

ここに刑事が若槻の封筒を持ってやってきたこと自体、それくらいのこととは掴んだ上のことだろう。

しかも、さつき自分でも、若槻が昔話をしようとしたのではないかと言ったばかりだ。

しかし若槻との昔話や、懐かしむ気持ちを小浦に披露しても意味はない。

「ええ。驚きましたね」としか、言いようがない。

結局、小浦はそのことについても、あえて突っ込むことはせず、帰っていった。

「先生と若槻所長は幼馴染だったんですか！ ぜんぜん知りませんでした！」

小浦が帰るなり、代わりに香坂が生駒を追求し始めた。

「しかも、おふたりとも生まれも育ちも現場の近く！」

「言ってなかったかな」

香坂が、グラスをキッチンのシンクに持って行きかけた。

「ごめん。後で洗うから、そのままにしておいて」

「今日はここのアルバイトですからね！」

と、シンクの蛇口を捻った。

「ありがとう。でも、よくわかったね。お茶」

「冷蔵庫を開けたら一発でわかりますよ。熱いレモンティーを入れろと言われたら、ちよつと手間取ったかもしれませんが」

「じゃ、紅茶を入れよう」

湯を沸かしなおしている間、狭いキッチンに入った生駒と香坂は、互いに体が触れ合わないように意識して立った。

「先生が地元の人だつてことは聞いていましたよ。でも、せいぜい奈良の人つていうくらいにしか思っていませんでした。まさか、それこそ地元の人だったなんて、思ってもみませんでした」

香坂はコーヒークップやドリッパ―や砂糖のありかを確認すると、キッチンから出て行った。

「僕も驚いたんだ。若槻さんが先に僕に気がついてくれた。いきなり、子供のときのあだ名で呼ばれて」

生駒は香坂の前に、熱いティーカップを置いた。

「あだ名？ 先生の？ なんていうんですか？」

「アトム」

生駒はそのあだ名が付いた理由を教えた。

「へえ！ アトム！ じゃ、若槻所長は？」

「コメツブ」

「なんだ。そのままですな！」

「実はふたりだけじゃないんだ。幼馴染は」

香坂の目が輝いた。

「弁当屋の行武さん。それに、織田建設の織田さん」

「うわ！ なんだか……」

「なんだか、なんだい？」

「同窓会みたいで楽しそうというか、やりにくそうというか……」

「若槻さんと織田さんは、お互いに知っていたのかどうか、わからない」

「えっ、そうなんですか？」

「織田さんとそういうつもりで話をしたことはないし」

「へえ！ じゃ、なぜ先生は織田さんのことを知っていたんですか？」

「行武さんから聞いた。行武さんが幼馴染だつてことは、若槻さんから聞いたんだ」

「なんだか、すごいですね」

「うん」

奇遇というのはこういうことを言うのだろう。

「会えて、懐かしかったですか？」

「若槻さん？」

香坂が頷いた。

「まあ、そうだな」

生駒はあいまいに肯定した。

確かにうれしかったし、懐かしいとも思った。しかし、ただそれだけのことだ。

若槻が殺されたといっても、実感がないだけではない。悲しみや怒りをそれほど感じていないことに、気がつき始めていたのだ。

そんな頼りない、中途半端な感情に、当惑さえも感じていたのだ。幼馴染とはいっても、三十年以上も全く音信のなかったもの同士。親しみの感情はともかく、友情を持ってというほうが難しい。

しかも若槻とはあの屋上での会話以来、幼馴染だという立場で話をしたこともなかった。

現場で若槻の言動を目にし、耳にするとき、一種の連帯感のようになかすかな欠片を感じることはあった。

しかしその感覚は、懐かしい故郷の光景の写真を見たときに感じる、実体のない表面的な郷愁と同じようなものだともいえた。

若槻の人となり、子供のときから変わっていないと言い切れるものではなかったし、むしろ子供だった生駒が、若槻がどんな人間かと、まともに理解していたはずもなかった。

幼馴染だからといって、郷里の人間だからといって、それだけで信頼しあい、真の友情を育む相手にはなりえない。

そんな当たり前のことを考えている醒めた自分を知っていた。

香坂が話を変えた。

「さっきのコピーはなんだったんですか？」

生駒は立ち上がったて、本棚に立て掛けてあった冊子を取った。

「これ、読んだ？」

香坂は受け取った冊子の表紙をちらりと見て、中を開いて目次を  
目で追った。

「関西建友会の会報」

「はい……」

「淀屋橋の事務所でもらってきた。コラムに若槻さんの寄稿が載っ  
ている。さっきのは、たぶん原稿段階のものだな」

香坂がそのページを開き、タイトルを口にした。

「ナチュレガーデン大和中央新築工事にあたって」

「そう。あの現場のこと」

「それを先生に」

「読んでくれたって。僕がこの冊子を購読していないと言ったんで、  
コピーしてくれたんじゃないかな。読んでみる？」

「私も、これ、読みました。所長が現場に来られてすぐに。原稿段  
階だけど読んでくれて、所員や業者さんの主なメンバーに配られ  
たんです」

「へえ。じゃ、今日のはそれか」

「所長は、自分の意気込みを伝えるために、そうされたんだと思い  
ます」

香坂が目を通し始めた。

「その中に、水路のことが書いてあっただろう」

「はい」

生駒は、本来なら若槻と話すことになっただろう昔話を、香坂を  
相手に話し始めた。

香坂が来るまで、これを読みながら思い出していたことだった。

「落ちて死んだ子もいるんだよ。彼が書いているほど、楽しく懐かしい思い出ばかりでもない。業界誌の記事だから、そんな暗い打ち明け話をしても仕方ないけどね」

## 23 人気者

「ふーん、そうなんですか。これ、コピーさせてもらっていいですか。もう一度、読んでみたいので。それからこれも。地図を見ながらだと、もつとリアルでしょ」

「どうぞ」

「地図は拡大コピーしよう」

香坂は独り言のように言い、コピー機が拡大倍率をセッティングしている間、窓からの光に透かして見るように、地図を眼の高さまで上げて眺めていた。

「ナチュレガーデン大和中央新築工事にあたって」

ハルシカ建設大阪支店工事部部长 若槻利郎

私が子供時代を過ごした昭和四十年ごろの大和高田市は、奈良盆地南部ののどかな村であった。近年では、JRや近鉄電車で大阪市内まで三十分ほどという地の利を活かして、近郊住宅地としての着実な市勢の拡大をとげている。その市街中心部からほど近い松並町という歴史ある地域に、奈良を発祥の地とするデベロッパ三都興産が手がける分譲マンション「ナチュレガーデン大和中央」の新築工事が進行中である。

私はこの松並町で生まれ育った者であり、一年前、ハルシカ建設が落札したこのプロジェクトの工事現場所長の選考会議が社内で開催されたとき、私が拝命することができればどれほど光栄なことかと、心密かに願ったものである。私が育った町に、きちんとした仕事をしたい、いいものを作って恩返しをしたい、そういう気持ちであった。

実は、私がこの現場に初めて乗り込んだのは、つい先日のことである。前任所長の転勤に伴う代役としてである。きっと、その日の

ことは、忘れられない思い出となることだろう。暖かい雨が降っている日であった。

事前に付近見取り図を見ていた段階では、懐かしい犬見神社の南側に隣接して当敷地があることを了解はしつつも、自分の幼い頃の記憶と、最近の地図で見る町のあまりの変わりように戸惑いを覚えていた。子供の頃遊んだあちらこちらの空き地は跡形もなく消え失せ、村を取り囲むように広がっていた田んぼや畑には大きな道路が敷設され、その沿道も完全に市街化されていたからである。当日、現地に到着したときにも、無秩序にスプロールされたとしかいいようのないなんの変哲もない街並みや、さびれかけた商店街を見て、まちがったところに来たのではないか、という気にさえなった。しかし、現場のすぐ近くに、ひとつの思い出を見つけたのである。それは商店街の入り口に立っていた。右、斑鳩、左、葛城、と刻まれた石の道標を、である。

私は思わず心の中で叫んだ。あった！ ただ私は、この道標を探していたのではない。正直に言うと、存在さえも忘れていた。しかし私は、なにかを探していたのである。小さい頃の思い出を喚起させてくれるなにかを。

生まれてから中学二年生になるまで、ここ松並町に住んだ。ここを離れてから三十年以上になる計算である。しかし、ここに住んだ人生最初の十数年間が、私の心や人格やものの考え方に、どれほど大きな影響を及ぼしたことが。幼年期や少年期そして思春期と、人は成長する過程を振り返るとき、地域の人たちや周りの自然や環境が及ぼすものの重要さを抜きにして語ることはできない。

今から申し上げることが思い出話になりがちであろうとは思いますが、私がこのプロジェクトに人並み以上の強い情熱を持って取り組んでいる理由の一端であることをお含みいただき、ご容赦を賜りたい。

前置きが長くなったが、この現場の近くで最初に見つけた道標にちなんだ話をしたい。

かつてこの道標は、水路に架かる橋の北側のたもとに立っていた。水路の名は樋口水路。橋の名は犬見橋。そこは三叉路になっていて、水路に沿って中心市街地から来た里道が、この橋のところできき当たる。右に折れると松並町を通り抜け、ずっと北にある斑鳩の里に繋がっていく。左に折れると水路を渡り、小学校や、中学校のある隣村、五郷町を通り抜けて葛城山の麓の御所市に至る。

この斑鳩から御所に至る道、子供の目線でいえば、松並町と五郷町を繋ぐ道は、単に大道と呼ばれていた。大きな道というだけのことであるが、村のメインロードでありながら、昭和四十年ごろはまだ舗装もされておらず、でこぼこは大きな雨が降ると水溜りになった。私達、松並の子供達は、毎日この道を小学校まで通った。犬見橋を渡ってからのはほんの数件ではあるが民家があった。しかし、たちまち村のはずれとなり、一面の田んぼや畑となる。ちょうど民家が途絶えるところに、アキニレの大きな木が立っていて、その下に白いヤギが飼われていた。短い木杭に繋がれて、いつもぼつねんと立ち尽くしていたヤギ。ヤギはおとなしかったが、自由に辺りを走り回る気の強い雄鶏が、小学校一年生くらいの子供達に攻撃的に飛びかかつては威嚇していた。

今では見かけることはなくなった肥溜めがそこにあり、中に放り込まれたものの表面はたいしては乾いていて、怖いもの見たさの子供が棒でつついたりしないかぎり、不快な臭いを周りにまき散らしているわけではなかった。大道からそれて畦道を行くと、小さな空地に出たり、池があったり水路を渡ったり、祠のある竹林を抜けたりして、軽い冒険を楽しむことができた。水路には亀やエビガニやドジョウがいたし、もちろんメダカやドンコなどの小魚や沼エビなども泳いでいた。そんな畦道や小径は、くねくねと曲がりながら繋がったり分かれたりして、どこまでも続いているかのようであった。子供達は、小学校に行くときは大道を一行になつて抜きつ抜かれつしながら通っていったが、帰りには好き好きにそれらの小径を巡りながら家路についた。学校の三階の窓から見ると、緑の広大

な野原の中に、黄色い帽子に紺色の制服が転々と散らばって見えたものである。

さて、先ほど述べたように、樋口水路の北側が松並町の中心部であったが、大道は犬見神社の鳥居の前を通ってしばらく北に行くと、二股に分かれる。西側の広い方の道を進むと、町の中心にゆくにしたがって道の両側に並んだ民家の中にポツリポツリと店舗が現れる。八百屋、果物屋、荒物屋、たばこ屋、燃料屋、食料品屋、酒屋、米屋、駄菓子屋、パン屋などである。そのいわゆる商店街の中ほどに大道が広がって小さな広場となっているところがあり、交番と集会所と郵便局があった。村の中心である。また二股から東側の細い道を進むと、ますます細くなつてところどころで折れ曲がる。やがては古い大きな家の塀や立派な生け垣に囲まれた迷路のような路地になり、郵便局のある広場で元の道と合流する。

私はその広場のまだずつと北側、つまり松並町の北のはずれに住んでいたのである。風呂屋の裏であった。周りはほとんどの家が借家で、一戸建ては数えるほどしかなく、連棟形式の住宅、つまりは長屋であった。

ここまで読んでいただいた人なら、松並町の構造がわかつていただけだと思う。つまり私の家は松並町の中心部にはなく、あの当時より少し以前に、村のはずれに大量に建てられた借家街に住んでいたということである。そこから町の中心部にあるいくつかの店の前を通り過ぎ、お宮さんの脇に立っている道標の前を通り、水路を渡り、田んぼを抜けて学校に通っていたということである。

さて、次に樋口水路について話そう。この水路はいうまでもなく、地域の田畑を潤す生命線であった。水路の幅は、私の記憶では、三、四メートル。実際はもう少し狭かったかもしれない。道から水面までの深さは二メートルくらい。もちろん水位は季節や日によって違っていた。満水状態のときもあったが、底にチョロチョロと流れているだけのこともあった。底には泥が溜まっていて、ところどころ

にゴミが放置されていた。大きな乳母車の残骸が捨てられていたことが記憶に残っている。

時にはこの水路に落ちる子供がいた。大道から次の橋までは相当の距離があり、子供達は近道と称して、水路に掛け渡された水道管の上を、バランスをとりながら渡っていたからである。水道管の太さは直径五十センチほど。慣れると両手を広げてさつと渡ってしまふことができる。この「近道」は年上の子供達が年下の子供達に「勇気を確かめる」場として、挑戦させていたものでもあった。

正直に話そう。私もおもしろがって、幾人かの小さい子供達に水道管を渡ることを強いたことがあるし、何人かはバランスを失って水路に落ちたこともあったように記憶している。すべてが懐かしく、どことなく甘い思い出である。

なぜ私が、長々とこんなことを書いてきたのかというと、今回の現場「ナチュレガーデン大和中央」が、この水路や昔の里道の上に建つマンションだからである。私にとって懐かしかった思い出の場所である以上に、古い昔を知る人にとって、あるいは地域にとって、水路はかけがえのないものであったと思う。もちろん、私がこの地から引越してから、いつごろ、どのような経緯があつて水路が埋め立てられ、その土地がどのように利用されて、そして今回のプロジェクトに至ったのかは私の知るところではない。しかし、経緯はともかく、どんな地にもあるその地ならではの歴史、そして思い出を、最終的に封印してしまうもののひとつが大規模マンションの計画なのである。

私達は単に市場の論理だけで、計画を進めてはいないだろうか。私は建設業界にあつて、作るものが大規模であればあるほど、地域に根ざした風土に十分に配慮したものを供給する、という意識を持つていなくてはならないと考えている。幸いにも今回のプロジェクトは、デベロッパーの深い人間味あふれるご判断によって、マンション内のランドスケープの中に、かつての水路をほうふつとさせる

せせらぎが取り入れられた。子供がおぼれるなどということがないように、水深は十五センチほどと浅い。きっと、このマンションに暮らす子供達が遊んでくれることだろう。そのことだけで、すべての免罪符になると考えるほど厚かましくはないが、私がこのプロジェクトに熱意を持って取り組もうとしている理由のひとつであることには違いない。

最後に、来年の竣工時には、地元の方々がいいものができたと喜んでいただけるような、質の高い建物をお披露目させていただくことをお約束して、拙文の締めくくりとさせていただきます。

パーティの間中、綾が近くにいたわけではない。

五十人ばかりの男、しかもそれなりに年のいったものたちの中で、女性は何人。打田と香坂とハルシカ建設の事務員、行武の奥さんを初めとするコンパニオン役のデリバリーサービスの女性達。

おじさん達に囲まれて綾は引つ張りだだった。

物怖じすることを知らない綾は、あっちのテーブル、こっちのテーブルでおじさんたちに世話を焼かれ、上機嫌だった。

予想通り、綾を呼んだことを若槻も喜んでくれた。パーティが賑やかになっていい、というのだった。

生駒は、綾が娘だという嘘をつくことはやめた。正直に、京都北部の山村からたまたま訪ねてきてくれたので、追いつくわけにもいかないの、と説明した。

そのことがおじさん連中を夢中にさせた面もある。

「そんな遠くからひとり、偉いねえ」

「しっかりしてるねえ」

「うちの娘にや、できないなあ」

というわけだ。

山奥の村の娘ということでも、話題はたっぷりあった。

どんなに山奥なのか、ということから始まって、綾の暮らしぶりを根掘り葉掘り、というわけだ。

ちようと蛍が飛んでいる頃だね、と遠い目をする者もいた。綾の話に郷愁を誘われたのだろう。

綾がたまたま近くにいるとき、大事な話って、と聞いてみたものの、綾は帰ってからゆっくりするといって、また違うテーブルに飛んでいくのだった。

食べて飲んで、話して笑って、綾は大忙しだった。

パーティがお開きになって、生駒は綾の手を取って、帰ろうとした。

と、綾が手を引つ張った。駅とは反対の方へ。

「ね、おじさん。あそこの大きな木が見えてるところ、行ってみたい」

綾の言いたいことはすぐにわかった。

「いつもの練習？」

「うん、そう」

聞き耳頭巾。

鳥や木々の声を聞くことができる、不思議な道具。

綾は山奥の村で出会った老婆から手ほどきを受け、聞き耳頭巾の使い手としての訓練を積んでいたのである。

その老婆が死んだ今となっては、聞き耳頭巾は綾のものとなり、彼女は毎晩、その訓練のために木の話を聞くのだ。

「マンションの木でもいいんだけど、どれも小さくて、何も聞こえないから」

生駒が住んでいる大阪福嶋のマンションにも植栽があり、それらの木々が植えられていた。しかしどれも小さく、意味のある声を

発するほどには成熟していないのだそうだ。支柱に縛り付けられているような木は、生きてはいるけれども、生きていて心を持ってはいないというのだ。

綾が指差した大きな木々は、工事現場の裏にある神社の木々だった。

「よし」

「やった！」

## 23 すずめやすずめ

綾が暗闇を怖がることはない。

そこが夜の神社であるうが、山奥のうっそうとした沢であるうが、村はずれの墓地であるうが。

怖いのはそこに潜む悪意を持った人間であって、闇に満ちている様々な生き物や、霊気が恐ろしいのではない。それらの中にも人に対して悪意を持っているものもいるだろうが、それは稀な存在であって、たいていは人などには無頓着なものだ。

私は、彼らの声を少しだけ盗み聞きしてみる、それだけのこと。と、綾が説明してくれたことを覚えていて。

山奥の村で殺人事件に巻き込まれ、大きなお屋敷の座敷で生駒、綾、優と、三人で川の字になって寝た夜のことだった。

あの夜、綾が見せてくれた瞳の黒く透明な深さに、生駒は魅入られてしまったのである。

そして、自分の娘でもない綾に、自分の子であるかのような愛情を感じてしまったのである。

初めて知った感情だった。子供をいとおしく思うとは、こういうことかもしれない、と感じたのだった。

その後、聞き耳頭巾の霊験の新たかさは、生駒も身に染みることになったのだが、綾とはそのことで話をしたことはない。

腕を磨くというのもニュアンスが異なるが、綾の聞き耳頭巾の使い手としての腕前はぐんぐん上達しているようだったし、よく知りもしない自分が不要な意見を言っつて、綾の修練に悪い影響があつてはいけないと思うからだった。

それしきのこと綾にどれほどの影響も与えることはないとは知

りつつも、万一ということもあると思うのだった。

だから、夜に、しかも草木も寝静まるような時間に、綾がマンションから出て行っても、後ろからそっと付いていくだけだった。

修練といっても、大げさなことはなにもない。聞き耳頭巾をかぶって心を澄ますだけ。

そのときばかりは、綾の顔からすべての表情が消えるが、行くときも帰るときも、あっけらかんとした天真爛漫な少女なのだ。

「おっ、ここね」

神社は湿った空気を纏って静まり返っていた。

「まだ、時間が早いんじゃないか？」

「いいの」

なんとなく綾が胸を張ったように見えた。

生駒は綾が修練を積んで、深夜でなくても木々の声を聞けるようになったのか、と思って綾のしたいようにさせた。

曇っているせいで星明りはないが、木々の間から街の明かりが見えて、思っていたよりも明るい。

「こっちな」

などといいながら、綾は拝殿の裏手に回った。

工事中のマンションがすぐ右手に黒々とそびえていて、どこことなくサイバー都市のエアポケットのような雰囲気だ。

「おっ、お墓もある」

綾が墓地の入り口まで行ってから、引き返してきた。

「お墓の中の木より、お宮さんの木の方がいいみたい」

と、もつとも大きなイチヨウの木を見上げた。

「イチヨウの声は聞いたことないのよね」

独り言のように呟いて、木に触れないように、張り出した根を踏まないように寄り添って立った。

太い枝が踊るように四方に伸びていた。

風はなく、葉やそよりも動かない。

昼間は工事中のマンシヨンのロビーに緑のシャワーを降り注いでくれている巨木だが、今は彫像のように、傍若無人な建物とかたくなに対峙しているようだった。

これは神木だ、と言いかけてやめた。

たとえ相手が神木だろうが、呪いのかけられた巨岩であろうが、妖怪をかたどった苔むした石だろうが、綾はお構いなしなのだ。

生駒は辺りを見回した。

この神木はこの位置にあった記憶がある。

ただ、注連縄を張られて、石の柵に囲まれていたはずだ。

そして、この神木を境に、奥は神域として塀で囲まれていたはずだ。今のように、あっさりと裏の墓地に抜けては行けなかった。

そもそも、神のおわします本殿はどこにあるのだろう。塀に囲まれた神域にあるはずだが、どの範囲が神域であったかさえ記憶にない。

綾がポーチから見覚えのある布切れを取り出した。

聞き耳頭巾である。

静かにそれをかぶると、ゆっくりと耳を木の幹に近づけていく。

顔を生駒に向けていたが、何も見てはいないのだろう。

耳が木の幹に触れるかどうかというところで綾は目をつぶった。

数年前、山の村の神社で綾がこうしてクスノキの声を聞いたとき、傍らにいた生駒と優は、これ以上はないと思うほどに神妙な気分になったものだ。

今にもとんでもない言葉が、綾のかわいい小さな口から発せられ

るような気がして。

そのときは、自分の手も見えないほどの暗闇の中だった。しかし、今は綾の胸の動きさえも見えるほどに明るい。車の音が間近に聞こえるし、遠くに近鉄電車の音さえ聞こえるのだ。

宮の夏祭りの時には、この木の下にはいつもお化け屋敷の小屋が建っていたものである。

小屋の女将さんが、威勢のいい、人を引きつけずにはおかない口上をマイクで叫んでいたものだ。お化け屋敷の中の狭い通路から、思わせぶりの青い光が暖簾の下から漏れていたものだ。

生駒はそんなことを思い出しながら、綾を見つめていた。

すずめやすずめ、こすずめや。

あそべやうたえ。

なくまいぞ、なくまいぞ。

はかのからすがこわいのか。

それならおつてやろつぞ、たいじしてやろつぞ。

のどがかわくか、ひもじいか。

それならしねをまいてやろつぞ、ひえもやろつぞ。

さみしかろつて、くやしかりつて。

それならこがねのかかじゃ。

すずめやすずめ、こすずめや。

あそべやうたえ。

駅への道を歩きながら、綾が教えてくれた言葉である。

イチヨウはそんな言葉を、喉から搾り出すように歌っていたというのであった。

## 24 不幸な出来事

「まるで悪夢だな」

栗田が疲れきった顔をしていた。

「三都興産はどうやった？ 納得してくれよったか？」

大矢の直接的な質問に答えたくないのか、栗田は黙って焼き鳥を口に運んだ。

「社長が頼みに行ったんやろ？」

串をぐつと引き抜くと、白木の安っぽい椅子の背にもたれ込んだ。「散々だ」

そして大げさな音を立てて、溜息をついた。

「それにしても、なんということに。ただでさえ工事が遅れ気味な上に、こともあるうに所長が殺されてしまった。いったいこの現場、どうなるんだ」

栗田は目をつむって、眉間に皺を寄せていた。

大矢は、若槻の死体を発見したときの光景をまた思い出した。

あの事件からまだ四日。

安い居酒屋で若槻の思い出話をするほど不謹慎ではない。

雇われている者として、ある意味で人ごとのように思おうとすれば思える仕事の話をしている方が、気持が楽だった。

「向こうがなんと言おうが、所長の再交替は仕方がない。まさか、ここまで進んでしまったから、工事中止ということはないやろ。販売も始めてることやし」

栗田が目を開けた。

「当たり前だ。納得はできないが仕方がない、ということになった。工事はいずれ再開する」

「いつごろ？」

「できるだけ早く。ただ、今は未定」

「向こうさんは誰が出てきた？」

「黒井副社長と三木次長、それに羽古崎課長」

「中田部本部長は？」

「あれ？ おまえ、中田部本部長を知っているのか？」

「いや、引き継ぎのときに、担当部長やとかなんとか」

「中田部本部長は出てこなかった。変だろ」

「ん？」

「元々、このマンションは彼が直接担当していて、三木次長は関係なかったんだ。ところが、最近はとんと姿をみせない」

大矢は、かつおのたたきにたつぷりと生姜を載せたが、栗田は首をぐるぐると捻っているだけで箸をつけようとしなかった。

「おまえ、なんか言い足りなさそうな顔をしてるぞ」

水を向けると、栗田が真剣な表情になった。

「今日、会議が終わってから、羽古崎課長に電話で聞いてみたんだ」「なにを？」

「中田部本部長はどうかしたのかって」

「おお、で？」

「羽古崎課長は、話したがらなかった。しかし、お世話になった中田部本部長に、今回のことを、どうしても直接ご報告したいと粘ったら、とうとう教えてくれた。静岡に転勤になっていたんだ」

「ほう。でも、静岡に三都興産の営業所なんか、あったか？」

「調べてみた。昔、富士山の麓にリゾート開発の話があつて、三都興産はそれに一枚加わったらしいんだ。ところが、バブル崩壊でプロジェクトはおじゃん。今は、後始末のための小さな部隊が残っているだけらしい。会社組織図に載っていないほどの部所だ。はつきり言つて、これは左遷だな」

「いつから？」

「それだ。白井部長が九州に転勤になったのと同じ頃」

「へえ」

大矢は、この現場に来た頃にこだわっていた、なぜ大阪支店が引き継ぐことになったのかという疑問を思い出した。

「ふたり同時に左遷か……」

「白井部長は左遷ということではないが……」

「転勤の理由に、左遷ということはないやろ。普通は」

栗田は反対しなかった。むしろ、はっきりと頷いた。

「阿紀納部長に報告した。中田部本部長が静岡に転勤になっていたことを。すると……」

一口、ゆつくりとビールを飲んだ。

「すると？ 勿体つけるな」

「部長はとぼけた。しかし、あれは知っていた顔だ」

「で？」と、大矢は先を促した。

「知っていたのに、担当営業の僕に言わなかったということは……、なにか、僕に言えない理由があったんだな」

「おまえの話は眠たいな！ 考えていることがあるんなら、ズバツと言え！」

「なにかあったんだ。白井部長と中田部本部長との間に。この現場には、おかしなことがあるすぎる。僕たちの知らないことが」

「それは俺の台詞やろ。おまえ、受注金額を決める交渉のときのことを話してくれたよな。もしかして、それか？ この喧嘩両成敗みたいな左遷人事の原因は」

「どうか。あの時はまだ、白井部長は舞台に出てきてないぞ。受注した暁に現場所長になるということは、内定済みだったけど。中田部本部長との交渉責任者は阿紀納部長だ」

「うーむ」

「ところで、大矢。社長に報告したときのことを教えてくれ」

「おまえ、聞いてないのか？ 担当営業のくせに」

「まあ、そう言うなよ。新しい所長は決まったのか？」  
「いや、まだ」

大矢の胸の内に、今日の朝一番に、事件の顛末を社長に報告したときの胸の悪くなるような感覚が甦ってきた。

もちろん、若槻が殺された一報は、その日の内に社長の耳に入っていた。翌日にも、現場副所長の鈴木から報告が上がっている。

今朝の会議はその後の詳しい報告と、今後の対処の仕方についての相談だった。

出席者は益田社長、板垣副社長、加粉本部長、阿紀納部長、そして大矢。

大矢は若槻を発見した社員ということで、念のために同席するように言われていた。しかし、自分から話すことはなにもない。偉い人たちが協議するのを、末席で黙って聞いているだけだった。

報告は主に阿紀納が行った。

板垣は副社長ではあるものの、益田のイエスマンであることに、なんの躊躇もない男だ。益田が口を開く前に、自ら進んで意見を言うことはない。

特に、今回のような政治的判断を要する会議では、なおさら益田の心の内を慎重に読もうとしているだけのようだった。

益田が人の意見を三分間以上にわたって聞き続ける、ということはない。

重役連中以下、それを身に染みてわかっているので、阿紀納の報告も極めて短いものだった。

「事件のあらましは以上です。工事は止めるように指示してあります」

大矢は、心の中で訂正した。

監督官庁や警察から止められていますし、責任者がいない状況で

は現場は動かさせません。

「三都興産へは今日の午後、社長にもご足労いただきですが、工事期間の延長と、再度の現場所長の交代をお願いするつもりです」

益田は眼鏡のつるを舐めながら、ソファにゆったりと座っていた。まだ頷いているだけだ。

阿紀納がそれを確かめて、さらに言葉を続けた。

「現場所長の後任ですが、もうしばらくお時間をいただきまして、なにぶん大きな現場ですし、こういったことがあった後ですので、きちんとまとめられる経験豊かな者でないと務まりませんので」

そう言って言葉を濁した。

大矢は心の中で阿紀納を代弁した。

できましたら、社長の口から誰が良いとおっしゃっていただけたら助かりますが……。

加粉が横から口を挟んで、当然のことを言った。

「できるだけ速やかに決定いたしましたして、工事を再開したいと考えております」

益田がまたおつ揚に頷き、やっと口を開いた。

大矢にも、阿紀納と加粉に緊張が走ったのが見てとれた。

ふたりがますます前かがみになった。

「黒井君の容態はどうだ」

大矢は驚いた。

若槻への追悼の言葉が出ると思っていたのだ。

阿紀納や加粉が、その言葉にどう反応するのかを見てみたいと思っていたのだ。

阿紀納がすかさず答えた。

「はい。順調に回復しております。後遺症もありません。業務への

復帰はまだ先のことになりますが」

大矢はまた阿紀納の言葉に追加した。  
と聞いております。

阿紀納が黒井を見舞ったとは考えられない。

「そうか。若槻君のことはどうだ？」

加粉と阿紀納が、顔を見合わせた。

若槻君のこと、という意味がわからないようだ。

板垣がいよいよ体を小さくして、益田の目に触れないように努力していた。

益田がいらついた声をだした。

「黒井君は、若槻君の事件のことをどう思っているのか」

大矢は、そんなこと知るか、と心の中でつぶやいた。

しかし、なぜそんなに黒井のことが気になる。

いくら三都興産の副社長の息子だからといって、若槻の不幸な出来事と、なんの関係があるというのだ。

阿紀納が末席に座っている大矢を振り返った。

「どうだ」

大矢は黙っていた。

答えようがない。

知らないからだ。

それに無性に腹が立ってきた。

自分が答えられないことは、部下に答えさせよつとするつまらない男。

加粉とも目が合った。自尊心のかけらもない、切羽詰まった目をしていた。

「存じません」

大矢は怒りを押さえ込んで、かろうじてそれだけを言った。

益田の質問は続いた。

「中田部本部長はどうしている」

これには阿紀納は答えることができた。嬉々とした声をだした。

「はい。転勤になったそうです」

益田がうるさそうに大きく手を振った。

阿紀納の顔にさつと赤みが差し、板垣がますます体をちぢこめた。

「そんなことはわかつている！」

「は！」

「彼はこの事件のことを、どう感じているのか！ おまえたち、それを報告に来たんじゃないのか！」

「ははっ！ それは！」

そう言つて、阿紀納が加粉を振り返った。

加粉が硬くなって、蚊の鳴くような声で答えた。

「申し訳ありません」

会議はそれで終わりだった。

## 25 鼻つまみ者

「なんだ、それ！」

栗田が大きくため息をついた。

「相変わらずの米つきバツタども」

「暗澹たる気分になるやろ」

「しかし、後任はまだ決まらないということか。後任のことより何より、中田部本部長の感想。こういうのは感想

というのか？ あいつら、それを報告できるようになるまで、社長のところには行かないぞ。困ったことになった

な

「現場所長の人事なんか、社長が決めるわけやないやろ。社内規則ではそんなことは支店長の権限や。大阪の現場

なんやから、うちの支店長が決めたらいいことやないか」

「ああ」

「それをあいつら、自分が決めるような口振りでぬかしてやがった。くそお。不愉快なやつらや。だいたい、今日

のこと自体が胸くそ悪い。なんであのアホの二人が何様のつもりで社長に報告するんや！」

栗田に話したことで、怒りがぶり返してきた。

「この会社はおかしい。もうあかんぞ。社長はアホ面してふんぞり返り、業界でも一、二を争う鼻つまみ者。重役

連中はいえ、権力争いにうつつを抜かしてばかりの腰抜けくそ

垂れ野郎！」

「まあまあ。そのとおりだ。しかし、今日は抑える。愚痴を言っている場合じゃない」

「ん？ 珍しいやないか。おまえ、実は阿紀納を嫌っているんやなかつたんか？ 久しぶりに、おまえの鬱憤を聞

いてやろうと思ったのに」

「それはそれは、ありがたいこと。しかし、グダグダ言っても仕方ない。君はいつも僕にそう説教を垂れてたか

らな。もしかして、もう酔っ払ってるのか？」

大矢は酔っていたわけではない。

腹が立っていると同時に、若槻追悼の湿っぽい場にしたいはなかつたのだ。

若槻が殺されたことについて、社内では自分勝手な推測がささやかれ始めていた。

怪しいやつとして、阿紀納など加粉派の切り込み隊長の名前も拳がっていたし、若槻にスポイルされた佐野川の

名前も拳がっていた。

大矢は殺人の真相をもちろん知りたかつたし、阿紀納であれ佐野川であれ、あり得ないことではないとも思っ

いた。

ただ、単なる当てずっぽうの面白半分の推理ごっこに参加する気はなかつた。

栗田の声が熱を帯びてきた。

「いいか、今の君の話は重要なヒントだぞ。君の例の疑問を解くに

は

大矢もそれは理解していた。

すでに頭の中にはひとつの推論が形になっていたが、今が栗田に話すタイミングかどうか、まだ計りかねていた

。

栗田の視線を外し、テーブルに並んだ料理に目を移した。

「マーボーナスが冷めてるぞ。おまえが注文した分や。早よ食わんか」

話題を避けようとしたと思ったのか、栗田が手にした割り箸を大矢に向けて小刻みに振った。

「そういうことをすると、行儀が悪いと怒られたもんや。かわいそうに、おまえにはそんなことも注意してくれる

人がおらんかったんか？」

「ふん。どうした。なぜ大阪支店が引き受けることになったのか、あれほど言い募っていたのに」

「もちろん、今でも疑問や」

「じゃ、今日は愚痴を言っでないで、その話をしよう」

大矢は小さく笑った。

若槻が殺されるという大事件の後で、あの疑問があまりに自分中心で矮小なことのように思えて、むきになって

いた自分が今や恥ずかしかった。

しかし一方で、その疑問の解は、思いもよらないさらに大きな疑惑を孕む回答となって、頭にこびりついていた

。

「いや、もうええんや。それが分かったとしても仕方ないことやし、今朝のことで、ほとほと愛想が尽きた」

「ふん。会社を辞める気か。君が辞めても僕は驚かないぞ。さもあらなんだ。ま、僕もそう長くはないさ」

「おい」

「しかし、その話は次の機会。ああいうおかしなことの真相は、ちやんと知っておきたいからな」

「それだけ言うところをみると、栗田越前の守様は、ひとつの解答に行き着いたんやな」

「ふふ。君もそういうことかな」

大矢と栗田は、互いに相手の推理を先に聞こうと譲り合った。

「俺は確信したな」

結局、そう言っただけで口火を切ったのは大矢だった。

「真相はキツクバツク。それがバレたんや」

栗田がかすかに頷いた。

「三都興産の中田部本部長が阿紀納に、あるいは加粉にキツクバツクを要求した。発注する代わりに、内々に金を

よこせとな」

栗田が頷いた。

「うちの会社はそれに応えた。会社ぐるみかどうか、それはわからない。おまえが話してくれた契約交渉の不自然

さがそれを示唆している。しかし三都興産の方ではそれが明るみになり、問題になった。で、中田部を左遷。一方

、うちの会社は白井を左遷してバランスをとった。で、後任はみそぎのために奈良本店ではなく、大阪支店の工事

部から選ぶことになった。社長があんなに三都興産のことを気にしているのがその証拠や。簡単に言つと、そういう

うことやな」

大矢はそこまで一気にしゃべつてから、反応を待った。

栗田は腕を組んだ得意のポーズで天井を仰ぎ、目をつむっていた。

「おまえはどう思う?」

栗田が薄目を開け、眉間のしわを指で撫で始めた。

しばらく考え込んだ後に口にした言葉に、大矢の表情が緩んだ。

「そういうことかもしれない。たぶんそうだろう。しかし、それを口にするには、もっと情報が必要だ」

「もちろんそう。今は単なる推測でしかない」

「君が話した相手が僕だからいいものの、誰彼なしにする話じゃない。やばすぎる」

「おまえ以外に、するかいな」

「いずれにしろ、情報を。きちんと証明できることが重要だ」

「証明? おい、栗田、おまえ、何か企んでるのか? 内部告発とか」

「あるいはゆすりとか? まさか。そんなあやふやな気持ちじゃ、こんな会社にはいられないぞ。それに僕の上司

が絡んでいるんだ。はっきりさせておかないとな。これから先、どれだけ一緒に仕事をするにしても、気持ちの整理

理がつかないだろ」

「俺もあの現場に行くことになったとき、そう言ってたんやけどな。おまえ、全く取り合わなかったぞ」

栗田がニツと笑った。

「そうか? いろいろ情報をやったじゃないか」

「とにかく証拠だ。金の流れは？ 誰から誰に？ 金額は？ 時期はいつ？ どんな方法で？ あるいは見返りは

金ではなく、現物の何かか？ とにかく、ハルシカ建設の社員である僕らにとって一番重要なのは、誰が中田部本

部長に金を贈ったのかということだ。誰に了解をとって？ あるいは自分ひとりの一存でか？」

栗田は大矢の推理が気に入ったのか、あるいは同じことを考えていたのか、嬉々として次々と言葉を吐きだした

。大矢も口を挟んだ。

「それに、チクツタのは誰かってことも」

演説を中断されたのが気に食わなかったのか、栗田が急に言葉を詰まらせて大矢を睨みつけた。

しかし、すぐに調子を取り戻して、また早口でまくしたてた。

「そういうこと。中田部本部長の意向を、こちらに伝えた仲介者もいるかもしれない。中田部本部長はそういうこ

とをストレートに言うような奴ではないように思う。もしかすると、温厚そうな態度は仮面だったのかもしれない

が。しかし、誰かがお膳立てをしたと考える方が自然だ」

以前からおかしいと考えていたことで、キックバックじゃないかと思ひ始めるヒントになったことを、大矢は話

した。

「ひとつ気になっていたことがある」「ん？」

「近隣工事。裏の神社の植栽工事や。これが発注されて一瞬で完了しているんやけど、金額が大きすぎる。この金

の中に隠されたんやないか」

「うむ」

「発注金額は千四百万円ほどや。しかし、どうみても植栽工事そのものは百万もあれば十分できる内容。これが怪

しい」

「なるほど。その工事はどこに発注したんだ？」

「織田工務店」

栗田が前のめりになって、大きな声をだした。

「加粉部長がいつも使っているなんでも屋だ！ 確か、大和郡山あたりの業者だ」

「そう。しかも植栽工事をさせるのに、わざわざ内装工事がメインの業者にさせることはない。植栽屋に頼めばいいことやる」

「なるほど、そういうことか」

「織田という部長が現場に来てる」

「織田工務店の織田……」

「知ってるんか？」

「いや、知らない。たぶん一族会社の奴だな。たいていのことは自分で処理できるという立場だろ？」

「たぶん、そうやる」

「どうだ、大矢。田所さんや川上さんなら知っていることがあるかもしれない。真相を聞いてみたらどうだ」

「できるわけないやろ、そんなこと。もし、何か知っているとしてみ、大事なことをあいつらが言うはずがないし

、もしかして俺が嗅ぎまわっていることが鈴木の子にでも入ってみる」

「大阪支店の自分の同僚だろ。信用できないか？」

「できないな。若槻所長が死んでからまだ数日しか経ってないというのに、加粉一派が我が物顔や。社長報告の件

でもそう。あいつらは若槻所長の部下やけど、今や内心、どう思っているのか知れたもんじゃない」

「悲しい話だな！」

栗田が大げさに首を振り、

「しかし会社を辞めるのなら、いいじゃないか」と、とぼけた調子で言った。

「おい、待たんかい。決め付けるな。阿紀納や加粉や白井に近いおまえの方が、何かルートがあるはずや。鈴木や

根木は？」

「いや、親しくない。うーん、いないなあ」

ふつと大矢は酔いを感じた。

心地よくはしゃいだ酔いではない。

若槻が殺されたこと、キックバック、益田と阿紀納たちの会議の様子、そういったうれしくない出来事が頭の中

に居座っていた。

頭が痛くなりそうな予兆を感じて、大矢は無理に声をだした。

「三都興産の御曹司に聞いてみるか」

「そうしろ！」と、栗田が間髪を入れずに応えた。

本気でそう考えたわけではなかった。

しかし、黒井はなにかを知っているかもしれない。しかも、同僚を売るようなマネはしないかもしれない、とも

思い始めた。

黒井は大矢からみて五年後輩だ。

三都興産の創業者である黒井種治の孫で、現在の副社長、黒井勇治郎の次男。社長は叔父にあたる。

大矢と黒井は表面的には仲良くしていた。

先輩として、親身になって黒井を鍛えようとした時期もあった。

黒井が父親の口利きでハルシカ建設に入社したことや、いずれはここを辞めて三都興産に再就職することは公に

されていたし、言動の中にハルシカ建設に対しての愛社精神がないことをうかがわせることもあった。

就職した会社に対して忠誠心を持つべきだといった考え方に反発する大矢でさえも、黒井の態度には違和感を覚

えることがあった。

それは、ここが最後のがんばりどころ、というようなときに滲み出た。黒井には、なんとしてでもやり遂げると

いう気迫が感じられなかったのだ。

少なくとも、大矢はそう感じていた。

黒井にとって、ハルシカ建設での仕事は、自分の将来に向けての学習や経験を積むためであって、勤めている会

社の利益貢献のためではない。

大矢は黒井のその考え方に賛成はしつつも、どうしても違和感を持ってしまったし、結果として黒井と距離をお

いてしまつたのだった。

その黒井が、自分の本拠である三都興産を施主とする現場に配属されることになった。

そして転落事故。

将来は三都興産の上層部の一員になることが半ば約束されている黒井が、今は病室で寝ている。

どんな気分でいるのだろう。

見舞いに行つてやろう、と大矢は思った。

大矢の頭の中では、口に出していることと考えていることが、微妙にずれながらバランスをとっていた。

思考も右左に振れた。

冷めた酔いだつた。

しかし言葉には、勢いがついていた。

「おまえは羽古崎にもう一度聞いてみる。キックバックがあつたという前提で。ズバツと！」

「羽古崎課長に？ なにを聞く？」

「中田部の左遷の理由に決まつてるやろ」

「ん……、むつかしいな……」

かまわず大矢は続けた。

「阿紀納の身边でおまえが信用できる奴はおらんのか？」

「いるわけないだろ。さっきの君の話をもそのまま返す。こつという社内では、信用する方が泣きを見る。特に阿紀納

本部長なんかに取り入っているやつを信用した日にゃ、なにをされるかわかつたものじゃない。君こそ、根木さん

なんかはどうだ。もう気心が知れているんじゃないのか。残留組だし、彼なら裏情報を持っているかもしれない」

「あかん。あれは単なる小心者のウサギ。優秀でいい人間かもしれないが、波風の立っているところに自分から近づ

くよつなやつやない。へたすりゃチクられるのがオチや」

「そうか、チクルられるか……」

栗田が左手をあごに持っていき、夜になって急に濃くなってきた髭の感触を確かめるように撫で始めた。

「ところでおまえの推理はどんなんや？」

「もういい。君の話の聞いたら十分だ。僕の方の話は、今の話に比べたら噂話に毛が生えた程度。推理は任せる」

「なに！ 卑怯者！ 俺にだけあんなやばい話をさせるんか！」

「なにくだらないうことを言っているんだ。それにしてもなあ。どうも白井部長がそういうことをするようには思え

ないんだ」

「なんでや？」

「人柄」と、栗田はきっぱりと言い切った。

「なら、阿紀納か、加粉のやつか」

「やりかねない」

「しかし阿紀納やないな。もし、阿紀納のやつがキックバックの当事者なら、わざわざ加粉にお出まし願う前に、

契約折衝はかたがついていたはずや」

栗田が頷いた。

「鋭い」

「そして、罪は白井が被らされよった……」

「被らされたというより、三都興産への手前、それでお茶を濁したという方が正しい。白井部長は元々が福岡の出

身で、いずれは郷里に戻りたかつたらしい」

「ふん。白井の九州転勤が懲罰人事やないんなら、加粉で決まりやな」

言ってしまったから、大矢は飛躍しすぎたと思った。案の定、栗田が突いてきた。

「決め付けることはできないさ。白井部長がすでにあの時点で僕の知らないところで動いていて、キックバックの

張本人だった。しかしそれは、中田部本部長に強要されて、会社の了解をとった上でのことだった、ということも

ありうるわけだから」

「担当営業の知らないところで現場所長の一候補が勝手に動く？ 内定していたとはいえ？ ちょっと考えにくい

な。まあ、いい。よし！ とりあえずは情報集めや！」

大矢はその気になった。

栗田が頷いた。

## 26 宴もたけなわ

「へえ、また珍しい経験をしたのね」

そう言いながらも、優はつまらなさそうな顔をしていた。

いつもの聞き上手の才能は消え、あるいは意識して隠され、カウンターに目を落としていた。

生駒が警察の事情聴取を受けたことをポツリポツリと話していた。入り口に近い席には見知らぬ二人連れ。生駒と優は一番奥の席に腰掛けていた。

生駒は若槻が殺されたことそのものより、事情聴取の経験譚をして、偽善的な神妙さを装う話題になることを避けていた。さほどの悲しみは感じないとはいえ、若槻が殺されたことを酒の席の話題にしたくはなかった。

「犯人は捕まるのかしら」

生駒は応えなかった。

若槻が殺されてまだ五日目。沈黙が自然だった。

BGMが耳に入ってきた。サンタナの「哀愁のヨーロッパ」。

やがて柏原が話題を振ってきた。

「黒井の具合はどうや？」

優が目を上げた。

「近々、またお見舞いに行ってくる。ママを誘って」

今日は先日のように、この話題で盛り上がることはできそうになかった。

生駒の沈鬱さが優にも伝染していたのかもしれない。

しかし、柏原の口から、佐野川という名前が出たことで空気が変わっていく。

「佐野川はどうしてる？ 変わったことはない？」

柏原に推理ごっこの情性があるのかもしれないと生駒は思ったが、それを咎めることはしなかった。

「私に聞いてるん？」

優からはそれ以上の言葉は出てこなかったが、明らかに声に張りがあった。

「変わったことが続く現場やな。理解に苦しむ転落事故と明らかな殺人事件。まさに連続事件」

「二つは関係した事件ということよね」

「さあ。若槻事件に佐野川はどう関係しているんやろ」

黒井転落事件の容疑者は佐野川だと決め付けているかのような柏原の言い方。

店の話題としては、回りくどいことよりも、すっきりした話のほうがいいということだろう。

生駒はそう考えて、柏原の問いに付き合った。

「佐野川はパーティが始まってすぐに顔をみせた。でも、飲み食いせずに帰っていった」

優はカウンターの上で組んだ指の先を見つめていた。

きれいな長い爪が、無防備な薄い二枚貝のように光っていた。

「若槻さんのことは、土曜日にお店で話題になったらいいよ」

あのパーティの次の日、土曜の夜に「セピア」に行つて若槻が殺されたことを話した者がいる。

女の子の肩に手を回して、さも悲しむべき重大事件のようにしゃべりながら、実は楽しんでいた男の様子が目に浮かんだ。

その男が誰なのか。生駒は知りはしなかったが、怒りの感情が湧いた。

若槻を殺した犯人より、それを若槻が行きつけの飲み屋で話題にした人物に腹を立てた。

自分の矛盾に気がついたが、一旦火がついた怒りは、押さえ込むには骨の折れそうなほど大きなものだった。

生駒は自分の胸の中の、心という液体に満たされた空洞に張り巡らされている安定した精神の細い糸が、一本切れたかように感じ、同時に軽いめまいを感じた。

ふと、大声をあげそうになった。

目の前のグラスをカウンターに叩きつけたい気分には駆られた。

自分がそんなことをするはずはないと実際はわかってはいたが、意識して全身をこわばらせ、体のどこもがピクリとも動かないようにしながら、気持ちが落ち着くのを待った。

「土曜日にそっちの店でハルシカ建設の誰かが、酒の肴にしたということやな？」

柏原が聞いたが、その名を聞いたところで、いい気持ちはしないだろう。

「まあね。そういうこと。自分達の仲間が殺されているのに、なんだかなあ、という感じよね」

「そいつは、誰や？」

柏原がなおも聞いた。

「知らないわよ。ママは言わないと思うから。なんなら、店の子に聞いてみる？」

生駒は思わず声をだした。押し殺した声になった。

「俺の知っている奴かもしれないぞ」

「ノブ、ちよっと調子が出てきた？」

「なんだ、調子って」

「だって、ここ数日、何を聞いても上の空なんやもん」

「そうか、すまん」

生駒はまだ、綾の申し出については優に話していなかった。

自分の気持ち整理できないまま、優に話せることではなかった。若槻のこと、綾のこと……。

優が言うように、生駒の胸の中はそのふたつのことで一杯だった。綾のことはまだ話せないまでも、若槻の事件については柏原と優に聞いてもらおう。胸の重みが少しでも軽くなるかもしれない。そう思って、優を誘ってオルカに飲みに来たのだった。

「さ、どうする、生駒」

柏原の目が、パーティの様子を含めて、若槻事件について話しておけと言っていた。

「記憶は薄れていくもんやぞ」

「皆さん、こんばんは！ ようこそナチュレガーデン大和高田新築現場の焼肉パーティにお越しくございました。私は、今晚の司会をさせていただきますます香坂さゆりと申します！」

マイクを通した香坂の声が響いて夜空に消えた。

拍手が沸いた。

「お肉もどんどん焼けていますので、早速乾杯とまいりましょう。

若槻所長！ よろしくお願いします！」

こうしてパーティは始まったのだった。

香坂は張り切っているように見えた。

作業服姿ではなく、白い無垢なTシャツにジーンズ姿で若さを発散させている。

若槻はじめゼネコンの職員全員が張り切っているようだったし、下請け会社の職員連中や藍原も楽しんでいるようだった。

主賓として挨拶に立った羽古崎は、工事に関わる人々にねぎらいの言葉を述べ、アトラクションのビンゴゲームの特別賞品まで持参して来ていた。

行武は数名のコンパニオンを連れてきていて、さかんに指示を出していた。

肉も他の料理も酒も、ふんだんに用意されていた。こういう屋外でのパーティーにも慣れているようで、肉や野菜や魚介類が手際よく焼かれて、次々になくなっていく。

行武自身も、熱い料理を大きなプレートに載せてサービスして回っていた。

会場となった現場の駐車場には紅白の幕が掛け渡され、資材置き場や大きな分別用コンテナなどが視界から隠され、適度に囲われた雰囲気を作られていた。

臨時の照明があちこちに据え付けられ、煌々とした白い光がパーティー会場を行きかう賑やかな人々の姿を包み込んでいた。

「行武さん、一緒にどうですか」

宴もたけなわになってきた頃、生駒は行武に声を掛けた。

生駒は会場の隅でひとり座り、飛び回っている綾の立ち居振る舞いや暗い空に盛大に昇る煙、そして人々が楽しんでいるさまを眺めながら、静かにビールを飲んでいった。

会場のいたるところで、様々な組み合わせが生まれ、笑いとお話が生まれていた。

隣のテーブルでは、香坂と石上が向き合って話しこんでいた。積極的に話しかける香坂に、石上は照れくさいのか、少し迷惑そうにわずかに逃げ腰になっていた。

綾を囲んで、男達が盛り上がっていた。

佐野川が会場に入ってきて、梱包された建築資材のサンプルを根木に渡すと、勧められたビールを断ってさっさと会場から出ていった。

中央の大きな集団では、鈴木が他の職員達と一緒に談笑していた。

こういうパーティの参加者の中には、自分で焼く側に回りたい人がいるものだ。

いつのまにか大矢は、網の上の焼き鳥をトングで裏返しながら大声で客寄せを楽しんでいたし、その隣では織田も焼きそば屋の親父に挑戦していた。ソースをかけるたびにジューと大きな音をたてて湯気が立ち昇り、香ばしい匂いが周囲にたち込めていた。

白い煙が何本もゆっくりと昇っていき、郊外の比較的くらい夜空の中、ここだけに薄いもやがかかっているようだった。

「皆さん、楽しんでもらってますなあ。天気が心配やったけど、もって何よりや。じゃ、遠慮なく一杯いただくとするか」

行武は躊躇することなく生駒の手から紙コップを受け取った。

白いカッターシャツに藍色のネクタイを締めて、折り目の付いた黒いズボン。ひげもきちんと剃っていた。

「こないだは、ごめんな。生駒君はもうちょっとこましかったところがよかったやろ」

生駒が大和高田市内の料理屋で行武と会ったのは、パーティの一週間ほど前のことだった。

行武の知人の店だった。料理屋とはいえ、居酒屋より少しは高級かなというグレードの店だった。

「いや。こちらこそ、どうもありがとう。あの晩は楽しかった」

そのときの行武は饒舌だった。

生駒はその夜の話を反芻した。

生駒と行武は、当時の地域の様子を、互いの覚えている限りひとしきり確認しあった。

どこそこの家の裏にはイチジクの木が植わっていて、その実を取ってイチジク爆弾と言いながら投げ合って叱られたこと。

地藏盆の夜、短くなった火のついた線香を配り歩いて小金を稼いだこと。

犬見神社の夏祭りの神輿を早く大人になって担いでみたかったこと。

小学校の校長が大樽というあだ名で呼ばれていたこと。

福若という駄菓子屋で買った串のスルメを、しがむだけしがんだ後はエビガニ釣りの餌にしたこと、など。

そんな話が尽きた頃、行武が聞いてきた。

「ところで、あのマンション、売れ行きはどうや？」

「まあ、そこそこいいんじゃないか」

「どんな人が買うんや？ 相当高いやろ？」

「この辺りの商圏の中では高い方だろうね。購入者は大阪市内に勤めている人がほとんど。地元の人を買ったという話は聞いてないな」

「そりゃ、そうやろ」

行武の言い方には険があった。

「歓迎されていないようだな」

「まあな。でも俺は喜んでるでえ。ゼネコンさんや設計事務所さん、業者さんの分でほしい毎日二十個くらいの注文がある。うちみたいな零細企業では毎日それだけの売り上げが固定的にあるというの  
はありがたいことなんや。聞いたら、現場に出入りしている職人は、  
今、八十人くらいいてるらしいから、もうちょっとあればいいんや

けどな。欲を言えば、きりないけど」

ひとつ四百五十円の弁当がそれだけの数では、いくら儲けにもなるまい。

ただ、商売というのは行武の言うとおりなのかもしれない。行武食堂は商店街の中にある本店と、新しくできた道沿いに支店がひとつあるが、支店の方が今や立派な工場で、清潔そうな作業場で真っ白な作業服を着た女性達が大勢働いているのが道からでもよく見える。

「それにしても、若槻さんが来てくれて助かったなあ」

「どういうこと？」

「前の白井さんっていう所長は、いつも使ってる業者があるそうなんや。奈良では大手のケイタリングサービス。正直言って、あんな所とうちとなら勝負になれへん。いつ難癖をつけられて替えられるか、びくびくもんやった。それに、いつも量が少ないとか、こんなメニューを入れるとか、味が濃いだの薄いだの、味噌汁をサービスしろとか、あれこれ注文をつけられてなあ」

「なるほどね。でも、若槻さんも自分の現場の弁当はこっつて、決めているところがあるんじゃないかな」

「あるかもしれへんな。しかしまあ、彼は大阪支店の人やし、奈良の業者は知らんということに期待してるんや」

「それに行武食堂は近隣の業者だしね」

生駒の仕事のことや行武の暮らしぶりなどといった話をせずに、当たり障りのない思ひ出話と弁当の話をしただけだった。

しかし、三十年ぶりに会った人といきなり身の上話をするのも妙なものだ。もう昔のことは忘れているだろうと、行武が彩りを与えてやろうとしてくれたのだ、と生駒は思っていた。

「言い忘れてたんやけど」

行武がロース肉を勧めながら言った。

「この現場にもう一人、地元出身者がいてるの知ってたか？」

「へえ、誰？」

「織田。ほら、ずっと町内会の会長をしてた家。孝っていうやつ。知らんかな？俺たちよりちょっと年上の」

行武は先日思い出話の続きをするつもりのように言った。

「えっ、織田工務店の部長のこと？」

「そう」

生駒の予想に反して、行武はあからさまに不愉快そうな顔で頷いた。

生駒は、地元では織田工務店の評判は良くないのかと思った。

「評判？ ああ、よくないな。少なくとも、こんな立派な工事に、内装のメイン業者として参加するような会社やない」

生駒は、織田工務店が地元の建設会社ということで無理やり工事に加わったのだと想像した。

よくある話だ。現場ではそういう申し込みを表向きは断るものだが、さまざまな思惑が双方にあつて、下請けあるいは孫請け会社として入ることはままあることだ。

大手ゼネコンが地元の中小工事会社とジョイントベンチャー、つまり共同企業体を組むことさえある。町内会の会長の関係者ということであればなおさらだ。

「町会長の家は建設業をしていたのか。こんにやくや豆腐なんかの工場だった記憶があるけど」

「建設会社をしているのは親戚の家や。食品工場をしてた本家は今や婆さんと息子一家だけ。その息子の孝が、叔父が経営している織田工務店の部長に収まったというわけや。社長は歳やから、実質的には社長やな。中桜工業も織田家の息のかかった会社らしいぞ」

「ぶっん、そうなんや」

生駒にはどうでもいい話だった。

現場にいる織田は、付き合っただけのいい男だとは思えない。地元出身者といっても記憶にない人物というのは、思い出話のネタにしようがないし、親しみの持ちようもない。

「織田の婆さんは相当もろくしとるし、息子は道楽者ときてる」  
行武は酔うほど飲んではいないはずなのに、強い調子で怒りをぶつけてきた。

反応の仕方に困って黙っていると、なおも吐き捨てるように言った。

「婆さんは、そりゃあ金を貯めこんどるやるがな」

「このあたりの大地主だったからな」

生駒が相槌を打つと、行武が鼻で笑った。

「ふん。この松並町がいつのまにかろくでもない町になったのは、あいつらが金に目がくらんだせいや。金に汚い連中というのは、つくづくいやになる。それにしても、かわいそうなのは住田の婆さんや。噂じゃ、孝が自分の母親よりも長生きされたらかなわんということ、難癖つけて追い出したそうや」

生駒には行武の口から出た住田という名前もピンとこなかった。

「住田？」

行武は生駒の顔を呆れ顔で見つめ、やれやれというように肩をすくめたが、石上が近づいてきたので、それ以上はなにも言わず、自分の仕事に戻っていった。

「先生。おひとついかがですか」

石上はトレイにのせたウイスキーの水割りと、チーズとクラッカーが載った皿を持っていた。

「あ、わざわざすみません。ありがとございます」

「先生にはいつもお世話になってますから、こういふときにご接待しとかない」と

と、石上が笑う。

「さつきは香坂さんに言い寄られてましたね」

生駒は石上と話ができることを喜んだ。

「ハハ。あの人、おもしろい人ですねえ。勉強熱心だし。プラスターボードの継ぎ目の不陸をわからないようにするには、どうすればいいのかって聞きに来たんですよ。あんまり基礎的過ぎて、いまさら誰にも聞けないからって」

「へえ。だめだな。そんなことをいまだに知らなかったなんて」

生駒は自分がまだ香坂の指導者であるかのようにおどけて言った。  
「まあまあ。いいじゃないですか。それにしても今日は、腹いっぱい食って、飲んで、大満足ですわ。生駒先生、今日は本当にありがとうございました。ありがとうございます」

「いえ。でも、なんで僕に礼を？」

「数名だけでしょ。孫請けの社員で参加させてもらっているのは。生駒先生が私の名前を入れておいてくれたんでしょう」

孫請けの社員の数が少ないのはそのとおりだった。当然だ。孫請けだから。

「違いますよ。僕じゃありません。石上さんの日頃の仕事熱心を見て、若槻さんか鈴木さんがノミネートされたんじゃないですか？」

石上はますますニコニコとして、じゃ、礼を言っとかなくては、と離れて行った。

その後ろ姿を追いながら、生駒はある日見た光景を思い出した。

ある夜、生駒が近鉄の駅への近道を急いでいると、目の前を見慣れた作業服が横切ったのだった。

あつ、と呼びかける間もなく、作業服の男は自転車一台通るのがやつとの路地に入ってしまった。白髪をがりがりやりながら。

石上の右手には手提げの紙袋。飲み物や弁当、着替えや替えの靴などを入れているのだろう。現場への往復に、石上はいつもくたびれた紙袋を使っている。

そして左手にはスーパーの白い袋。食料品のトレイがいくつか透けて見えていた。

路地の奥には、木造モルタル二階建て、築後四十年は経っていそうな古いアパートがあった。

壁に赤い塗料で、デカデカと太陽荘と書かれてある。

木の表札は薄汚れ、開け放した扉も建つけが悪そうにひと目見てわかるほど傾いでいた。

扉の中はモルタルを引いた薄暗い土間になっていたが、もう何十年も洗われたことがないように黒光りしていて、靴箱の前に敷かれた端っこのちびたスノコの下には砂が溜まっていた。

各部屋は六畳一間というところだろう。

生駒は自分が学生時代を過ごした同じようなアパートのひと部屋を思い出した。

角の取れた人造石のシンクがわずか六畳の部屋の隅に取り付けられていて、ガスコンロは持ち込み。

各部屋には風呂はもちろんトイレもなく、洗濯物は当時ようやくではじめたコインランドリーに持っていったものだった。

部屋の物音は上下左右に筒抜けで、隙間風がいたるところから吹き込んでいつもかすかな音をたてていた。

裸電球が垂れ下がり、ギシギシと音を立てる階段には、管理人の

老婆が飼っていた猫の臭いが染みついていたものだった。

こういうところに石上はひとり住んでいる。

両側にベニヤ板の扉が並ぶ廊下の床をきしませて自分のねぐらにもぐり込み、スーパーで買ってきた出来合いのものを暖めて食べるという生活。

生駒の気分はふさいだ。

親しくなった石上の寂しい暮らしを垣間見たことだけで感傷的な気分になったのではない。

住まいという意味では同列に並ぶものだが、自分が設計している建物との落差の大きさを突きつけられたように感じたのだ。

えてして華美になりがちな数千万円もする分譲マンションを購入する人もいる一方で、こういう雨露をしのげるだけの最低限の空間に住む人もいる。

生駒は、自分が設計しているものこそが正しく美しく、人々の暮らしの向上に貢献していると有頂天になることほど、思い上がった考えはないと改めて感じた。

もつと建築家としての自分に、できることがあるのではないか。まだまだ、自分はそういう意味で世の中の役には立っていないのではないか、と思ったのだった。

生駒はふと我に返った。

鈴木が話しかけていた。

「いやあ、生駒さん、すみませんね。遅くまで付き合っていたいただいて」

生駒は招待を受けた礼を言った。

「生駒さんに現場に来ていただいて大助かりです。ところで例の石碑の件。どんな感じでしょうか？」

若槻に頼まれたことを忘れていたわけではなかった。

「すみません。再整備するのは外構工事のときでしょう。まだまだ先のことですよね」

「ええ。でも申し訳ありませんが、地元にどんなふうを整備すると言っておきたいので」

「わかりました。じゃ、現時点のもので結構ですから、外構の詳細図をいただけますか」

「あ、そうですね。すぐにお手元に届くように手配します」  
若槻が話題に入ってきた。

「頼みますよ。気が進まないかもしれませんが、生駒さんにも思い出があることだし」

鈴木が、なにか取ってきてきましょう、と席をはずした。軽快なフットワークでそつのない接待役を務めている。

若槻が来たことで、席をはずそうとしたのかもしいないが。

若槻が生駒に体を寄せてきた。

そして、内緒話をするように、「俺に何か郵送してきた？」と、聞いてきた。

「いいえ」

「そう。じゃ、行武かな？」

「なんですか？」

「後でちよつと見てくれる？」

若槻と入れ違いに、鈴木が戻ってきて、缶ビールをテーブルの上に並べた。

これはなかなかいけますよと、イカやエビの塩焼きを山盛りにした紙皿を勧めたが、追いかけるようにしてついてきた設備業者が挨拶を始めたので、賑やかな中央のテーブルに戻っていつてしまった。

ひとりになった生駒は、藍原や他の業者が集まっている隣のテーブルに移動した。

早速、藍原が話しかけてきた。

「今日の料理は飲み物別で、一人三千円だそうですよ。まあまあです。行武食堂もぼつんぽつんと昼の弁当を配っているより、これ専門でやった方がよほど儲かるだろうに」

「確かにね。こんな宴会はいつもあるわけじゃないでしょうけど」  
「行武さん、今日は奮発したのかもしれない。前にやったときより豪勢だ」

生駒は宴会料理の質にたいして興味はない。しかし、藍原は何かを伝えたいかのように、声をひそめた。

「一昨日の昼の弁当を食べましたか？」

「いえ」

「行武食堂の弁当じゃなかったんですよ。別の業者の」

「そうだったんですか」

「最近、その弁当をとることも多くなってきました。特に、ハルシカ建設の幹部連中が現場に来る日は」

行武が先ほど見せた不機嫌の原因は、これなのだ。

「今日のパーティは以前から予約をしていたので行武食堂がデリバリーしましたが、これからはよほど営業をかけないと、取って代わられるかもしれません」

大の大人が弁当のことをこれほどとやかく言うこともないだろう。

藍原はかなり酔っているらしくて、顔面真っ赤でろれつも少し怪しい。

「時々は代えて競争させないと、業者が甘えてしまいますからね。しかし、最近の職人はコンビニの弁当を買ってくる人が多くなって、行武さんのところみたいな零細な弁当屋は大変でしょうね」

藍原が行武の動きを、ちらちらと目で追っている。

「それに、生駒さんのご友人のことですから言いにくいんですが、正直言っただけというものではないでしょ。若い人にはあれで良く

ても、僕らみたいな年齢のものにとっては、毎日はこちらとね。脂っこすぎて」

そういいながら、塩焼きのイカに大胆にかぶりついた。

羽古崎が話に加わってきて、ようやく弁当の話から開放された。

「今日のパーティーは静かですね」

「前はいつだったかな、半年くらい前かな。あの時はもっと人数はいたし、おたくの女性社員も来ていて賑やかでしたね」

藍原が、さあさと目の前の料理を羽古崎に勧めながら同調した。おしゃべりすぎて、そばにいて、どうにも落ち着かない。酒が入るととたんに声のトーンもボリウムも、上がりっぱなしになるタイプだ。

「でも女性社員の代わりと言っちゃなんですが、生駒さんがかわいいお嬢ちゃんを連れて来てくれましたよ」

「ですよね！」

と、藍原が元氣一杯に応えたものの、羽古崎は口調は愚痴っぽくなった。

「今日はおとなしいというか、淡々と食って飲んで、という感じがすねえ。こういうのも、ゆっくり話ができいいですけど」

「私はこれくらいの上つとりした雰囲気が好きですよ。焼肉の煙で、ただでさえ近隣に迷惑がかかっているんですし」

生駒は今日のパーティーは成功だということにしたかった。

若槻にしる行武にしる、声援を送りたい気分だった。

羽古崎や藍原のやんわりとした非難を、自分なりに押し返しておきたかった。

羽古崎の視線の先には、大声をあげている中央のテーブル。

その集団の中心人物は鈴木。根木をからかっているようで、ふたりのやり取りのたびに周りがどっと沸いていた。

藍原がエビの尻尾を口から出したまま言った。

「ですよ。生駒さんに同感です！ きちんとしたことの好きな若槻さんの人柄もあるし、最近の現場の状況を考えると、あまり浮かれすぎる気分にはならないでしょう。ねえ、羽古崎課長」

羽古崎がはつとして、藍原に向き直った。

「現場の状況？」

「お耳に入っていると思います。最近、若槻所長と各業者の間で揉めごとが多いでしょう。表立ったことはたいしてありませんが」

「ええ、聞いています」

「現場で監理をしていると、ギクシヤクしているなって感じることもあるんですよ。ここは、うまく回り始めるのに、もう少し時間がかかるんでしょう。どういうわけで、現場のメンバーが交替になったのか知りませんが」

生駒もそれは知りたかった。

羽古崎は知っているはずだ。

しかし羽古崎は、そろそろ蛍の季節ですね、と夜空を見上げた。その手の話には関心はないというポーズなのだろう。

藍原もつられて空を見上げたが、すぐに羽古崎に視線を戻し、

「さっきの話ですが」と、食い下がった。

羽古崎がうんざりしたように手を振った。

「現場の人間関係に興味はありません。滞りなく竣工してくれればいいんです」

現場所員の交替の理由を聞きそびれた。

ただ、前の所長の顔も知らない生駒にとっては、どうでもいいことだった。

「羽古崎課長はどう思われます？ ギクシヤクしているのは黒井さんの事故も関係しているからじゃないですかねえ。若槻さんは、秘密裏にあの事故の原因を追究しているのかも。業者の誰が事故原因を作ったのかと」

藍原は、生駒が事故の直前にあの足場を通ったはずだと言ったときの自分の反応を忘れたかのように、事故のことをほじくり返していた。

「若槻さんとしても、あの事故をそのままにはしておけないんですよ」

下請け業者と若槻の間の軋轢と転落事故とを、どうしても結び付けたいようだ。

そんな話を楽しんでしているようだった。

羽古崎はいつのまにか、するりと席をはずしてしまった。

生駒は夜風に吹かれて、ゆっくりとした気持ちで食事を楽しみたくなった。

「ちよつと失礼。トイレ」

生駒は藍原と離れ、会場を離れた。

屋外にある工事用の仮設トイレは会場のすぐ近くにあっただが、あえて遠くのトイレを選んだ。

工事中のマンション一階にあるトイレの方が、本設のもので清潔なのだ。引き渡し時には機器類を取り替えるので、作業員以外なら誰が使ってもいいことになっていた。

会場から遠ざかるにしたがって、焼肉や炭火の臭いは急速に薄れ、奈良の空気の新鮮さを実感できた。

振り返ると、夜の工事現場特有の荒涼とした静けさの中で、人々が紅白幕に影絵となってパントマイムを演じていた。

たち昇っている盛大な煙がライトに照らされて、触れることができるほどの質感を持って夜空に揺らめいていた。

砂漠を移動する旅芸人一座の宿営地のように。

会場となった広場の左右には駐車場があり、平屋建ての各業者の現場事務所が建っている。それらの隙間を共同の仮設トイレ、資材

置き場、ゴミ置き場、洗車場などが埋めている。

会場はこうこうと照らしだされ、ゲートや事務所やトイレにも照明が灯っていたが、駐車場や資材置き場には夜のとばりが降り、駐車した車列や、角材に敷き並べられたコンパネの上に積み重ねられたタイヤの箱が、さらに濃い陰を作って静まり返っていた。

マンションの上層部から見下ろせば、暗い荒れた大地に穿たれた光溢れる地下国への入り口から、予期せず膨大な水蒸気がたち昇っているように見えたかもしれない。

## 29 焼きそば屋の親父

生駒はマンションの建物の中に入っていった。

やがてはエントランスの風除室になる位置だが、今は自動ドアはおろか、なんら仕切るものはなく、いわば外部と同じだ。

床は自然石の模様貼りで仕上げされる予定だが、まだコンクリートが打たれたままの状態。

香坂と石上が出てきた。石上が、今晚は蒸し暑いですね、と声をかけてきた。

「ほんとに」

「そこへきて焼肉だから、これでもかって汗をかきますなあ」と、手に持ったタオルで額を拭いた。

この先に進めば天井が高くなり、空間が広がってエントランスロビーとなる。そこからわずかに涼しい風が吹き出てきた。

「もうちよつと風が吹くと、少しは気持ちいいんですけどね」

「そうですねあ」

「あれ、石上さん、もう帰るんですか？」

「え、あつ、これ？」

石上が、持っていた紙袋をわずかに掲げてみせた。中に水色の物が覗いていた。

「いやあ、焼肉のタレで汚してしまつて。汗もかいたんで、着替えたんですわ」

さっぱりしました、と笑った。

生駒と石上が二言三言交わしている間に、香坂は軽く会釈して何も言わずに足早に会場に戻っていった。

「あ、そうだ。生駒先生、ご指摘のあった例の特注の収納扉。色合わせができてますんで、今度来られるときにでも確認していただい

ますか」

「わかりました。じゃ、来週月曜日に」

石上と別れ、生駒はロビーに入っていった。

奥に照明がついている部屋があった。将来は集会室になる大きな部屋。当面は現場事務所として利用される。

ゼネコンの事務所と生駒らの監理事務所が、プレハブの仮設建物から屋内のこの部屋に越してきたのは昨日のことで、パーティはそれを記念するという意味も込められていた。

生駒は窓ガラス越しに中を覗いた。

眩しいくらいに明るい。

まだ片付けきれっていないものが、そこらじゅうに置かれていた。

鈴木がひとりぼつんと机の隅に腰掛けて、書類を読んでいた。

電話が鳴った。

受話器を耳にあてた鈴木の様子がみるまにこわばった。

目が合った。

鈴木は乱暴に受話器を戻すと、生駒に向かってやれやれというように大げさに両手を広げてみせると、くると背を向けた。

生駒は事務所には入らず、その場を離れるとロビーを横切っていた。

トイレはロビーを挟んで事務所とは反対側、管理人室になる小屋の裏側の廊下を進んだところにある。

廊下は薄暗かったが、かろうじてトイレの入り口がわかった。

スイッチを入れるとやわらかな光が灯り、真新しいタイルを貼ったばかりの室内が照らし出された。

ハッとした。

小便器の前に人が立っていた。

「や、そこにスイッチがあっただんですか。場所がわからなくて」  
織田だった。

織田は小便器の前で生駒と体を入れ替えながら、照れたようにニヤリとした。

「さーて、次は喫茶店でもしますわ」

生駒はとつさに声が出なかった。

この男から、こんなふうに話しかけられたのは初めてのことであった。

「焼きそば屋、ご苦労さまでした」というのがやっとだった。

「あれは暑くて、失敗でしたわ」

と、織田は手を洗い、出て行った。

織田は本来、このトイレを使ってはいけない立場だ。

それを見られたことで、あのようにさつくばらんことを言っ、照れ隠しをしたのだろう。

生駒は、設置されたばかりの清潔な洗面化粧台で火照った顔を洗いながら、そう思った。

マイクを通した香坂の声が聞こえてきた。

「ここで、ご出席いただいた皆様からお一言……」

エントランスに向かうと、鈴木が立っていた。

「近隣がうるさいと言ってきていますね。もうちょっと辛抱してくれたらいいのに。まだ八時なんだから」

「さっきの電話？」

「ええ、まあ」

「予定は何時まで？」

「一応、九時ということで伝えてあるのですが。閉会をちょっと早めた方がいいかもしれません」

会場では、パーティのためにわざわざ駆けつけてきた各業者の重

役連中が、長々とした挨拶を始めていた。

計画を絶賛し、若槻を初めとするゼネコン所員への美辞麗句。そして紋切り調の決意表明。

聞いていて、おもしろいものではない。

生駒は、コンパニオンが運んできた冷たい中華サラダを落ち着いて味わおうと、パイプ椅子に座った。

「先生。ひとついかがですか？」

織田が立っていた。

プラスチックの容器をトレーに乗せている。

「シャーベット。甘いものはあきませんか？ 私は目がない方でしてね」

生駒の前にひとつ置くと、そのまま立ち去りかけた。

「ありがとう！」

あわてて声を掛けると、振り返った織田が乾杯するかのようにはシャーベットを掲げて笑った。そして綾にもシャーベットを。

生駒は気持ち良かった。

苦手な男であることはこれからも変わらないのだろうが、なんとなく気持ちが晴れた様な気分がした。

目の前に置かれたシャーベットには、プラスチックのピンク色のスプーンが突き刺してあった。

挨拶が次々と際限なく続いている。

誰彼なしにマイクの前に立ち、もはや挨拶というより歌謡漫才だった。

香坂がその横で役回りをこなそうとするかのように、にっこりとして律儀に直立している。

火照った顔がかわいらしかった。

今朝来たメールに書かれていたことを思い出した。

生駒先生、おはようございます。

今日は、待ちに待った焼肉パーティーですね。

何か余興をお願いできませんか？

物まねとか、歌とか、マジックとか。

それとも私とダンス？

ジルバならちよつとだけ習ったことがあります。

冗談です！

現場の人は芸人ぞろいなので、先生の出番はないでしょう。

ところで、男の人の気持ちってわかりませんよね。

あれれ、誤解を生みそうな書き方ですね。

夫あるいは父親の気持ちって、ということですよ。

いまさらこんなことお聞きするのもどうかと思いますが、生駒先生、

お子様はおられるのですか？

えっ、プライベートなことを聞くなつて？

綾を連れてきたことで、自分と香坂の間になにか起こるということでもないが、次に話すときに彼女はどんな反応をするだろうと思つと、自然と笑みがこぼれた。

元気一杯の男が、マイクの前で歌い始めた。手拍子が湧いた。

織田が今度はミニケーキの皿を持って歩いていった。

坂本や石上がそれを見て囁いた。織田が手に持った皿を二人に押し付けようとして、怖気づいた二人が逃げ腰になった。

行武はワゴンカーから、最後の料理が詰まったアルミ製の大きな平箱を引っ張り出そうとしていた。

舞台の前では、藍原が片手に缶ビール、もう一方の手にフォークを持って仁王立ちしていた。

その横では、田所や根木らが業者の若い社員のために、一升瓶を持ち上げていた。プラスチックのカップに並々と注がれた酒に、若

者達は困惑気味の笑みを浮かべていた。

生駒は、楽しそうに笑い、大声をあげ、さかんに口を動かしている人たちの間をすり抜けていった。そろそろ、綾を近くにおいておいた方がいい頃合だと感じた。

突然、マイクがハウリングを起こしていやな音をたてた。

あわてて田所がカラオケの装置の音量を調節した。

鈴木が香坂の耳元で何ごとかを告げてから、生駒やゼネコン職員達が集まっているテーブルに近づいてきた。

「若槻所長はどこに行った？」

川上や田所が知らないと言顔を見合わせた。

「困ったな」

確かに、会場に若槻の姿はない。

「そろそろお開きにしないと、近隣がうるさい」

「事務所の方を探してきまひよか。こんなときに昼寝でもあるまいに」

鈴木は酔った声の田所に、絶好調だな、と肩をぽんと叩き、腕時計に目をやった。

「事務所にはいない」

「トイレは？」

「いない。うーむ、仕方ないな。所長抜きでお開きにするか」

「ビンゴオ！ ビンゴゲエムをしなくちゃあ！」

「さつさとやってしまえ！」

香坂がビンゴの司会に、大矢を指名した。

お開きとなっても、ゼネコンの職員や工事業者の若い社員の尻は重かった。

根木は設備業者の社員を捕まえてまだ飲んでいたり、そこかしこで、まだお開きには早い、などと言いながら料理をつついたり、一升瓶の中身を確かめたりしている者がいた。

行武食堂のコンパニオンがそんな彼らに遠慮しながらも、徐々に片付けを始めた。

紅白幕がはずされ、いつもの殺風景な夜の現場の景観が現れた。その只中に取り残されることになっても、いたるところにパーティの余韻に浸りたい者の姿が煌々とした明かりの中にあつた。

生駒はタクシーを呼んだ羽古崎を見送り、事務所に戻って帰り支度を始めた。

ゼネコンの事務所で電話が鳴り始めた。監理事務所とゼネコンの事務所は簡易なスクリーンで仕切られているだけなので、電話の音はよく聞こえる。女子事務員が出たようで、鈴木は今ここにはいないという声が聞こえた。

会場では根木と大矢が話し込んでいた。

その周りを行武が荷物を持ってあたふたと駆け回っていた。

藍原が生駒になおも缶ビールを押し付けてきた。

業者の幹部達の車が駐車場から次々と出て行った。

電車で帰る者も三々五々、生駒らの横を会釈しながら通っていた。

ようやくゼネコンの職員たちが会場の一角に集まって二次会の相談を始めると、行武食堂の後片付けは一気に進み始め、テーブルクロスが剥ぎ取られ、テーブルの足が折りたたまれ、ライトバンの後ろには、詰め込まれる荷物が順序良く並び始めた。

藍原がまだ缶ビールを手に行っているのを気にした大矢が、酔いの回っただみ声で怒鳴った。

「それにしてもし長は、どこに行きよったんや？ 世話のかかるおっさんや。探すか？」

川上が、困ったやっただというように目で大矢を睨みつけ、

「まさか。子供じゃあるまいし」と、吐き捨てた。

根木が腕時計を確かめた。

「そろそろ、業者連中はみんな帰ったかな？」

大矢が、いや、と言つて、暗がりの中の駐車場にまだ残っている一台の車をあごでしゃくつた。

シルバーのトヨタセルシオ。その高級車に向かつて織田がよろける足で歩いていく。ふと気づいたように、織田はこちらに体を向け、黙つて頭を下げると運転席に乗り込んだ。

「あいつ、飲んだか？ どうせ、シートベルトもしていないんだろ。ほんとに、いい加減にしないと」

セルシオは勢いよく発進したが、ものの数メートルも行かないうちに、ガクンと止まつた。

「ふん、エンストしてやがる」

「いまどき、どんな車がエンストするんや」

ゼネコン職員に囃されながら、車はすぐまたさらに勢いよく飛び出し、そのままゲートを走り抜けて現場から出て行った。

「乱暴運転！」

根木の演説が始まつた。

「ああいうのは自己破滅型だな。自分が破滅するだけなら勝手に死にゃあいいけど、周りほとんどでもない災難だ。無事に帰り着けばいいけど、万ーのことがあつたらどうする？ 飲ませた俺たちも罪に問われる時代なんだ」

「縁起でもないこと言わないでください！」

ゲートまで藍原を見送りに行つていた香坂が、戻つて来るなり、根木にくつてかかつた。

まあまあ、織田の家はすぐ近く。ものの一分もかからないよと田所がなだめかけたが、根木は収まらない。

「なのになんで、車で来るんだ？」

飲酒運転撲滅キャンペーン演説を続ける根木を無視して、坂本と石上が、

「失礼します。今日はありがとうございました」と、連れだつて脇を通つていった。

「さ、これで業者は全員帰つたな。まさか、今から残業をしようなんていう物好きはいないな」

現場事務所から出てきた鈴木に、大矢が、つまらないことを言うなどばかりに睨みつけた。

「今日のご苦労さん」

鈴木は大矢の目を意に介さず、帰り支度を始めるように促した。

「生駒さん、今日は遅くまでどうもありがとうございました。綾ちゃん、また来てね」

「ハイ！　ありがとうございます！」

生駒は若槻に挨拶をしてから、と思つて最後まで残っていたが、ついに若槻は現れなかった。

### 30 血痕

七月末の月曜日、暑くなりそうな朝だった。  
若槻の事件からひと月ほどたち、工事が再開された。

大矢は誰よりも早く現場に来て、閉鎖されていた現場のゲートを開けた。

事務所のセキュリティを解除し、若槻の机を見た。

几帳面な若槻は普段から机の上をいつも整頓していた。今朝も、見事になにもものつていなかった。

大矢は自分が拍子抜けしたことを感じて、まさか花でも生けてあると思っていたわけではないだろうと自嘲した。

事務所の窓を順番に開けて回って風を通し、コピー機の電源を入れ、コピーメーカーのスイッチを入れてから外に出た。

若槻が殺された現場は、警察が現場検証を終えたときそのままになっていた。

ロビーの穴の周りに張り巡らされた単管の落下防止柵。赤い一斗缶の吸い殻入れ。

目に入ったそういつたものが、いやがうえにも、あのと時の情景を思い出させた。

穴の横に置かれた鉄製の廃棄物用の箱。

埋め立て処分する雑多なごみを入れる横幅一メートルあまり縦二メートルほどの大きな鉄箱。

大矢はあえて穴の中を覗き込もうとはせず、箱の裏側に回った。  
トイレの入り口に近い辺り。

大矢はぎよっとして立ち止まった。

血痕。

床にしぶきのような血の痕が十数箇所、三メートルほどの範囲に散らばっていた。

人頭大のものがひとつ。

流れ出した血が溜まったような、いびつな楕円形。

血を踏んだ靴跡も。

犯人の靴跡、という考えが浮かんだ。

それらはいずれも白いチヨークでマークされていた。

目の前の螺旋階段を登り始めた。

半分くらいまで登ったとき、鉄のゴミ箱の中がすっかり空っぽになっっていることに気がついた。

特別に大量のゴミが出たとき以外、金曜日にはゴミの収集はない。

あの日はどうだったか？

空ではなかったはずだ……。

収集業者が来た覚えはない。伝票を確かめればわかる。

もし、業者が収集したのでなければ、警察が持ち帰ったのだ。

二階でも、白いチヨークで描かれた印が目に入った。

吹き抜けの周りに張り巡らされた手すりの足元。

丸いマークは二階の床の端部によって切り取られた半円状。

その中心に向かう矢印。

大矢はしゃがみこんだ。

直径三十センチほどの半円のマーク。

辺り一面に工事現場特有のセメントっぽい埃がつつすらと積もっていた。

そのマークの中も、周りと変わった様子はなかった。

血が付いているということでもない。警察がなにかを持ち去った

後なのだろうか。

目を上げると、もうひとつ、小さな矢印を見つけた。  
単管の手すりの下の段。

パイプに上向き小さな矢印が描かれていた。その矢印の先にも、大矢はなにも発見することはできなかった。

立ち上がり、手すりに触れないようにして首を伸ばし、真下を覗き込んだ。

一階には空っぽの鉄箱と吸い殻入れ。そして大きさ五メートル四方の穴。

穴の縁には、コンクリートが打ち込まれて床が作られるときにために、多くの鉄筋が突き出ている。

その穴の下、地下駐車場の床にチョークで描かれた白いヒトガタ。

顔を上げて周りを見まわした。

いったい俺はなにをしてるんだ、と心の中で毒づいた。

事件は解決していない。少なくとも警察の捜査の進捗についてはなにも聞かされていない。

当然、気にはなっている。

だからといって、犯行現場をうろつくことはない。

きちんと積み重ねられた内装下地用ボードや造作用の細い角材などを眺めた。

大矢は自問した。

若槻が死んで、自分が若槻を尊敬していたことを改めて知った。

現場は今日から、何事もなかったかのように再び進んでいくだろう。

工事の遅れを取り戻すために、ゼネコンは金を積んでも、より

多くの職人を動員するよう各業者に要請するだろうし、できることはなんでもやるとばかりに、施工上の数々の工夫が実行されるだろう。

大矢たちゼネコンの職員も、残業が続くことになるだろう。

そんな多忙な中でも、若槻亡き後の社内の権力構図がはっきりするまでは、いろいろな人間がさまざまな動きをすることだろう。

部長級は部長級レベルで、課長級は課長級レベルで。

平社員は平社員なりの仕掛けをして、少しでも自分にとって都合のいい環境に持っていきこうと画策することだろう。

すでにそういう動きは活発化している。

大勢がはつきりするまでは殻に閉じこもって、下手に自分をさらけ出すまいとする者もいるだろう。一方で、手の平を返したようなあからさまな行動に移る者も出てくるかもしれない。

憶測が飛び交い、長い尾ひれがついた噂で、誰かが身に覚えのないことで傷ついたりもするだろう。

そういったことに、自分だけは関わらずに超然としていられるだろうか。

若槻は大阪支店のホープだった。

奈良の小ゼネコンであるハルシカ建設は社業拡大の過程で、まず大阪に支店を出した。ついで東京、名古屋、福岡と新しい拠点を作り始めてはいる。しかし重心はいまだ奈良にある。

今後、大阪に重心を移すべく、徐々にではあるが大阪の人事を厚くしつつある。

工事部隊では若槻がその中心人物だった。

奈良本店に在籍することにこだわった加粉に対して、若槻が大阪で仁王立ちになっているようなものだった。

その若槻がいなくなった。

大阪支店の組織はもちろん、社の工事部全体の組織改変は避けられなかった。

大矢は、社内の不穏な空気に惑わされたくはなかった。

当然のように嬉々として、組織の今後について思い付きを披露し合う同僚とは一線を画していたかった。

彼らは自分がどう思おうが、単なる駒だ。支配されているグループに属しているのだ。

支配する側にいないのに、組織の一員としてというフレーズとともに、あるべき論を語ってみせる。

大矢は、会社帰りの居酒屋でそういう話をしている自分が情けなかった。だから、こと若槻の事件に関しては、飲み屋での噂話には絶対に加わらないと心に決めていた。

若槻の亡骸を発見した自分だけは。

まだ生暖かい血の臭いを嗅いだ自分だけは。

工事がストップしてから、現場の所員はそれぞれの部所に一時的に帰っていた。

今朝から久しぶりに現場が動き出す。

しかし、もはやここで、心躍らされることがあるとは思えない。むしろ気の滅入ることが多くなるのは目に見えていた。

なにしろ、現場所長が不在のまま、とりあえずは副所長である鈴木木の指揮で動き始めるのだ。

若槻の部下である田所や川上が、どういう態度で鈴木の下で働くのだろうか。

そんなことを考えてしまうこと自体にも嫌気がさして、大矢は自分でも驚くほど大きな声でため息をついた。

いつのまにか、三階への階段の前に来ていた。

二階ラウンジから続いている廊下の突き当たり。

廊下の正面は東を向いた大きな開口部になっていて、完成すれば明るい光を一階ロビーまでもたらしてくれるはずだ。現状はサッシもはまっておらず、床から三階の床のコンクリート板まで、すぽんと開いているだけだ。ここにも落下防止の単管の手すりが取り付けられていた。

大矢はそこに先ほどと同じような白いチヨークの跡を見つけた。

下を覗きこんだ。

ちょうど白いワンボックスカーが現場に入ってきたところで、真下に停まった。

下請け業者の誰かの車だ。また車が入ってきて、奥に設けられたゼネコン職員用の駐車場に停まった。白いホンダのシビック。鈴木だった。

大矢はくるりと向きを変え、三階への階段を登った。  
靴音が響いた。

三階では北側へ向かった。

建物の北側はよくあるような開放廊下で、養生用のメッシュで全体を覆われていなければ、どこからでも真下の犬見神社が良く見える。

大矢は小さな社や目の前にそびえ立っている大きなイチョウの木に眼をやったが、近隣対策として施された神社の植栽は、中断されたままの機械式立体駐車場の資材の山や、仮囲いに邪魔されて見えなかった。

大矢はふと、自分がヘルメットを被っていないことに気がついて落ち着かなくなった。

鈴木に皮肉を言われるのはごめんだ。

急いで二階に戻り、螺旋階段を降り始めた。

途中まで降りたとき、振り返って警察がつけたマークをもう一度見た。

思わず足を止めた。

二階の床の小口、つまり厚み二十数センチのコンクリート板の下端、角の部分、一階の天井。

ちょうど警察がつけた矢印の下の位置。

赤黒い染みが目に入った。

「あんなところに血……」

### 31 黒いネクタイ

「おはよう！」

鈴木が上機嫌で声を掛けてきた。

「おはようございます」

「いい休養になっただろ。今日からまた忙しくなるぞ」

「はあ」

人が殺されて、いい休養だと！ とは大矢は言わなかった。

しかし、そういう気持ちが出たのか、鈴木が取り繕うように、若槻さんの名を汚さないようにいい工事をしないと、とわざとらしいことを言った。

大矢はそれには応えず、作業机にあったウエットティッシュの箱から三枚抜き取り、自分の机の上につつすらと積もった埃を拭い取った。

八時のチャイムが鳴った。

ゼネコン職員も下請けの業者も外の広場に出て、合同の朝礼が始まった。

もちろん、焼肉パーティのなごりはどこにも残されていない。

鈴木が若槻の一件を簡単に報告し、しばらくの間は自分が現場の指揮を執ることを発表した。太った腹が、いつもより自信満々に突き出していた。

朝礼の最後に、鈴木は若槻の死を悼んで黙祷をささげること提案した。

大矢は鈴木的心里にもないポーズに、胸が悪くなった。

目を瞑ると、コンクリートにこびりついていた血がまぶたに浮かんだ。

朝礼が終わり事務所に引き上げると、鈴木が所員全員に呼びかけ

た。

「みんな、聞いてくれ！ 今も言ったが、新しい所長が着任するまでは俺がここの指揮を執る。これまでも増してがんばってくれ！」  
大矢には勝利宣言に聞こえた。  
それほど鈴木の声には高揚感が満ちていた。

大矢は午前中、生駒から連絡を受けて収納扉の確認に立ち会った。作業の遅れを取り戻そうというのだらう。今朝は誰もが早くから現場に顔を出し、活気が戻っていた。

「これです。色、どうでしょう？」

石上が住戸のリビングの壁に立て掛けてある収納扉を指さした。

「寝室に持って行って行ってくれますか。寝室の扉と並べて確かめたいので」

生駒が注文をつけた。

「すみません。気が効かなくて」

そう言っって石上が扉を抱えあげようとするのを手伝い、壁のクロスに傷をつけないように慎重に主寝室まで運ぶ。

「うーん。いいでしょう」

生駒の応えに石上は喜んだ。

「よかった！ では早速取り付けます。お手間をとらせました！」

再びリビングまで扉を運び、石上が作業を始めた。

床に置いた扉に金具を取り付けている石上の背中を見下ろしながら、生駒が話しかけてきた。

「若槻さんが亡くなって、現場は大変でしょう」

大矢は生駒とこれまで何度も一緒に現場を回ったりしている。すでに親しみを感じる間柄ではある。

しかし相手が誰であれ、若槻の死のことを話すときにはどうしても気持ちが引いてしまう。

「ええ、まあ」

我ながら、気のない返事だと思った。

生駒もそれに気がついたのか、少しの間、黙って石上の作業を見下ろしていたが、しばらくするとまた話しかけてきた。

「これから鈴木さんが現場所長ですか」

「いえ、今のところ現場所長は不在で、鈴木は代行という形です」  
「なるほど。で、新しい所長は？」

「まだ、決まっていないようです。ああいうことがあった後ですから、急には決められないようです」

「かもしれないですね」

「いわば危機管理ができていない会社、ということですよ。若槻所長が亡くなってから、もう一ヶ月も経つというのに」

自分でもびっくりするくらい、吐き捨てるような言い方をしていた。

「ところで、事件の解決のめどはついたんでしょうか」

生駒が、そういう大矢の反応に頓着することなく聞いてくる。

「いえ。警察はいろいろ調べてるんですけど、なにも進展してないようです。少なくとも私はなにも聞かされてません」

生駒が頷いた。

「本当に……、本当に腹立たしいことで、なんとも気持ちが治まりません」

若槻が殺されたことに対する怒りが湧き起こっていた。

大矢は、自分にとって若槻が大きな存在だったことを今更ながら実感していた。

悲しみが心の中に大きな空洞を作っていることも感じていた。犯人が一刻でも早く捕まってくれることも祈りたかった。

こんな感情になったのは生まれて初めてだった。

しかし、何事もなかったかのように、工事は再び動き始めている。しかも、鈴木 の指揮の下で。

組織とはそういうものだし、だからこそ組織の強さがあるのだということをわかってはいても、やりきれない気持ちが軽くなることはなかった。

石上が大きな体を丸めて、太い指で器用に次々とビスを留めていた。

「若槻さんのことは、私にとっても、他人ごととは思えないんです」  
生駒が、取り付けの終わった扉の建付けを石上が調節しているのを見ながら言った。

大矢は誰からもそのことについて、今は声を掛けて欲しくはないと思った。

こんなふうには、雑談めいた話はしたくない。

つい、ぞんざいなものの言い方になった。

「幼馴染としては、そうでしょう……」

石上の手が止まり、これでいいですかというように生駒を振り返った。

大矢は、幼馴染という言葉の中に、小バカにしたようなニュアンスがあるような気がして、言葉を付け加えた。

「これから内装工事が佳境に入ろうというときですしね」

「ええ……。石上さん、それで結構です。無理を言って、すみませんでした」

生駒が微笑んだ。

穏やかな声だった。

「生駒先生のこだわりには、本当に参りますよ」

そう言いながらも、石上が満足そうな笑顔をみせた。

生駒と石上をその場に残して現場事務所に戻ってきてから、いつもは黒いTシャツにジャケット姿の生駒が、この暑い今日に限って、白いカッターシャツに黒いネクタイをつけていることの意味に気が

つ  
い  
た。

### 32 錆びた賣銭箱

大矢は昼の弁当を食べ終え、周りを見まわした。

川上と女子事務員が、今日から切り替えた弁当屋のサービスについて感想を言い合っていた。いつもと変わらない昼休みの光景だが、どこかにあえて静粛にしているような雰囲気があった。

なにかを、モジモジしながら待っているような雰囲気。

そのなにかとは、決して楽しいことではない。いやなことでもない。

しいていうなら変化。

気詰まりな空気を動かしてくれる出来事を期待しての沈黙。

大矢は、そんな部屋の中で腰を下ろしていること自体に苦痛を感じた。

近隣を一回りしてみようという気になった。

気晴らしではない。単に逃げ出したかったのだ。

川上から借りた鍵をポケットに滑り込ませると、作業着の上から通勤用のジャケットを羽織って、事務所を出た。ゲートの横で突っ立ったままでいるガードマンにご苦労さんと声を掛けて、工事現場を後にした。

現場の前には、両側に歩道がついている二車線道路がまっすぐ東西に通っている。

左手つまり東に行けば中心市街地。道路の向かい側には民家や商店が軒を並べている。ガソリンスタンドもあるし、沿道型の大きなサインを掲げたレストランもある。典型的な都市近郊の地域内幹線道路沿いの景観。

申し訳程度に植えられた背の低い枝振りの貧弱なハナミズキの街路樹が、なんとか街に潤いをもたらそうとがんばっている。

大矢は現場の仮囲い伝いに東に向かった。

小さな賃貸アパートと数軒の民家の前を通り過ぎ、携帯電話販売店の手前の細い道を北に折れた。

現場の北側一帯を、東の方から反時計回りに歩いてみようというのだ。

すぐに墓地の前に出た。

村の古い共同墓地なのだろう。二千坪ほどの敷地の中央に、大きなヤナギの木があった。

墓地を囲う緑色の安価なネットフェンスには葛が絡まり、ところによっては人の背を超えようかという高さにまで生い茂っている。

墓地の北側には寺院があり、土塀越しに瓦葺の本堂の屋根が見えていた。境内の狭さには不釣り合いなほど、堂々とした山門に鬼無寺と書かれた木の表札が掲げられていた。境内は荒れた様子で、庫裏はなにかの倉庫に使われているようだ。人が住んでいる様子はない。寺より先には、なんの変哲もない住宅街が続いていた。

幅員四メートルほどの曲がりくねった道に接するように、小さな二階建てや三階建ての住宅がひしめき合って建ち並んでいるだけだ。

大矢は墓地に戻り、中の小道を進んでいった。

アスファルトが敷かれているのは中央の小道だけで、他は砂利のまま。

新しい墓石が目立つが、北辺の奥の方、寺院の塀と接する辺りには古い苔むした墓石が並んでいるのも見える。

墓地の中ほど、ヤナギの木の下にはコンクリートの短い土管がゴミ捨て場として置かれていて、中には枯れ果てた供え物の花が数束、放り込まれてあった。立水栓の横には、場違いな印象を与える真新しいスチール製の屋外物置が備え付けられていて、黄色いプラスチックのバケツが数個、伏せてあった。

墓地と神社を仕切っているウバメガシの生け垣のところまで来た。生け垣は高さ二メートルほどあるが、長い間、手入れがされたことがないようで、無数の徒長枝が伸びていたし、下枝は枯れ上がり足元が透けていた。貧乏カズラが生け垣に這い登り、神社へ通り抜けることのできる生け垣の隙間にも、長いつるを伸ばしていた。

携帯が鳴った。

栗田からだった。現場を再開したことの報告に、羽古崎に会いに行ってきたらしい。

単刀直入に、中田部はキックバックがばれて左遷されたのではないかと聞いたという。

しかし、つまらない言いがかりをつけないでくれとばかりに追いつ返されたらしい。

「あれは凶星だな」

「どうしてわかるんや？」

「勘」

大矢は貧乏カズラを払いのけ、生け垣の隙間を通り抜けて神社の境内に出た。

犬見神社の最奥部にあたる。

神社の境内の幅は三十メートルほどで広くはないが、奥行きはマシヨンの工事現場の幅と同じで、百メートル以上ある。縦に細長い。

大きなクスヤカシの木などが十数本あるだけで鎮守の杜を形成しているが、足元の地面は踏み固められた土がむき出しになり、手入れの良くない樹形の乱れたアジサイやアセビなどの灌木が数株転々とあるだけだ。

殺風景だった。

「なるほど、やはりな。しかし、おまえ、大丈夫か？ そんなこと、

ストリートに聞いて。羽古崎を怒らせて、担当を替えてくれと言われたら、どうするんや？」

「おまえがそうしろと言ったんだろっ！」

「担当をはずされるだけで済めばいいけどな」

「僕はハルシカ建設の営業だぞ。それも昨年は最優秀営業成績で表彰まで受けた。危ないことに首を突っ込むときもある。リスクをとらなければ果実は手に入らないさ」

受話器の向こうで栗田が無理に軽いノリで言っている様子が、目に見えるようだった。

「大丈夫か？」

「会社を辞める気でいる人に言われたくないね。で、黒井のほうはどうだった？」

「今日の夜、行ってくる。何か聞けしだい報告する」

不意に大矢の頭の中に、キックバック事件と若槻殺人事件はひとつの繋がった出来事ではないか、という考えが浮かんだ。

ただ、単にそう感じただけで、どちらも謎が解けかけているということは全くないし、どう関連しているのかも皆目見当がつかない。

しかし、無関係であるはずがないという気がしたのだ。

社内の権力争いの渦は、若槻が殺されたことまでも、その材料にしようとしている。当事者達は、自分のあさましい行動を、組織のためにしていることだと臆面もなく言いくるめている。

そんな環境にいて、平穏な振りをして業務をこなしているだけの自分への腹立たしさともどかさ。

大矢は、普段は見慣れないマンションの裏側を見上げた。

今、マンションの陰になった神社の裏で、セミ時雨も聞こえない昼時の静けさの中で、大矢は心に突き上げるものがあるのを感じていた。

なんらかの行動をとらねばならない、という思いが。

「栗田、ところで、おまえの次の予定は？」

「次の予定？」

携帯電話の向こうから、慎重そうな声が流れてきた。

「そうや。真実を追求しようと言ったのはおまえやぞ。優秀な営業マンの活躍に期待してる」

「おい、なにをさせる気だ？」

「織田建設の実態調査」

「ふう！」

「キックバック事件の真相究明のためだけやない。若槻さんの事件を解決することになるかもしれない」

「なんだって？」

「黒井の転落事故もそうや。全部、繋がっている」

唸り声が聞こえた。

「そう考えるのが自然や」

「……」

「おい、聞いてるんか？」

「ああ」

「二人はキックバックに利害関係があった。そう考えても不思議やない。どう絡んでいるのかはわからんが、全く無関係ということもないやろう。聞いてるか？」

「聞いてるよ。やはり、そう考えるか……。だろうな。が、俺は抜ける。警察の仕事だ。俺たちの出る幕じゃない」

「いきなり意気地がなくなってるやないか！」

「意気地のあるなしじゃない。俺たちが引つ掻き回すことじゃないと言ってるんだ。警察が捜査中だ。もしもだ。俺たちが考えたキックバックの件と若槻さんのことが関係しているのなら、警察も掴んでいるだろう。任せておけばいい」

「掴んでいなかったとしたら？ キックバックの関係者が、自分か

ら進んでそんな情報を警察の耳に入れるはずがない。警察は真相に近づかないぞ。犯人は捕まらないかもしれないぞ」

「人殺しが起きているんだ！ 黒井も死ぬところだった。羽古崎課長は、恐れて現場に出て来ない」

「えっ！」

「きつと、そういうことだろう。な、無理をすることはない。警察の捜査を待つんだ。結果が出てから、もし違っていると思ったら、恐れながら申し出てもいい」

そう言うなり、栗田は電話を切ってしまった。

大矢は小さな社の正面に回った。

相当古い建築物のようで、使われている材木には古色がつき、あちこちに傷んだところが見えた。

錆びた鉄格子が嵌めこまれた御影石造りの賽銭箱。

社の扉は板戸で閉ざされていた。

再び、社の南側に聳え立っている工事中のマンションを見上げた。

マンション敷地の境界沿いには中断されたままの三段式の機械式駐車場が見えている。

今は白く塗装された鉄板の仮囲いに視線を遮られているが、竣工後には、チェーンがむき出しになった無粋な鉄の檻が、社の境内沿いにずらりと並ぶことになる。

境界沿いに列植されたツツジの苗木を見た。

社の前の道から大矢が立っている社のところまで、ずらっと三列に植え込まれている。根木から説明を受けた近隣対策工事として施されたものだ。

マンション敷地内においても少々の植栽帯が設けられ、なんとか機械式駐車場を隠そうとすることになる。

しかし、それしきのこととで、この古い神社の境内が以前は持っていたであろう厳かで神聖な空気というものは、もはやどこにも感じられなくなることは容易に想像することができた。

大矢は居心地が悪くなってきた。

犬を連れた中年の婦人が石畳を歩いてきた。

大矢は軽く会釈をすると、足早に神社を通り抜け、マンションの西端にあたる道に出た。車が一台すれ違うのがやっとの道だ。

ただ、こちらは墓地の裏の道に比べると、少しは広くて賑やかなけはいが感じられた。

木造瓦葺の民家や前面だけ白いタイルを貼った幅の狭い三階建ての住宅に混じって、クリーニング屋や荒物屋、パン屋、お好み焼き屋などがあつた。自動販売機に店先を覆われたタバコ屋もある。

街路沿いには、丸いガラスの照明器具をぶら下げた錆びの浮いた柱が並んでいた。

緑色のペンキを塗られた街灯が、この道が商店街であることをなんとか証明しようとしている。街灯には、松並商店街と記されたサイン板が突き出ている。

大矢は、商店街をマンションとは反対側に歩きだした。

自転車に乗った小学生が数人、通り過ぎていった。

昔から使われてきた村の中の道らしく、わずかに曲がりながら続いている。

軒先にタマネギを積み上げた食料品店。今どき誰も着ないような地味な洋服を鼻の欠け落ちた古いマネキンに着せた洋品店。仲介物件のピンク色の説明書を窓一面に貼り付けた不動産屋……。

どの店も繁盛しているようだとは言いがたい。

昼間の時間帯とはいえ、人影はまばらだった。

なおも数分ほど歩くと、道はけばけばしい水色の吹き付け仕上げ

の単身者向けマンションに突き当たった。

そこで道は大きく左に折れ曲がっている。大矢は回れ右をした。クリーニング屋の前まで戻ってくると、生駒が佇んでいるのが見えた。

気がついていないようだ。

声を掛けようとする前に、生駒は鳥居をくぐって神社に入っていた。

### 33 真新しい赤いランドセル

生駒は工事現場を後にすると、改めて目の前の道路を見渡した。現場に足を運ぶたびに何度となくこの道を歩いているが、常に違和感があった。

子供の頃には神社から南には、草むらの中の細い小道と水路を隔てて、見渡す限りの農地が広がっていたものだった。

おぼろな記憶では、農地の中に数軒の民家。その先に小学校の校舎。そして小さな雑木林や古い農具小屋が散らばっているだけ。そんなのどかな風景だったのだ。

今は、高層の建物はないものの、隙間なくなんらかの建築物が建ち並び、派手な看板が目についた。歩道を歩く。

自分の足元がかつての水路の上なのか、水路沿いの草に覆われた小道なのか、はたまた田んぼの中なのか。それを知るどんな手がかりもなかった。

小学校に通い始める頃、石積みだった水路の土手がコンクリートの護岸に変わった。

それでも、周りの小道には相変わらず草が生い茂っていて、時にはアオダイショウがとぐるを巻いて子供たちの行く先を阻んでいたりしたものだ。

今は国道の抜け道として、やたらと通過交通が多い道路に姿を変え、沿道に住む人にストレスを与え続けているだけだ。

生駒は工事現場に沿って西に向かった。

現場の仮囲いが途切れるところは、十字路になっていて信号機がついている。

前の広い道路を、赤い看板をでかどと掲げた焼鳥屋の方に渡ってしばらく行くと、今でも小学校があるはずだ。

松並小学校。生駒が三年生になるまで通った学校。

生駒ははるか昔に何度となく行き来した道を見通した。

記憶にあるよりもはるかに細い道が、狭小建て売り住宅の群れの中に消えていく。

田んぼの上を渡ってくる、のどかな風を感じながら通った記憶の痕跡さえ、見つけることはできそうになかった。

生駒は信号が青になっても渡ろうとはせず、仮囲いに沿って北に折れ、さびれきった商店街に入ってしまった。

現場の仮囲いが神社の石柵に変わるところで立ち止まった。

石柵はほぼ高さ一メートル。

一辺が十五センチほどの正方形の断面をした白い御影石の柱が、五十センチほどの間隔をあけて立ち並べられ、鉄の棒が上下二段に渡されている。

石柱は汚れて磨耗し、よほどその気にならないと刻み込まれた奉納者の名前を読み取ることはできない。

鉄の棒も錆びて黒ずみ、ところどころ留め金はずれて失われ、ぶざまに垂れ下がっている。

神社の石柵の古色と比して、仮囲いの均一な白さが眩しいくらいに際立っていた。

仮囲いと石柵のわずかな隙間に眼をやった。

そこには二メートルばかりの茶色の石柱が、打ち捨てられたかのように無造作に横たわっていた。

若槻から、どうしたらいいか、再整備のプランを考えてくれと頼まれていた石碑。

竹の子のように根元がまだ白く、土がこびりついている。

引き抜かれてから、それほど長くこの状態だったのではないことがわかる。石碑の上に空になった清涼飲料水のペットボトルが転がっていた。

生駒はしゃがみこみ、石碑の表面に刻まれた文字を読んだ。

南無妙法蓮華経。

深く刻まれた文字は、その筆遣いまでもまだ明確だ。ただ、裏面に刻まれた文字は、地面に接していて読むことはできなかった。

まっすぐ伸びている白い仮囲い。

マンシヨンの建物の位置……。

神社の鳥居や社。

石畳や灯籠。神木のイチヨウ……。

生駒は倒れた石柵のひとつに腰掛けて、若槻が見せてくれようとしていた古い地図を取り出した。

何を確かめようとしているのでもなかった。

強いて言うなら、今自分たちが関わっている建物が、自分の記憶にある風景の中の、どの位置に建ったものなのかを知っておきたかった。

水路や草むらや小道と、今日の前にある仮囲いや立体駐車場やマンシヨンの建物。

それを脳裏にオーバーラップさせてみたかった。

地図は縮尺が大きすぎて、そんなささやかなエリアの詳細は分かりはしない。それでも生駒は、少しずつここがかつてなんであったかを思い出し始めていた。

夏祭りの宵……。

この石灯籠より、かなり控えた位置に夜店が並んでいたはずだ……

…。  
確か、神社の南側には板塀が続いていた。その外側には草地が…。

いや、待て。

草地は水路に面していたのではない。

小さな工場が何件か並んでいたように思う。

その中にガラスの工場があつて、丸いガラスの粒をたくさん拾つては集めていた……。

その工場の向こう側が、小道と水路だったはず……。

神社の塀と工場の塀に挟まれた草地はいつも湿つていて、奥にいくと沼地があつて……。

食用ガエルの……。

そうだ、白い大蛇が住んでいて、イチヨウのご神木に登っていくのを見たという人がいた……。

草地に大蛇が通つた跡があるというので、朝早く、見に行つてみたこともあつた……。

綾が聞いたのは、木の声だろうか。

まさか大蛇の……。

そんなはずはない……。

生駒はかすかに身震いがした。

記憶の引き出しが少しずつ開いていった。

マンションの建物は、ちょうど水路を跨ぐ格好で建てられているのだ……。

ロビーのあたりには、水路を跨ぐ水道管が……。

そして、この石碑の裏側には……。

そう、住田何某と刻んであるはずだ。

水路の名は、樋口水路。

田畑の中を縫う他のもつと細い水路では、まだドジョウを掬うこともできたが、樋口水路は家庭の排水が流れ込んでいるおかげで、ドブ川になる一歩手前の状態だった。

かろうじて、たまにカダヤシや弱ったクサガメを見かけるだけだった。

そんな水路に、不要になったさまざまなものを捨てられていた。川に物を捨てることに、なんら罪の意識を持たない人も多かった。

生駒がまだ小さかった頃には、そんな水路でも筏を作って遊んだものだ。

土手は石垣の部分もあったし、土の部分は草で覆われていた。水路も、ガラモをなびかせながらそれなりの水量があった。

しかし、年を追うごとに樋口水路は汚くなっていった。いつしか、もう誰も水路に入ろうとする子供はいなくなっていた。大雨の後に大量に流されてくるフナを掬いに、あるいは飼っている魚のためのイトミミズを捕りに行くくらいのもので、黒ずんで油の浮いた水は淀み、底に溜まった泥が悪臭を放ち始めていた。

三十数年前。

ある日の夕方。

生駒が松並小学校の三年生のときのことだった。

水路には水道管やガス管などが掛け渡されていたし、水門もあった。そういう構築物は、子供達の遊びの拠点になりやすい。

学校の帰り、田んぼの畦を縫って歩いてきた子供達は、水道管を渡って、工場のはずれから草地に入り、沼の脇を通って神社の境内、笹に覆われた社の裏側に抜けていくのが一般的な寄り道コースだった。

その途中の最大の難関は、子供によって違う。

細い水道管をバランスを取りながら渡るのがなかなかできない子もいたし、板塀に囲まれ、陰気で草ぼうぼうの沼地を怖がる子もいた。沼地からは先の尖った墓石が何本も見え、草むらを進めば墓地にも抜けて行けるのだ。

神社に入れば、そこは人の手によって整備されたエリアではあるものの、背より高い笹が生い茂り、夕方になるとコウモリが飛び回る。一気に異世界のムードが漂い始めるのだ。

板塀の隙間から真つ暗な神域が垣間見えて、どんな子供でも怖気づくのだった。

子供達は大人達に叱られながらも、そんな小さな冒険を重ねながら放課後をタツプリと使って、帰宅していたのだ。

春には亀の卵を家へ持ち帰り、夏には身の丈より高い草に隠れながらバツタやドンコを捕り、秋には木の実を拾いながら。

ある日、ひとりの少女が樋口水路に落ちた。

新一年生数人を引き連れた若槻が、水道管の試練をけしかけたのだ。

生駒はその子が落ちたとき、目の前にいた。

しかし、水路の水深は膝くらいまでしかなかったし、わずか数メートル下流には道に上がるための階段もあつた。自分たちも雪に足を滑らせて誤って落ちることもままあることだった。

結局、すでに渡り終えていた若槻や生駒や他の新一年生達は、ドジ！ と囃すだけで助けようとはせず、そのまま帰ってしまった。

しかし子供達の知らないうちに、そこには板金工場の使い古された機械が捨てられ、ぬるぬるした泥に埋もれていたのだった。

少女は足に大けがをした。

通りかかった人が何気なく水路を覗いたとき、少女の小さな体は大きな赤い真新しいランドセルを背負ったままの姿で、汚れた水の中に横ざまになってぐったりとしていた。

そして少女は、その夜の内に息を引き取った。

石碑は、少女の死を悼んだ地元の有志が建てたものだったのである。

### 34 コンビニの親父

生駒は立ち上がった。

石碑がどこに建っていたのか。

それだけが正確には思い出せなかった。神社と水路の間、道端のどの辺りだったのか。今でいえば仮囲いの中か、あるいはマンション工事に合わせて少々広くなった商店街の道のどこかだったのか……。

周りを見渡した。

道標が目に入った。

若槻が寄稿文に書いていた道標。

道の向かい、シャッターの下りた店舗の脇。何年もそこに置かれたままであるかのような、不動産屋の箱型の古臭い看板の陰に隠れて立っていた。

不意に、死んだ少女の名前を思い出した。

隆子。

さらに記憶を辿った。

少女の兄の名は靖男。

三つほど年上の、おとなしい少年……。

自転車に乗った小学生達が、大声ではしゃぎながら、猛スピードで走り抜けていった。

もう夏休みか。

子供がなく、電車通勤もしていない生駒は、普段そんなことを実感することはなかったが、ふとそんなことを思った。

道標から目をそらし、石柵の丸みを帯びた頭に手を載せた。

冷たい感触を確かめると、鳥居に掛けられた犬見神社と書かれた額をちらりと見上げて、境内に入っていた。

石畳は昔のままのようだ。

しかし、ここでも戸惑ってしまう。

綾と夜に通ったところではあるが、昼間に見ると、記憶にある光景との違いがあまりに大きすぎた。

遠くからでもすぐにそれとわかった、暗くうつそうとした参道の杜はどこにもない。

石畳の横に何十年にも渡って降り積もり、あらゆる幼虫の寝床であり巨大なミミズの生息地であったふかふかの腐葉土は完全に失われ、今は踏み固められたむき出しの土がねつとりと黒光りしている。小学校の二階の窓から見えていた神社の木々の、成れの果てを見上げた。

クスの巨木が、頂部に鉄のキャップを被せられたまま、まさに枯れ果てようとしている。

かつて力強く腕を伸ばしていた太い枝は打ち払われ、体をくねらせただけの不細工な一本柱のような無様な姿を晒している。

記憶にある、藁で作られた立派な注連縄は既に巻かれてはいなかった。

石段を三段ほど上がり、賽銭箱に百円玉を滑り込ませ、かつんという音を確かめると、建て込まれた板の扉に顔を近づけた。隙間から井桁に組まれた元々の扉が見える。

暗闇に目が慣れるにしたがって、中の様子が見えてきた。

かつて、巫女が剣や鈴の舞を演じた板張りの床は、何年にもわたって清められたことがないように埃が積もっている。

隅には古びた木の箱などが積み上げられ、クモの巣がまとわりついていた。内陣の扉も固く閉ざされ、もう、夏祭のときにも開かれ

ることはないのかもしれない。

生駒は、遠くへ過ぎ去った時の流れを感じ、自分も今は完全に余所者なのだという感覚にとらわれた。

社を離れ、裏手に回った。

社の裏にはまだしも大きな常緑の木々が茂り、その杜の中程には樹高二十メートルはあろうかという大きな一本の神木。

大蛇が住むと言われたイチヨウ。

木漏れ日の落ちるところには、蛇イチゴがばらばらと生えている。参道側に比べると、裏側はまだ昔日の面影をかるうじて残しているようで、生駒は少し落ち着いた気分になった。

奥にはレンガ造りの背の低い塀が巡らされている。塗りつけられた白いモルタルが剥げ落ちていますが、これも昔のままのようだ。墓地の背景としての記憶があった。

塀の上から背後に植えられたウバメガシの生け垣の頂部が見えている。

塀に穿たれたくぐり口を抜けて、小道が神社の裏側、村の墓地に通じているはずだ。

イチヨウと並ぶ巨木クスノキ。

その根元。石柵の中。

そこには昔と同じように、小さな石の祠が祀られてあった。シダに覆われた境内の隅は、小山のようになっていた。その場所に、正体不明の動物をかたどった石像がうずくまっていた。

生駒はしゃがみこんで、その苔むした石像を眺めて微笑んだ。犬ほどの大きさで、熊のような愛嬌のある顔をしている。

記憶にあるのと同じ顔……。

苔の感触を確かめるように、石像の頭を撫でてみた。

と、足音がした。

振り向くと、薄緑色の作業服を着た男が、杜の中を足早に通り過ぎていく後ろ姿が見えた。

墓地に向かっている。

不意に、何十匹ものセミの音が盛大に降り注いでいることに気がついた。

石像を撫でながら、生駒はいつしか、とうの昔におぼろになってしまった若槻や行武らの少年時代の面影を、記憶の底から探り当てようとしていたのだった。

ゆっくりと立ち上がり、こわばったひざをさすり、タオルハンカチをポケットから引っ張り出して、玉になった額の汗を拭いた。

なんとなく、墓地に入ってしまった男を目で追い、男がひとつの墓石の前でしゃがみこむのを見た。

「えっ、生駒延治君？」

佐久間伸一郎は、目の前に立った生駒の顔を、眼鏡の奥から覗き込んだ。

「おじさん、お久しぶりです」

佐久間が眼鏡に手をやった。

「いやあ、本当だ。お父さんのお葬式以来だから、かれこれ三十年ぶりかな。来てくれてうれしいよ。どう？ 元気にやってる？」

はにかんだような笑みを浮かべ、佐久間は髭面を撫でた。

松並商店街の中にあるコンビニエンスストアには、まずまずの客が入っていた。

といっても、他の店に比べてという意味だ。元々は酒屋だったものが、今はフランチャイズのコンビニになっている。

佐久間は生駒の父親の親友だった男で、家族づきあいをしていた。もしやと思つて店に入つてみると、まさしく佐久間伸一郎自身がレジの後ろに陣取つていたのだ。

「繁盛してますね」

「いやあ、だめだめ。幹線道路沿いじゃないんで、こつこつ働いて、なんとか食いつなぐ程度の売り上げしかない」

「いつからコンビニを？」

「十二年ほど前」

佐久間が、フツと悲しげな顔をした。

「ところで、君はどうしてる？ 今日はこの近所に、用でもあったのかい？」

生駒はマンションの現場に来ていることを話した。

「ふうん、そうか。この辺りも変わってしまったのだろ」

「そうですね。自分の家がどこにあったのかさえ、わからないかと思いましたよ」

「ハハハ、行ってきたのか。そうだろ。特にあの辺りはすさまじい変わりようだ。風呂屋もなくなつたし、集会所も別のところに移設された」

「ええ。目印になるものがなくて。この前の道をとにかくまっすぐ行けばいいはずなのに、新しい道ができていたりして距離感がつかめなくて」

生駒は、久しぶりに楽しい気分であつたよつな気がした。

「でも、うちの家のあつたところがあんなに広い道になつていて、風呂屋がパチンコ屋になつていたのにはびっくりしましたよ」

佐久間がニヤリとして、生駒の言葉を訂正した。

「正確にいうと、君の家があつたところがパチンコ屋で、風呂屋だつたところが道路になつたんだ。どうだい？ 故郷は？」

生駒は正直に言つとすれば、村の輪郭さえも明確でない、単に埃つぽいだけの住工混合地域になってしまったことに失望を感じていた。

自分の仕事はその変化の一端を担い、かつ促進しているということもわかつてはいながら、軽い憤りを感じないではいられなかった。

「あつ、ちよつとごめん」

アルバイトらしき若い女性が担当しているもうひとつのレジの前に、客が溜まっていた。

佐久間がレジにキーを差し込んで、こちらへどうぞ、と客を呼んだ。

生駒は名刺を取り出して、佐久間が客に釣り銭を渡すのを待つて差し出した。

「お忙しいようですし、今日はこれで失礼します。また寄せてもらいます」

「ああ、すまんね。そうしてくれるか。僕からも連絡するよ。今度はどこかでゆっくり話でもしよう」

レジの横においてあったポーチから、佐久間が名刺を取り出した。

### 35 洗濯物がはためく脇で

黒井は大矢の顔を見て喜んだ。

「どうや。退屈してるか？」

「死にそうですよ！」

「あんまり縁起でもないこと言うなよ。近頃はなにかと物騒や」  
黒井がばつの悪そうな顔をした。

大矢は見舞いに持ってきたシューアイスの紙箱を開けた。

「冷凍庫はあるか？ なけりゃ、同室の人に配ってくれ。たくさんあるから」

「ありがとうございます。ところで、もう捕まりましたか？」

「いや、まだ」

「いろいろ噂は、出ているようですね」

「なんや。あんなつまらん話。おまえも聞いてたんか」

「つまらない話かどうかは別にして、僕の情報網はすごいですよ。

現場が再開したことも知ってるし、今度の人事のことも」

「あんまりそんな話は、聞きたくないな」

「そうですね。僕も聞いたところでなんの得にもならない。でも、いいんですか。こんな時間に出てきて。まだ五時ですよ。仕事でしよう」

「気にするな。すぐに戻る。ところで、おまえの情報網では、中田部さんの静岡転勤と白井さんの九州転勤が同じ時期に重なったことは、どう出てるんや？」

「占いじゃないですよ。僕の情報網は」

そうは言ったものの、黒井はどう応えようか迷っているようだった。

ただ、知らないとは言わなかった。

ベッドの横に、松葉杖が立て掛けてあった。

「ようやく、それで歩くのに慣れてきたところですよ。ちょっとお茶にでも行きますか。近くに静かでない喫茶店があるんです」

「ほんとかよ」

「冗談。病院の屋上に行きましょう。風があつて、いい気持ちですよ。よく行くんです。なんと、現場が案外すぐ近くに見えるんです」

「すまん。これからはちよくちよく見舞いに来る」

「まさか。おっちゃんの見舞いは時々がいいんです。さ、行きましよう」

屋上は確かに見晴らしがよかつた。

金剛山の裾野が広がっているのがよくわかる。

松並町の現場が、まだ高いところにある太陽の逆光になって、幾分青みがかつた墨色をしていた。

「さつきの話やけど」

「中田部さんや白井さんの転勤が、若槻さんの事件とどんな関係があるんです？」

「関係はないかもしれん。しかし、あると考える方が自然やないか？ 大阪支店にお鉢が回ってきたいきさつにも関係している、と考えるのが普通やろ」

黒井は黙っていた。

大矢はストレート勝負でいくことにした。

ここでの発言が行き過ぎであつても、たいしたことじゃない。

「俺が考えてることを言おうか」

黒井が大矢から目をそらして、景色を眺め始めた。バイパス道路は夕方の渋滞時間に差し掛かったようで、長い車の列が見えていた。

大矢もその車列を見ながら手すりにもたれた。

「ナチュレガーデンの工事を受注するとき……」

キックバックがあつたのかもしれないという話をした。

黒井は黙って聞いていた。

話の最後に、大矢は黒井の関心を引こうとした。

「おまえの事故も関係しているかもしれないぞ。あの事故以来、羽古崎さんは定例会議に出て来なくなったそうだ。なにかを恐れているようにな」

予想通りの反応があった。

「羽古崎課長が……。そうなんですか……」

「自分も狙われると思っっているのかもしれないな。そして若槻所長が殺された。これは偶然か？」

黒井が一呼吸置いて、意外にもあっさり話し出した。

「ご想像は凶星です」、と。

三都興産の秘書部に、匿名の電話があったのは、五月の末だったという。

電話の内容は、大和高田のマンション新築工事の受注にあたって、ハルシカ建設の加粉から中田部個人に金が流れたと思われるので調査されたい、というものだった。

男は、織田建設経由で金が渡ったことも示唆した。

社長から指示を受けた羽古崎は、中田部の周辺を探り、中田部の自宅が改装中であり、その工事を織田工務店の下請け業者である中桜建設が施工していることを知った。

三都興産の上層部は、直ちにハルシカ建設社長の益田に連絡をとった。

そして互いに協力して秘密裏に調査し、告発が万一事実であれば双方の関係者をきちんと処罰することを申し合わせた。

三都興産側の調査員は三木と羽古崎、ハルシカ建設側は本社総務部長の井川と黒井に決まった。

「僕がそのメンバーに指名されたのは、益田社長が三都興産との関

係を考えてのことです」

「ああ」

「つまり、最悪の事態を避けるために、社長は僕を選んだってことでしょう。三都興産へのパイプ役という意味も込めて」

「まあな」と、大矢はあいまいに相槌を打った。

「正直言って、面倒なことに巻き込まれてしまったな、と思いましたがよ」

適任じゃないか、と大矢は話の先を促した。

「なぜ僕が適任なんですか。ま、でも調査部隊といっても、たいしてなにもすることはなかったんです。益田社長が直接、加粉本部長と阿紀納部長を追及されましたから」

「へえ」

「実は僕が今話したことも、社長と井川部長のやり取りを横で聞いていただけのことです。僕がした調査らしいことといえば、契約書類や伝票類を調べたりしたことだけです」

「ふうん」

「勘違いをしないでくださいよ。僕は好き好んで、スパイ行為まがいのことをしたわけではないんです。社長からの特命でしたから、断りようがなかったんです」

「そんなことは誰も気にしていない。心配するな」

「はい。それで益田社長に追及された加粉本部長は、中田部本部長に便宜を図ったことをあつさり認めました。続いて中田部本部長の方も」

大矢の推理は、的を射ていたのだ。

そして黒井の態度を見て、この男に話すという冒険的行為が悪い結果を生みそうでないことにも安心した。

「所長はそのことを知っていたんか？」

「は？ 若槻さんが？ いえ、僕からは。その……、例の派閥のこ

ともあるし。そういうことに関わるのは本当にいやだったもんですから。それに、井川部長からは、誰にも洩らすなと堅く言われていましたし」

「所長に話さなかったことを責めているんじゃない。大切なことは、不当なことをしたやつがどう罰せられるかで、それを明らかにした功労者であるおまえをどう守るかや。ところが守られなかった。おまえは、危うく命を落とすところやった」

そう言いながら、改めて黒井の事故は偶然ではありえない、という思いが強くなってきた。

黒井も、大矢の刺激的な解説に驚く様子はない。

やはり自分でも、そう感じていたのかもしれない。

「僕が転落したとき、織田さんが後ろにいました」

「ん？ どういう意味や？」

わかりきったことを聞いてみた。

黒井は、織田なら足場板をはずしておく細工ができたと言っているのだ。

しかし黒井はさすがに、はっきりとは口にしない。

二人はしばらくの間、黙りこんだ。

「警察は、僕の件も再捜査する気にいるんでしょうか」

ぼつりと言う。

「さあ」

干された洗濯物が風にはためいている。

それを取り込みに来た女性スタッフが軽く会釈をした。

「いや、もちろんそうするやる。キックバックの件が警察の耳に入っていればな」

「……」

黒井は黙っている。

警察がその情報を掴んでいるのかどうかと、考えているのだ。

「話を戻そう。実際の金の流れはどうなってたんや？ まさか、封筒かなにかに入れて、現生を渡したんか？」

「さあ。それは知りません。しかし、織田工務店を通じて金が流れたことは確かです」

「中田部か加粉が、吐いたんか？」

「いえ。僕が井川部長から指示されたのは、織田工務店がらみの発注で不審な点がないかどうか調べる、ということでした。発注伝票や見積書のコピーをたくさん渡されて」

「なるほど」

「で、見つけました。裏の神社の植栽工事。知ってますか？」

「ああ、地元対策工事な」

「あれは織田工務店への発注です。工事量に比べて多額の発注金額になっていました。確か、千三百八十万円。あの植栽工事はそんなにかからないでしょう」

「うむ」

「せいぜい二、三百万もあれば十分です。ああいうのは操作しやすいですからね。工事量を水増ししていましたし、植木のスペックも違っていました。誰もわざわざ確認に行きませんから、普通ならばれることはありません。その差額、一千万円ほどが中田部本部長へ流れたんです」

「一千万……」

「実際にはいくらだったのか、僕は知りません。そうじゃないかと井川部長に報告するまでが、僕の仕事で」

大矢は腕を組んだ。

目の前が明るくなってきたように感じた。自分の推理はいい線を書いていたのだ。

「織田工務店と中桜建設か」

「つまり、織田工務店経由で、中田部郎の改修工事の金が出たという事です」

「キヤツシユは？」

「そこまでは知りません」

「要するに、社長は、加粉の身代わりに白井を弾き飛ばしたということやな。もしかすると、この件は社長も了解の上のことやったのかもしれないな」

「かもしれませんね」

「白井は、自分がとんでもない濡れ衣を着せられた、ということを知ってたんやろか」

「さあ」

転勤の挨拶をしたとき、白井は病氣のことを聞かれたくないという反応をした。誰でも、自分の病氣のことは他人に聞かれたくない。

しかしあの反応は、自分が身代わりだと知っていたからだとは考えられないか。

そうに違いない。

しかしそうだからといって、新しい事実が判明する突破口にはならないが。

「織田工務店の誰が仲介役になったんや？」

「仲介役？ それは聞いていません。現場に来ているのは織田部長だけですけど」

「こんなことがあっても、織田工務店は出入り禁止にはなっていない。いくら加粉や白井のお気に入り業者やとしても、これは変やな」

「ええ。でも、織田工務店というのは近隣の有力者の関係会社です。そういうことじゃないですか」

「その地元有力者が請負契約を仲介し、自らも何らかの受注をする。ふん、極めてありがちな話や」

大矢は、黒井の口が滑らかなうちにすべてのことを聞きだしておこうと、先を急いだ。

「匿名の男が誰だったのか。これは？」

「知りません。結局わからないままじゃないですか。僕は関わり合いになりたくない、そんな一心でしたから、突っ込んで聞いてないんですよ」

「情報通のおまえとしては、片手落ちやな」

大矢と黒井は互いににやりと笑った。

「ま、そうですね」

大矢は唸った。

と、新しい考えが閃いた。

若槻所長が……、まさか。

そう思ったとたん、若槻が殺されたことと、キックバック事件を結ぶ線が見えたように感じた。

若槻がもし、キックバックがあったことを知ったなら、彼はどうしただろうか……。

そして、若槻は殺された。

その理由は……。

もしキックバックを知ったことが原因で殺されたのなら。

黒井の転落事故もそれが原因なら……。

また狙われてもおかしくはない……。

背後でなにかが動くけはいを感じた。

思わず後ろを振り返った。誰もいない。ハトが手すりに止まっているだけだった。

夏の暑い日差しの中で、大矢は寒気を感じた。

気が付くと、背中に汗をかいていた。

黒井が大矢の動揺に無頓着に言った。

「匿名電話は、若槻さんだったのか……」

黒井が手すりを握っている手を開き、手の平の汗を確かめるように見つめた。

「可能性がないとは言えませんが、あのときはそんなことは考えてもみなかつたんですが、今にして思うと、可能性はあつたんですよ」

大矢は頷いた。

なにしろ若槻は地元の出身者なのだ。織田工務店と接点があつても、おかしくはない。

黒井もそのことに気がついたのだ。

「織田家というのは松並町の旧家だと聞いています。実は、うちの現場に来ている織田部長。あの人はその織田家の跡とりだそうです」

黒井はここまで言って、口をつぐんだ。

その先を口にするのははばかられるのだろう。

若槻を殺した容疑者、そして自分をマンション現場の八階から転落させた犯人を名指しするようなものだ。

大矢は黒井の無言を、そう理解した。

しかし、大矢の頭にはもう一人、違う人間の名前が浮かんでいた。ただ、大矢はその名を口にはしなかった。黒井の饒舌を中断させる必要はない。

「他に誰か、このことを知っているやつはいるか？」

「さあ……。いないんじゃないでしょうか。少なくとも僕は、大矢さん以外にこんな話をしたことはありません」

「ああ。絶対にするなよ。しかし契約時に、相当激しいやり取りがあつたそうや。神社の植栽工事も、その気になってみればおかしいと気がつく。なにしろ、その伝票を切つたやつがおるんやし」

「でも、そういうことを言い出すと、現場の連中はみんな怪しくな

つてしまいますよ。鈴木さんも根本さんも」  
「怪しいって、どの意味で？」

受け取る側の中田部はとにかく、加粉には共犯者がいたと考えるのが常識的だ。

仕事は加粉ひとりで流していけるものではないからだ。

仲介役も、ひとりではなかったかもしれない。

一方、キックバックを告発した者もいる。

そしてそれを秘密裏に処理したい者がいて、あるいは今以上の秘密が公にならないように黒井を殺そうとし、若槻を殺した者がいる。大矢の頭が熱くなってきた。

「裏金の存在に気がついたという意味で」

黒井は、思ったことをあっさり口にしていく。

「織田工務店への発注内容を見て、裏金の臭いに気がついたとしても、それだけでは中田部が横領をしたという真相にまでは行きつかない。匿名の電話は中田部という名前を出したんやろ？ 全貌を知っていたやつか、織田工務店以降の金の流れを知りうる立場のやつやな……」

再び沈黙が流れた。

黒井は手すりの上に両手をのせ、その上にあごをのせていた。

手すりに立て掛けた松葉杖に巻かれたガーゼが真新しかった。

「疲れたか？」

「いいえ。ちょっと言いにくいことなんですけど……」

「かまうことはない。言え」

「はい……。若槻さん自身の不正が絡んでいるのかもしれないな、と考えていたんです」

「ええっ！」

大矢は黒井に向き直った。

「どういうことだ！」

黒井が目をそらすように、ナチュレガーデンの現場を見た。

「いわゆる空伝票。飲み屋の」

「なに！」

大声になった。

黒井は現場に目を据えたまま、落ち着いていた。

「たいした額じゃないと思いますよ。それに、うん、やはり関係ないですね」

大矢の脳裏に、ラウンジ・セピアのママの顔が浮かんだ。

そして、ママと黒井の関係も。

「どういうことなんや」

「すみません。関係ないですね」

黒井はそれ以上、このことについて話そうとはしなかった。

### 36 いつがいい

夕方、生駒にはゼネコンとの打ち合わせが待っていた。藍原や織田工務店、中桜建設も参加していた。

工事が中断している間も、生駒や藍原の書く図面は進捗していた。打ち合わせは比較的スムーズに進んだ。進行役の大矢は、いつもなら冗談とも雑談ともつかない話を合間に挟んで、自分も含めて参加者をリラックスさせようという配慮をみせるが、後の予定が詰まっているのか、淡々と議事を進めていった。

若槻の死の衝撃を今さらながら感じ始めていた生駒にとって、仕事のことだけに没頭できる打ち合わせの進め方はありがたかった。

打ち合わせの後、生駒と藍原はロビーを通りかかった。事件の痕跡はすでに片付けられていて、なにも残されていない。

坂本と石上が床の穴を覗きこんでいた。

「先ほどはとも」と、藍原が声を掛けた。

「こちらこそ。それにしても一体全体、誰があんなことをしたんでしょうな。若槻さんのご家族も、さぞ悲しんでおられるでしょう」

坂本が神妙なことを言ったが、顔は自分には関係ないことだという表情だ。

藍原も一応のお悔やみの言葉を述べた。

「本当に。奥さんや子供さんはたまらない気持ちでしょう」

石上が暗い気分を吹っ切ろうとするような、明るい声をだした。

「藍原先生は、お子さんはいくつですか？」

「小学生が二人です」

「かわいいころでしょうなあ。生駒先生は？ お嬢ちゃん、元気一

杯で賢くて、かわいいですなあ」

「ええ」

少しつっけんどんな言い方になった。

石上は娘だと勘違いしているようだったが、訂正する気になれなかった。

生駒は、彼らのやり取りが、儲かりまっか、ぼちぼちでんな、みたいな紋きり調の挨拶のように聞こえて、愉快ではなかった。

若槻の死を悼む気持ちを、あっさりと言われたようにも感じたのだ。

それに、同年輩の人から子供の話を聞くのは苦手だ。

親しみを込めた罪のない話題ではある。親バカですがと言いなながら、実は息子自慢をするような男はフランクで愛嬌があるとも思う。しかし、生駒のように五十を過ぎてなお独身を通している者にとっては、特にありもしないその理由を詮索されているようで、できれば避けて通りたい話題なのだ。

それでは、と二人が立ち去った。

藍原は坂本達と話があると、後を追っていった。

入れ替わりに香坂が通りかかった。

「先生、すみませんでした。メールの返事を出さなくて」

生駒は、香坂にメールで図面の指示をしたついでに、若槻事件が進展したかどうかと聞いていた。

「なかなかああいいう話、メールではしにくくて」

「そうだね。で、どう？ 状況が全くわからなくて。さっきの打ち合わせでも、捜査状況の説明はなかったし」

香坂が、声のトーンを落としてささやいた。

「先生も、やはり気になります？」

探るような目で見つめてくる。

興味本位でないかどうかを測っているのかもしれない。

生駒は、黙って頷いた。

「すみません。鈴木さんが勝手なことを言いふらすな、とおっしや

っているものですから」

香坂が小さく肩を落とした。

「そうだろうね」

「でも、私もなにも知らないんです。大矢さんに聞いてみられたらどうですか？」

生駒は今朝、現場の新しい体制を聞いたときの、大矢の不機嫌そうな様子を思い出した。

しかし、大矢が自分と同じように、若槻の話題に慎重になっているからだと解釈しようとしていた。

先ほどの打ち合わせの進め方もそれを物語っているし、今でも大矢だけが若槻を現場所長と呼んでいることも知っていた。

「彼が第一発見者ですし、若槻さんを信奉していた人ですから」

香坂が軽く笑みを作って見せた。

「警察からなにか進捗を聞いているかもしれません。あつ、携帯で連絡した方がいいですよ。鈴木さんに知られると彼も困るでしょうから」

そうすると言って、監理事務所に戻ろうとする生駒を、香坂が引き止めた。

「もし、お会いになるのであれば、私も参加させていただきませんか。決して遊び心で言っているのじゃありません。会社のみんなの動きを見ていると、なんだかいても立ってもいられなくて」

生駒はその場で大矢に連絡を入れた。

すぐに大矢は事務所から出てきて、黙って生駒を手招きした。

三人はマンションの裏手に回り、建物の端に設けられた地下駐車場へ通じる斜路を降りていった。

地下駐車場は薄暗かった。

天井に多くの配管が張り巡らされているだけで、なにもない空間が続いている。コンクリートの太い柱が林立しているだけだ。誰もいなかった。

「ここだと、気兼ねなく話せます」

大矢がようやく口を開いた。

生駒は前方を透かして見た。

一箇所だけ外の光が入っているところがある。

ロビーの床に空けられた穴の下。

「若槻所長はあそこに倒れていました」

大矢と香坂は人に見られるのを避けるように、そのぼんやりとした光の中に入ろうとはせず、柱の陰にたたずんでいた。

生駒は穴の下まで行き、若槻が倒れていたという床を見つめた。

今朝、洗われたのだから。

わずかな水分が残っていた。

それ以外になにも発見はなかった。

上を見上げた。

気を引くものはなかった。

一階床スラブから突き出た数十本の鉄筋。そして四周に回った一階ロビー及び二階ラウンジの落下防止柵が見えた。

それ以外に見えているのは、二階と三階の床スラブの底だけ。

コンクリートばかりの灰色の世界。

大矢が戻って来いというジェスチャーをしていた。

上のロビーを、誰かが歩いてくるけはいがした。

柱の陰で、大矢が若槻を発見したときの様子を話し始めた。

地下駐車場は蒸し暑く、生駒は慣れないネクタイを緩めた。

「そうですか。あそこは血の海だったんじゃないですか？ 清掃す

るのが大変だったでしょう」

生駒は、ぼんやりと光の落ちている辺りを見ながら言った。

「いえ、それほどではありませんでした。所長の頭の下には小さな血だまりができていましたが、他はあちこちに飛び散っていただけで」

香坂はコンクリートの床を濡らしている水分が血だまりに見えるのか、両手で口と鼻を押さえ、眉を寄せていた。

生駒は、若槻が首に長いロープを巻きつけた姿で、無残に頭を割られ、血を飛び散らせて倒れていた様子を思い描こうとした。

しかし、周りの景観があまりに無機的すぎ、モノトーンな色調の中に置かれた鮮血の赤をイメージできないでいた。下衆なアドベンチャーゲームのプロローグのように、リアリティを持ってないでいた。

大矢が口を引き結び、ポケットの中に突っ込んだ手を動かしていた。

生駒は何か言わなければと思ったが、言葉が出てこなかった。

「生駒先生」

大矢の言葉に、熱がこもっていた。

「午前中は失礼しました。なぜ僕が今、詳しくお話したかということ、いうまでもなく犯人が早く捕まって欲しいからです」

大矢の目が、ぴたりと生駒を捉えていた。

「若槻所長と親しかった生駒先生なら、犯人逮捕に結びつく情報をお持ちかもしれないと思ったからです。事件からもうひと月も経っています。警察はパーティの参加者全員から事情聴取したそうですが、それ以降、目立った動きをしていません。手をこまねいているんじゃないかと思うんです」

事件が解決して欲しいと思う気持ちは同じだ。

ただ、期待されても困る、と生駒は思った。

こうして大矢の説明を聞いているのは、興味本位ではない。若槻を悼む気持ちも日増しに強くなっている。

しかし、自分になにができるというのだ。

たかだかふた月ほど前に三十年ぶりの再会をしただけの自分が、どれほどの役に立てるといふのだ。

大矢の思いの熱さに応えられないまま、単に首を突っ込んだだけという結果に終わるのは目に見えていではないか。

生駒はそう考え、大矢の呼びかけに応えられないでいた。

香坂と目が合った。

大矢にも勝る真剣なまなざし。

生駒は、香坂と大矢を順に見つめ返した。

ここでこうして大矢の話聞き、事件の現場を見に来たことに後悔はなかった。

自分にできることがあるのではないかという、かすかな気持ちもある。

ただ、そう考える根拠があるわけではない。

しいて言うなら、若槻と少年時代の一時期、この地で共有した時間があるという思いだけ。

若槻が殺されたことを聞いた後でも、わずかな悼みを感じただけだった自分に、徐々に変化が生じ始めていることはわかっていた。

特に、仮囲い一枚隔てた神社の裏で、正体不明の動物の石像に跨った幼かった自分と、若槻のモノクロ写真が、実家の古びたアルバムに貼ってあったことを思い出してからは。

「僕が若槻さんを殺した犯人に結びつく情報を持っているとは思えない。しかし、考えることはできる。それは大矢さんも同じ。むしろ、大矢さんこそできるんじゃないかな。いつも若槻さんのそばに

いたんだから」

大矢がきつぱりと言った。

声の中に思いつめた様子があった。

「はい。僕なりに考えていることはあります」

「えっ！ 誰なんですか？」

香坂が、地下に降りてきてから初めて口を開いた。

大矢はそれを無視した。

「さつき、上をご覧になったとき、なにが見えましたか？」

生駒は見えたとおりのものを言った。

「その手すりのことなんですが」

大矢が警察の現場検証の痕跡を説明した。

「もう、それらもすべて消してしまいましたが。今から見に行きましよう。位置はお教えできません」

三人は地下駐車場を出た。

「ここです」

幸い、二階にも人はいなかった。

大矢が話した。

白いマークとこびりついた血。

そしてゴミ箱が空になっていたこと。

生駒は説明を聞きながらも、ここでも反応のしようがなかった。

探偵の真似事をしていることに再び違和感を覚えた。

黒井の転落事故の後、柏原や優と推理ごっこをしていたときの後、ろめたさが甦ってきた。

俺は、なにを考えようとしているのだろう。

犯行の手口をか。

そんなことがわかって、どうなるというのか。

いわゆる犯人や、動機や、事件の全貌がわかるとでもいうのか。

すでに警察は犯行時の状況について、結論を出していることだろう。

俺は内装デザイナーとしてここで仕事をしている。こんなことをしているところを誰かに見られて、これからの仕事に支障があるのではないか。

そんなことが頭に浮かんで、生駒は逃げ出したい衝動に駆られた。

大矢に廊下の端に誘導され、ここにもマークがあったという説明を聞きながら、生駒は意識的に自分の弱気を押さえ込もうとした。

大矢は声を落とそうとはしていなかった。

先ほどのまでの気の使いようとは違って、もはや誰に聞かれようともかまわない、という声だった。

生駒は周りを見渡した。

そして歩き回った。

印と印を結ぶライン上に立ってみた。

穴を覗きこみ、ゴミ箱の中を確認し、しゃがみこんでマークのあったところを見つめ、天井についた血の染みの場所を見つめた。

大矢と香坂が、生駒の後ろを黙ってついてきた。

生駒はやがて顔を上げた。

大矢と香坂は、生駒がなにかを言うのを待っているようだった。

やがて香坂が提案してきた。

「先生、今度、ゆつくりお会いしませんか。ねえ、大矢さん。今日の話の続きをしたいんです。先生が今お考えになっていることも、お聞きしたいんです」

ふたりの間で、そんな話をすでにしていたのだろう。

大矢も躊躇なく頷いた。

生駒はにこりと笑った。

「いつがいいですか」

### 37 老人の饒舌

大矢はその夜、全員が退社した後、重要書類が収納された書棚を開けた。

川上から借りた書棚の鍵は、昼休みにコピーを作っていた。神社植栽工事の関連書類を見るためだ。

不当に高い織田工務店との契約書。

契約金額は税込み千三百八十万円。そして出金依頼書の控え。着手金として半金六百九十万円が既に支払われた記録。白井と鈴木の印が押されてあった。

変更契約書も探し出した。

請負額を当初の契約金額の半額にするための書類。

すでに六百九十万円が支払われているので、変更契約書を締結した時点で、契約行為はすべて完了していることになっていた。

大矢はそれらのコピーを取った。

そのころ、オルカでは。

生駒が柏原の作った一杯目のジントニツクを飲み終える前に、佐久間が入ってきた。

コンビニのレジの後ろで水色の帽子を被っているときと違って、オーソドックスなダークスーツに身を包み、少々派手めのネクタイを締めていた。

「こんにちは。待たせたかな？」

「いいえ。すぐにわかりましたか？」

「ああ。完璧な地図だったよ。すまなかつたね。急に会おうと言って。今日、大阪でフランチャイズ関係者の集まりがあったんでね」  
「スツールに腰掛けた佐久間は、迷うことなくサントリー山崎の口ツクを注文すると、早速だが、と切り出した。」

「今日、君に会いたいと思ったのは、単刀直入に言わせてもらおうと、若槻さんの事件のことだ」

生駒は面喰らったが、黙って頷いた。

「実は、工事現場の所長が若槻という人に代わったことは、本人からご挨拶をいただいたから知っていた。が、彼が地元の人だということは知らなかった。地元の人間は誰もだ。行武以外は。今はもうみんなが知っている。というより、彼が殺された話で持ちきりだ」

佐久間は地元でどんな噂が流れているかを語りだしたが、生駒にはあまり興味が湧かない話ばかりだった。

「若槻家は町会長に頭が上がらないはずだ。生駒さん、覚えてますか。いや、君の家が引越してからのことだったかな。寺の裏の入り組んだところに、小便長屋と呼ばれてたぼろい路地があつたでしょう。あそこが火事になった。その火事で住田の家の大黒柱、邦宏が死んだ。原因不明の失火だということになった」

生駒はとりあえず相槌を打った。

「しかし地元では、横の空地で若槻の息子と竹安の息子が火遊びしているのを見かけた人がいたんだ。それで、その火遊びが原因じゃないかという噂がたった。若槻の息子が年上だったし、竹安の息子はほら、ちょっと頭が弱かった。だもんだから、本当は若槻の息子が火事の犯人だと言う人がいたんだ。あくまで噂としてだがね。そんな噂を、町会長が一喝した。つまらないことを言うな、とね。若槻家を庇ったわけだ。そう、そのときの若槻の息子というのが、先日殺された人だ」

コンビニで別れ際に、一度ゆっくり会いましょうとは言ったものの、若槻が殺された今となっては聞きたい話ではない。

生駒は、自分よりもずっと年長で、父親の友人だった老人の話の腰を折るのは気がすすまなかったが、露骨に不愉快だという顔をし

ていたのだろう。

佐久間が諭すような口ぶりになった。

「君にとつては、おもしろい話題ではないようだね。でも、地元にずっと住み続けている人間はそういうこともずっと覚えていて、昔のしがらみに縛られ続けているものなんだよ」

「はあ」

「恨みがましいことを言うつもりじゃない。殺された若槻さんのことを、いまさらとやかく言うつもりでもない。君にも理解しておいて欲しいという、年寄りのおせっかいかもしれないね。だけど、聞いて欲しいんだ。正直言って、あのマンション。地元ではよく思われていないんだよ。だから、あの工事にまつわる地元の噂はどれも、いわば辛らつなものになってしまう」

生駒にも、その気持ちは理解できた。

マンションは東西に長く、神社の南側に、巨大な城壁のように建つ。

その圧迫感を耐え難いと思う人もいることだろう。

生駒は、自分がインテリアの設計で、建物そのものの設計者ではないことを、さらりと弁解した。

「経済活動だから仕方のないこと。それはわかっている」

佐久間は、これも町の噂だと、今度は織田家の批判を始めた。

三都興産に土地を売って得た多額の金を、全く地元のために使わないと言っただ。

「昔の町の名士というものは、自分の費用で橋を作ったり、道を作ったり、子供達に公園を整備したりしたものだ。もちろん祭にも多額の奉納金を出したりね。ほら、あの樋口水路に架かっていた織田橋というのがあっただろう。小学校へ行く道に架かっていた犬見橋より、ひとつ西の」

生駒は頷いた。

橋のたもとにジユズダマがたくさん生えていて、その実をタコ糸で繫いで腕輪を作ったことを覚えている。

「あれは織田の先代が、架け直したものだよ。それまでは危なっかしい木橋が架かっていたんだが、どんな車でも通れるようになって、コンクリートで先代が架け替えたんだ。橋を渡ったところに斉藤商店って、かしわ屋があつたのを覚えていないかな。裏に養鶏場があつて。あの橋はそれまで、いわばその店だけしか使わないようなものだったが、架け直されて新しい道が通るきっかけになった。そして、つぶれかかっていたかしわ屋は甦つた」

いきさつを知らない生駒は、ただ頷くだけだ。

「田村公園もそうだ。君もあそこで遊んだらうね。田村というのは町のはずれの古くからある家だが、その家の子が遊べるようになってあの公園を作つて、周りの人にも開放したのが始まりだ。今でも田村公園はあるよ。市が買い上げたけどね」

「はい」

「そうやって昔の金持ちというのは、自分の富を上手に地域に還元していた。だから織田家や田村家に恩義を感じている人が大勢いるわけだ。ところが今ではどうだ。言い方は悪いけど、地域を踏みつけにして自分の金儲けに明け暮れている。自分さえ豊かになればそれでいいという考えだ。元々、織田家は食品工場をしていて、町のみんながそこで働いて大きくしたようなものだよ。先代はそれをよくわかつていたし、ことあるごとにそう話していた。それが今はどうか、ということだな。町の土地をあちこち買い漁さつて、駐車場経営やアパート経営なんかをやっているかと思えば、それらをまとめて三都興産などの業者に土地をどんと売つて、莫大な金を手に入れている」

佐久間はよほど腹に据えかねているのか、勢いよく飲み干したグラスを乱暴にカウンターに置いた。

「つまむものでも出しませんか」

佐久間はすでにグラスを二杯空けていたが、口に入れたのは小さな皿に載せられたわずかなピーナツだけだった。自分が興奮気味だったことに気がついたのか、神妙な声で、すみません、もう一度これを、と小さな皿を差し出した。

「実は、わしは今、町内会の副会長をしている。今度のマンション建設については、こういつちやなんだが、基本的に反対の立場だった。地元にとってメリットが少ないから。近隣の商店主の中には、なにがしか潤うのではないかという期待もあることは事実だ。しかし、失うものも大きいわけだ。詳しく説明するまでもないことだろうけど、わしは、地元の一体感というか、昔ながらの松並町らしさというか、そういうものが失われていくことが残念で仕方がないんだ。すでにそんなものはなくなってしまっているし、いつまでも郷愁に囚われていてはだめだという人もいる。でも、昔から住んでいるものとしては、それがもうありもしないものだとしても、守りたい気持ちがあるわけだ」

佐久間が、出されたピーナツをポチリと口に入れた。

「それに、今度のマンションはあの規模だ。まるで監獄の壁。町があのマンションの裏側になってしまふ。わしとしては、最後まで反対の立場を貫きたかった。ただ、マンション建設を中止に追い込むなどというようなことはできっこない。それはわかっていた。なにせ町内会の会長が賛成の立場だから。反対というのは、自分の気持ちの問題だった。そういう人が大勢いたんだ」

生駒は佐久間の長い演説にうんざりしていた。

会うまでは、昔の良き時代の思い出話や、死んだ父親の思い出話などをするのかと思っていた。

しかし、そんな思い出話が、町を出た者が勝手に持ち続けている感傷的な郷愁であって、そこに住み続けている者にとっては、乗り越えるべきもつと切実な現実があるのだという、当たり前前のことを思い知らされていた。

「ところで生駒さん、行武とはもう話をしたかな？」

「はい」

「あいつはあの事件のあったパーティーの仕事を請け負っていたんだろ。なんとも皮肉なもんだな。実はあいつもマンション建設には反対だった。むしろ、最も強く反対したメンバーの一人だった」

生駒は黙って頷いた。

行武と飲んだ夜、そんな話は聞かなかった。

そんな話題を避けていたのかもしれないと思った。

「それがどうだ。工事が始まってからは、いいお得意さんができたと喜んでいた。で、結果は？ 自分が段取りしたパーティーで人殺しだ。しかも殺されたのは元はといえば町の人間。そして、いわば、自分の幼馴染」

佐久間が生駒に顔を向けた。

ちらりと見返すと、佐久間は手に持ったグラスに視線を戻した。

「あいつは近所でもいろいろ言われて、かなりストレスになっているようだ。もちろん、若槻さんが殺されたといっても、あいつにはなんの落ち度もないだろう。だが、ことあの工事について良く言う人はいないわけだ。その現場で金を儲けていた行武に、冷たいことを言う人もいるわけだ。言いがかりだけだね」

佐久間はずっと手にしたままだったグラスをカウンターに置き、初めて店内を見回した。

「行武は、かなり参っているのかもしれない。家に引きこもってい

るのか、最近は弁当を配達する姿を見かけなくなった」

「そうなんですか」

生駒も、あのパーティーの夜以降、行武とは会っていない。

現場が止まっていたし、行武食堂は現場の出入り業者からはずされている。

聞き疲れていた生駒は、それを口にした。

「ほう。それは知らなかった。いつから？」

「あのパーティーの直前からです」

「ふーむ。それはその……、例の事件があったから、ということではないんだね？」

佐久間が少し不安そうな声を出した。

「関係ないですよ。ちよつと業者を変えてみようという軽い気持ちじゃないですか。毎日、同じ業者の弁当だとどうしても飽きるし」

「そう。それならよかったです」

ホツとしたように言うと、また語り始めた。

「行武は、新しい現場所長が自分の幼馴染だということを知っていた。事件の後、わしにそう言った。あいつはそのことを隠していたんだ。若槻さんに口止めされたからだ、と言ってはいたが」

行武批判が始まりそうだったので、生駒は行武に代わって弁解しておこうという気になった。

「若槻さんが行武さんにそう言った、というのにはわかる気がしますね。若槻さんは地元の人達に、自分の素性を明かしたくなかったんじゃないでしょうか。ああいう大きな工事の場合、近隣の方とはうまくやっていかなくてはならない一方で、馴れ合いというのも困るんです。どこでも地元の業者から、工事やさまざまな物品の納入を発注してくれという声がたくさんあって。あの現場でも、そういう申し入れが多くて困っていたんじゃないでしょうか」

生駒は織田工務店を意識しながら、思いつきのでまかせを言った。

「そんなときに、現場所長が地元出身者だということが広まれば、断りきれなくなるということもあるでしょう。いろいろ、昔ながらの力関係なんかもあるでしょうし」

佐久間がグラスの縁をツーツと撫でた。

「ま、そういうこともあるでしょうな」

濡れた指先をお絞りで拭い、生駒に向き直った。

「ところで、若槻、織田、行武、そして生駒さん。皆さんでどんな話をされていたんですか？」

唐突な聞き方だった。

しかし棘のある口調ではなかった。

むしろ、微妙な不安感がにじみ出ているように聞こえた。

「四人で集まって話をしたことはありません」

「それぞれでは？」

「若槻さんとは仕事のこと以外は立ち話程度ですし、織田さんとはそういうことを話したこともありませぬ。行武さんとは一度食事をしましたが、まあ、いろいろと昔話をしただけで」

生駒は、行武とした思い出話を二つほど紹介してみせた。

「そうだったねえ。確かに亀井の風呂屋の裏には、燃料用のおがくずがいつも山積みになっていたなあ」

拍子抜けしたように佐久間は肩を落としたが、ポツリと出た次の言葉に、生駒は耳を疑った。

「行武はあの夜、どんな様子だった？」

### 38 月極の大型セダン

佐久間はなにを知りたいというのだろうか。

なにかを期待しているのだろうか。

生駒は少し緊張して、あえて聞き返した。

「あの夜？」

グラスを磨いている柏原の手元を見やりながら、佐久間は小さな声で付け加えた。

「パーティの夜」

「さあ」

織田の悪口を言いつのる行武の声を、まざまざと思い出した。

しかし、それを話す気はなかった。佐久間の織田家批判をエスカレートさせることはない。

「どんな様子といっても……。パーティの料理や飲み物がうまく捌けているので、満足げでしたが」

この返答に、佐久間はやはり不満だったようだ。  
聞き直してきた。

「あいつは会場に最後までいたんだろう？ 後片付けやなんかがあったと思うんだ。当然、引き上げるときには現場所長にお礼のご挨拶をしようと思ったはずだし」

「はあ」

「もしかすると、最後に若槻さんに会ったのは、行武かもしれないなど……。だからどうっていうことはないんだが……。少し気になつてね。警察がどう捜査をしているのか知らないが、生駒さんならそういったことが耳に入っているんじゃないかと思つてね」

「行武さんが、なにかを知っていると思つてられるんですか？」

まさか犯人だと思つているんですか、と声に出かかったが、かる

うじてその言葉は呑みこんだ。

「彼が犯人だとは言つてないよ。勘違いしないで欲しい」

佐久間が自分からそう応えた。

生駒は驚いた。

それなら、なんだというのだ。詰問調になった。

「なにを言いたいんです？」

佐久間は少し体を引き、言い訳を口にした。

「いや、特に意味はないんだ。犯人がまだ捕まっていないようなので、少し気になってるだけ。というより、あいつがこの事件に、なにも関係していないということであればいいんだ」

町内会の副会長として、ことなく任期を終えたいと言っているようにも聞こえた。

生駒は急に疲れを感じた。

これ以上、佐久間と話すことはないように思った。

柏原が生駒の気分を察して、そろそろ閉店だと言った。

「生駒さん、今日は本当につまらない話ばかり聞かせてしまつて、すまなかつた。次回はもっと楽しい会にしよう。一度、席を設けるよ。若槻さんが殺されたことで、いろいろ考えすぎてしまつて。年寄りは一考え始めると、なかなかその思いが頭から抜けなくてね。申し訳ない」

佐久間はそう詫びて帰つていった。

「今晚のおまえは散々やな」

柏原が、飲み直していけ、と新しいジントニックを作り始めた。

「おごりだ」

「サンキユ。やれやれだ」

「人が殺されたんだから、楽しい夜を過ごそうというのが、虫が良すぎるんやな」

「そりゃそうだ。そんな都合のいいことは思っていない。ただ、なんともつまらない。死んだ人を追悼して飲んでるわけじゃないんだから。もっと別の話題がないかな」

「そりゃ、無理。誰もおまえみたいに、冷血やないからな」

「冷血じゃない。飲みながらああいうことを言い合うのが、性に合わない」

「そうか？　じゃ、若槻殺しの犯人探しは警察に任せておいて、えんやな？」

「当たり前だ。彼らの仕事だろ」

そうは言ったものの、生駒は心にうずくものがあることに気づいていた。

大矢が案内してくれた犯行現場の様子が脳裏に浮かぶ。

見たわけではないが、チヨークでマーキングされた現場検証の痕跡が、想像力をかきたてていた。

柏原が追い討ちをかけてきた。

「警察は若槻の出身地は調べていたし、社内に敵が多かったことも掴んでいるやろ。加粉とかいったよな。黒井の転落事故の件はどうや？　これも一応は関連付けて考えてるやろ」

柏原が、いつもの饒舌モードに切り替わっている。

「現場の規律の乱れもある」

「サラミまで滑らせてきた。」

「これもおごりか？」

それには応えず、柏原は立て続けに言葉を発している。

「生駒宛の封筒の中身は？　あの地図の印は何を示している？　情報はいろいろと揃ってきてるやないか」

「はあ」

「警察はそれなりに捜査を進めているやろ。が、若槻がおまえに

言った、見て欲しいものがあるという言葉の意味。これはどうや？  
警察に教えたか？」

「いいや」

「そうやる。どうせ、おまえのことや」

柏原がサラミを摘まんで、ビールを口にした。

「高飛車に來られて、だんまりを決め込んだんやろな。事件には関係ないとかなんとか、自分勝手な理由をつけて」

「ふん。よくわかるな」

「当たり前や。何年来の付き合いや。それに職業柄やな」

柏原がこういうときに職業柄と言うのは口癖だ。

元は弁護士、今はバーのマスターという、人の心を掴んだり把握したり動かしたりすることに長けた者にふさわしい職業だ、と言うのだ。

「警察に協力する気がないなら、自分でも事件を解決する気にならんとあかん」

「ふう！」

生駒は大きく息を吐き出した。

自分がすでにそういう気持ちになりかかっていることは実感していた。

今までと同じように、昼はあの現場で仕事をして夜はオルカで飲んでいても、煮え切らない思いが残ることも想像できた。

しかも、大矢と香坂とここで会うことを約束している。

話題はもちろん、若槻事件の真相に近づくこと。

香坂の思いつめたような目。

大矢の真剣な口ぶり。

彼らを欺き続けることはできなかった。それこそ偽善だ。

生駒は、自分の煮え切らない気持ちがあもどかしかった。

だからこそ柏原に、自分が知っていることをすべて話していた。そうすることによって、自分を追い込もうとしているともいえた。「もつ少し、事件解決に繋がるきっかけみたいなものがあればなあ」と、生駒はつぶやいた。

若槻の葬儀は、奈良市内にある大きな寺院で行われた。

生駒が式場に着くと、大勢の黒い集団が暑さを避けて、あちこちの木陰に群れていた。

ゼネコンの社員を筆頭に、参集した大勢の人。

生駒は受付に名刺を出し、藍原を見つけてその集団の中に入った。いった。

きよるきよると知った顔を探すようなことはしない。藍原と鈴木に簡単な会釈で挨拶を済ませると、祭壇に向かって立った。

そこからは若槻の遺影を拝むことはできなかった。

時間がたつにつれて、足元の砂利の感触が靴底を通して伝わってきた。

マイクを通した僧侶の読経を聞きながら、生駒は切れ切れの思い出の中に意識を浮遊させていた。

若槻なりにあの現場に思い入れはあっただろう。

故郷だから、ということをあえて意識はしなくても、力が入っていたはずだ。

日常の言動を見ていると、それは感じる事ができた。建友会の会報への寄稿を読んでもわかる。

しかし若槻は、その現場で殺された。

生駒は心の中に生まれた熱いものをもてあましていた。

「こんにちは」

いつのまにか、行武が横に立っていた。

「ご苦労さまです」

一般参列者の焼香が始まり、人並みが動いた。

生駒はようやく周りに立っている人に関心を向けた。

羽古崎がいた。大矢がいた。香坂や佐野川もいた。少し離れたところには、織田や坂本や石上の姿も見えた。パーティのときに顔を見かけた下請け業者の幹部連中もいた。

誰もが黙ったまま、神妙な顔をして暑さをこらえていた。

焼香を終えると、後に続いていた行武が声を掛けてきた。

「あの夜、俺がまだ現場にいてる間に若槻さんが殺された。なんとも言えない気持ちだ」

「ああ」

「いまから、どうする？ なにか予定がある？」

生駒は葬儀が終わってから冷たいものでも飲みに行かないかと誘った。行武がそれもいいな、と言ってため息をついた。

「顔色がよくないね」

「ああ。地元民はこういうとき、大変や」

「噂話の矢面に立たされて？」

「ん？ まあ、そういうこと」

行武は疲れているようだった。

寺院の近くのファミリールレストランに入って開口一番、行武が、最近はや当の配達をアルバイトに任せることにした、と照れ笑いをした。

「お客さんに顔を合わせるのが客商売の基本やと、かねがね言ってたんやけどね。さすがにそもいかなくなって」

「商売繁盛で、いいじゃないか」

「いやいや。効率が悪いんで、さっぱり儲からん」

そう言っ行って行武は、お絞りで顔を拭き始めた。

額から口元へとまんべんなく拭ってから、首筋、腕、最後は手の平へ。

生駒は、行武がお絞りをしきりに動かすのを見ながら、行武食堂が納品業者からはずされたことを考えた。

行武食堂のサービス向上を促すため、一旦他の業者にワンポイントで変更ということかもしれないが、元々、地元業者だからということ、義理で注文されていただけなのかもしれないのだ。

現場の実権が鈴木に移った今となつては、地元への義理は果たしたと考えるもおおかしくはない。

行武食堂が返り咲くことは、むつかしいかもしれない。

生駒は、鈴木にどんな営業活動をしているのかと聞きかけたが、行武の疲れたような顔を見て思いとどまった。

お絞りをテーブルに放り出した行武が、フウツと息を吐いて、水のグラスに手を伸ばした。

むつかしい顔をしていた。

「地元では織田の話で、もちきりや」

いやな予感の中した。

また織田の話だ。

思わず脱力してしまったが、行武の話は違った。

「ついに逮捕かってね」

「えっ、逮捕？」

思わず大声をあげた。

アイスコーヒーを持ってきたウェイトレスが、何事かとこちらを見た。

行武があわてて解説を付け加えた。

「あ、いや、警察が織田のことを調べてるっていうもんやから」

生駒は思わず息を吐き出した。

「事情聴取？」

「うん、それ」

そんなことなら驚かない。

自分も経験済みだし、行武自身もそうだろう。  
パーティ会場にいたわけだから。

「俺もあれこれ聞かれた。話すことなんかにもなかったけどな。  
でも、織田が事情聴取を受けたのは、そんなことやない。つい昨日  
のことや」

「ん？」

「織田の車を、警察が持つていった」

新しい情報だった。それもかなり重要そうな。

生駒は、前のめりになって行武に話の続きを促した。

「どういうこと？」

「さあ。なぜ警察が織田の車に関心を持ったのかは知らん  
情報はあいまいなものらしい。」

「もちろん、若槻さんの事件に関してのことやろ？」

「そりゃそうやろ」

「車って？」

「織田の屋敷の裏にある月極駐車場に、いつも停めてある高級車。  
車に詳しくないんで車種は知らんけど、トヨタの大型セダン」

「そんな車を、月極駐車場に？」

「そう。あいつ、何台も持つてるからな。外国の超のつく高級車は  
自宅のカーポートに入れて、通勤用の車なんかは、家が経営してい  
る月極駐車場に、自分だけ屋根をつけて置いてるんや」

「ふーん。で、もちきりの話っていろいろは？」

「こうなってくると、いろいろと悪口を言う人が出てくる」

「織田さん個人のこと？ 織田家のこと？」

「両方。元々は織田家への不満やったものが、最近は孝個人への攻

撃になつている」

「歓迎している？」

「逮捕を？ いや、事情聴取か。ま、どっちでもええ。前にも言つたやろ。あいつの放蕩ぶり。君も知つてるとおり、織田家には恩がある人が多い。多くの土地やアパートを所有しているし、かつては織田家の奉公人であり、いまだに織田家の賃借人である人も多い。だから表立つては悪口なんか言わないし、言えない。しかし、跡取りの孝にはつくづく嫌気がさしている。そういう人が多い」

行武は織田家の内情について、話し始めた。

佐久間の話をなぞるような部分もあったが、行武の話は織田家のそれぞれの人物にスポットをあてていたし、行武が生駒と同年ということもあって、話に幾分リアリティがあった。

織田家の長男である孝には、ニューヨークで事業を成功させた一人娘と、その娘と一緒に暮らす妻がいる。

いわゆる別居状態ではあるが、不仲ということではない。

年に何度も互いに行き来しているし、円満で幸せな成功一族のように見える、ということだ。

「孝は、町では嫌われているさ。子供の頃から乱暴者やったし、今で言うついじめっ子やった。今は金にものを言わせて放蕩三昧。よくあれで、あのできた嫁さんがついてきたもんや」

生駒は行武のひとり語りにも、ふうん、と相槌を打った。

佐久間によれば、行武はマンション建設反対の急先鋒だったが、結局はそのおかげで儲けていると陰口を叩かれている。

生駒は、零細企業のこの男がそんな筋違いの悪口を言われるほど、織田家とあのマンションは恨まれているのだということを知ったし、行武を気の毒にも思った。

こうして織田孝の悪口を並べながら、行武が、マンション計画には反対だったのだ、織田家とは何のしがらみも、まして織田家の金儲けの片棒を担いだわけではないのだ、と弁解して回っているのかもしれないと思った。

あいつの悪口を言うのはこのくらいにしよう、と行武が、次は次男の博と静江のことを話し始めた。

織田家の次男の博は、高校卒業時に養子に出された。姉の静江は東京の商社勤めのサラリーマンと結婚した。

博と静江は、孝と違っておとなしくていわゆる良い子で、やさしい面もあった。近所の人達からもかわいがられていた。

住田の未亡人が織田家へ住み込みで働くことになったのも、博が父親に頼んだからだということは、誰もが知っていることだという。

話を聞きながら生駒は思った。

行武は先日の続きのように、同窓会的な話題として、知人の消息を話してくれているのだろう。

とはいえ、生駒にはどうでもいい話だった。

博や静江といっても、三人兄弟だったというおぼろな記憶があるだけで、懐かしさなど全くなかった。

行武の話は脱線し、当時は多かった養子制度について論じていた。生駒は生あくびが出そうになった。

疲れていた。

仕事が忙しいからということではない。

むしろ仕事は手に付かない。

若槻の事件以来、すっかり生活のペースが狂ってしまった。

考えることが多すぎた。

考えるというより、悩んでいるだけということかもしれないが、ふとした拍子に若槻が殺された現場の情景を思い描いてしまうし、現場に残されたマークの意味などを検証しなおしてしまうのだった。

ふと、大矢や香坂と会うのは明後日だということ考えた。

そして、香坂からのメールがめっきり減ったことを思った。

事件までは二日と空けずに来ていたというのに、あれからは一度来たきり。

メールを書く気分にはなれないだろう。

そうは思うものの、やはり物足りなさはあった。

さつき告別式で見かけたときも、一言も交わさなかった。目を合

わすことさえしなかった。

生駒は急に寂しさを感じた。

香坂のどちらかといえば低めの声。

会う約束をしたとき以来、耳にしていない。

仕事のことが日常的なおしゃべり程度のことしか話したことはないが、その声が好きになっていた。

そして笑うときの声も。

もっと言えば、話をする事自体が。

一緒にいることが。

見つめ合っただの声を聞いていたい。

そんな思いが、もしや自分は、というとんでもない考えに繋がってしまう気がして、生駒はあわてて行武に注意を戻した。

博や静江が、今どうしているのか知らない、と締めくくって、話が終わったところだった。

生駒はなにくわぬ顔で聞いた。

「それにしても、織田さんがなぜ疑われているんだろっ?」

そうは言ったものの、誰にでも見当はつく。

織田は黒井のすぐ後ろを歩いていたのだ。

「黒井さんの転落事故についても、警察は関心を持っているんだろっか?」

生駒は言ってから、行武は黒井の事故のことを知っているのだからかと思っただ。

行武は疲れたようにため息をついて、「そうやな」と、氷だけになったアイスコーヒーストロウを音をたてて吸った。

「なぜ孝が疑われているのか。地元では誰もはっきりしたことを言

うやつはいない。あんなことを言い合いながら、昔話だけが生きがいの年寄りみたいなもんで、そこからはなにも新しいことは出てこない」

やれやれというように、氷をかき混ぜ、ガラガラと音をたてた。生駒は思いついたことを口にした。

「もしかして、若槻さんと織田さんの間には、ずっとなんらかの關係が続いていたんだと思う？」

「さあ。それはどうやら」と、気のない返事だ。

ふと生駒は、大切なことを思い出した。

「そういや、若槻さんに書類を送った？ 昔の地図なんだけど」

「いや。なにそれ？」

行武が怪訝な顔をして、見返してきた。

「そう、それならいいんや」

それからの生駒と行武は、唸っているだけだった。

店を出るとき、携帯が鳴った。鈴木からだった。

「今日のような日にお誘いするのはどうかとも思うのですが、藍原さんが、今日が都合がいいとおっしゃるので。いかがなものでしょうか。今日の夜、阿倍野辺りでお食事でも。現場においていただいってから、まだ一度もちゃんとお礼をさせていただいたことがありますし、ぜひ一緒にできればと思っっているのですが」

生駒は誘いを受けることにした。

二次会はセピアだった。

鈴木は大阪支店工事部の巣であるラウンジに、生駒と藍原を案内した。

大阪の店を知らない鈴木に代わって、同席した田所と川上が店の選定に主導権を握ったというところだろう。

店内の調度は品のよいアンティークでまとめられ、居心地のよさそうなやさしい光に包まれている。入るなり、この店が接待にも使われる少々高級な店であることがわかった。

入り口近くのバーカウンターでは、棚に並んだ多くのボトルを背に、年配のバーテンダーが酒を注いでいたし、中央に置かれたグラウンドピアノを髭もじゃらの男がやさしい仕草で弾いていた。

ピアノを囲むようにゆったりと置かれたソファは、真っ白な皺のないレザー貼りで、適度な反発感が心地よかった。

ユウが話してくれていたママは、想像以上の美人だった。

「今日、お見かけしましたよ」

と、田所と川上に笑みを送った。

「あ、葬式で」

「はい」

必然的に現場の話題になった。

社交辞令的な挨拶は、先ほどの割烹料理屋で済んでいるので、ざつくばらんな雰囲気である。

「インテリアだけ、という仕事も、これまでされているのですか」

鈴木が話を振ってきた。

「ここでもホスト役に徹している。」

「いえ。今回が初めてです」

「以前設計された三都興産さんの物件は、なかなかご評判がよろしかったそうですね」

「ありがとうございます。うまく当たったところですよ」

「ご謙遜を。羽古崎課長からお聞きしていますよ。生駒さんに押し切られた格好で決めたインテリアが、結果は大評判だった、生駒さんを信頼して本当によかったと」

藍原は何度かここに来ているのだろう。打ち解けた様子でママやホステスと話していた。

聞きようによっては藍原の癪に触る話だが、意に介していないようだ。その向こうでは、田所と川上が男同士で盛り上がっていた。

「生駒さん、囲碁はされませんか？」

唐突に鈴木が聞いてきた。

「囲碁ですか。無粋なものですから」

「それは残念です。最近はずっと相手がいなくなりましてね。以前は現場でも、昼休みになんかよくやっていたものです。おもしろいと思うんですけどねえ。ルールもご存じない？」

「いえ、少しは。子供の頃、父親に教えられました」

「あれは戦略思考のゲームでしょう。自分の思いを実現し、相手の思いを阻止するべく盤面での戦いに臨む。互いに思考の限りを尽くして、最善手を打つ」

鈴木は熱弁だった。

「囲碁、将棋はそういうゲームですね」

「将棋とよく比べられますが、私は囲碁の方が好きです。戦略的な部分が、より深いという気がします。単に盤面が大きいということだけではなく、どこにでも打てるという自由度というのかなあ。ひとつひとつの石には将棋のような違いはありませんが、盤面に打たれた瞬間、その石の役割が生まれるのです。しかも、強烈な意志の元で打たれた石ほど」

藍原が急に話に加わってきた。

「碁は芸術だ！」

鈴木が言った。

「おつ、藍原さんはされるんですか。今度、いかがですか？ やりませんか」

「いいですね。ただ残念ながら、へぼでして。新聞の紙上認定で五

級です。鈴木さんはお強いんでしょうね」

「いえいえ、まだ二段くらいでうろうろしています。最近はやってませんから、実際はたぶん一級くらいのレベルでしょうか。よろしくお願いします」

「こちらこそ。碁は芸術。つまり、自分の思い、夢と言ってもいいかな。それを実現するんですよ。結果として、それは地としての勝ち負けになるんですが、そのストーリー、戦いの形、あるいは大げさに言えば世界構築のステップがおもしろいんです。生駒さん、夢ですよ。夢の実現！」

酒が入って、いつものように藍原は熱弁モードに突入している。

囲碁の楽しさをわからせようと解説しながら、実は二人で盛り上がっているのだ。戦略的思考、夢の実現というフレーズに意気投合して、接近戦がどうだの、空中戦がどうのこうのと言いつつ合っている。

「生駒さん、捨て石というのはご存知ですか？」  
知っていた。

藍原が大きく頷いた。

「さすが生駒さん。ツボはきちんと押さえられますね」

捨て石とは、と鈴木が持論を打ち上げる。

「一言でいえば不要になった石。しかし、自分の役目を果たし終えたという意味で、不要だということです。盤面に打ち下ろしたときに、その石に大きな役目を負わせたわけですが、それを徹底的に働かせることができれば、もうその石はお役ご免だということです。最初から捨てるためだけの石ではない。ちゃんとした役割があるのです。しかし、役目を終えた後は、もうその石にこだわってはいけません。捨てること、つまり取られるということですが、取られるところまでいって、その石の役目は終わるわけです。もっと言えば、相手に取らせるところまでが、その石の役目だということです」

鈴木の熱弁が続いた。

藍原も負けじと口を出す。

「それが、なかなか捨てられないんですよ。ついつい捨て石を助けてしまう。で、結局にっちもさっちもいなくなってしまう。鈴木さんのように二段ともなれば、そのあたりは華麗なものでしょう」「とんでもない。まだまだ見極めができません。会社の仕事と一緒にですよ」

ママはとつくに席をはずしている。

残されたホステスは話題についていけないのか、笑顔は絶やさないものの、黙りこんでいる。

ホステスは、昼間に見ればギョツとするようなピンク色の髪で、それもめっちゃめっちゃに乱れたようなセットがあててある。

こういう子が黙って座っているというのは珍しい。たいていは、無理やり自分の話をして、それが接客だと勘違いしている子が多いのだが。

そんな観察をしながら、生駒は囲碁談義が収まるのを待った。

ドアが開いて、ママが客を出迎えに立ち上がった。

客の視線が必然的に、入り口へ向く。

生駒は、息が止まるかと思うくらいに驚いた。

「まあ、早いわね」

「たまたま近くにいたから」

店に入ってきたのは、優だった。

ニツと目で笑いかけてから、ひそひそとママと話している。

40 ね、おとうさん！

優の姿を見つめっていると、唐突に川上が話に入ってきた。

「会社の組織でも、その捨て石というのはあるんでしょっか？」

生駒の意識は半分は鈴木達の話に引き戻されたが、半分は優に釘付けた。

優の姿は、ママとの密談が終ると、控え室に消えた。

鈴木と田所と同じ年代のはずだが、川上は丁寧なもの言いだ。鈴木を所長代行としてたてているのだろう。

しかし若干ではあるが、鈴木の話の揚げ足をとったようなニュアンスもあった。

「ある」

鈴木はあっさりと応えたが、これ以上追求されるのはいやなのだろう。話題を変えようとした。

「娘がダイビングに凝ってましてね」

しかし、川上が追い討ちを掛ける。

「大阪と奈良の工事が合体する、という噂は本当でしょうか？」

鈴木は明らかにムツとして、

「そういう話を、ここでするのはよくないな。藍原さんや生駒さんもおられるし、第一、飲みながらする話じゃない」

と、制するが、川上は、

「でも、気になるよな」と、田所に同意を求めた。

「そんなくだらない話がしたいのなら、よそでやれ！」

鈴木が切り捨てた。

落ち着いた口調だったが、有無を言わさない威厳のこもった声だった。

川上が縮こまるのを睨みつけてから、藍原と生駒にぺこりと頭を

下げた。

「すみません。内輪話をお聞かせしてしまつて」

すつと優がやってきて、隣りに座つた。

肩も露なキャミソールに着替えている。

胸元にラメ入りで、いかにも、という装いだ。

「ユウです。よろしくお願いします!」

などと、まるで店の子みたいに。

「はじめまして」と、ウインクまでしてくれる。

知り合いだつて、ばれないようにしてね、というわけだ。

ママが呼んだのだろつが、なんとも、落ち着かなかつた。

入れ替わりにピンク髪は、軽く会釈をして他の席に移つていった。

「お、そうそう。この近くに旨いたこ焼き屋があるそうじゃないか。出前を頼んでみよう。ユウちゃん、知ってる?」

「はい! 何人前頼みましょうか」

「たくさん入つてる?」

「ま、三人前でいいでしょうね」

「じゃ、頼む。君が食べる分も入れたか?」

「もちろんです!」

優は大げさに笑い、半分は私がいただくのかなつ、と熱々のたこ焼きを爪楊枝で口に入れるパフォーマンスまでしてみせた。

おいおい、どういうつもりなんだ、と聞きたいのは山々だが、知らない顔をしているのが無難なのは、いうまでもない。

ここで場の主役になつても、いいことは何も無い。

「猫舌なの?」

生駒は合いの手を入れたが、言つてしまつてから、しまった、と思つた。それじゃ、知り合いの会話だ。

「あれ? 私、猫舌じゃないですよ。誰かとまちがつてるんじゃないんですか?」

と、優は受け流し、電話を架けに席を立った。

猫舌の人間とそうでない人間、どちらが不幸かと藍原が論じ始めた。どうでもいい話だが、結構それが長続きた。

たこ焼きが到着して、また猫舌談義が蒸し返され、最後には自分の舌を見せ合ってふざけあい、やがてそのまま散会となった。

生駒は、無理してはしゃいだとき特有の疲れを感じた。眠れなくなりそうな、自己嫌悪の入り混じった高揚感。もちろん飲みすぎだった。

しかし、最もストレスを感じさせたのは、そんなバカ騒ぎのせいではなく、鈴木らの口から黒井や若槻の事件に結びつく情報が得られなかったことでもない。

もちろん、意味不明な優の乱入のせいでもない。

現場の人間模様が決して一枚岩ではなく、どこかに脆弱な部分があるように感じたからだだった。

それでも、作り笑いをしながら鈴木を目を盗み見していた田所や川上。深刻ぶった生き方が嫌いなのか、根っからの軽薄さなのか、飲み屋ならではの盛り上がりっぷりを見せてくれた藍原のことはまだいい。

生駒が心につかえるものがあると感じたのは、鈴木が得意の美声で話し、大声で笑いながらも、どこか上の空だったことだ。そして、ときとして周りの人間を品定めするような目を向けている、と感じたからだだった。

生駒が家に帰って、ものの五分も経たないうちに、優が帰ってきた。

「おまえなあ、びっくりするやる。なんでまたセピアに」

なんとなくブスリとして、優は「だつてさ」と言っただけ、いつものようにコンビニで買ってきた飲み物を冷蔵庫に詰め始めた。

優の不機嫌の理由はわかっていた。

生駒は優の後姿を見ながら、どさりとソファに座り込んだ。すでに頭が痛くなり始めていた。

今日一日あったことを反芻した。

若槻の葬儀に参列し、行武の愚痴ともつかぬ話に付き合い、鈴木  
の接待を受けて割烹からラウンジに移動した。

仕事に熱が入らないばかりか、誰かと交わす会話自体が神経をすり減らしているようで、まぶたは腫れぼったく、思考は空転していた。

このところ、夜もなかなか寝付けず、くだらないことを考えては寝返りを打つばかり。

疲れが溜まっていた。常に、遠くでラジオが聞こえているような耳鳴りまでしていた。

優が、目の前にキンキンに冷えたコーラを置いてくれた。

「たまには糖分を。頭を休めなきゃ」

そして自分は、テーブルの端に腰掛けた。

「迷惑だった？」

「いや、おまえが来てくれて、顔見てるだけで心が休まった」

「そう。ママが、恋人が来てるよって電話をくれたから」

「すまない。最近、恋人らしくなかったな」

「ううん」

いつもの闊達さはなく、優は沈んだ声で事情を話してくれる。

「あれからさ、私は私なりに、ママに聞いてたの。黒井さんや若槻さんや佐野川さんのこと」

「そう」  
「今度、久しぶりにお店においでって、誘われてたから」  
「ママにも、俺のことを話してたんだな」  
「当然やん。でなきや、ハルシカ建設のことを聞く理由がないもん。でも、まあ、口が堅い」  
「ママだからな。商売第一だろ」  
「うん」

生駒は、今日は事件のことを話す気にはなれなかった。

頭も舌も回らなかつたし、毒を食らつたように内臓が重たく、ソファに体を投げ出していることさえ苦しかった。

「今日も、お疲れやん」

それでも生駒は、今日あったことを優に話して聞かせようとした。

「明日でもいいよ」

「いや、明日は朝から出かけなきやいけない。で、夜は大矢さんと香坂に会う」

「えっ、そうなん？」

「言つてなかつたかな」

「聞いてない」

「あのさあ、ノブ」

「すまん」

「これまで、ふたりでいくつもの難事件を解決してきたよね」

「いくつもつてのは大げさだし、難事件かどうかも知らないけどな」  
「だからさ」

これまで、ふたり、あるいは柏原も加えた三人で、たまたま遭遇した事件に取り組んできた。

優がいなければ、ただの酒飲み話に終始していたかもしれないことを、スマートではなかつたものの、ひとつの区切りにまでもって

いけた。

黒井の事故も、最初の頃は、優も含めて推理めいたことを話していたのだ。

だからこそ、優は継続してセピアのママにピアリングを重ねていたのだ。

しかし、当の本人である生駒自身が真剣ではなかった。

若槻が殺されるという事態になっても、生駒は事件として関心を持ったわけではなかった。身の回りで起きたことであっても、自分のこととして受け取ってはいなかった。

その間、優はいつになったら自分にも声が掛かるのかと、やきもきしていたのだ。

「いつものことやけどね。ノブは、自分は関係ないって」

優は、自分は冷たいコーヒーのコップを手にしている。

「でも、ノブ」

「ん？」

言われなくてもわかっていた。

「ノブだから見えてくることもあるし、自分でも納得ができる答つてもものがあるじゃない。警察がスルスルって犯人を捕まえてくれても、身内としちゃ、それだけじゃ気持ち治まらないってことがあるやんか。今回もそうと違うん？」

優の言うとおりだった。

大矢の話聞き、居ても立ってもいられない気分になったことは事実なのだ。

「わかってる。今回もユウのおつむを借りることになると思う」

「もちろんやん。じゃ早速、明日の作戦会議」

そう。いつものように……。

「大矢さんと香坂さんに会うんでしょ、と言いたいところやけど」

いつもなら、ここで優の顔は晴れ晴れとし、思いつきりにつこりとして身を乗り出してくるはずだが、今夜は唇の隅に微妙な笑いを作っただけで、またキツチンに入ってしまった。

「ノブ、隠してるよ、あるでしょ」

誰かからハワイ土産にもらったチョココレートを箱ごと出してきて、一粒丸ごと口に入れた。

生駒は、ついに来たか、と身構えた。

「一ヶ月前」

チョココレートの中のナッツを、バリツと噛み砕く音がした。

「父の日に、綾ちゃんからもらったでしょ。パンツ」  
知っていたのだ。

他の下着と同じように、引き出しに入れておいたものを。

優は恋人だとはいえ、下着まで買ってきてくれるような妻の真似事はしない。

新しいパンツが増えていたからといって、それが綾からのプレゼントだとは気づかないはずだが。

「でも、どうしてパンツなんやる。綾ちゃん、そこんとこ変よね。相変わらず、子供なんだか、大人なんだかわからない子」

綾が養女になりたいと言ってきたことを、優には話していなかった。柏原にも釘を刺してある。

聞いた当初はかなり悩んだが、あることに気がついて、自分なりにあっさり結論を出していた。

綾を愛している、生駒は改めてそう思ったのだ。

一緒にいたい。

そんな考えが芽生えたのだ。

自分の子供のように、成長を見守りたい。

もし、それができれば幸せだ、と思ったのだ。

彼女が養子になりたいと言い出したことで、仰天してしまって、その是非を考えてしまった。

しかし、綾がそう思いつめた理由に気がついて、心が晴れたのだ。綾は、小学六年生。

彼女は、都会の中学に進みたいのだ。

山奥の村が嫌というのではなく、彼女の器はもっと大きいのだ。自分でもそれを感じていて、いずれは村を出て行くことを知っているのだ。

そう考え始めると、一日でも早い方がいいような気がして、いてもたっても居られなくなったのだ。

生駒は、綾がそうしたいなら、うちに来ればいいと思った。

ただ、養子にするという話は抜きだ。

あくまで美千代の養女ということにしておいて、大阪の福島で預かっているということにすればいいのだ、と。

綾が自分なりにゆっくり考えればいい、と違って、そんな風には話をしてはいない。

決定打を出してやるのではなく、彼女自身がよく考えればいいことなのだから。

幸いに、まだ、中学進学まで時間の余裕はある。

もし、私立を考えているとしても、試験日はまだまだ先のことだ。

しかし、こんなことがあったと、優には話していなかった。

もし、綾が「下宿」することになれば、優に話さないわけにはいかなかったし、了解してもらわねばならないのに。

優とは、半同棲という言葉がピッタリなのだから。

柏原が言うように、優が結婚を望んでいると感じることはあった。むしろそう信じていたし、そうあって欲しいと思っていた。

でも、生駒は己自身が踏み切れなかった。  
年齢差を考えて、危ういバランスを取っていると感ずることもあった。

綾のことで、このバランスが崩れることは、絶対に避けたいことだった。

綾への愛情と優への愛情を、同じ土俵で比べることはできなかったが、生駒にとって優を失うことは、腕一本、脚一本もぎ取られることより辛いことだった。

「もしかすると、綾ちゃんがうちに来るかもしれないよ」  
優に告げる、この一言がなかなか言い出せなかったのだ。

「ノブにはパンツで、私にはパジャマ。いったい、あの子は何を考えているんだか」

「えっ？」

「母の日に渡しそびれたから、父の日に一緒に渡すねって」

「知らなかった……」

「一緒に暮らせる日を、心待ちにしていますって、メッセージ付きで」

「あっ」

「お礼ついでに、どういうことなんって聞いたら、おじさんに頼んでるんだけど、まだ返事もらってないってさ」

「それは……」

優が、ムツとした顔を近づけてきた。

「そんな大切なこと、どうして私に話してないん？」

「それは、だから……」

「養子になるって、言ってた」

「いや、だから……」

「だいたいね、若槻さんのことでしょんぼりしてるのかって、静かにしておいてあげたのに、そんなことを隠れて相談してたんや！」  
「ちがう。それはおまえが」  
「どう思うかって？ ノブは全然わかってないんや！ いつものことながら」

生駒は、綾を下宿させる案を話した。

「そう、いい手やね」

優がチヨコレートの匂いのする溜息をついた。

「あのね、ノブ」

「うん」

「綾ちゃんがここに来ることになったら、私がどんなに喜ぶか、考えたことあるん？」

「……」

「私が綾ちゃんのこと、本当にどれだけ心配してるか、考えたことがあるん？」

「……」

「聞き耳頭巾の使い手だっていっても、あの山奥で、年寄りばかりに囲まれて、彼女がどうして成長していけるん？」

「……」

「彼女に手を差し伸べてあげられるのは、私達以外に誰がいるん？」  
「……」

生駒はぐうの音も出なかった。

「元はといえば、私が綾ちゃんに言ったんや。大阪に出てくればって」

「……そうだったのか」

「おじさんに頼んでみようかって言ったら、自分で話すからって」  
「くっ」

「まさか、養子って、そこまでは想像しなかったけどね。でもね、

それほど真剣やってことやん」

生駒はうなだれるしかなかった。

「美千代さんも、賛成してくれてるよ。というより、大賛成」

「そうなのか……」

「少しでも綾ちゃんを町に出そうと、いろんな用事を言いつけては大阪や京都までひとりで来させてるし、そのたびにおじさんのところへ行っておいでって、送り出しているんやから」

「……」

「美千代さん自身は、村に嫁いだ身だし、もう結婚して出て行ったとはいえ、子供達にとってはここが故郷だから村を離れられないって。彼女は出てきたくても出て来れないよね。生駒さんがそうしてくれたら、どんなにありがたいかって」

生駒は震えてきた。

自分はなんと浅はかだったのか。

綾が好きだといいいながら、こちらに呼ぶことまで頭が至らなかった。

他人事のように、どうするのかな、とぼんやり思っていただけだったのだ！

しかも、綾からそう頼まれた後になっても、まだ他人ごとのように、自分でよく考えてみるのだなどと突き放していたのだ。

綾はもちろん、一緒に暮らしている優にも相談せず、ちっぼけな心の中で、自分の思いをもてあそんでいたただけなのだ！

これでは親の資格はない。

巷に放任主義などという言葉もあるが、己の態度は放任ではなく、無関心そのものでないか！

親が子に対して、決してとってはいけない態度ではないか！

今夜、今、優が話してくれなかったら、自分はこの先何日も、あるいは何ヶ月も綾を不安にさせ、苦しませ、最後には悲しませていたのだ。

綾だけでなく、優も美千代も含めて、周りの人全員を。

「すまなかった」

「後は、ノブの心ひとつ。綾ちゃんの気持ちを理解してあげられないほど、ノブはボンクラじゃないと思ってるけどね」

「いや、ボンクラだった」

「私が、ここ一ヶ月、どんだけ迷ったか。今日は話してくれるか、明日は話してくれるかって」

「……」

「待って、待って、待ちくたびれて」

「……」

「綾ちゃんは、おじさんが電話くれるからって言うってたんだよ。お姉さんは、もうちょっと待っててねって」

生駒は、目頭が熱くなった。

うれしかった。

それだけ、自分を頼りにしてくれていたのだし、信頼もしてくれていたのだ。

それなのに、なんだ、この男は！

いい気になって生きていても、心は薄っぺらだ！

情けなかった。

「ノブは賢いけど、こういうことにかけては、小学生以下」

「そうかも……」

「人を愛することが、どういうことなのか、いまだにわかつちやいない。だから、人の心に本気で目を向けない」

「……小学生以下どころか、カエル以下だ」

「カエルが怒るわよ」

涙が流れていた。優の頬に。

「ノブ、ちゃんと考えてよ。私のことも、綾ちゃんのことも」

「うっ、うん」

「自分のことより、相手のこと。それが愛情の基本やんか」

「すまない」

「もういいよ。謝らなくても。ね、今日は何の日か知ってる？」

「ん？」

「綾ちゃんのお誕生日」

「えっ」

「さ、電話、電話！ 喜ばせてあげなくちゃ、ね、お父さん！」

「さてえーと、じゃ、始めるか！」

涙を手の平で拭って、優がうんと伸びをした。

そして、生駒の頬に接吻した。

「始めるって、なにを」

「恋人らしいことを。もう、一カ月もしてないし。さ、シャワーを。

キヤー！違うって！アホか！」

「なにも言っていないぞ」

「推理やん！ 明日のために！」

優は、完全にいつものペースに戻っていた。

澁刺として、かわいくて、にこやかで、次々と言葉を繰り出してくる優に。

くるっくるっ瞳を輝かせ、先へ先へと走っていつてしまう優に。

「おっつ、明日のために！」

疲れを、そしてこぼれかけた涙を吹き飛ばすように、生駒もそう叫んでいた。

## 41 暗中模索

柏原が気を利かせて、夜七時から九時の間を貸し切りをしていた。大矢と香坂が来るまで、少し時間があつた。

「今日はどんな段取りや？」

柏原がBGMの音量を調節しながら聞いてくる。

珍しくクラシックをかけるようだ。シヨパンの別れの曲が流れていた。

「それに、優はどういうことにしておく？」

優も生駒の横に座っていた。

「大矢さんはたぶん会ったことあると思う。セピアで。もしかすると、香坂さんも。ま、この店で知り合った仲間ってことで。例によって、私はおとなしくしてるから、ノブ、上手くやってよ」

「俺たちの方は、ほとんど暗中模索状態。彼らの方が、圧倒的に情報を持っている。本音をうまく聞きだすこと。これが今日の作戦の第一」

「ん？ そいつらを信用してないのか？」

「そういう意味じゃない。彼らは本気で若槻事件の真相を知りたいと思ってる」

朝、久しぶりに香坂からメールが届いていた。

今夜はよろしくお願いします、というだけの短いメールだった。「警察をあてにしていない、ということではない。捜査が順調に進んで、今日明日にでも犯人逮捕ということになるかもしれない。それならそれでいい。というより、そうなって欲しい。いわば、彼らは俺と同じように、いても立ってもいられないという気持ちだと思っ」

優が、持参したチョコレートを口に入れながら頷いた。

「彼らの考えていることや、持っている情報を聞いておきたい」  
「なんや、教えてもらう役かいな」

「まあな。元々、彼らの方から誘ってきたことだし」

「しかし、そいつらはなぜ自分たちの手で解決しようとしてるんや？　そこが重要やないか？」

「解決したいとまで思っているのかどうか。が、真相を知りたいとは思っている。俺はそう感じた。彼らは真剣なんだ」

「なぜそんなに真剣になれる？　若槻とは部下と上司の関係やろ」

「そんなこと知るか」

「あ、そう。で、作戦の第二は？」

「黒井の転落事故と関係づけて考えること。セピアのママや佐野川のこと、念頭において」

「それは作戦というより、推理のためのデータのひとつやな」

「ああ」

「作戦はそれだけか？」

「いや。もうひとつ。特に、香坂に存分に話をさせること。派閥争いのことは香坂から聞いた。今日の会合のきっかけを作ってくれたのも彼女」

「なるほど」

「きつと、なにか言いたいことがあるんだろう。ただ、大矢と一緒にだど、なかなか話せないこともあるかもしれない。要は、彼女の発想をうまく引き出すこと」

「フム。ただその子は、おもしろがっているだけ、ということはないのか？」

「それはない。しかしそうだとしても、聞いて損はない」

「了解。ようやくおまえもその気になったようやな。俺は黙って聞いてたらええな」

「そうしてくれ。でも、意見があれば言ってくれていい。おまえの

ことは話してある」

店のオープンと同時に、七時きっかりにふたりは入ってきた。

柏原にも優にも警戒することなく、ふたりは簡単な自己紹介をした。

生駒は、硬い表情をしているふたりの気持ちを、少しでもほぐしてやろうとした。

「おっ、今日はいつもの水色のバッグじゃないんだね」

香坂がいつも持ち歩いている、図面も入る大きなトートバッグではなく、黒い小さなかばんを持っていた。

「さて、始めようか。まず、大矢さんから話してくれませんか」

生駒は、自分が正面から取り組むつもりだと強調するように、宣言した。

「はい。あの、皆さんは事件のあらましをご存知なんでしょうか」「すべて話してある」

大矢は生駒が議長役することに、違和感はないようだった。

「じゃ、考えたことを単刀直入にお話します。いろいろなことがあるんですが、まず私がもっともらしいと思うことから話します」と、口火を切った。

「同じ社内の人間のことを言うのは気が引けますが、まず、佐野川が怪しいと思います」

大矢が柏原の顔を見たが、柏原が生駒から聞いていると言ったので、そのまま言葉を続けた。

彼は若槻所長を恨んでいました。

エヌピー興産という子会社に転籍になったのは若槻所長が行った人事ですが、所長は、佐野川が加粉の下にいたことで明らかに敬遠していました。

佐野川は加粉や白井と馬が合わなくて、やっとの思いで大阪支店

に転籍したのに、そこでも排除されて、かなり頭にきていました。それに加えて、ナチュレガーデンの現場で、海外資材の発注に関して問題が起きました。カーペットが納期に間に合わなくなった、生駒さんにもご迷惑をかけた例の件です。

あれは、エヌピー興産の女子社員が品番をまちがって注文書を出していたことが原因です。

営業担当者という意味では、佐野川は注文主であるハルシカ建設に迷惑を掛けたわけですから、責任をとらされるというのは当然のことでしょう。

ですが、エヌピー興産の社内では、発注部所と営業部所は違うわけです。発注部所のミスですから、その部署の長が責任をとってしるべきです。実際に発注書を切った女性もです。

ところが、その女性社員は、若槻所長が無理に入社させた人なんです。

元はといえば、あるラウンジの女の子でしてね。私も何度も店で会ったことのある子です。

所長はそのことを知って、わざわざエヌピー興産まで出向き、大勢の人の前で佐野川だけを強く叱りました。

そうして、発注部所の責任も、ひいてはその女の子の責任も、うやむやにしてみましたのです。

おかげで佐野川ひとりだけが、損な役回りになりました。

エヌピー興産は完全な子会社ですし、プロパー社員はほとんどおらず、いずれは本社に帰ろうと思っている人ばかりです。

しかも、若槻所長は飛ぶ鳥を落とす勢いの人ですから、逆らえないわけです。

所長に睨まれた佐野川は、エヌピー興産の中でも辛い立場だったと思います。

ちなみに、例の件で所長がエヌピー興産に怒鳴り込んだのは、定例会議での報告より二週間ほど前のこととして、黒井の事故の前日です。

そして事故の日、佐野川は現場に来て、対応策の打ち合わせをしていました。

以上が佐野川の動機です、と大矢は言葉を切った。

香坂が大矢に耳打ちした。

「生駒先生はミヤコさんをご存知ですよ」

生駒はその言葉に付け加えた。

「会ったことはありませんけどね。ま、それは気にしないでください。ところで、黒井さんの転落事件との関係はどう考えていますか。恋敵だったということを、香坂さんから聞いていますが」

「はい。佐野川は黒井にも恨みを持っていました。殺したいというほどの恨みだったかどうかは別にして」

黒井が転落したときには、まだ私はあの現場におりませんでした。が、聞いたところによると、あれは若槻所長の身代わりだったのではないかと思えます。

所長が行くはずの巡回にたまたま黒井が行った。

佐野川は所長のやり方を知っていたのですから、決めた時間に巡回することはわかっていたはずですよ。

しかも、佐野川は元々はうちの職員として、あの現場にいたわけですから、現場の中の状況にも精通していたはずですよ。

で、足場板がはずれるように細工しておいた。

ちなみに、若槻所長が現場を巡回するのは、どの現場でも同じ時間帯ですよ。

ところが、巡回に行ったのは、若槻所長ではなく代理の黒井だったということですよ。

佐野川は黒井を狙ったのではないと思います。

黒井を狙うのなら、もう少し別の方法もあったらと思うからです。

おっしゃるとおり、彼らは店の女の子を取り合った仲ですが、表向きは仕事仲間として付き合っていましたから、何人かのメンバーで飲みに行ったりする機会もあるわけです。

あんな、足場板をはずすなどと、犯人が現場の中にいたということがはっきりする方法でなくてもよかったです。

「なるほど。で、若槻事件当夜の佐野川さんの行動はどうだったのでしょうか」

生駒は、まずは大矢に話をさせるつもりで、質問を投げかけ続けた。

彼は現場に来ていました。

パーティが始まって、しばらくしてからのことです。

パーティには参加せずに会場から出て行くのを見かけましたが、それ以降の行動はわかりません。

ゲートはずっと開いていましたし、周りは暗かったものですから。また彼が戻ってきて、あるいはゲートから出ずに、現場内のどこかに潜んでいたとしても、誰も気がつかなかったのではないかと思えます。

「そうですね。ところで、若槻さんが殺されたとき、長いロープが首に巻きついていていたということでしたね。それについてはどうですか？ つまり、どのようにして殺されたのかということと、佐野川さんとの関係について」

大矢が困った顔をした。

「すみません。私がお話できるのはここまでです。ロープについては、前にお話したように」

非常に長いロープだった。  
首を縛っていたのは一重だが、もう一方の先はとても長いものだった。

どこかに若槻を吊り下げたとしても不自然なほどの長さ。  
加えて、ロープの先が引きちぎれたようになっていた。  
そして若槻の後頭部には大きな傷があった。

地下の床に叩きつけられたときにできたとも考えられるが、若槻が倒れていた地下には、それほど多くの血は流れていなかった。  
死因が、頭の傷か、ロープで首を絞められたからかどうかはわからない。

そして、2階の床スラブの下側に残された血痕。

「それらが何を意味するのか、想像することすらできません。生駒先生は現場をご覧になって、どう思われましたか？」

「では、私の推測ですが」

大矢と香坂が揃って頷いた。

生駒は、あえてゆっくりと説明を始めた。

結論から言いましょう。

若槻さんが襲われたのは、あの地下ではない。

大矢さんに案内してもらったとおり、地下に降りるには、かなり遠いところから回って行かなくてはならない。それも時刻は夜。真っ暗な中をです。どんな理由があるにしろ、不自然。

しかも首のロープ。

大矢さんの話では、明らかに食い込んでいたそうですね。

ということは、吊るされたと考えるのが普通です。

吊るしたところは、二階ラウンジの柵。

警察がつけた印から推測できる。それより上には、ロープを結わ

えるところはない。

ただ、よくわからないのは、ロープはそれよりももっと長く、しかも先が引きちぎれていたことです。

ロープが長いことは、こう考えられます。

例えば一階と二階を何往復もさせて、最終的にどちらかの手すりに結んだというようなことが。

そうする意味は、わかりませんけどね。

あるいは上下に往復させるのではなく、一階か二階の水平方向のどこかに結んだのかもしれない。

ただ、ロープの実際の長さがどれくらいだったのかという情報がないので、いろんなパターンをここで考えてみても、意味はない。

しかし、警察が重要なヒントを現場に残しておいてくれました。

二階ラウンジの手すりにつけたマークだけでなく、廊下の突き当たりのマーク。

二階ラウンジのマークは、もちろん若槻さんの死体の真上。廊下の突き当たりに記されたマークの下は、下請け業者用の駐車場。

駐車場の建物寄りには、梱包された外装用のタイルが大量に仮置きしてある。

ロープの先は、その梱包のどこかに結び付けられていた。さて、それが答えでしょうか。

香坂がはっとして、口に手をあてた。

## 42 オートマチック

「なにか気がつきましたか？」

「織田さんの車？」

香坂がはきはきした口調で答えた。

「察しがいいね。交替しようか？」

「いえ、続きをお願いします」

「了解。あの時、織田さんの車はエンストしたように一旦止まった。そしてアクセルを踏み込んで、無理やり発進した。織田さんの車はオートマチック。なのにエンスト？ あの時、誰かがそう言いましたね」

香坂が小さく何度も頷いた。

ところで、大矢さんが教えてくれたことが、あと二つあります。廃棄物の大きな鉄の箱の中が空っぽになっていたこと。

もうひとつが、二階ラウンジの床の下端に血がついていたこと。

床の下端、つまり天井。

あんなところにどうやって血がついたのか。

こういうことですね。

若槻さんは吊るされてから、ぐいぐい上に引き上げられたということですよ。

そのときすでに、若槻さんは血まみれになっていた。そして、二階ラウンジの床の下までロープで引き上げられて、コンクリートの天井に頭か首かをぶつけて血がついた。

しかし、誰があんなところまで引き上げる？

大力がいる。というより、人の力ではなかなかむづかしい。

滑車かなにかで？

でも例えば、こう考えるのはどうでしょう？

さっき言ったように、若槻さんの首に巻きつけられたロープは二階ラウンジの手すりに掛けられ、二階廊下を通って突き当たりの開口部から下に垂れ下がり、地面に置かれたタイルの梱包の下をくぐって、織田さんの車に結ばれていた、と。

タイルの梱包はひとつひとつは手で持てるが、積み重ねられた箱は重い。ちよつとやそつとでは動かない。

それにあの箱は、角材の上にコンパネを敷いて、その上に積み重ねられてあった。

ロープはそのコンパネの下をくぐって、織田さんの車に結び付けられてあったのでしよう。

そして車が発進したとき、ロープがぐんぐん引つ張られ、若槻さんの体は引き上げられて二階の床に引つかかって止まった。

つまり織田さんの車が、かくんと止まったそのときです。

そして織田さんがなおアクセルを踏み込んだので、コンパネの端で擦れたロープが切れた。

ロープは切れた反動で、若槻さんが地下に落ちるときに、一気に建物を駆け戻り、地下まで一緒に落ちた。

だからロープの一方の端はあんなに長く、しかも端は引きちぎれたようになっていた。

生駒が言い終わるやいなや、香坂が、ああつ、と小さな声をあげた。

「何か気が付いた？」

「えっ。あ、いえ、すみません。なんでもないんです。なぜロープがあんなふうに切れていたのか、不思議だったんです。なるほど、そうですね！」

「それだ、違うない！」

大矢が大声を出した。

香坂が頷きながらつぶやいた。

「織田さんが……。そうか。やっぱり織田さんの車がそうだったのか」

生駒は、大矢や香坂がそれ以上なにも言わないのを待って、言葉を続けた。

ただ、疑問もあります。

犯人が誰であるにしろ、織田さんがいつ車を発進させるのか、わからない。

それに、その時点まで、首にロープを縛り付けた若槻さんをどうする？

犯人が織田さんであっても同じことです。

車に戻るまでどうする？ 若槻さんを隠しておく必要があります。

「廃棄物用の箱！」

大矢が叫んだ。

そう。

あの箱に、首にロープを縛り付けたままの若槻さんを隠しておく。車がいつ発進しても、そのまま若槻さんを引き上げてくれる。

犯人はトイレのあたりで若槻さんを待ち伏せしていたのだろう。

後ろから若槻さんの頭を殴って気絶させ、あるいは殺し、首にロープを縛ってから箱に放り込んだ。

あんな箱の中は誰も覗かないし、念のために、ダンボールや養生シートの切れ端かなんかのゴミを、若槻さんの体に掛けておきさえすれば、見つかることはない。

きつと箱の中には、その証拠が一杯あったんです。

だから警察が中身をすべて持っていった。

生駒は一息ついた。

ぬるくなつたビールを口に運ぶ。

柏原が控えめに口を挟んだ。

「大矢さんと香坂さんは、今の生駒の話、どう思います？」

大矢はそのとおりに違いない、と頷き、香坂は恐ろしいわ、と口元を手で覆った。

「犯行時の様子はおよそ想像がついた。で、犯人像はどうなりますか？ 現場の状態に通じていて、あの車が確実に運転されるといふことがわかつていた者ですよ。」

生駒の問いかけに、間髪いれずに大矢が応えた。

「佐野川なら十分わかつている！」

香坂が、織田さん自身もね、と言った。

「しかし、今の絞り込み方だけでは、現場の人なら誰でも可能ということになってしまう。犯人がこんな残忍な手口を選んだことについては、どう感じますか？ なぜこんな方法をとったのか？」

「そうですね……」

しばらく考えてから、大矢と香坂がそれぞれ応えた。

「犯人は、ある意味では、楽しんだのかもしれない。そうすることで恨みを晴らした。そんな感じがします」

「それを見て楽しんだともいえるけど、見せしめのために、ともとれます。いずれにしても若槻さんを吊り下げるなんて、想像するだけでも鳥肌が立つくらいに恐ろしいことだわ。もしも私がある場に居合わせたら、気を失っていたかもしれない。相当深い恨みを持っているんだと感じます」

生駒は自分の考えを話した。

犯人が、なぜそんなことをしたのかはよくわかりません。

ただ、自分が見て楽しむだけというのは違うかもしれないね。それなら、あんなに人目につく場所でもよかったわけだから。むしろ、人目につかないところで自分だけで楽しむ方がいい。あのとき、あそこで、誰もその瞬間を見なかったのが、不思議なくらいでしょう。

犯人は織田さんの車だということを知ってか知らずか、運転されれば若槻さんをぶら下げるように仕組んだわけです。

パーティが終わったあと、大勢の参加者が帰るとき、つまり一階ロビーの周りを誰が行き来してもおかしくない時間帯を選んだわけです。

ということは、人に見られてもよいと考えていたんですね。

むしろ、誰かに見せたいと考えていたのかもしれない。

ということで、香坂説に分があるように思いますね。

香坂が生駒の賛同を得て、ぎごちなく笑い、おずおずと言った。

「あの、私は織田さんが怪しいと思います。自分で車を運転して、確実に、その……、若槻さんを吊り上げることができるんですから。短絡的でしょうか？」

柏原がニコリとせず、その香坂説に応えた。

「いえ。あんまり複雑に考えすぎるより、シンプルな思考の方がいい場合が多いんですよ。さて、貸し切り時間も半分過ぎました。佐野川犯人説の解説は出ましたね。織田犯人説はどうですか？ 香坂さん？」

生駒に代わって柏原に聞かれることになっても、香坂には違和感はないようだった。

むしろ、幾分、声に張りが出てきたようだった。

「それをおっしゃるのなら、加粉派犯人説です。加粉派の中に織田さんも含まれます。加粉派といっても、あの現場にはたくさんいま

す。ゼネコンの職員の中にもいるし、下請け業者の中にも

「名指しすることはできますか」

「できますよ。でも、犯人かどうかということでは、なにも根拠がありませんから……」

香坂が大矢の顔を見た。

大矢は落ち着かなく柏原と香坂の顔を交互に見ていた。

「大矢さんはどうですか？」

生駒の問いかけに、大矢は迷っているようだった。

香坂が言った。

「もし私が邪魔なら、散歩でもしてきましょうか？」

香坂は本気でそう言っているのではなく、大矢の逡巡をちゃかしているのだろう。

頭を大矢の前に突き出して、大げさに顔を覗き込んだ。

「いや、そういうことやない。ここにいてくれ。じゃ、みなさん、内密にお願いしますよ」

大矢はなおも言いづらそうに、グラスの中で生まれては消えるピールの泡を見つめていたが、やがて顔を上げるとはつきりした声で話し始めた。

「事件のことをお話しするより、なぜ私や若槻所長が、あの現場に配属されることになったのかということから、お話します」

大矢の話は、事前に準備をしてきたかのように、整理されていてわかりやすかった。

「ということで、大阪支店がなぜあの現場の担当になったのかという、当初の私の疑問は解けました。キックバック事件についてわかったことは、これですべてです」

大矢が話し終えた。

「なんと。そういうことがあったのか」

明らかに変わった新しい事実には、生駒は啞然とした。

香坂が以前、金にまつわる汚い話があると言っていたのは、こういうことだったのだ。

若槻殺しの犯人探しに極めて有力な情報が提供されて、もう少しでぴったりにくる推理が出て来そうな予感がした。

香坂も考え込むように、カウンターのの上に落ちた水滴を指でいじっていた。

「そのキックバック事件の中心に織田がいた。事実はこちらまでです。人から聞いた話もありますから、真実かどうか、わからない部分もありますけど」

「わかりました。で、あなたの推理は？」

生駒は、てきぱきと進めようとした。

「推測ですが……」

とたんに、大矢の口ぶりが自信のないものになった。

唸るばかりで、一向に前に進まない。

香坂が生駒を見つめている。

生駒は、あなたが話す？ と目で促した。

「さすがに社員としては、同僚のことを話しくいんでしょう」

香坂はあっさりと、その話を引き取った。

「今の話、私、初めて聞いたことですけど、そういうこともあるんじゃないかって感じですよ。でも、わかりやすい話だったから、それを元に私が推理しましょうか。思いつきの範囲を出ないかもしれませんが」

「ん……」

「行き過ぎだと思ったら止めてください。いいですか？ 大矢さん」

「む……」

香坂の話は単純明快だった。

キックバックの要求を呑んだからかどうかはわからないが、ハルシカ建設にとつて、加粉派にとつても、この現場はおいしい仕事だった。

社内でも指折りの大きな物件だったし、利益率もいい。

ところが、キックバックが行われたことが、誰かの密告によって三都興産上層部の耳に入るところとなった。

三都興産の担当本部長中田部は処分。ハルシカ建設でも応分の処分。

キックバックの指示をしたのは加粉だが、白井を身代わりとして九州へ左遷。

そして現場は、施工途中で加粉派の手を離れ、仇敵若槻のものとなった。

密告者はそれなりの調査力を持っている立場の人間のはずだと考えた加粉派は、地元に繋がりのある若槻を疑った。しかも、若槻の下には三都興産の関係者である黒井がいる。

黒井からなんらかの情報を得た若槻がキックバックの存在を知り、加粉派追い落としのために密告したに違いない。

そう考えた加粉派は、かねてから邪魔で仕方がなかった若槻を、この際、排除してしまおうと考えた。

指示したのは加粉。

阿紀納を参謀に、織田を実行犯として若槻殺害計画を実行させた。吊り上げるという残忍な犯行は、もっと特殊な個人的な恨みが犯行の動機であると見せかけるためのカモフラージュである。

黒井の事故については、二通りの考え方があある。

ひとつは、キックバック事件を封印してしまおうと考えた加粉派による犯行。

この場合は若槻を狙ったと考えられるし、黒井を狙ったとも考えられる。

二つ目は、若槻自身の犯行。

若槻は黒井を使ってキックバック事件を内偵していたのかもしれない。

その内偵の事実を覆い隠そうと、若槻が口封じのために黒井を殺そうとしたのではないか、という考え方だ。

「あるいは、こういうふうにも考えられます。もつと単純に」

香坂の第二説だ。

若槻の密告によって、キックバックが明るみに出たという前提は同じである。

織田は若槻の密告によって、キックバックのパイプ役としての役得から排除されたことを恨んでいた。

あるいはキックバックを知った若槻が、織田をなんらかの形で脅迫していたのかもしれない。

織田は腹いせに現場のゴミを撒き散らしたりしたが、それを責められ恨みが増した。

この説の場合は、黒井の転落事故も織田が犯人だということになる。

「うーん。大胆なことを言うな」

と、大矢が唸った。

香坂は、自分の推理で決まりだといわんばかりに付け加えた。

「細かいことはまちがっているかもしれませんが、大筋はそんなところじゃないでしょうか」

「佐野川犯人説より、説得力がありそうですね」

生駒は驚いてしまった。

香坂の頭が切れることは知っているつもりだったが、今聞いたば

かりのキックバックの話を元に、ここまでですらすらと解説してみせるとは。

「佐野川は関係ないんか？」

大矢はまだこだわっているようだ。

「関係ないわ。だって、あの体格でしょう。パーティの最中にロビ―の辺りをうるちよろしてたら、いやでも目につくでしょ。それに、一旦帰ったはずの人がうるちついているの見たら、怪しむじゃない。そんな危険を冒して、あんなシヨーを演じることはないと思います」「シヨーか」

それが最も近い表現かもしれない、と生駒が言ったことで、香坂は自信を深めたようだった。

「織田さんは動機もあるし、佐野川さん以上に現場の中のことに精通しています。そして、若槻さんを車で引つ張り上げたのも織田さん自身！」

香坂は再確認するようにそう言って、犯人は織田で解決済みといわんばかりに、カウンターを指先でこつこつと叩き始めた。

生駒は今のような香坂の表情を、何度か見たことがあった。

打ち合わせのときに、懸命に主張するときの表情。

口先をわずかに前に突き出し、少し潤んだ目をせわしなく動かして、周囲の人を見渡す。

生駒はそんな香坂を見つめた。

ほのかに紅潮した頬に一筋の髪がかかり、汗ばんだ鼻の先がわずかに光っている。

真っ白なブラウスの開いた胸元から、黒いインナーがのぞいていた。

その少し上で、小さな茶色のほくろが、鼓動に合わせて上下していた。

### 43 イチヨウの歌

その規則的なほくろの動きが乱れたとたん、香坂が念を押すように言った。

「どうでしょうか？」

自信が少し後退したような声だった。

沈黙が流れた。

犯人の名を、香坂があまりにもはつきりと口にし、その推理の根拠まで解説したことで、誰もが驚いていた。

しかし、あまりにもすらすらと解説されてしまうと、それに飛び乗るのではなく、一歩下がって慎重に考えてみたいと思うのは自然な心の動きだ。

大矢は口を引き結び、身じろぎもせず前を見ていたし、柏原は軽く頷きながらも、香坂を見つめているだけだった。

生駒は香坂に同調した。

「確かに。最もありうる答えです」

もちろん、生駒の頭の中には、佐久間や行武が話していた地元での織田のよくない噂がある。

大矢が自問するように呟いた。

「しかし、なにか決め手に欠ける」

それをきいて、香坂が、フツと息を吐き出した。

「確かに動機はありそうだ。ただ、あえてパーティの日に実行しているのは……」

と、香坂に向き直る。

「もつと人気のない日に実行する計画も立てられたはずやろ。なにも、大勢の人に目撃される危険性のある日にせんでも」

「だからですね！」

香坂がまた自信を取り戻したようだ。  
精一杯主張するように、声のトーンが上がっている。  
いつもの打ち合わせのように。

「パフォーマンスですよ！ 多くの人に衝撃を与えて、問題を大きくする。そうして、この現場の主導権を大阪支店から加粉派が取り戻す」

生駒は、香坂のパフォーマンス説に相槌を打った。

「確かに、問題を大きくすることに意味があるのかもしれない。現に僕らはこうして集まっているし、地元でも織田さんのことで、噂が飛び交っているらしい」

再び大矢が反論した。

「違うんじゃないかな」

「なにが？」

香坂が、うんざりというようにカウンターに頬杖をついた。

「織田犯行説」

大矢が香坂から目を離し、生駒に向き直った。

「あのパーティーの後半、織田さんはずっと焼きそば屋をやっていた」

とたんに、香坂が自信のない声を出した。

「そうだったかしら……」

生駒は、あの夜の情景を思い出そうとした。

確かに、織田は焼きそばを作っていた。しかも喜び勇んで、かなり長い間……。

しかし、最後までずっとか？

トイレで会った。

シャーベットを持ってきてくれた後は、ケーキを配り歩いていた。それ以外の時間帯は？

記憶になかった。

そう、口にした。

「まあ、そうですけど」

大矢も認めた。

「なるほどね」

唐突に柏原がそう言い、また黙り込んで、大矢と香坂を眺め始めた。

香坂は柏原の目を見つめ返していたが、やがて目を落とすと、グラスを手に取った。

大矢はガクツと肩を落とすと、両腕をカウンターの下にだらりと垂らし、緊張をほぐすように肩と首を回し始めた。

生駒は頭が冴えているのを感じた。

今までの話を反芻してみた。

織田犯行説。ありえないことではない。

人を殺す動機としては弱いように思うが、それは第三者の印象であって、案外そんなことなのかもしれないと思っただ。

地元に住み続けている人の日常とはかけ離れた故郷への郷愁と同じように、その組織の中にいなければわからないこと。

来る日も来る日も、その人の日常がある一定の環境の中で営まれることによつて蓄積していく思念は、部外者にはうかがい知れない高みにまで、いつしか上り詰めていくこともあるのかもしれない。

事件が起きた後で、あの人がまさかそんなことを、という周囲の反応は、典型的なパターンではないか。

そうは思いつながら、これで一件落着きという結論を出すことには逡巡していた。

大矢が口を開いた。

「ところで、話は違いかもしれませんが、若槻所長が先生に渡そうとしていた書類。手に入れられましたか。パーティのとき、所長の机の上に置いてあったものですが」

「ああ、もらいましたよ。警察から」

「やっぱり警察が持っていたんですね。あれ、なんだったんですか？ 差し支えなければ」

「地図ですよ。付近の古い地形図。それと関西建友会の会報。若槻さんが寄稿したもの」

大矢が怪訝な顔をした。

ふと生駒は、最後に聞いた若槻の言葉を披露してしまおうかと思っただが、思い留まった。

古い地図は自分が送ったのではないと行武は言っていた。

若槻も行武も本当のことを言っていたとしたら、あれは織田が送ったものに違いない。

でも、なぜ？

織田は、それでなにをしようとしていたのだろうか。

昔話のネタに？

わざわざ郵便で送らなくても、毎日のように顔を合わせていたのに？

生駒の思考は、そこで止まったままだった。

しかし、今それを披露すると、織田犯人説を強化するだけのことになりそうで、ためらわれた。

「昭和三十年ごろの国土地理院の地形図。僕たちが子供だった頃の松並町の様子がよくわかる。若槻さんは、話のネタにと思って、用意してくれていたんじゃないかな」

「ああ、そうですね。事件には関係ないのか……」

大矢はがっかりしたようだった。

香坂が別のことを言い出した。

「ねえ、さっきの大矢さんの話では、地元の有力者である織田さんが仲介役をした、ということだったでしょう？ 有力者ってどういう意味ですか？」

香坂は大矢に向かって言ったのだが、生駒から説明してくれということなのだろう、大矢は黙っている。

「織田工務店という会社は、織田さんの叔父さんがやっている会社だということ以外、詳しいことは知らない。織田さんは地元の町内会長の息子。母親はもう相当の歳のはずだけど、旦那の跡を引き継いでまだ町内会の会長をやっている。代々の織田家は、町内会の会長の家で相当な資産家。元はと言えば、あのナチュレガーデンの土地も織田家のもので、それを三都興産に売ったんだ」

「えっ！ そうなんですか。元々は織田さんの土地だったということですか」

大矢も香坂も驚いていた。

「織田さん自身の名義かどうかは知らないよ。たぶん違うんでしょう。母親のものだったんじゃないかな」

「そうか！」

香坂が納得いったというように手を叩いた。

「つまり、織田さんは三都興産に土地を売り、ハルシカ建設にもその情報を流した。もしかすると、ハルシカ建設は織田家のひも付き業者として三都興産にアプローチしたのかもしれないわね。ねえ、ハルシカ建設は昔から三都興産と付き合いがあっただんですか？」

大矢が自信なげに首を振った。

「じゃ、やはりそうですよ。織田さんはハルシカ建設に工事を請け負わせて、その間で自分もうまい汁を吸おうということだったのよ」  
「土地を売って儲けてなお、下請けとしても大きな利益を上げ、しかも中抜きして小銭を稼ごうってか？ 太い野郎だな」

大矢が低い怒気を含んだ声をだした。  
生駒も頷いた。

柏原が香坂をほめた。

「香坂さん、冴えてますね」

「ありがとうございます」

香坂はあっさりと礼を言うと、誰に言うともなく、まくしたてた。「だいたい、汚いことが多すぎるわ。この業界すべてがそうだといいわけではないでしょうけど、世間で土建業があまり評判がよくないのは当然よ。いつも金、金！ 金が命！」

大矢が反論した。

「話を混ぜかえすな。キックバックなんていうのは、どこの業界にもあることやろ」

「ええ、そうですね。でもいつも内部で話しているのは、コストダウンのことばかりじゃないですか」

聞き捨てならないと思ったのだろう。

大矢が生駒をちらりと見てから、猛然と香坂の意見に抗議しだした。

大矢の地が出た。

「それは違うぞ。いいものを作ろうと考えるのは設計者もゼネコンも同じや。ただ、ゼネコンの場合は設計者以上にコストのことも考えないとあかん。コストをかけさえしたらいいものができるというわけでもないのに、素人に限ってそう考えるやつが多い。設計者の思いやクライアントの希望をローコストで実現する。それがゼネコンの仕事のひとつでもあるんや。コストダウンだけに命をかけているわけやない！」

香坂も負けてはいなかった。

「理想はね。でも、上のほうからいつも言われることは、いかにコ

ストを下げて、利益率を上げるといふことばかりじゃない」

「程度の低い連中はそう言うやろ。でも、実際の現場を見てみる。俺たちがそんなことばかりに振り回されてるか？ どうです？ 生駒さん。そんなふうに見えますか？」

「この現場は、そんなことはないと思いますよ。みなさん前向きだし」

柏原が生駒に目くばせをした。

香坂に話をさせることが今日の命題のひとつだったが、杞憂だったなと言っているようだった。

「それに、地元がらみのことが多すぎるわ。この現場は」

香坂が大矢に食い下がった。

「そうでもない。どこの現場でも、近隣対策上、地元業者を使うなんてことは、多かれ少なかれある。織田建設を使ったことがなんで悪い？ キックバックの事件があったからそういうことを言うんやろうけど、もしその事件がなくて、ちゃんとした工務店なら、下請けとして使うことはなにもおかしくない。地元の人に喜んでもらえるわけやし、結果的にローコストでいいものができるんなら、いうことはない」

「織田工務店が、ちゃんとしたところだったのならね」

香坂がそう捨て台詞を吐いて、グラスに手を伸ばした。

大矢が大きなため息をつき、また首を回し始めた。

一旦休戦だ。

「まだ、なんだかよくわかりませんが、加粉派の陰謀、キックバック事件、織田家。そういうことで繋がっているらしいということはわかりましたが、肝心の犯人はびたりとは浮かんでこない。今までの話で、最も怪しいのは織田か、ということにはなりましたが」

しかし、大矢が口にした結論めいた言葉に、また香坂が噛みついた。

「怪しいものは怪しい。はっきりしてるじゃない！」

「断定はできない」

「そうよ。でも、今日は自分の持っている情報を全部出しあって推理しよう、ということだったんでしょ？　じゃ、今日の結論は出たということじゃないの？　それともまだ新しい情報があるの？

ねえ、大矢さん。おかしいんじゃないですか？　最初あなたは、キツクバツクのことには隠しておいて、佐野川さんが怪しいと言っていたわね。どうということなの？　ここまで話をして織田さんが怪しいという結論を出せないということは、まだ何か、私達が知らない情報があるのかしら？」

「隠していたわけやない。ただ……」

「ただ、なんなのよ！」

香坂が険しい声をだした。

生駒は少し驚いて香坂の顔を見た。

まぶたまで赤くなっていた。

興奮しているようだった。

大矢と香坂の言い争いを、これまで目の当たりにすることはなかったが、さつき二人が声を荒げたときも本気で非難しているのではなく、いわばじゃれあいといったものだと思っていた。

ところが、今の香坂の言い方には、剣があった。

大矢も少し驚いたようだ。

香坂の顔をじっと見つめると、ゆっくりとした静かな声をだして言い争いを締めくくろうとした。

「隠していたわけではないし、もう新しい情報はないよ。ただ俺は、生駒先生にあの現場の恥を晒したくなかっただけ」

「ほら！　やっぱり恥ずべきことだと思っていたんじゃない。さつきはあんなに格好つけたこと言ってたくせに！」

大矢がやれやれというように、首をすくめて黙ってしまった。

生駒も、香坂がここまで自分の推理にこだわるとは思っていなかった。

確かに名推理だった。

しかし、最も若槻に近い大矢が、結論とするには性急過ぎる言っただのだから、今日のところはそれでいいではないか。

そう考えて、柏原の顔を見た。

柏原が目元をほころばせて軽く頷き返した。

「さて、そろそろ今日のところは閉会にしましょう。主な情報は出揃ったということで、少し時間をかけて、それぞれで考えてみましょう。また続きをしますよね」

大矢も香坂も頷いた。

「じゃ、次回までに大矢さん、密告者が誰か、引き続き調べてくれないですか。それから全員で織田さんの情報集め。一応、その線できましよう」

大矢と香坂が帰ってから、優がポツリと呟いた。

「なんか、こう、ずばりって来ない話やね」

生駒もそう感じてはいた。

「そんな些細な、そう言うのと怒られるかもしれないけど、はした金やん。そんなことで人を殺す？」

「人殺しの理由なんて、周りの人にはわからない」

柏原がいつもの台詞を吐いた。

「でもさ。ね、ノブ、イチヨウの言葉は？」

「あん？」

「だって、イチヨウは事件を一部始終見ていたんでしょ。その直後やん。綾ちゃんが声を聞いたのは」

「すずめやすずめ、こすずめや。」

あそべやうたえ、なくまいぞ、なくまいぞ。

はかのからすがこわいのか。

それならおつてやるうぞ、落としてやるうぞ。

のどがかわくか、ひもじいか。

それならしねをまいてやるうぞ、ひえもとつてやるうぞ。

さみしかるうて、くやしがるうて。

それならこがねのかかじや。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3107u/>

---

ノブ、ちゃんと考えてよ

2011年11月20日03時16分発行